

日本応用心理学会

第91回大会発表論文集

応用心理学の近未来を考える
—基礎研究と社会実装の並走を目指して—



2025年8月26日(火)～27日(水)

東洋大学 白山キャンパス



一般社団法人
ココロバランス研究所

お問い合わせはこちら



info@kokorobalance.jp



https://kokorobalance.jp



学術と絆で あんしんいきいきをつくる

個人のウェルビーイングから組織の価値向上まで
私たち心理学、行動科学、実務の専門家集団が
科学的なエビデンスを用いてかなえます

【事業】

格付け認証制度



あんしんいきいき職場格付け認証
A&i Certification

学術的知見（心理学・保健学・経営学・行動経済学等）に基づき、従業員があんしんいきいきと働けるよう、組織としての対応や従業員のメンタルヘルスを評価し格付け認証する制度を行っています。

講演研修・組織支援・アドバイザー

カスタマーハラスメント・ウェルビーイング・心理的安全性・組織活性化・リスクマネジメント・組織内不正等専門領域に基づく講演・研修・アドバイザーを行っています。

2025年7月10日、「あんしんいきいき職場格付け認証」を取得した企業・団体およびゲストが一堂に会し、「あんしんいきいきラボ」第一回研究会が開催されました。本研究会では、各組織が直面するカスタマーハラスメント（以下、カスハラ）対策の課題を共有し、先進的な知見を交換することで、参加者間の「横のつながり」を醸成し、業界全体の対策レベルの向上などが検討されました。

第21回
2025

一般社団法人日本心理学諸学会連合 認定

心理学検定

心理学の基礎知識を身につける。実力を試す。

試験会場でコンピュータを用いて解答するCBT形式の試験です。
全国47都道府県にある試験会場からご都合の良い試験会場・日時を選ぶことができます。

● 試験期間

2025年 7月15日(木)より8月31日(日)

心理学検定は、心理学に関連する50以上の学会が加盟する日本心理学諸学会連合が認定する唯一の検定です。

検定は、春試験（2月中旬～3月末）／夏試験（7月中旬～8月末）の年2回開催しています。試験開催期間中、ご都合の良い日時や試験会場を予約して受検することができます。具体的な日程は随時ホームページに掲載いたします。

<https://jupaken.jp/>

目 次

館内案内図	4
タイムテーブル	5～6
大会企画・一般公開シンポジウム	9
大会企画シンポジウム	9, 13
特別講演	10
応用心理士研修会	11
自主企画ワークショップ	12, 14～17
ポスター発演題リスト	21～30
一般発表原稿	31～110
教育発表要旨	111～114
索引	115～119
日本応用心理学会第91回大会 賛助団体等御芳名	120
日本応用心理学会第91回大会 大会委員	121

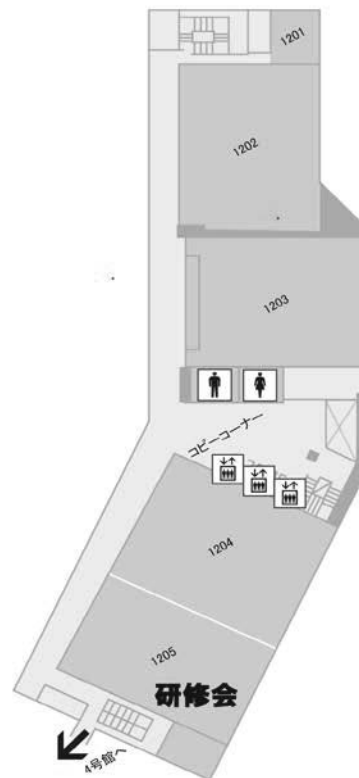
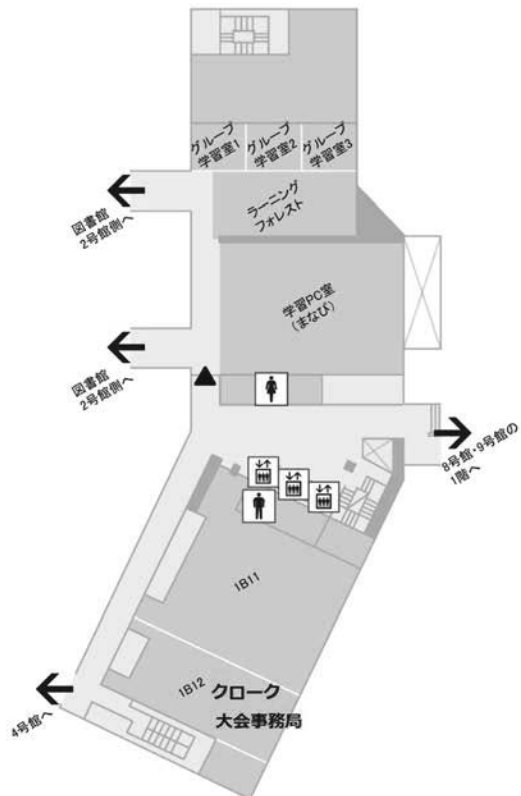
館内案内図

8号館 地下1階(受付, 大会会場等)



1号館 クローク, 大会事務局 地下1階 ↓ IB12 教室

研修会会場 1号館2階 ↓ 1205 教室



第1日目 8/26 (火)

9:00 15 30	大会受付 9:00～18:30			
45 10:00 15 30 45 11:00 15	ポスター発表1A 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半	ポスター発表1B 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半	ポスター発表1C 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半	
30 45 12:00 15 30 45	総会：8号館地下1階 8B11教室 11:20～12:50 *昼食を準備しております			
13:00 15 30 45 14:00 15 30	ワークショップA 13:10～14:40 1号館2階 1202教室	ワークショップB 13:10～14:40 1号館2階 1203教室	応用心理士研修会A 13:10～14:25 1号館2階 1205教室	常任理事会 13:30～14:30 1号館2階 1201教室
45				
15:00 15 30 45 16:00 15 30 45 17:00 15 30	大会企画・一般公開シンポジウム コンバーGINGテクノロジー研究会併催 「AI×心理学による社会実装の加速」 15:00～17:30 8号館地下1階 8B11教室			シンポジスト 控室1号館3階 1302,1303, 1304
45				
18:00 15 30 45 19:00 15 30 45 20:00	懇親会 18:00～19:30 8号館地下1階 ホール			

クローク・
大会事務局
1号館地下1階
1B12
9:00～18:30
休憩室・
企業展示室
8号館地下1階
ホール
9:00～18:30

第2日目 8/27 (水)

9:00 15 30	大会受付 9:00～16:30		
45 10:00 15 30 45 11:00 15	ポスター発表2A 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半	ポスター発表2B 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半	ポスター発表2C 8号館地下1階ホール 9:40～10:25前半 10:25～11:10後半
30 45 12:00 15	特別講演 篠田裕之先生（東京大学） 11:20～12:20 8号館地下1階 8B11教室		
30 45 13:00			
15 30 45 14:00 15 30	ワークショップC 13:10～14:40 1号館2階 1202教室	ワークショップD 13:10～14:40 1号館2階 1203教室	応用心理士研修会B 13:10～14:25 1号館2階 1205教室
45 15:00 15 30 45 16:00 15 30	大会企画シンポジウム 「血液型性格心理学の再評価―大村政男生誕100年を記念して―」 15:00～16:30 8号館地下1階 8B11教室		
45 17:00			

クローク・
 大会事務局
 1号館地下1階
 1B12
 9:00～17:00
 休憩室・
 企業展示室
 8号館地下1階
 ホール
 9:00～15:30

大会企画・一般公開シンポジウム

大会企画シンポジウム

特別講演

応用心理士研修会

自主企画ワークショップ

第91回大会企画・一般公開シンポジウム

第1日 8月26日(火) 15:00~17:30 8号館地下1階 8B11 教室

一般公開シンポジウム

コンバーGINGテクノロジー研究会併催

「AI×心理学による社会実装の加速」

第3回コンバーGINGテクノロジー研究大会

<プログラム>

15:00- はじめに(富士通 プロジェクトディレクター 紺野 剛史)

15:10- 講演①「科学技術・イノベーション政策と総合知」

(内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 参事官 永澤 剛 氏)

15:30- ご挨拶 (日本応用心理学会 理事長 京都大学 田中 真介 氏)

15:40- 講演②「「総合知」に着目した科学技術・イノベーション政策のデザイン」

(科学技術振興機構研究開発戦略センター 上席フェロー 山本里枝子 氏)

16:10- 講演③「コンバーGINGテクノロジーが拓く異分野融合の新地平」

(富士通 フェロー(コンバーGINGテクノロジー担当) 増本 大器)

16:30- 招待講演①「カスハラ対策における心理学×AIの応用研究と実践」

(一般財団法人ココロバランス研究所 島田 恭子氏 / 富士通 岩崎 翔)

16:55- 招待講演②「北海道大学人間知・脳・AI研究教育センター(CHAIN)における

異分野融合研究の取り組み」

(北海道大学 人間知・脳・AI研究教育センター長 田口 茂 氏)

17:20- 質疑

17:30- 総括(東洋大学 社会学部 教授 桐生 正幸 氏)

大会企画シンポジウム

第2日 8月27日(水) 15:00-16:30 8号館地下1階 8B11 教室

「血液型性格心理学の再評価」 — 大村政男生誕100年を記念して

企画者・司会 浮谷秀一(東京富士大学)

話題提供者 山岡重行(聖徳大学)

藤田主一(日本体育大学)

指定討論者 浮谷秀一(東京富士大学)

血液型について、大村政男が研究発表したのが、1984年に富士短期大学(現東京富士大学)で開催された日本応用心理学会第51回大会である。発表題目は「血液型性格学」は信頼できるかであった。この発表では、いくつかの調査などを踏まえて、思い込み効果の善用が得策ではないかと締めくくっている。この発表を皮切りに、30年間第30報まで発表が続けられている。第10報(1993年)から浮谷が、第22報(2005年)から藤田が研究に加わった。また、第75回大会(2008年)から第80回大会(2013年)まで自主ワークショップ「血液型による性格判断を信じる人はなぜ多いのだろうか」を実施した。今回は「血液型性格学」を再評価してみる。

特別講演

8月27日(水) 11:20~12:20 8号館地下1階 8B11 教室

「触感テクノロジーは心の問題を解決できるか」

講演者：篠田裕之先生

(東京大学新領域創成科学研究科複雑理工学専攻・教授)

司 会：桐生正幸(東洋大学)

概要：

これまでの IT 技術において、触覚は再現が難しいもの、というのが前提であった。そのため、人間への情報伝達の経路としては視聴覚が専ら使われ、触覚の活用は限定的であった。しかしその前提は近年変わりつつある。面倒な装置を身につけなくても、非接触のまま多様な触感を再現できる技術が現実となり、モノに直に手で触れたときの圧覚や、他者に触れられたときの心地よい感覚まで、一定の万能性をもって再現できるようになってきている。このような新たな感覚生成技術は、人間の生活を今後どのように変えていくであろうか。触覚の重要な特徴の一つは、メンタルに対して視聴覚とは異なる性格のアクセス経路を有していることである。触覚は、ホルモン分泌などを通して精神の安定や身体の健康と物理的にも関係しており、幼児期においては自己肯定感や倫理感の醸成など、人格基盤の形成のために不可欠な感覚であると考えられている。そのような触覚を、日々の人間の行為の中に適切に組み込むことができれば、人間のこころを良好な状態に保ち、その活動を強力に支援できる可能性がある。本講演では、触覚を活用する IT 技術の新しい姿を提案しながら、想定される負の側面やその対処法についても議論する。

応用心理士研修会

研修会A

日程:8月26日(火) 13:00 ~ 14:15

講師:深澤 伸幸 氏(松蔭大学)

題目:応用心理学とエビデンス ― 組織におけるヒューマンエラーの低減に向けて ―

司会:上市 秀雄 氏(筑波大学)

心理学,とりわけ応用心理学においては社会との関係性が重視されます。一般に心理学においては分析研究が中心となっていますが,社会が求めるものはむしろ対策研究であり,研究結果が社会や組織においてどのように活かされるのか,という点が重視されます。

今回は「組織におけるヒューマンエラーの低減方法」をテーマとして取り上げ,お話しします。ここでは個人対策と組織風土という社会集団への2つの対策が中心となります。具体的にはヒューマンエラーの発生過程についてシミュレータ実験を通じて探り,ヒューマンエラーの発生過程を考えます(エラー行動という不可視の現象を可視化します)。次に個人対策としての危険感受性訓練法を実施した際の効果測定の研究をお話し,最後にヒューマンエラーをさらに低減させるための職場風土をより安全な方向へと向けるための研究をお話しします。

今回お話しさせていただきたい点は,客観的な事実やデータを基に分析研究を行うことに加え,対策研究までを視野に入れた研究を目指すことが,今後の応用心理学の発展に寄与するということです。ともすれば解釈中心の分析研究になりがちですが,若い研究者の皆様においてはエビデンスを基に対策研究へと踏み出していただきたいと思います。

研修会B

日程:8月27日(水) 13:10 ~ 14:25

講師:山本 勝則 氏(札幌保健医療大学)

題目:精神看護学とは何か:応用心理学との関係

司会:松本 友一郎 氏(京都女子大学)

心理学および応用心理学はこころ(心と行動)全般を扱う学問です。一方,精神看護学はこころの健康に関することを扱う学問です。

心理学は大きく基礎心理学と応用心理学に分けられ,応用心理学は具体的な状況・環境に人間の心理のメカニズムを当てはめて考えるという意味で実践を志向する科学です。一方,看護学は実践の科学(アートでありサイエンスであると表現することもある)です。その一分野である精神看護学も実践の科学です。つまり,応用心理学と精神看護学とは,こころを扱うことと実践を志向するという意味で共通しています。

応用心理学を専門とする人にとって,「応用心理学」に関する上記の説明はほぼ自明のことだと思います。同様に精神看護学を専門とする人にとっては,上記の「精神看護学」に関する説明はほぼ自明のことでしょう。ところが,お互いの学問分野については,共通性があるにも関わらずほとんど理解していません。そこで今回は,応用心理学を専門とする先生方に「精神看護学」とは何かということを紹介したいと思います。

現在の精神看護学は,精神症状に対処する症状マネジメント,信頼関係に基づく人間関係論,生活上の問題を解決する問題解決型看護過程,健康な面や強みを生かすストレングスモデルとリカバリーから成り立っています。

自主企画ワークショップ

8月26日(火)

ワークショップA 13:00~14:30 1号館2階 1202 教室

交通社会の諸問題を解決する質的・個性記述的研究の現状と今後

企画者、話題提供者	大谷 亮 (一財)日本自動車研究所
司会者、話題提供者、指定討論者	小菅英恵 (公財)交通事故総合分析センター
話題提供者・指定討論者	中西 誠 株式会社電脳
話題提供者	中野友香子 科学警察研究所

8月26日(火)

ワークショップB 13:00~14:30 1号館2階 1203 教室

カウンセリング、心理療法のアジアからの発信(6)

企画者	林 潔 Australian and NZ Student Services Assn
司会者、話題提供者	加藤博己 駒澤大学
話題提供者	李同帰 北京大学
話題提供者	Nagongbiling 内モンゴル自治区国際蒙医病院
話題提供者	高橋良博 駒澤大学
指定討論者	高橋浩子 山手教育研究所

8月27日(水)

ワークショップC 13:10~14:40 1号館2階 1202 教室

重心動揺研究とワーキングメモリ

企画者	板垣文彦	国立病院機構 東京医療センター
司会者、指定討論者	須永範明	日本大学
話題提供者	和田万紀	日本大学
話題提供者	鹿内菜穂	亜細亜大学

8月27日(水)

ワークショップD 13:10~14:40 1号館2階 1203 教室

スポーツ指導に身体接触は必要か?

企画者	権野めぐみ	名古屋葵大学
司会者	来田宣幸	京都工芸繊維大学
話題提供者、指定討論者	伊藤将史	近江兄弟社高等学校
話題提供者	橋元真央	大阪教育大学
話題提供者	越智淳子	佛教大学

血液型性格心理学の再評価

—大村政男生誕 100 年を記念して—

企画者・司会 浮谷秀一（東京富士大学）
話題提供者 山岡重行（聖徳大学）
藤田主一（日本体育大学）
指定討論者 浮谷秀一（東京富士大学）

【企画意図】浮谷秀一（東京富士大学）

血液型について、大村政男が研究発表したのが、1984 年に富士短期大学（現東京富士大学）で開催された日本応用心理学会第 51 回大会である。発表題目は「血液型性格学」は信頼できるかであった。この発表では、いくつかの調査などを踏まえて、思い込み効果の善用が得策ではないかと締めくくっている。この発表を皮切りに、30 年間第 30 報まで発表が続けられている。第 10 報(1993 年)から浮谷が、第 22 報(2005 年)から藤田が研究に加わった。また、第 75 回大会(2008 年)から第 80 回大会(2013 年)まで自主ワークショップ「血液型による性格判断を信じる人はなぜ多いのだろうか」を実施した。今回は「血液型性格学」を再評価してみる。

【話題提供者 1】山岡重行（聖徳大学）

大村政男は日本応用心理学会において、『「血液型性格学」は信頼できるか』という統一タイトルで毎年継続して研究発表を行ってきた。第 1 回目の発表である 1984 年の日本応用心理学会第 51 回大会の段階で既に、「思い込み効果」という言葉を使っている。

血液型性格の内容は誰にでも当てはまるフリーサイズの内容であるためにバーナム効果が生じ、それが自分にだけ当てはまるものとして刷り込まれてしまい、血液型性格が自分に当てはまるという実感を生み出していく、と考えるようになり大村の「FBI 効果」となっていく。

話題提供として、「血液型性格が当てはまる実感」は血液型性格を受容する程度の高い高受容群の「思い込み」であることを、山岡の調査結果から明らかにする。

山岡は 1999 年から断続的に血液型性格に関する調査を行っている。血液型性格の熟知度と確信度、血液型性格を信じる理由／信じない理由、血液型性格に由来する快体験と不快体験など様々な内容の調査を行っているが、その中心となるものは、血液型性格項目を使用した調査である。

松井(1991)や縄田(2014)は、他者が血液型性格とは無関係な目的のために行ったランダム・サンプリングに基づいた大規模調査結果を血液型により差があるか再分析した結果を報告している。両者が使用した質問項目は、「各血液型の性格」だと血液型性格肯定派が主張する項目ではないために、血液型性格肯定論者にとっては、「血液型によってそのような項目に違いがあると主張していないのだから、差が出ないことが血液型と性格の無関連性の証明にはならない」と反論する余地が残されている。この反論の余地をなくすためには、「各血液型の性格特徴」と血液型性格肯定論者が主張する項目を使用することが必要になる。

渡辺(1994)は、1990 年代初頭出版されていた 6 冊の血液型性格本のうち 3 冊以上に共通して特定の血液型の特徴として記述されていた項目を各血液型につき 7 項目、合計 28 項目抽出した。山岡はこの項目を血液型性格項目として採用し自分に当てはまる程度を 5 件法で回答を求め、各血液型群の平均値に有意差が認められるか検討した。

山岡は血液型性格の熟知度と確信度の回答から調査対象者を血液型性格の知識が豊富で血液型性格の妥当性をかなり信じている血液型性格高受容群と、知識が乏しくあまり信じていない低受容群に分け、各群においても同様の分析を行った。

結果は学会当日会場で発表するが、まさしく大村が最初期から主張していた「思い込み効果」であることが明白となった。大村の慧眼にあらためて敬意を表したい。

【話題提供者 2】藤田主一（日本体育大学）

大村政男（以下、すべて敬称略）は、1925（大正 14）年 10 月 4 日生まれであるから、今年の 10 月で生誕 100 年を迎え、また没後 10 年になる。大村の心理学者としての研究歴を振り返ると、一貫して性格心理学の領域を外れることはなかった。

大村はまだ学徒のとき、古川竹二の『血液型による気質の研究』（1927 年）の論文に出会った。彼は、自分の血液型と性格や行動とを照らし合わせて非常なる興味を抱いたが、当時所属していた研究室のスタンスでは、考えることさえ認められなかったのが、大村の「血液型と性格」との興味は抑圧されていった。研究者として歩み始めた彼の研究生生活の前半は、どちらかといえば地味で繊細な領域に埋没していたといっていよう。ただ、潜在的にこの領域への伏線があったに違いない。

研究の転機は、学生の卒論指導がきっかけであった。その後、日本応用心理学会第 51 回大会（1984 年）の口頭発表『「血液型性格学」は信頼できるか』をスタートとして、毎年、日本応用心理学会や日本心理学会、日本教育心理学会などでの学会発表や、学術誌への論文投稿、雑誌等への論説執筆をとおして、「血液型と性格」との関係を批判的な視点から論及していった。彼の研究生生活の後半は、「血液型と性格」にどっぷり浸かり、それがとても楽しいものになった。このような取り組みは、おそらくわが国の心理学者としては最初であっただろうし、今まで抑圧されていた大村の姿が覚醒したといっても過言ではない。彼の発信はマスメディアにも取り上げられ、たとえば大橋巨泉、小倉智昭、ビートたけし、森本毅郎などテレビ界の大物と接触することもあった。大村の批判的研究は、古川竹二の著書や論文をきっかけに、能見正比古（大村と同じ 1925 年生まれ）の書籍に記された内容や、その嗣子である俊賢と対峙するまでに及んだ。とくに俊賢とは、テレビや雑誌の中で激論を交わした。

大村は、細かなことを調べるのが好きだったし、また、ひらめきが湧くアイディアマンだった。たとえば、軍部の組織と血液型との関係に注目すると、もともと戦記物が好きだったこともあるが、いろいろな文献を獵歩して新しい資料を提出したり、血液型と性格が関係するかのよう感じさせるトリックに「FBI 効果」と命名し、「血液型の信者は、FBI の力でも捕まえられないのだ」と、ウイットに富んだことば遊びをしたりするのを忘れない。そのエネルギーは留まるところを知らず、雑誌『月間血液型研究』に掲載されている論説をひとつひとつ検証してしまうのである。

大村は、3 冊の単著を上梓し、数多くの学術論文を公表した。また数えきれないほどの学会発表や講演、各種雑誌への執筆をこなしてきた。大村のあとから、この分野に関わってきた研究者たちは、多かれ少なかれ、彼の文献やアイディア、さまざまな資料等をステップにしたに違いないので、今、我われは彼をもう一度再評価すべきだろうと思う。

交通社会の諸問題を解決する質的・個性記述的研究の現状と今後

企画・話題提供者：大谷 亮 ((一財) 日本自動車研究所)
司会・話題提供者：小菅英恵 ((公財) 交通事故総合分析センター)
話題提供者：中西 誠 (株式会社電脳)
話題提供者：中野友香子 (科学警察研究所)
キーワード：道路交通社会・質的/個性記述的研究

【企画趣旨】

交通社会の諸問題を解決する交通心理学の役割として、運転適性検査の開発と運転者選択、交通参加者への教育や啓発、人間特性に基づく自動車や道路交通環境の設計、法規や基準または標準の制定等の様々な貢献がある(宇留野, 1972)。

2023年度の自主企画ワークショップ(WS)では、道路交通社会を具体例とした応用心理学研究について議論し、理論と実践のバランスや、人間を「測ること」と「変えること」の難しさを共有し、今後の方向性について検討した(大谷・小菅・中西・中野, 2023)。また、2024年度のWSでは、2023年度の議論を踏まえ、下げ止まりとなっている交通事故の更なる低減を目指し、代表値や散布度等を用いたこれまでの量的・法則定立的な研究や取り組みに加え、質的・個性記述的研究の意義や方法論について議論することを企図した(大谷・小菅・中西・中野, 横井川, 2024)。

本企画では、交通社会の諸問題を解決するための質的・個性記述的研究の現状について話題提供者よりご報告いただき、交通事故低減等の各種の諸問題を解決するための情報を収集する。また、質的・個性記述的研究の現状と今後の課題や方向性を整理することを主として、話題提供者間の質疑応答の後、フロアの皆様との領域を超えた議論を行う予定である。

【話題提供】

●小菅英恵 ((公財) 交通事故総合分析センター)

2024年度は量的研究者の立場から、普遍的な法則だけでは解決が難しい高齢運転者の安全支援の研究を事例に、介入相手の体験や意識を深く理解する個別対応の重要性について話題提供を行った。このように現在の交通社会における質的研究および個性記述的研究はますます重要な役割を担うと考えられる。しかし、未だ事例や質的研究は科学的でないという見方や、自然言語処理技術を用いた解析は科学的価値が高いとみなされる風潮が存在し、質的・個性記述的研究の理解と普及を妨げている。質的研究は、現象の深い理解が可能であるものの普遍性の追求は困難を伴う。一方、量的研究は、信頼性や再現性に優れるが新しい文脈や異なる条件下に研究結果を適用した一般化は出来ない。

交通社会の諸問題解決において、質的研究と量的研究それぞれの強みと弱みを理解し、補完的に活用することで、実務に役立つ知見が導かれることを期待している。

●中西誠 (株式会社電脳)

教習車は、道路交通法第71条「初心運転者標識等を表示している車の保護」において、危険を避けるためにやむを得ない場合を除き、幅寄せや割り込みが禁じられている。道路交通社会において、運転行動は道路交通法や一般的な交通の流れに基づいて行われるものではあるが、現実の交通環境においては、法規のみでは捉えきれない他者の多様な運転行動が観察される。このような状況下において、他の交通の流れと異なる運転を行う教習車は特異な存在と捉えられる可能性がある。そこで、路上教習という環境下で教習車が経験する他者からの特異な行為に着目し、それらのエピソードを収集し

体系化することで、運転者教育のための知見として活用できるのではないだろうか。本話題提供では、教習指導員資格を持つ者に対して、路上教習中に経験した他者からの特異な行動(例：意図的な進路妨害、不慣れた運転への配慮等)に関する記述データを収集する方法について報告する。

●中野友香子 (科学警察研究所)

筆者はこれまで、効果的な交通安全教育の方法や内容の研究を行ってきた。より具体的には、教育を受ける者の認知・行動変容を促すべく、小集団討議を活用した教育プログラムを提案して、主に量的アプローチから効果検証を行ってきた。量的データの分析結果は、教育プログラムの有用性を明瞭に示すことができるという利点がある。しかし、それだけでは、教育プログラムの参加者の知識や認知がどのようなプロセスで変化し、その変化に教育プログラムのどの働きかけが寄与したのかを示す知見は不足している。また、量的データの分析結果だけでは、具体的な小集団討議の進め方や教育プログラムを応用・発展させる際の方針がわかりにくく、実務に適用する際の資料も不足しているという課題がある。

そこで本話題提供では、筆者が収集した小集団討議中の参加者の発話データの一部を示して、これらの課題解決のために質的データの分析を行うことの有用性を検討したい。

●大谷亮 ((一財) 日本自動車研究所)

歩行中の子どもの安全確保のため、筆者はこれまで子どもおよび保護者対象の安全教育や、保護者による歩行中の子どもの監視について、観察調査やアンケート調査等の手法を用いて検討を行ってきた。以上の研究では、子どもの道路横断行動や知識の変容、さらには保護者の意識の変化や監視の影響要因を定量的検討により明らかにしてきた。一方、子どもの交通事故の更なる低減のためには、平均値的な対策だけではなく、きめ細かな対応が必要と考え、これに資する資料を得るために、保護者対象の面接やアンケート調査により、生活世界の子どもの安全教育や保護者の監視、さらには子どもの飛び出し事象の様相について調査を始めている(大谷, 未刊行)。今回の話題提供では、これまでに得られた質的・個性記述的研究の結果の一部を報告するとともに、交通社会の諸問題を解決するための質的・個性記述的アプローチの方向性について情報提供を行う。

【参考・引用文献】

宇留野藤雄. (1972). 改定 交通心理学 技術書院.
大谷亮. (未刊行). 歩行者事故低減を目的とした子ども用教育ツールの開発と普及に関する研究. 2024年度一般社団法人日本損害保険協会自賠責運用益事業(研究事業)報告書.
大谷亮・小菅英恵・中西誠・中野友香子. (2023). 社会に役立つ応用心理学研究を考える-道路交通社会を例とした貢献と課題-. 日本応用心理学会第89回大会自主企画WS⑥.
大谷亮・小菅英恵・中西誠・中野友香子・横井川美佳. (2024). 交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法. 日本応用心理学会第90回大会自主企画WS①.

(おおたに あきら・こすげ はなえ・なかにし まこと・なかの ゆかこ)

カウンセリング，心理療法のアジアからの発信（6）

林潔¹ 加藤博己² 李同帰³ Nagongbiling⁴ 高橋良博² 高橋浩子⁵
(Australian and NZ Student Services Assn¹ ²駒澤大学 ³北京大学
⁴内モンゴル自治区国際蒙医病院 ⁵山手教育研究所
キーワード：蒙医インタラクティブ療法 呼吸法 禅

目 的

カウンセリング，心理療法は，さまざまな周辺領域の知見の影響を受けながら発展している。カウンセリング，心理療法の普遍性，文化（注 1），個別性が課題となる。一連の報告（注 2）は，この地域外の人々には情報発信を，地域内の人々には取り組みについての再認識をはかることを意図している。

本ワークショップでは，そのモデルの基礎として 引き続き禅と，中蒙医学について影響を受けた試みについて報告する。

加藤博己

井上円了の禅と心理学

2017 年に始まった本企画は，途中コロナ禍によりオンライン発表，未参会など形を変えて継続し 9 年目となった。「諸学の基礎は哲学にあり」との建学の精神の下に，哲学館（現東洋大学）を創設した井上円了は，日本で最初の心理学者である元良勇次郎と同じ年に生まれ，数々の心理学に関する著作を残した。

その内容は，記憶，錯視，重量感覚，遺伝，知能など諸々の基礎心理学的なものだけでなく，本邦で初めて「心理療法」という用語を用いた著作と言われる『心理療法』や、『東洋心理学』、『仏教心理学』など，応用心理学までユニークで多岐にわたる。

井上は浄土真宗の寺に生まれているが，自らの宗派に固執することなく，唯識に関する著作や禅に関する著述など，仏教への造詣が深い。今回は特に井上が扱った「禅」と心理学，心理療法との関連を確認する。

李同帰 納貢畢力格

蒙医インタラクティブ療法の認知行動理論的分析

グループ認知行動治療（Group Cognitive Behavioral Therapy, G-CBT）は，グループ環境に認知行動治療技術を応用する方法である。

蒙医心身インタラクティブ療法（Mongolian Mind-Body Interactive Therapy, MMBIT）は，理論紹介，モンゴル音楽，経絡養生体操，患者共有，医師コメントを含む，健康教育の形式を通じて，叙事を主とする団体心理療法である。

MMBIT は総合的な心身統合治療モデルであり，認知行動理論と治療技術の基礎の上で特色ある優位性を示している。健康教育と心の啓発，MMBIT は G-CBT の心理健康教育の上で，生命の意義と人生の価値に対する啓発を増加した。また，主に心理疾患を対象とする G-CBT とは異なり，MMBIT の心身兼治と多病同治は，特定疾患に限定されないため，複数の疾患に適用され，多病同治の効果を達成することもできる。

患者の叙述と認知再建，物語を話すことは患者の心理治療に対するインピーダンスを減少しやすく，訪問者の認知再構築を促進する。患者主導の治療モデルは患者の経歴

をより説得力を持たせる。MMBIT は患者が治療の過程で絶えず学習することを奨励し，自身の問題を解決する治療師になる。

MMBIT は治療過程で認知行動理論と治療技術を使用し，本土の状況に合わせて特色化融合を行う。これは認知行動理論と治療技術が他の非心理治療分野に応用されるに例と構想を提供した。

高橋良博

災害時の心のケアの現状と呼吸法

わが国では阪神淡路大震災や東日本大震災などの大規模災害の経験を経て，被災者への心理的援助に関する関心が高まってきている。さらに近年では災害発生後，被災地や避難所に暮らす被災者の，災害ストレスの影響を最小限にとどめようとする試みが様々な形で取り組まれている。

災害ストレスへのケア，特に被災者が実践できるセルフケア技法に関しては，呼吸法，瞑想，ストレッチ，ヨガ，漸進的弛緩法，自律訓練法などが推奨され，提唱されている。

どのような技法が災害ストレスに有効かは，被災者が置かれている状況によって異なると考えられる。また，被災者自身が生活の中で実践できるセルフケアの技法は，習得や実践が容易で，副反応や副作用のなるべく少ないものが望まれると考えられる。

本報告ではそのような被災者のセルフケア技法についての取り組みの現状を概観し報告する。

注

1 不安の Trophotropic shift の発展のためには，東洋における古来の古来の方法にも目を向ける必要があろう。禅，ヨガ，TM 法（超越瞑想法），のほか，解脱，安心立命，涅槃，菩提の道としての念仏，称名，写経，さらには能，詩歌，管弦，その他わが国古来の生活，習俗の中にも新たな発見があるかも知れないからである（内山，1984）。

2 第 5 報告は，日本カウンセリング学会 56 回大会（2024）で行われた

司会：林潔・竹内啓恵 話題提供者：加藤博己 禅とカウンセリングの研究小史 李同帰・Nagongbiling・呉紅雲 蒙医の心身相互作用療法が癌患者の治療に果たす役割 竹内啓恵 森林環境を活用したカウンセリング手法について 指定討論者 高橋良博・高橋浩子

引用文献

内山喜久男 1984 ストレスの行動療法：Trophotropic shift えの行動論的アプローチ 行動療法研究，9,70-77.

（はやしきよし かとうひろき りとんぐ なごぶりんぐ たかはしよしひろ たかはしひろこ）

重心動揺研究とワーキングメモリ

-副次タスクとしての乱数生成課題の応用可能性について-

企画：板垣文彦 国立病院機構東京医療センター
司会・指定討論者：須永範明 日本大学文理学部
話題提供者1：和田万紀 日本大学法学部
話題提供者2：鹿内菜穂 亜細亜大学経営学部
話題提供者3：板垣文彦 University of Bristol・School of Psychological Science

キーワード：ワーキングメモリ，乱数生成，ドーパミン

【企画趣旨】近年，重心動揺に関する研究は国際的にも活発に展開されており，2020年以降，年間1,000件以上の学術論文が発表されていると推定される．日本においても，年間150件以上の研究が公刊されており，研究領域は以下のように多岐にわたる：①高齢者の転倒予防，②パーキンソン病など神経疾患の評価，③スポーツ科学における運動制御，④発達期の子どもの姿勢・認知機能の関連，⑤姿勢制御と認知課題の拮抗的相互作用，など．本ワークショップでは，これらの領域横断的な重心動揺研究の実践を共有し，研究視野を拡張するとともに，とりわけ⑤の「認知課題と姿勢制御の相互干渉」^[1]に焦点を当て，認知課題としての乱数生成課題(Random Number Generation: RNG)の応用可能性について議論する．本日の司会および指定討論は登壇者の研究背景に精通する須永範明氏が担当し，まず和田万紀氏より「不安と身体動揺の関連性」について，続いて鹿内菜穂氏から「スポーツ心理学の立場からみたヨガ実践と姿勢制御」についての話題提供が行われる．企画者である板垣は，ワーキングメモリの中央実行系課題としてのRNG課題に長年取り組み，Baddeleyの多成分モデルに基づく分析手法「軸構造モデル」^[2]を作成した．本ワークショップでは，以下に述べる三点を中心に，RNG課題を重心動揺計測研究の副次課題として応用する意義と可能性について検討したい．

(1) ランダム性と人間運動反応：創造性の評価との接点

日本において村上正克^[3]は，RNG課題が現在のように実行機能の妨害課題として用いられる以前に，その「創造的思考」を反映する課題としての意義を指摘し「乱数発生テスト法」を提唱している．その着想には，すでに脳機能を読み解こうとする視点があり，彼の分析手法は，臺式簡易精神機能評価指標(UBOM研究会^[4])の1つに組み込まれている．

RNG課題は「どの数を言っても間違いではない」という非定型課題の典型であり，生成テンポを一定に統制しない場合は，生成系列の長さ(量)とランダム性(質)のバランスを評価できる点で，創造性の課題と呼ぶにふさわしい．この側面はロールシャッハ・テストにおける創造性指標である「人間運動反応(M)」の関連からも支持された^[5]．M反応はインク図版に人間の行為と姿勢が報告された場合にスコアされる．RNG課題を重心動揺計測時の副次課題として利用した場合，それが現実の姿勢制御のための注意資源を取り合うのか，あるいはその姿勢制御を表象空間の側から補正，支援するのかという関係性の解明が期待される．

(2) RNG課題はワーキングメモリ全体の負荷課題である

RNG課題が中央実行系機能を反映する直接の原因は生成の対象としている1から9までの9つの数がワーキングメモリの容量限界(4±1)を超えており，自然数チャンクの中から絶えず新しい数表象を更新し続ける必要があるためである．そ

して，実行系の操作の対象となる中心的生成方略としては，新しい数を効率良く発見するためのCounting方略(自然数順に数を生成し，その音韻情報を音韻ループに保持する)と，それらのいくつかを自然数チャンクから切り離し単独数表象として心的数直線上に配置するためのHopping方略(視空間スケッチパッドを利用)が深く関与している．これらの方略の連続使用は数系列内に特有の「ステレオタイプ」の痕跡を残すが，中央実行系は方略循環(Switching)によってステレオタイプ化を防止し，それぞれ音韻特性を有する数と視空間特性を有する数を結合(バインディング)した数対を生産し，エピソード・バッファ容量を拡張する．

このようにRNG課題は個人のワーキングメモリ特性を構造的に分析できることから，その個人に生じている重心動揺の原因や，重心動揺を引き起こす器具の特性がワーキングメモリ成分のどのモジュールと関係するかを示すことができる．

(3) 自己意識と姿勢制御を統合するドーパミン研究

現在，ドーパミン濃度がRNG課題で評価する研究を遂行中であるが，これはMcNamara^[6]がパーキンソン病の精神病理を基礎として提唱する「主体的自己(agentive self)」の概念がワーキングメモリに類似していることがきっかけであった．ドーパミンが前頭葉における実行系機能と，基底核における運動制御の両方に関与していることを踏まえれば，それぞれの「思考のゆらぎ」と「身体の揺らぎ」を反映するRNG課題と重心動揺計測は，そこにドーパミン研究を仲介させることで，心身の総合的な研究となること期待できる．

【まとめ】以上，RNG課題を重心動揺研究の副次タスクに利用する場合の理論的可能性を提案した．最初に話題提供された研究に戻り，その実践的応用について議論を進めたい．

【謝辞・利益相反】本研究はJSPS科研費23K02563，20K19608の助成を受けた．利益相反はない．

【引用文献】

- [1] Salihu, A. T. et al. (2022). Effect of cognitive task complexity on dual task postural stability: a systematic review and meta-analysis. *Exp. Brain Res.*, 240(3), 703-731.
 - [2] 板垣文彦 (2005). 乱数生成課題とワーキングメモリー軸モデル, *Focus of Attention と Episodic Buffer の統合—電子情報通信学会技術研究報告*, TL2004-36, 1-6.
 - [3] 村上公克. (1969) 乱数発生テスト法, *DNIA*, 30, 1, 1-7.
 - [4] <https://ubom.net>
 - [5] 板垣文彦 (1991) 乱数生成における思考過程—注意，拡散的思考，創造性の関連について—, *日本大学人文科学研究所研究紀要*, 41, 167-179, 1991.
 - [6] McNamara, P. (2011). *The cognitive neuropsychiatry of Parkinson's disease*. MIT Press.
- (いたがきふみこ, すがのりあき, わだまき, しかない ほか)

スポーツ指導に身体接触は必要か？

女性選手を対象としたスポーツ指導現場に着目して

○権野めぐみ¹ 伊藤将史² 橋元真央³ (非会員) 越智淳子⁴ 来田宣幸⁵
(¹名古屋葵大学 ²近江兄弟社高等学校 ³大阪教育大学 ⁴佛教大学 ⁵京都工芸繊維大学)

キーワード：ハラスメント、倫理観、科学的根拠

【スポーツ指導における身体接触の現状と課題】

スポーツ指導では、動作のデモンストレーションや声かけが基本的な手法とされる一方で、必要に応じて身体接触を伴う指導も行われてきた。身体接触は、姿勢の修正や運動感覚の促進に寄与する側面があり、頻繁に使用されており、これまで経験的に支持されてきた。このように、スポーツ指導者や選手は経験や伝統に基づいて身体を触る指導法を受け入れてきたといえる。

しかし、近年、諸外国ではハラスメントや子どもの権利保護の観点から、身体接触を伴う指導の是非について倫理的な議論が展開されている。例えばクラシックバレエ関係では、2010年頃から欧米の一部のバレエ学校において、「ダンスにおける適切な身体接触に関する方針」が策定されている

(The Royal Ballet School, 2015)。そこでは、「身体を触る指導法が不可欠」であると明記されつつも、「最小限に留めること」、「事前に選手の同意を得ること」を求めている。しかし、「最小限」という表現は抽象的であり、具体的な基準が不明確である。また、身体接触の効果や選手の反応についての科学的な検証も不足している。

【社会的な価値観の変化と身体接触に対する不快感】

一方、一般社会においては、不要な身体接触や意に反する身体接触はセクシュアルハラスメントに該当し、厳しく避けられるべきものとされている。大森ほか(2013)の調査では、日本の大学生が身体に触れることに対して不快感を抱くことが示されており、特に女性においてその傾向が強いとされている。さらに、この不快感は、相手の性別、関係性の親密度、触られる身体部位、日常生活での身体接触の経験によって異なるとされている。

このように、スポーツ現場と一般社会では身体接触に対する価値観や倫理観に大きな隔たりが存在している。日本のスポーツ指導の現場では、「熱心な指導」、「技術の習得」、「信頼関係の構築」などといった文脈のもとで身体接触が東漸しされることも少なくなかった。こうした文化的背景を考慮しつつも、国際的な倫理基準や人権意識に基づくと、今後、日本のスポーツ指導現場においても、身体接触に関するガイドラインを策定することは必要と考えられる。

そのためには、競技種目や指導場面、選手の年齢や性別といった多様な要因に応じた「適切な身体接触」のあり方を明らかにする必要がある。特に、身体接触に対する受け取り方を指導者と選手の両方の視点から検討し、相互理解を深めることが持続可能なスポーツ環境の構築には求められる。

スポーツ指導と一般社会において相反する可能性のある価値観が存在する可能性を踏まえ、その両者の共生をめざし、スポーツ指導における「必要最小限の身体接触」の着地点を探ることは独自の視点であり、また、欧米で策定されたガイドラインを参照しつつ、日本の文化的背景や教育現場の実情に適した適切な指導法を模索する意義は高いと考えられる。

【調査結果からみえるスポーツ現場での身体接触に対する不快感の実態】

女子大学に通う学生175名(全員女性)を対象として、スポーツ場面における身体接触に対する不快感についての調査を実施した。対象者に対しては、接触者との関係性(親しい

友人、親しくない友人、教員)および相手の性別(女性、男性)を条件として、身体11部位(手、腕、背中、首・肩、頭、脚・足、腰、顔、お腹、お尻、胸)への接触に対して不快と感じるかたずねた。

その結果、女性(同性)による身体接触では、親しくない友人や教員における胸部や臀部など一部の部位では5割前後に達するものの、多くの部位で不快と感じる割合は5割を下回っていた。一方で、男性(異性)による身体接触では、親しくない友人や教員において、ほぼすべての部位で不快と感じる割合が5割を超えていた。親しい友人であったとしても、胸、お尻、お腹、腰といった体幹部では8割以上が「不快」と回答しており、相手との関係性が近くても、不快と感じる部位があることが明らかとなった。

この調査結果は、身体接触の受容性は、接触者の性別、関係性の親密さ、接触部位によって大きく左右されることを示している。特に、女性選手を対象とする現場では、男性指導者や男性トレーナーによる身体接触が、意図せずして強い不快感や心理的負担を与える可能性があることに十分配慮する必要がある。実際、近年報道されているように、男性指導者およびトレーナーによる女性選手に対するハラスメント事例も少なくない。

【倫理的なスポーツ指導を考える対話の場へ】

そこで、本企画では女子学生や女性アスリートに関わる現場で活動・活躍されている先生方を話題提供者として迎え、スポーツ指導を中心として、「身体に触れる」ことに対する認識や実態を共有することを目的としたワークショップを開催する。登壇者はそれぞれ、高校女子運動部活動、審美系統技種目、リハビリテーションという異なる分野において、長年、女性に関わる実践を続けてきた立場であり、視点の多様性と現場感のある観点から議論したい。

また、最終ディスカッションではフロアの方も交え「身体接触はスポーツ指導にとって本当に不可欠か」、「スポーツ指導における身体接触はどのように行われるべきか」といったテーマについて、多様な視点で議論を深めていきたい。現場の経験と心理学の知見を結びつけながら、実践的かつ倫理的なスポーツ指導のあり方を共に考える場としたい。

【登壇者】

企画者：権野めぐみ

司会：来田宣幸

話題提供者：伊藤将史(高校女子バレーボール部顧問)、橋元真央(新体操指導者)、越智敦子(理学療法士)。

【利益相反】特になし。

【引用文献】

大森馨子・五十嵐由夏・齋藤慶典・和氣洋美・巖島行雄
(2013)「触られる」ことは心地よいのか? (3) 日常生活における身体接触頻度からの検討. 日本心理学会大会発表論文集 (pp. 1EV-029) .

The Royal Ballet School (2015) Policy on Appropriate Physical Contact in Dance.

(ごんの めぐみ・いとう まさし・はしもと まお・おち じゅんこ・きだ のりゆき)

一般研究発表

ポスター発表 A1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

原理・認知・感情

- | | | | | |
|------|---|-------------------------------|--|----|
| A1-1 | 「ダンス・リサイクル」に創造性はあるのか?
—コンテンポラリーダンスにおける再構成的
創造性の構造分析— | ○ 来田宣幸 1
権野めぐみ 2
阪本麻郁 3 | (1 京都工芸繊維大学)
(2 名古屋葵大学)
(3 四国学院大学) | 31 |
| A1-2 | 東洋大学第 12 代学長:高嶋米峰の偉大性
について
高嶋正士生誕 100 年を記念する:高嶋正士
と偉大性心理学(4) | ○ 藤田主一 | (日本体育大学) | 32 |
| A1-3 | 「〇〇らしさ」の認知プロセス —人間と深層
学習モデルの意味処理順序の比較による検
討— | ○ 下條朝也 | (コニカミノルタ株式会社) | 33 |
| A1-4 | A.H.マズローの言う「自己実現」が殆ど見ら
れない世界について —現代の所謂「自己実
現」社会との比較において— | ○ 三島斉紀 | (神奈川大学) | 34 |

教育・発達・人格

- | | | | | |
|------|--|---|---|----|
| A1-5 | ロール・プレイングの可能性
—教育現場をささえる取り組み③— | ○ 時田学 | (日本大学) | 35 |
| A1-6 | 障害者の趣味活動とウェルビーイングの関連
性:質的研究による考察 | ○ 成井隆友 1
時田学 2 | (1 日本大学大学院)
(2 日本大学) | 36 |
| A1-7 | 中学校部活動への所属が心理社会的成長に
与える影響の縦断的検討:教員の働き方改
革と部活動の地域移行期における教育的意
義の再評価 | ○ 大門耕平 1
駒田淑久 2
来田宣幸 3 | (1 東北学院大学)
(2 近江兄弟社中学校)
(3 京都工芸繊維大学) | 37 |
| A1-8 | 接客業における顧客対応力尺度の開発 —
カスタマーハラスメント対策施策の効果計測
に向けて— | ○ 岩崎翔 1
設楽一碩 1
吉岡隆宏 1
紺野剛史 1
島田恭子 2,3
桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)
(2 一般社団法人ココロバ
ランス研究所)
(3 東洋大学) | 38 |
| A1-9 | AI 技術と心理学の融合によるカスタマーハラ
スメント対応教育プログラムの開発と実証 —
コールセンター従業員を対象とした実証実験
による教育効果の検証— | ○ 紺野剛史 1
岩崎翔 1
設楽一碩 1
吉岡隆宏 1
島田恭子 2,3
桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)
(2 一般社団法人ココロバ
ランス研究所)
(3 東洋大学) | 39 |

ポスター発表 AI・BI 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

教育・発達・人格

- | | | | | | |
|-------|---|---|---|---|----|
| AI-10 | カスタマーハラスメント体験 AI ツールを用いた訓練が従業員の対応力と主観的生産性に及ぼす長期的影響
—コールセンターにおける実証研究— | ○ | 設楽一碩 1
岩崎翔 1
吉岡隆宏 1
島田恭子 2,3
桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)
(2 一般社団法人ココロバ
ランス研究所)
(3 東洋大学) | 40 |
|-------|---|---|---|---|----|

臨床・福祉・相談

- | | | | | | |
|------|--|---|----------------------------|--|----|
| BI-1 | 自傷行為の経験と解離傾向の関連の検討 — 一般健常群との比較から | ○ | 今井田貴裕 1
小鹿柚祐 2 | (1 仁愛大学)
(2 人間環境大学心理学
部) | 41 |
| BI-2 | 社会人以降の対人関係と孤独感—職場と職場外におけるハラスメント被害経験の影響— | ○ | 藤後悦子 1
大橋恵 1
井梅由美子 1 | (1 東京未来大学) | 42 |
| BI-3 | 中学受験をめぐる親子の心理的葛藤② — 中学受験経験者に聞いた受験当時の親子関係と現在の幸福感— | ○ | 井梅由美子 1
藤後悦子 1
大橋恵 1 | (1 東京未来大学) | 43 |
| BI-4 | Social Networking Addiction Scale 日本語版の開発 — 因子構造と信頼性の検討— | ○ | 中谷智美 1
福井義一 2
堀孝司 3 | (1 名古屋産業大学)
(2 甲南大学)
(3 甲南大学大学院) | 44 |
| BI-5 | 大学生における行動的感情制御方略のスタイルと抑うつ・不安の関連 | ○ | 村田康德 1
加藤佳子 1 | (1 神戸大学大学院) | 45 |
| BI-6 | 単身中高年者における孤独感と時間的切迫感が将来展望に及ぼす影響 | ○ | 清水佐紀 1
村山陽 2 | (1 和洋女子大学)
(2 東京都健康長寿医療
センター研究所) | 46 |

健康・看護・医療

- | | | | | | |
|------|--|---|-----------------------------|-------------------------------------|----|
| BI-7 | カロリー・塩分量の栄養表示が選択行動に与える影響 | ○ | 杉山聡一 1
幸田仁志 2
来田宣幸 2 | (1 京都工芸繊維大学大
学院)
(2 京都工芸繊維大学) | 47 |
| BI-8 | タッチングによる快体験の様相
～時間的変化と身体感覚・感情への気づき～ | ○ | 小西奈美 1
内堀恵美 2
大久保千恵 2 | (1 明治国際医療大学)
(2 京都橘大学) | 48 |

ポスター発表 B1・C1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

健康・看護・医療

B1-9	花を用いた心理療法で撮影された生け花画像に関する距離分析と印象評価分析の検討	○ 内田誠也 1 田中英明 1 本村明嘉 1	(1 一般財団法人 MOA 健康科学センター)	49
B1-10	介護士を対象としたソーシャルスキル尺度の階層構造の検討	○ 三宅沙侑美 1 山野洋一 2 田中共子 1	(1 岡山大学) (2 京都産業大学)	50
B1-11	コロナ禍を過ごしてきた大学生の友人ネットワークと大学適応過程 —2019年度・2020年度入学者の TEM 図—	○ 上田仁 1 松浦均 2	(1 愛知県庁) (2 星槎大学)	51
B1-12	子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(1) 職場認知と子育て意識の関連	○ 池田琴恵 1 谷口まち子 2	(1 豊田工業大学) (2 南山大学)	52
B1-13	子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(2) 仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセス	○ 谷口まち子 1 池田琴恵 2	(1 南山大学) (2 豊田工業大学)	53

犯罪・社会・文化

C1-1	留学生との交流における意思決定バランスと行動変容ステージの関係	○ 田中共子 1 山野洋一 2 三宅沙侑美 1	(1 岡山大学) (2 京都産業大学)	54
C1-2	「きょうだい児」に関する態度分析 — YouTube のコメント欄を用いて—	○ 工藤咲	(立正大学大学院)	55
C1-3	17 歳身長分布での変動係数の経年増大等 —関与及び影響する諸領域での応用心理学的考察—	○ 廣島克佳	(マンション管理士)	56
C1-4	アタッチメントと他者のユーモアに対する魅力に関する日中調査	○ 中尾達馬 1 李同帰 2	(1 琉球大学) (2 北京大学)	57
C1-5	ありのまま信念が新規職場適応に与える影響	○ 谷口淳一	(帝塚山大学)	58
C1-6	マッチングアプリに対して大学生が持つ印象 —地域差と NIMBY の関連—	○ 井川純一	(東北学院大学)	59

ポスター発表 C1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

産業・交通・災害

- | | | | | | |
|-------|---|---|------------------------------------|---|----|
| C1-7 | 若手リーダーはいつ「矛盾」を活かせるのか?
—パラドキシカル・リーダー行動に与える年上部
下比率の曲線効果と外向性の調整効果— | ○ | 竹内規彦 | (早稲田大学商学学術院) | 60 |
| C1-8 | 推し活の行動的側面の構造と推しの対象の関
連について —探索的因子分析と多重コレスポ
ンデンス分析による検討— | ○ | 山村豊 1
菅野智子 2
大森哲至 3
田宮憲 3 | (1 桜美林大学)
(2 立正大学)
(3 帝京大学) | 61 |
| C1-9 | 推し活の心理的側面と行動的側面の関連につ
いて
—クラスター分析とコレスポネンデンス分析による
検討— | ○ | 菅野智子 1
大森哲至 2
田宮憲 2
山村豊 3 | (1 立正大学)
(2 帝京大学)
(3 桜美林大学) | 62 |
| C1-10 | あおり運転を誘発する運転行動の要因の検討
—STAXIを用いた怒り表出傾向との関連— | ○ | 今井靖雄 1
小島治幸 2 | (1 金沢大学大学院)
(2 金沢大学) | 63 |
| C1-11 | チーム・パラドックス・マインドセット尺度作成の
試み—パラドキシカル・リーダー行動の影響を中
心に— | ○ | 新保智之 1
竹内規彦 2 | (1 早稲田大学大学院)
(2 早稲田大学商学学術院) | 64 |
| C1-12 | フロー体験が導く主観的キャリア成功 —ポジテ
ィブ感情と外部参照型目標難易度の媒介メカニ
ズム— | ○ | 劉徳嘯 1
竹内規彦 2 | (1 デルテクノロジーズ株式会
社)
(2 早稲田大学商学学術院) | 65 |

スポーツ・生理

- | | | | | | |
|-------|---|---|---|--------------------------|----|
| C1-13 | 大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性
の研究 | ○ | 井上雄貴 1
新里知佳野 1
古澤伸晃 1
百田尚史 1
八木沢誠 1
軽部幸浩 2
藤田主一 1 | (1 日本体育大学)
(2 東京富士大学) | 66 |
| C1-14 | 大学剣道部員の心理的特性と身体的特性の研
究
—男子部員と女子部員の比較— | ○ | 新里知佳野 1
古澤伸晃 1
井上雄貴 1
百田尚史 1
八木沢誠 1
軽部幸浩 2
藤田主一 1 | (1 日本体育大学)
(2 東京富士大学) | 67 |

ポスター発表 C1 8 月 26 日 (火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半) 9:40~10:25

偶数番号(後半) 10:25~11:10

スポーツ・生理

C1-15	大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(1) —因子分析の検討—	○ 岡崎祐史 1 大藤潤也 2 大関貴久 3 森脇保彦 4 軽部幸浩 5 藤田主一 6	(1 武庫川女子大学) (2 至誠館大学) (3 東日本国際大学) (4 国士館大学) (5 東京富士大学) (6 日本体育大学)	68
C1-16	大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(2) —男女間における魅力の差について—	○ 大藤潤也 1 岡崎祐史 2 大関貴久 3 森脇保彦 4 軽部幸浩 5 藤田主一 6	(1 至誠館大学) (2 武庫川女子大学) (3 東日本国際大学) (4 国士館大学) (5 東京富士大学) (6 日本体育大学)	69
C1-17	大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(3) —共起ネットワークによる分析—	○ 大関貴久 1 岡崎祐史 2 大藤潤也 3 森脇保彦 4 軽部幸浩 5 藤田主一 6	(1 東日本国際大学) (2 武庫川女子大学) (3 至誠館大学) (4 国士館大学) (5 東京富士大学) (6 日本体育大学)	70
C1-18	大学生における剣道の寒稽古が心理的能力に及ぼす可能性	○ 百田尚史 1 古澤伸晃 1 新里知佳野 1 井上雄貴 1 八木沢誠 1 軽部幸浩 2 藤田主一 1	(1 日本体育大学) (2 東京富士大学)	71
C1-19	大学生の武道に対するイメージの研究 —初発反応の内容について—	○ 井上航人 1 軽部幸浩 1 藤田主一 2	(1 東京富士大学) (2 日本体育大学)	72
C1-20	大学生の武道に対するイメージの研究(2) —最も強いイメージについて—	○ 軽部幸浩 1 井上航人 1 藤田主一 2	(1 東京富士大学) (2 日本体育大学)	73
C1-21	日体大版剣道イメージ尺度(NIKS(ニックス))の作成(5) —信頼性について—	○ 古澤伸晃 1 新里知佳野 1 井上雄貴 1 百田尚史 1 八木沢誠 1 軽部幸浩 2 藤田主一 1	(1 日本体育大学) (2 東京富士大学)	74

ポスター発表 A2 8 月 27 日(水)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

原理・認知・感情

A2-1	表情解析 AI による入院患者の感情判定の試み	○ 稲野辺奈緒子 1 松沼悟 2 井上真郷 3 岩藤和広 4 小川久貴子 1 古屋健 5	(1 東京女子医科大学) (2 マクセル株式会社) (3 早稲田大学理工学術院) (4 東京ネクスト南砂内科) (5 立正大学)	75
------	-------------------------	---	--	----

A2-2	待つだけの場面と待ち時間に労力を必要とする場面間の選択行動に及ぼす労力の効果 —ヒトのデータを中心として—	○ 久保尚也	(駒澤大学)	76
------	---	--------	--------	----

A2-3	妬みは他者と共有されるのか —探索的検討—	○ 井上裕珠	(日本大学)	77
------	-----------------------	--------	--------	----

教育・発達・人格

A2-4	どの世代が他者に「親になる資格」を求めるのか? —「親になる資格」の認識における世代差—	○ 扇原貴志	(龍谷大学)	78
------	--	--------	--------	----

A2-5	ながらスマホ育児が幼児のインターネット依存に及ぼす影響 —3 波パネル調査による子どものインターネット利用時間の媒介効果の検討—	○ 松尾由美	(江戸川大学)	79
------	--	--------	---------	----

A2-6	ポジティブイラショナルビリーフ尺度日本語版の作成(第2報)	○ 森本康太郎	(福井県立大学)	80
------	-------------------------------	---------	----------	----

A2-7	英国保育者がポジティブに評価する雇用の特徴 —管理職と保育者の視点の違いに注目して—	○ 山本 睦	(常葉大学)	81
------	--	--------	--------	----

A2-8	自己批判の質的変容を促進する教育プログラム開発の試み —失敗後の動機づけを効果指標とした予備的検討—	○ 巻田晴香 1 及川昌典 2	(1 同志社大学大学院) (2 同志社大学)	82
------	--	--------------------	---------------------------	----

A2-9	潜在クラス分析による学校教員の心理的職務状態の分類 —バーンアウト症状と職務負荷認知および専門性向上意識を変数として—	○ 磯和壮太郎 1 今井田貴裕 2	(1 名古屋芸術大学) (2 仁愛大学)	83
------	---	----------------------	-------------------------	----

A2-10	選択法によるTCT創造性検査の課題の性質 —課題ごとの測定内容の検討—	○ 高下梓 1 岸学 2 黒岩誠 3	(1 松本看護大学) (2 東京学芸大学) (3 明星大学)	84
-------	-------------------------------------	--------------------------	--------------------------------------	----

A2-11	中老年における幸福感・うつ・未来展望の比較 —量的調査と老年期の漁師への予備的面接調査—	○ 白石奈津栄 1 三宅沙侑美 1	(1 岡山大学)	85
-------	--	----------------------	----------	----

ポスター発表 A2・B2・C2 8月27日(水)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

教育・発達・人格

A2-12	離乳期の我が子の特徴に対する親の説明と幼児期のアタッチメント安定性との関連	○ 福田佳織 1 森下葉子 2 尾形和男 3	(1 東洋学園大学) (2 文京学院大学) (3 放送大学)	86
-------	---------------------------------------	------------------------------	--------------------------------------	----

健康・看護・医療

B2-1	継続してきたことの挫折経験は恩恵が大きい—挫折経験の内容と自己成長と苦境耐性—	○ 本多麻子	(東京成徳大学)	87
B2-2	高齢潜在看護師によるアドバイスの戦略—Web 版対人関係小集団訓練プログラムでのアドバイス内容の質的分析—	○ 宮島直子	(北海道大学大学院保健科学研究院)	88
B2-3	精神科多職種連携の実効性に及ぼす心理的安全性の影響に関する探索的検討 —	○ 異儀田はづき 1 古屋健 2	(1 立正大学大学院) (2 立正大学)	89

犯罪・社会・文化

C2-1	推しへの思いにおける性差	○ 山岡重行	(聖徳大学)	90
C2-2	待ち時間を分けることと残り待ち時間を伝えることの効果	○ 富田瑛智	(帝塚山大学)	91
C2-3	大学生における防犯行動の規定要因の検討—計画的行動理論から—	○ 大久保智生 1	(1 香川大学)	92
C2-4	男性の伝統的男性性とミソジニーがゲイに対する態度の多次元性に及ぼす影響	○ 池田満	(南山大学)	93
C2-5	犯罪不安には性差があるのか? —犯罪不安,リスク認知,防犯意識,犯罪情報への関心,感情反応に着目して—	○ 皿谷陽子 1 今井田貴裕 2	(1 人間環境大学) (2 仁愛大学)	94
C2-6	夫婦間における家計についての会話の抑制経験	○ 渡辺伸子	(東北公益文科大学)	95

産業・交通・災害

C2-7	信号機のない横断歩道におけるドライバーの一時停止行動の心理的予測因に関する研究 —罪悪感、向社会性、違反寛容度の役割—	○ 木村年晶 1 古川紘子 2 内山伊知郎 3	(1 京都橘大学) (2 同志社女子大学) (3 同志社大学)	96
C2-8	新人のキャリア満足度を高める組織要因の二重経路 —組織的インクルージョンと内部者地位知覚の効果の比較—	○ 山本しおり 1 竹内規彦 2	(1 アフラック生命保険株式会社) (2 早稲田大学商学大学院)	97

ポスター発表 C2 8 月 27 日 (水)

8号館地下1階ホール

在席責任時間： 奇数番号(前半) 9:40~10:25

偶数番号(後半) 10:25~11:10

産業・交通・災害

C2-9	組織におけるサポートのパワーハラスメント抑制効果 —自己愛に注目したパワーハラスメント6 類型別検討—	○ 仙波亮一	(京都橘大学)	98
C2-10	組織社会化過程における新規学卒者の社会的スキルの役割 —縦断調査による連鎖媒介モデルの検討—	○ 竹内倫和	(学習院大学)	99
C2-11	多次元尺度構成法による大阪府堺市銘菓の心理的特徴可視化の試み	○ 秋保亮太 中村早希 大本浩司	(1 帝塚山学院大学)	100
C2-12	変革型リーダーシップと高業績 HRM システムが経営理念の浸透を通じて従業員のモチベーションに与える影響 —製造業の従業員における検証—	○ 脇坂正和 竹内規彦	(1 早稲田大学商学学術院)	101
C2-13	安全教育参加に伴う保護者の危険認識の変化の理由 —交通安全教育の効果評価の視点に関する考察—	○ 大谷亮	((一財)日本自動車研究所)	102
C2-14	公正世界仮説と他者のヒューマンエラーへの許しとの関連 —怪我の有無と完全主義の個人差の影響—	○ 森泉慎吾	(帝塚山大学)	103
C2-15	広告における緊急性の表示が購買意図に及ぼす影響 —カウントダウンタイマーの表示は商品の魅力を掻き立てるか?—	○ 小島弥生	(北陸大学)	104
C2-16	自動運転技術の社会的受容に対する影響要因	○ 王 晋民	(千葉科学大学)	105
C2-17	状況に着目したコンピテンシーモデルのフレーム	○ 片岡大輔	(株式会社日本能率協会 マネジメントセンター)	106

ポスター発表 C2 8 月 27 日 (水)

8号館地下1階ホール

在席責任時間： 奇数番号(前半) 9:40～10:25

偶数番号(後半) 10:25～11:10

スポーツ・生理

C2-18	フェンシング審判員の審判活動における 参加動機の構造	○	佐藤秀明 1 来田宣幸 2 権野めぐみ 3	(1 日本大学) (2 京都工芸繊維大学) (3 名古屋葵大学)	107
C2-19	高校部活動における倫理的指導の構築 と生徒のウェルビーイング:	○	伊藤将史 1 大門耕平 2 山本ちさと 3 権野めぐみ 4 来田宣幸 5	(1 近江兄弟社高等学校) (2 東北学院大学) (3 洛和会音羽リハビリテーション病院) (4 名古屋葵大学) (5 京都工芸繊維大学)	108
C2-20	姿勢制御における開眼・閉眼の影響 — 乱数生成課題と重心動揺計測の関係か ら—	○	板垣文彦 1 鹿内菜穂 2 須永範明 3	(1 国立病院機構 東京医療センタ ー) (2 垂細垂大学) (3 日本大学)	109
C2-21	大学競泳選手版自己調整学習方略尺 度作成の試み	○	高井美莉衣 1 種ヶ嶋尚志 1	(1 日本大学大学院)	110

教育発表 D2 8 月 27 日 (水)

8号館地下1階ホール

在席責任時間： 奇数番号(前半) 9:40～10:25

偶数番号(後半) 10:25～11:10

教育発表

D2-1	運転自己調節行動に影響を及ぼす諸要因の探索的検討	○ 福井匠流 山村豊	(1 桜美林大学教育探究科学群)	111
D2-2	創造的自己信念と諸要因の関係の検討—偏相関による分析—	○ 小松駿 時田学	(1 日本大学商学部)	111
D2-3	生と死に対する欲尺度(LADDS)の開発—探索的因子分析から—	○ 小鹿柚祐 今井田貴裕 2	(1 人間環境大学心理学部) (2 仁愛大学)	112
D2-4	青年期におけるアイデンティティ発達と集団へのコミットメントとの関連	○ 本田直人 時田学	(1 日本大学商学部)	112
D2-5	「キモかわいい」は人を甘やかすか? ~かわいさの新たな心理効果の検討~	○ 宮優作 齋藤拓心 岡田佳穂 井上裕珠	(1 日本大学商学部)	113
D2-6	セルフオーダーがカロリー選択に与える意外な影響	○ 長瀬華 阿部美乃 荒井香凜 井上裕珠	(1 日本大学商学部)	113
D2-7	企業の炎上は本当に悪か? —倫理的炎上が低関与消費者の購買意欲に与える影響—	○ 佐々木大輔 浅岡陽 市東紫月 前田直太郎 井上裕珠	(1 日本大学商学部)	114

「ダンス・リサイクル」に創造性はあるのか？

コンテンポラリーダンスにおける再構成的創造性の構造分析

○来田宣幸¹ 権野めぐみ² 阪本麻郁³
(¹京都工芸繊維大学 ²名古屋葵大学 ³四国学院大学)

キーワード：知識工学、創作、持続可能性

【目的】創造性は心理学・芸術学で重視され、「新規性」や「独自性」を基盤とする理論が多く提示されてきた。特に心理学領域では創造性を個人の特性や問題解決能力として捉えるアプローチから状況的・社会的要因を含むプロセス論的視点への関心が高まりつつある。芸術領域では、「ゼロから新たなものを生み出す」という生成モデル的な創造性観は根強い。一方で、近年では既存の素材や表現を再構成・再文脈化する手法にも注目が集まっている。しかし、芸術実践において「再構成」を伴う創作がどのような判断・構造・関係性の中で行われているのかの実証的・理論的研究は少なく、創造性研究においては位置づけが不十分である。

本研究は、コンテンポラリーダンスの創作において過去の作品を素材として再構成する「ダンス・リサイクル」実践に着目する。この手法は、既存の動きやテーマを単に再利用するのではなく、解体・再構成を通して新たな意味や構造を生成する。本研究はこの実践において、創作者がどのように素材を選び、意味を再構成し、創造的判断しているのかを質的に記述・分析する。特に、創作に内在する美的・社会的・身体的な多層的な判断や創造性のプロセス構造を明らかにすることで再構成的創造性の理解枠組みに理論的貢献を試みる。

【方法】調査対象者は、コンテンポラリーダンスの分野で長年にわたり創作・指導活動を行い、「ダンス・リサイクル」という手法を実践している振付家・阪本麻郁氏とした。

2025年4月から5月に研究者2名がオンライン形式で半構造化インタビューを実施し、録音・逐語記録の同意のもと、約90分の語りを得た。質問項目は素材選択の基準、構成判断、意味の再文脈化、価値観、教育的意義等のテーマを設定し、自由な語りを重視した。得られた逐語録から重要語句や概念を抽出し、構成原理や創造的判断を導出した。特に「素材選択」、「構成原理」、「意味再生成」、「価値判断」の4視点に着目しカテゴリー化・理論化を行い、創作プロセスに内在する創造性の構造モデルを探索的に導出した。

【結果および考察】対象者の語りから「ダンス・リサイクル」実践に内在する創造性の構造を検討した結果、以下の4つの主要カテゴリーが抽出された。1つ目に、「素材の潜在可能性を見出す視点」として、対象者は既存の作品や要素を単に再利用するのではなく、それらに含まれる未顕在の価値や意味に着目し、新たな文脈や構造へと変容させる創作判断を行っていた。特に、「リユース」、「リメイク」、「リサイクル」といった枠組みの違いを、原作品からの逸脱の程度や再構成への介入レベルとして整理し、創作の自由度や責任の在り方に応じた判断を行っていた。すなわち、リサイクルとは、既存の素材を一度構造的に解体し、それを再構築することで新たな意味や価値を生成する創作的実践であり、単なる再利用とは異なり、原型を保持しない変容プロセスを伴う点が特徴といえる。また、素材に潜在する創造的可能性を見出し、それを意味的・構造的に再文脈化する過程は、リサイクル的創作に内在する創造性の中核であり、既存の表現を基盤としつつ新たな価値を生成する営みとして評価できる。

2つ目は「判断基準の多層性」である。創作における判断は、自己の美学や感性に基づくだけでなく、元作品の振付家に対する敬意、出演者・スタッフや観客との関係性、教育的再利用の可能性、著作権や表記に関する配慮など、複数の文脈的要因に支えられていることがうかがえた。作品の再構成

に際して、対象者は「どこまで変更することが許されるか」、「何を記録・明記すべきか」といった問いに対し、表現の自由と倫理的責任とのバランスをとる判断を慎重に行っていた。リサイクル的創作においては、元の作品に対する一方的な「再利用」ではなく、多面的な視点に基づいた判断と選択が求められる。その判断は、単なる模倣や引用とは異なり、創作者自身の価値観や他者への配慮、社会的文脈を統合する高度な創造的営みである。したがって、たとえ出発点が既存の作品であったとしても、そこに至る選択と再構成の過程には、独自の創造性が内在しているといえる。

3つ目は「即興と構成」である。創作における素材の抽出段階では、偶発的な気づきや即興的な動きが重要な起点となっていた。一方で、作品として観客に提示するためには、構成の整合性や再現性が求められ、振付として一定の秩序と形を与える作業が不可欠であった。対象者は、即興と構成、自由と制約のバランスの中で、創作判断を柔軟に調整しながら、段階的に作品を構築していた。このプロセスは、「自由な発想」と「構造化された表現」の創造性のダイナミズムであり、素材が既存のものであったとしてもその取り出し方、組み立て方、展開の仕方において独自の創造的判断が求められていた。リサイクル的創作であっても、即興と構成を往復し新たに生成する実践は、創造的営みとして評価できる。

4つ目は「循環構造としての創造性」である。創造性は一方向的な「生み出す行為」ではなく、既存の表現を受け取り、意味や構造を再構成し、他者に再利用可能な形で開くという、継続的な創作プロセスとして捉えられていた。対象者は、作品に含まれる素材・ツールを抽出・再文脈化することで、単なる再演ではなく、次の創作の出発点として活用していた。このような再構成された作品は、今度は新たな「素材」として他者に共有され、再び創作の中で展開されることが期待されていた。特に、保存・再現が困難で、消失しやすいコンテンポラリーダンスにおいて、開かれた再構成的営みは、創造性の持続可能性という観点から極めて意義深い。リサイクル的創作は既存の表現を活用しているものの、一方で閉じるのではなく、開く実践であるという点において、本質的な創造性を有する営みとして位置づけることができる。

以上の分析から、「ダンス・リサイクル」における創造性は、素材と構成に関する多層的判断、即興と構成、美的・教育的な視座の重層によって支えられた再構成的営みとして捉えられる。その創作プロセスには、従来の「完全な新規性」や「独自性」を基盤とする創造性概念では捉えきれない、関係性的かつ動的な創造性が顕在化している。「リサイクル」という語には「古いものの使い回し」という否定的なイメージがあるが、ダンス・リサイクルは創造性の本質に関わる実践であり、コンテンポラリーダンスが本来的に有する「同時代性」、「再構成的性」、「多義性」といった性質に照らせば、この手法はまさにその芸術的本質を体現する実践であり、創造性の観点からも意義深いものであるといえる。

【利益相反】特になし。

【引用文献】

阪本麻郁・権野めぐみ・来田宣幸、「ダンス・リサイクル」
「実践とその可能性」、第76回舞踊学会大会抄録、
2024

(きだ のりゆき・ごんの めぐみ・さかもと まや)

東洋大学第12代学長：高嶋米峰の偉大性について

— 高嶋正士生誕100年を記念する：高嶋正士と偉大性心理学（4） —

藤田主一

（日本体育大学）

キーワード：高嶋米峰、高嶋正士、香川葆晃、偉大性

1. 研究の背景と目的

高嶋米峰（たかしまべいほう：1875-1949）は、哲学館（現東洋大学）の出身で、卒業後、井上円了の助手になり、のちに東洋大学第12代学長（1943年7月～1944年11月）を務めた社会教育家、仏教学者である（以下米峰とする）。

米峰は、1875（明治8）年1月15日、新潟県頸城郡竹直村（現在の上越市吉川区）において、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗本願寺派真照寺の第十三世住職宗明の長男として誕生した（幼名を大円という）。米峰という名前は、幼少期に朝晩眺望していた標高993mの霊峰・米山（よねやま）の美称で（図1）、大正10年には戸籍上も幼名の大円を米峰に改名している。米峰は、父宗明の晩年に誕生した唯一の男子で、本来なら第十四世住職になるはずであるが、出生したときにはすでに第十四世住職が決まっていたため、住職になることができなかったのである。



図1 霊峰：米山

高嶋正士（たかしまさし：1925-2021、日本応用心理学会名誉会員、真照寺第十六世住職、以下正士とする）からみると、米峰は大伯父（正士の父親の伯父）にあたり4親等（正士は筆者の伯父であるため、筆者から米峰は5親等）である。

ここでは、日本応用心理学会第91回大会が東洋大学で開催されるのを機会に、米峰の偉大性について回顧することを目的とする（本文中の敬称略）。

2. 研究の方法

米峰が残した多数の書籍や論説、年譜、正士の著述類、筆者所有の資料、各種メディアの資料、後世の『高嶋米峰自叙伝』（復刻）などを基にして論考する。

3. 結果と考察

米峰は、2003（平成15）年3月31日発行の新聞「上越タイムス」の特集記事「世紀を越えて：上越の偉人」の一人に取り上げられている（図2）。

（1）履歴：米峰は8歳のとき、父宗明の実弟である香川葆晃（かがわほうこう）に伴われて京都へ行き、郷里の小学校から転校を経験する。葆晃は、明治期に勤王僧の一人として行動し、のちに大学林（現龍谷大学）の総長、西本願寺執行長（現在の総長）などの要職を務め、勸学（同派最高の学階位）であった人物である。

米峰は、両親と死別後、自身の疾病のため一時郷里へ帰るが、14歳のときに再び葆晃の誘いがある京都へ戻り、西本願寺立普通教校（改称して大学林）に入る。18歳で新潟県出身の井上円了の哲学館に入学して学問の道へ進み、21歳で第七期教育学部を卒業し、井上の助手になる。23歳で哲学館近くの京華尋常中学校の国語作文科教師になる（日本大学心理学科を創設した渡辺徹は、米峰の教え子）。その後、多数の活動を経て、68歳のときに東洋大学第12代学長となる。1949（昭和24）年10月25日、三鷹市の自宅で永眠する。

（2）業績：米峰の経歴として特筆すべきことは、24歳のころから哲学館の同士とともに既成教団の腐敗を攻撃し、その改革を目的として「新仏教運動」を起こしたことであろう。正士は、「米峰はお経を読むことが嫌いだったが、父や叔父の

行動や態度、業績を常日頃見ていたので、寺に生まれたご縁から新仏教運動へ心を寄せたのだろう。親鸞聖人の『悲僧非俗』の立場に近い考えをもっていたのではないかと述べている。また米峰は、当時の廃娯や禁酒、禁煙運動には先頭に立って活動し、東京吉原花魁道中の禁止を訴えた。（2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」のなかで、吉原花魁道中の一部が放映された。）米峰の書物（単著）は60冊に及び、その半数以上は、60歳以降のものである。なかでも『聖徳太子正伝』（1948年：明治書院）は、天皇・皇后・皇太后・皇太子に献上された。執筆した論文や論説の数は数百になる。



図2 「上越タイムス」（平成15年3月31日）

（3）人物：米峰の人格を語るとき、乳幼児期の家庭環境の影響が大きいといわれる。米峰に一貫して見られる精神は「正義と正論」でなかったか。正士によれば、「何ごとにつけても単刀直入で、はっきりさせる性格を備えて外向性が強く自己に厳しかった」ようだ。幼いころから弁舌に長けていた米峰は自らの宗教観を国民に語りかけでいるが、その語り口は大変な反響があり、ラジオでの講演等で人気が高かったという。

本研究に関する利益相反はありません。

【引用文献】

- 高嶋米峰小誌（1975）. 廿七回忌・生誕百年記念、非売品。
- 高嶋米峰没後五〇年記念顕彰書籍刊行会編（2000）. 高嶋米峰、ピーマンハウス。
- 高嶋正士（2016）. 出会いとご縁、クロスロードエッセイ：私と応用心理学、応用心理学のクロスロード vol.8, 30-31.
- 藤田主一（2021）. 追悼：高嶋正士先生を偲んで、応用心理学研究第47巻第1号, 54-57. （ふじた しゅいち）

「〇〇らしさ」の認知プロセス： 人間と深層学習モデルの意味処理順序の比較による検討

下條朝也

(コニカミノルタ株式会社)

キーワード：ブランド・アイデンティティ、ブランド認知、視覚的注意

【目的】パッケージデザインは、企業のブランド・アイデンティティ（BI）を象徴するメディアであり、視覚的印象が消費者の態度形成や購買意思決定に大きな影響を与える

（Kapferer, 1994）。従来、色彩、ロゴ、タイポグラフィなど明示的な要素が議論されてきたが、こうした視覚的印象に対する人間の反応を、機械学習モデルと比較する試みが進展している。

特に、モデルが画像内のどの領域に注目しているかを可視化できるようになり、人間の視線データと主観評価と対応させることで、注視位置や視線の時系列変化がモデルと人間でどれほど一致しているかを評価する検討が進められてきた（Guo et al., 2021; Müller et al., 2024）。しかし、現時点の多くの研究は、視線位置や Grad-CAM マップの重なりといった、出力の一致度の検証にとどまり、情報選択と判断の順序構造に踏み込めていない。

また、Grad-CAM はモデルの出力勾配に基づいた事後的な可視化であり、情報処理の因果構造そのものを示すものではない。さらに、モデルが注目している箇所が人間と似ていても、それが異なる目的関数や報酬設計に基づいて導かれている可能性がある以上、外見上の注意の一致は構造的対応を保証しない。

そこで、本研究は、BI 処理過程における入力情報に対して、どの意味的特徴が選択され、それがどの順序で処理・評価されていくのかという認知的な情報処理の流れが、人間とモデルの間でどれほど共通しているかを検討する。具体的には、視覚的特徴の選別、意味の解釈、価値づけ、判断という一連の処理において、選好や評価の計算的枠組みに共通性が見られるかを検証する。処理構造が類似する場合、単なる出力結果の一致ではなく、モデルが人間のような情報選択と価値判断のパターンを内包していることを示唆し得る。

【方法】本実験では、2つの筆記具ブランド（以下「ブランドA」「ブランドB」）のパッケージデザインを対象とし、深層学習モデルと人間の視覚的処理構造の対応関係を検証した。

Grad-CAM によるフィルタ視覚化 データセットには、歴史が100年以上ありBIが確立されていると考えられる筆記具ブランドのパッケージ画像を各1000枚、計2000枚収集した。ブランド名が明示されている箇所はPhotoshopでマスキング処理を行い、視覚的特徴による判別が可能な状態とした。VGG16をベースとし、最終全結合層の出力ユニット数を2に変更して転移学習を実施した。訓練データ70%、検証データ30%に分割し、Adam最適化器、学習率1e-5、エポック数200で訓練した。最終的な検証精度は86.3%となった。

上記モデルの判断根拠を可視化するため、Grad-CAMを適用した。対象は「block5_conv3」層であり、出力クラスに対する勾配情報をもとに、入力画像上に重要領域をヒートマップとして重ねた。各刺激画像について、モデルがブランドAに分類した際のGrad-CAMマップを保存し、後述の比較に用いた。

視線計測実験と主観評価 成人参加者6名（男性4名、女性2名、平均年齢39.8歳±7.9）に対し、視線計測を実施した。訓練には用いなかった各ブランド10枚の画像（計20枚）を1枚5秒間ずつ表示し、注視を指示した。表示順はランダムであり、顎台を用いて頭部を固定した上で、UCAM-C750FBBKカメラとGazeRecorderソフトウェアにより視線データを収集した。画像ごとに、対象がブランドAである確信度（0-100%）をVAS形式で回答させ、70%以上の試行に限定して分析対象とした。

次に、画像内の視覚的意味カテゴリとして、「ロゴ」「色調」「質感」「材質」「形状」「構図」「余白」「影」など10カテゴリを設定し、専門家2名によってラベリングを実施した。視線データおよびGrad-CAMマップの高強度領域が、時間順にどのカテゴリを通過したかを抽出し、意味処理系列として記録した。

そして、BIに関連すると考えられる意味特徴（例：「高級感」を与える光沢）に対し、3条件（元画像、当該要素マスク、当該要素置換）を作成した。参加者およびモデルに対しそれぞれ提示し、ブランドAらしさスコア（VAS形式）を収集。スコア変化量を計算し、人間とモデルの間での評価反応の一致度を比較した。

【結果】

意味処理順序の一致度 DTW距離により算出した意味ラベル系列の対応度では、被験者とモデルの系列類似度スコアは平均0.76（相関係数ベース正規化、SD=0.09）であり、順序構造においても部分的な対応が観察された。特に「質感→ロゴ→色調」の順序は、被験者群の約83%およびモデル出力の約78%に共通して出現していた。

意味要素をマスクまたは置換した画像に対して、被験者およびモデルの評価スコアの変化量（Δスコア）を比較した結果、ピアソン相関係数は $r=0.64$ （ $p<.01$ ）であり、有意な一致が確認された。特に「高級感」の減衰処理に対しては、人間・モデルともにスコア低下が大きく、価値評価の因果構造に共通性が見られた。これは、深層学習モデルが表面的な分類を超え、意味的・価値的判断構造を内部的に獲得している兆候と捉えられる可能性がある。

【利益相反】なし。

【引用文献】

- Kapferer, J. (1994). *Strategic brand management: New approaches to creating and evaluating brand equity*. Simon and Schuster.
- Guo, S. S., Zhang, R., Liu, B., Zhu, Y., Ballard, D., Hayhoe, M., & Stone, P. (2021). Machine versus human attention in deep reinforcement learning tasks. *Advances in neural information processing systems*, 34, 25370–25385.
- Müller, R., Dürschmidt, M., Ullrich, J., Knoll, C., Weber, S., & Seitz, S. (2024). Do humans and convolutional neural networks attend to similar areas during scene classification: Effects of task and image type. *Applied Sciences*, 14(6), 2648.

(しもじょう あさや)

A.H.マズローの言う 「自己実現」が殆ど見られない世界について

ー現代の所謂「自己実現」社会との比較においてー

三島斉紀

(神奈川大学 経済学部)

キーワード：マズロー、自己実現、現代社会

【研究背景】 心理学や経営学に関する種々の著作を手にとると、“現代社会は、自己の有する能力を大いに発揮することが求められる、所謂「自己実現」社会である”…とのフレーズを間々目にする。そうして、この「自己実現 (Self-Actualization)」なる用語の前後に、その概念を提唱したとされる心理学者 A.H.マズローの名と、彼が提唱した欲求階層説について概説されることが多い。

ところで、当のマズローは日記をつける習慣があった。そうした彼の日々の走り書きを読んでいくと、晩年である 1969 年 11 月 28 日(死去する約半年前)に、「自己実現」が殆ど見られない社会について彼がメモ書きしていたものを見いだすことができる(34 の小段落から成る箇条書きの紙面である)。彼はそうした世界を「弱肉強食社会(jungle world)」、または「協働など見られないゼロサムゲーム、敵意に満ちた、悉無律な勝ち負け的社会観 (antisynnergic, zero-sum-game, adversary, win-lose Weltanschauung)」のもとにあるとしている(以下より、括弧内数字は日記内の段落順を指す)。

【彼が記した日記の内容の検討】 マズロー曰く、そうした弱肉強食的な社会の根底には、「競争(competition)」(1)と「対立(Rivalry)」(1)があるという。「最も適した者が生き残ること = 生き残る者こそが勝者であること、生存のために個々が争い合うこと(“Survival of the fittest” = whoever survives & wins. Individual struggle for survival.)」(22)という考え方が浸透しており、故に他者との「共同作業が有効なものとして機能しない」(34)という。そうした社会では「人を馬鹿にし、他者に対して生のままの力を見せつけるかのような行動をとり、他者を従属させ他者の上に「乗る」(7)。そうした勝敗こそが重視される社会においては、「困惑と疑念、不信と混乱」(16)が彼方此方で見られる。換言すれば「世界は危険に満ちた場所」(30)であり、もって「危険から保護されるということがなにより重視される(Protection against dangers is first)」(30)「安全レベルの世界観」(30)のもとにあるという。優位な立場にいる「強い者(卓越した者)が全てのものを収奪し、力を手にし、服従をも手にする」(27)、「強い者には喰らう権利があり、弱い者は喰われるべき」(27)という考え方がそこにはある。そうした「弱肉強食社会」における政治とは、力、地位、富、これらを得るための闘争」(29)に他ならないとマズローはする。

また、そうした「弱肉強食社会」における経済は、自分が得られる全てのものを手中にする権利(Jungle economics = you have a right to everything you can get)」(28)が主張される、と。「これは俺様のものだ」という絶対的な立場(“It’s mine” = absolute statement)」(28)からものを言い、「他者への義務など何もなく(no obligation to others)」(28)、「他者への責任感の無さ(No responsibility to others)」(2)が蔓延っている。「自分にとって良い事とは何なのか(What’s good for me ?)」(2)だけが注視され、従業員が「報われないことに対する責任感など見られない」(2)。それどころか「徳を積むこと、正直であること、寛大であることには、あまりにも大きな

コストがかかってしまう」(26)。「ある人は、それを行うことで懲罰を受ける」(26)ことさえある。そこでは「俗的な生き方」(25)、「低次元な快楽」(25)を追い求める生き方が流布している、と。

こうした競争・対立を根底に置いた世界では、彼曰く、「踏みこじること、支配的な闘争」(24)が繰り返されるという。そのため人々は「嘘をつくこと」(24)も当然のことであると考えている。そうした「視野が狭く」(13)、「疑念に基づき」(13)、「弱いのか強いのか」(13)だけの「二分法」(18)的な見方がなされることから、疑り深さが人々に観察される。「力、地位、富こそが究極的なもの」(21)であり、それらを有している者は、「いかなる気まぐれさや衝動を解き放つ」(21)ことも可能である。「陰では悪を称賛し、自分を肉食獣、虎であるかのようにみなし」(10)、そうした感覚を持つことに「恥ずかしいとする感覚も見られない」(10)。そこは「人間を扱うこと(buying people)」(7)ができる世界である、と。

この種の弱肉強食社会で「なにより重要な原則となるものは、自分への忠誠(First principle = loyalty to self)」(3)に他ならず、結果として、人は「鎧兜を身につけ」(14)、「背中の後ろに誰も立たせない」(14)ようになる。「自分一人だけ」(5)で悩み苦しみ、「リラックスなどできず、遊び心もなく、いつも心配で不安」(14)な状態に留め置かれる。もって、何をやっても無駄だ…と「怠惰(laziness)」(32)さが見られるようになり、「馬鹿で無能力、だらだら過ごすことを好む(stupid, incapable ; prefers idleness)」(32)ようになっていき、「報酬もしくは懲罰によって動機づけられる」(32)ようになっていく。

こうした社会においては、「他者を認めず、他者を気にかけず、他者の意見に耳を傾けることはなく」(4)、「自慢し、俺は大物なのだ」(15)と「偉そう」(15)に振る舞い、「誰かを助けてあげよう」という衝動などない」(15)者が多数見られる。また、そうした世界では、性が従属を表したり、支配を示すための道具ともなる(9)、と。

【結果】 上記までを概観すると、我々が日々目の当たりにしている所謂「自己実現」社会と呼ばれるものが、実際のところは、マズローが「自己実現」が殆ど見られないとする世界と非常に近似したものであると感じざるを得ないのではなかろうか。

【考察】 ここまで見てくると、著者であるマズローが主張した「自己実現」が殆ど見られないとする世界と、現状の所謂「自己実現」社会と呼ばれるものの間には、どうしてこれほどの近似性が見られるのか…という疑問が生まれてこざるをえない。言い換えれば、彼の言う自己実現の原義は何であるのかを再度、丁寧に渉猟していく必要があるのは明らかな今般ではなかろうか。

【引用文献】 Lowry, R. J. (1979), *The Journals of A. H. Maslow, Volume II*, C.A.: Brooks/Cole Publishing Company., pp. 1208-1211.

(みしま むねのり)

ロール・プレイングの可能性

教育現場をささえる取組み(3)

○時田 学

(日本大学商学部)

キーワード: ロール・プレイング・学校教育・教師

【目的】 文部省は1965年に「生徒指導の手引き」(文部省, 1965)を公刊し, 教育現場での活用に供していた。その後, 1981年に「生徒指導の手引」として改訂が行われ, 生徒指導の基本的な指導・資料として供されていた(文部科学省, 1981)。さらに, 2010年に「児童生徒にかかわるすべての教職員や, 教育委員会をはじめその他教育にかかわる多くの関係者などに読まれ, 具体的な指導や研修に大いに活用されることで, 生徒指導の一層の充実が進められること」(文部科学省, 2010)として「生徒指導提要」(文部科学省, 2010)が示された。その後の社会状況, 法整備等の状況変化を背景として「生徒指導提要」(改訂版)という改訂版が示された(文部科学省, 2022)。この中では, 特に「近年, いじめの重大事態や暴力行為の発生件数, 不登校児童生徒数, 児童生徒の自殺者数が増加傾向にあるなど」(2022, 文部科学省)という事態に対する今日的な対応がなされていると指摘されている(高橋, 2023)。

一方, 今回の改訂の主たる目的の一つと考えられる「いじめ」の記述の中で, 「学校においては, 道徳科や学級・ホームルーム活動などの時間に, 実際の事例や動画などを教材に児童生徒同士で検討したり, いじめ場面のロールプレイを行ったりするなど, 体験的な学びの機会を用意することが求められます」(文部科学省, 2022, P.132)という箇所が認められる一方で, 中学校道徳指導書(1962)では「生徒を当惑させ, その感情を傷つけるような役割を演じさせることは避けるべきである」との記述が劇化に対する注意として示されており, 体験的な学びの実施時に慎重さが求められるのではないかと考えられる。

「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)の趣旨から鑑みると, 本書の教育の現場における影響力は大きいと推察される。そこで, 上記の記述に関する研究の現状について検討するため, 昨年度に続いて, 現時点での同書籍に対する研究動向について調査し, 基礎的資料収集を目的として, 以下の検討を行った。

【方法】 「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)の現在における研究動向, 特にロール・プレイング(同書ではロールプレイと表記), と学習指導要領(文部科学省, 2017)で使用されている役割演技などの語句について, 文献・資料上の出現状況, を確認した。確認対象としては, 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所(NII)の提供しているCiNii(NII 学術情報ナビゲータ)を用いて行った。検索時期は, 2025年5・6月時点の複数回行った。

【結果】 はじめに「生徒指導提要」を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物: 391件, 研究データ0件, 論文342件, 本40件, 博士論文0件, プロジェクト9件という結果が示された。昨年度から比較すると全体で72件(22.1%)件の増加となっている。

次に, 「生徒指導提要」(改訂版)を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物: 64件, 研究データ0件, 論文56件, 本7件, 博士論文0件, プロジェクト1件0件という結果が示された。論文の区分が全体で10件(21.2%)の増加となっている。また, 「生徒指導提要」(改訂版)と「いじめ」を検索語として検索を行ったところ, す

べての著作物: 4件, 研究データ0件, 論文4件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。わずかながら増加がみられた。一方, 生徒指導提要と役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロールプレイングを含む)を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物: 2件, 研究データ0件, 論文2件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。しかし, 生徒指導提要(改訂版)と, 役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロールプレイングを含む)を検索語として検索を行ったところ, いずれの場合も, すべての著作物: 0件, 研究データ0件, 論文0件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。

【考察】 「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)が刊行された時期を考慮すると, 現時点の検索結果として論文に区分される著作物がいまだ約20%以上増加していることは, 刊行年から引き続き本発行物への教育関係者の関心の高さを示すものと考えられる。

一方で, 検索語として, 役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロール・プレイングを含む)を検索語に加える形で同書の検索を行った結果については, 論文が2件確認されたが, (改訂版)を検索語に加えた場合は有効な著作物は確認されなかった。この2件について, その内容を確認したところ, いずれも教員を養成する課程における技法の使用にとどまっており, 実際の教育現場での児童・生徒に対する体験的な使用ではなかったことが明らかになった。これは, 体験的な学びを取り入れる場合に, 十分な配慮, 例えば劇化を取り入れる際の注意点(文部省, 1962)や, ロール・プレイングを実施する場合, 多数の留意点(時田, 2019)があることなどを踏まえた結果であるとも考えられるが, ロール・プレイングや役割演技についての有効な活用法や, 学校現場での活用にあたって留意すべき点などを具体的かつ明確化し, それらの情報を集積・提供していくことが早急に求められている。その一助となるよう, 即興劇的技法やアクションメソッドを用いて行う治療的, 教育的集団技法の研鑽に努めている, 「日本心理劇学会」では, 特に学校におけるロール・プレイングのよりよい活用に向けてその, 方法や在り方について資料もまとめており(日本心理劇学会, 2024)それらの活用なされるようさらに内容を充実させていきたいと考えている。

【利益相反】 本研究における利益相反(COI)は認められない。

【引用文献】

文部省 1962 中学校道徳指導書

文部省 1965 生徒指導の手引き

文部省 1981 生徒指導の手引(改訂版)

文部科学省 2010 生徒指導提要

文部科学省 2017 小学校学習指導要領

文部科学省 2022 生徒指導提要(改訂版)

日本心理劇学会 2024 学校におけるロール・プレイングのよりよい活用に向けて<https://psychodrama.jp/iinkai/studentguideline/>

高橋典久 2023 概要解説「生徒指導提要(改訂版)」の概要 生徒指導提要(改訂版)前文と解説 学事出版 10-13

時田 学(2019) ロール・プレイングを教育現場の中で生かすために 日本応用心理学会第86回大会発表論文集 81

本研究は, 日本大学商学部の研究助成を受けた。記して感謝する。

(ときた がく)

障害者の趣味活動とウェルビーイングの関連性：質的研究による考察

○成井 隆友¹ 時田 学²

(¹ 日本大学大学院総合社会情報研究科人間科学専攻 ² 日本大学商学部)

キーワード：障害者 趣味活動 ウェルビーイング

【目的】本研究の目的は、障害者が日常的に取り組む趣味活動（大坊，2005）が、ウェルビーイングを構成する幸せの4因子のうち、「ありのまま因子（佐伯・蓮沼・前野，2012）」との関係に対し、質的手法を用いて明らかにすることである。本研究が「ありのまま因子」に着目したのは、障害者にとってこの因子が自己肯定感や自分らしさの受容と深く関係しており、趣味活動がそれを支える重要な手段（佐伯・蓮沼・前野，2012）であると考えられるためである。本調査の設計においては、インタビュー項目の妥当性を確認するため、先行調査として健常者に対する予備的インタビューを実施する。最終的な研究対象は（聴覚障害者、知的障害者、脳の障害者、発達障害者の方々を障害者と定義する）障害者ではあるが、対象者に適切なインタビュー内容であるかについて検討を行うために、健常者へのインタビュー調査を行う。

具体的には、趣味活動が健常者の幸福度（ありのまま因子）に与える影響を明らかにすることを目指す。これは、健常者へのインタビュー調査を行うために、障害者のデータと比較するための基準を確立し、趣味活動が幸福度に与える影響について多様な視点を得ることを通じて、質問内容や方法が適切かを事前に確認し、研究結果を広範な集団に一般化するために重要である（荒尾・潮見，2014）。

【研究背景】障害者のウェルビーイングに関する研究は、近年益々注目を集めている。例えば、林ら（2025）は、特別支援教育の支援策といった福祉的な観点を視野に入れ、ウェルビーイングの向上に寄与することを示している。また、ウェルビーイング学会（2025）は、ウェルビーイングに関する研究を推進して障害者おり、趣味活動がその一環として重要視されている。これらの研究（林他，2025）（ウェルビーイング学会，2025）は、趣味活動が障害者（杉野，2009）のウェルビーイングに重要な役割を果たすことを示唆している。更に、一般社団法人日本リハビリテーション工学協会（2025）は、趣味活動が身体的健康にも寄与することを示している。このように、趣味活動が障害者の全体的なウェルビーイングに与える影響についての理解を深めることが重要である。

【方法】調査対象は健常者（男性6名・女性4名、平均年齢54歳（8～66歳））とし、趣味活動についてインタビュー調査を行った。障害者についての趣味活動とウェルビーイングの関連性についての研究を行う前段階として、今回は健常者の趣味活動についてインタビュー調査（質的データ分析：テーマ分析法、質的データ整理技法）を行った。また、前野ら「幸せの四つの因子（佐伯・蓮沼・前野，2012）を参考に【やってみよう因子（やりがい・強み）関連】、【ありがたう因子（つながり・感謝）関連】、【なんとかかなる因子（前向き・楽観）関連】、【ありのまま因子（独立性・自己肯定感）関連】を基に、インタビュー内容を構築し、上記の理由により、基本情報、「ありのまま因子」のインタビューのみ検討した。以下にインタビュー内容を示す。

基本情報：あなたの名前、年齢を教えてください。
趣味活動：あなたが現在取り組んでいる趣味活動を教えてください。
【ありのまま因子（独立性・自己肯定感）関連】
・あなたは趣味活動をしているとき、自分らしさを感じることはありますか。

【結果】

	趣味活動 年代 性別	調査内容をまとめ小見出しをつけた
A	スキー40 女	自分が楽しむ
B	ギター60 男	他者とのつながりの中で
C	園芸 20 男	自分でアレンジできる庭
D	登山 40 男	自分のペースで登る
E	着物 50 女	自分に集中できる
F	キャンプ 20 男	自分だけのキャンプ
G	占い 50 女	自分の力を皆に伝える
H	野球 10 以下男	野球を通して自分らしさを発揮できる
I	土壌改良男	自分に集中してゾーンに入る
J	園芸・食事 50 女	自分の好きな通りにできる。

Fig1：「ありのまま因子」の分析結果。縦軸（A～J）は回答者（Hは10歳未満により保護者による回答、障害者インタビュー調査でも若年層を扱う。横軸は「ありのまま因子」のテーマ分析結果で、趣味活動のある各年代の男女を対象とし、調査内容をまとめ小見出しを作成）。

【考察】結果より、参加者の多くが、趣味活動を通じて「自分のペースでできる」「自分に集中できる」といった体験を語り、他者に左右されずに自己を肯定する傾向が見られた。これは「ありのまま因子」の特性と一致しており、趣味活動がこの因子の促進に寄与する可能性が示唆された。本研究では「ありのまま因子」のみに焦点を当てた。これは全ての因子を同時に扱うことで分析が分散し、趣味活動と自分らしさとの関係に関する検討が不十分となる可能性があるためである。予備調査としての性質上、参加者の負担や調査時間の観点からも、対象因子を限定する必要があった。他の因子については、今後の本調査にて段階的に検討し障害者にも同様の調査を行い、趣味活動を通じた自分らしさの実感、幸福度の向上に寄与する可能性があるため趣味活動がウェルビーイングに与える影響をさらに明らかにしていく必要がある。

【利益相反】利益相反：無。

【引用文献】

荒尾 雅文・潮見 泰藏（2014）. 障害者の幸福度は健常者と差があるのか？第49回日本理学療法学会大会（横浜）.
大坊郁夫（2005）. 趣味活動と主観的ウェルビーイングの関連. 心理学評論, 48(1), 45-62.
林尚示, 安井一郎, 鈴木樹, 眞壁玲子, 元笑予, 下島泰子（2025）「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を図る特別活動の実践課題. 東京学芸大学教育実践研究推進本部.
一般社団法人日本リハビリテーション工学協会（2025）. 身体活動とウェルビーイング 障害者スポーツから自然体験活動まで. 日本リハビリテーション工学協会.
佐伯・蓮沼・前野（2012）. 主観的 well-being とその心理的要因の関係 日本心理学会大会発表論文集, 76, (0).
杉野聖子（2009）. 障害のある人の余暇活動の保障とその支援における現代的課題—教育と福祉の連携について—日本体育大学紀要, 9 (1), 59-70.
ウェルビーイング学会（2025）. ウェルビーイングレポート 日本版 2025. ウェルビーイング学会. （なるいたかとも・ときたがく）

中学校部活動への所属が心理社会的成長に与える影響の縦断的検討：

教員の働き方改革と部活動の地域移行期における教育的意義の再評価

○大門耕平¹ 駒田淑久²（非会員） 来田宣幸³
（¹東北北学院大学 ²近江兄弟社中学校 ³京都工芸繊維大学）

キーワード：部活動、中学校、心理社会的成長

1.【目的】本研究は、現代の部活動が抱える課題（教員の長時間労働問題や指導者の専門性不足、不適切な指導）を認識した上で、中学校における部活動が生徒の成長を促進する重要な教育的機会であることを、客観的なデータに基づき実証することを目的とする。具体的には以下を明らかにする。

1.部活動所属の有無が生徒に与える影響の解明。

調査初期（春）および調査後期（冬）のそれぞれの時点において、部活動に所属する生徒と所属しない生徒の間で、自己肯定感、ソーシャルスキル、学校での不安感、学校での存在感の各項目に統計的に有意な差が存在するかを検証する。

2.部活動への所属が春から冬にかけての期間における生徒の心理社会的な変化に与える影響の解明。

各測定項目について、部活動に所属する生徒と所属しない生徒の間で、春から冬への変化量に統計的に有意な差があるかを検証し、部活動への所属が、これらの心理社会的な側面の成長や改善を促進する効果を有するかを明らかにする。

上記の実証分析結果に基づき、少子化や教員の働き方改革、地域移行といった外部環境の変化に直面する中学校部活動が依然として有する教育的意義を明確にする。これにより、今後の学校教育における部活動の適切な位置づけ、より効果的な活動内容の検討、および生徒の健全な発達を支援するための指導体制の構築に向けた基礎的な知見を提供することを目指す。

2.【方法】

2.1 調査対象と期間：対象は、近畿圏のA中学校に在籍する1年生から3年生までの生徒とし、2022年度の春期から2024年度の冬期までの3年間、計6回データを収集した。

2.2 調査項目：質問紙調査では、生徒の心理社会的な成長を測定するため、自己肯定感、ソーシャルスキル、学校での不安感、学校での存在感の4つの指標を用いた。

2.3 データ分析：SPSS Statistics 23.0を用いて分析した。主な分析方法は以下の2点とした。

1. 特定時点における群間差の検証：春期および冬期の各調査時点において、部活動所属群と非所属群の間で各心理社会的な指標の平均値に統計的に有意な差があるかを分析した。

2. 経時的変化における群間差の検証：各生徒の「冬期の値－春期の値」を「変化量」と定義し、この変化量を用いて部活動所属群と非所属群の間で独立サンプルt検定を実施し、これにより、部活動への所属が、心理社会的な側面の成長や改善を促進する効果を有するかを検証した。

3.【結果】

3.1 春期および冬季における群間比較

表1. 各心理社会的指標の部活動所属有無による平均値の比較

	所属あり			所属なし			t検定
	母数	平均値	標準偏差	母数	平均値	標準偏差	
春期							
不安感	895	3.38	± 1.16	175	3.30	± 1.14	
存在感	929	3.43	± 1.05	182	3.30	± 0.97	**
自己肯定感	929	1.64	± 0.91	182	1.74	± 0.95	
ソーシャルスキル	895	3.81	± 0.74	176	3.62	± 0.78	
冬期							
不安感	724	3.64	± 1.13	126	3.54	± 1.09	
存在感	831	3.63	± 0.89	138	3.50	± 0.91	**
自己肯定感	831	1.63	± 0.89	138	1.70	± 0.90	
ソーシャルスキル	815	3.88	± 0.75	136	3.73	± 0.90	

*p<.05, **p<.01

春期および冬期の各調査時点における部活動所属群と非所

属群の心理社会的指標の平均値を比較し、表1に示した。

その結果、存在感については、春期および冬期のいずれの時点においても、部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して有意に高い値を示した。その他においては部活動所属群の値が良い傾向ではあったが有意差は認められなかった。

3.2 経時的変化における群間比較

春期から冬期への各心理社会的指標の変化量について、部活動所属群と非所属群の間で比較した。その結果、存在感の変化において部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して、有意な増加を示した。また、自己肯定感の変化においても部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して、有意な増加を示した。不安感の変化およびソーシャルスキルの変化については、有意な増加はみられなかったが、部活動所属群の生徒の変化量の値が高い傾向がみられた。

表2. 経時的変化における群間比較

	所属あり			所属なし			t検定
	母数	平均値	標準偏差	母数	平均値	標準偏差	
不安感の変化	780	0.03	± 0.85	175	-0.01	± 0.79	
存在感の変化	750	0.07	± 0.56	182	-0.01	± 0.64	*
自己肯定感の変化	729	0.46	± 1.01	182	0.36	± 1.25	**
ソーシャルスキルの変化	780	0.15	± 0.90	176	0.06	± 0.82	

*p<.05, **p<.01

4.【考察】

本研究では、中学校部活動への所属が生徒の心理社会的成長に与える影響を、特定の時点での状態差および経時的変化の観点から縦断的に検討した。

4.1 特定時点における部活動所属の意義

特定時点における部活動所属の有無と心理社会的指標との関係では、春期および冬期のいずれにおいても、部活動所属生徒は非所属生徒と比較して、学校での存在感が有意に高い値を示した。これは、部活動が学校内での生徒の帰属意識や居場所の感覚を育む上で、非常に重要な役割を果たしていることを示唆している。

4.2 経時的変化における部活動の成長促進効果

本研究の最も重要な発見は、部活動への所属が、春から冬にかけての生徒の存在感と自己肯定感の有意な増加（成長）に寄与している点である。この結果は、部活動が単に生徒の心理社会的な状態を良好に保つだけでなく、実際にこれらの側面を積極的に育成・促進する機能を持っていることを強く示唆している。

4.3 結論

本研究は、中学校部活動が生徒の学校での存在感の維持・向上、そして自己肯定感の成長を促進する重要な教育的機会であることを実証した。この知見は、部活動の持続可能な発展と、生徒の健全な発達を支援するための今後の教育実践に資する基礎的なデータを提供するものである。

【利益相反】利益相反（conflict of interest; COI）無し。

【参考文献】

吉田浩之 来田宣幸 2014 中学校における日常的な学習・生活場面・時間帯を想定した生徒指導 学校心理学研究.

Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press

菊池章夫、「Social Skill 尺度の作成」、『東北心理学研究 38号』、東北心理学会、1998、67-68

（おおかど こうへい・こまだ としひさ・きだ のりゆき）

接客業における顧客対応力尺度の開発

カスタマーハラスメント対策施策の効果計測に向けて

○岩崎翔¹ 設楽一碩¹ 吉岡隆宏¹ 紺野剛史¹ 島田恭子^{2,3} 桐生正幸^{2,3}
(¹富士通株式会社 ²一般社団法人ココロバランス研究所 ³東洋大学)

キーワード：顧客対応力尺度，因子分析，カスタマーハラスメント

【目的】近年，カスタマーハラスメント（カスハラ）が深刻な社会問題となっている．サービス業従事者の46.8%が直近2年以内にカスハラ被害を受け，その半数が心身に持続的な悪影響を感じている（UA ゼンセン，2024）．国や自治体は対策を強化しており，組織でも従業員を守る取り組みが求められている．しかしながら，従業員の顧客対応力を計測可能な心理尺度はなく，従業員研修等の施策の効果を適切に評価できないことが課題である．そこで本研究では，顧客対応業務における冷静な対応やストレス管理力を計測する「顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale, CRRS）」を開発する．

【方法】

項目生成 関連する既存尺度 Customer Service Skills Self Assessment (CSSSA)，Kikuchi's Scale of Social Skills (KiSS-18)，ストレスマネジメント自己効力感尺度 (SMSE-20)，コーピング特性簡易尺度 (BSCP) などを参照し，心理学またはカスタマーハラスメントに精通した専門家6名によるKJ法で44項目を作成した．5件法（1＝とても思う～5＝全くそう思わない）で評定．解析時は逆転符号化し，値が大きいほど顧客対応力が高いものとした．

サンプル オンライン調査により回答を収集した．日本の人口統計に沿って抽出したオンライン調査回答者19,000名から接客業従事者2,383名をスクリーニングし，質的チェックを経て1,299名を解析対象とした．なお，オンライン調査にあたっては，調査の目的，回答の任意性，途中での回答中止の自由，ならびに個人情報保護について説明を行い，これらに同意した参加者のみから回答を収集した．

分析手順

- ① 記述統計量を算出し極端な偏り（天井／床効果を含む）のある項目を除外．ただし，該当項目はなかった．
- ② 因子数決定については，並行分析・BICとも6因子を支持（MAP＝5因子，調整MAP＝8因子）．最終的に，解釈容易性を考慮し6因子を採用した．
- ③ 因子抽出は最尤法を，回転はプロマックス回転を使用．
- ④ 主負荷量 $|\lambda| \geq .50$ ，副因子への負荷量 $|\lambda| < .30$ を満たす30項目のみを残し，それ以外の14項目は交差負荷項目として除外した．
- ⑤ 探索的モデルの自己評価として，同一データに対してモデル適合度（CFIおよびRMSEA）を算出した．また，信頼性（内の一貫性），妥当性（並存的妥当性）についても評価した．

なお，本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：P240044）．

【結果】

因子構造 表1に因子別サマリを示す．ストレスマネジメント関連（F1,F5,F6）と対応スキル関連（F2-F4）とに大別された．6因子で累積分散説明率は54.5%であった．

モデル適合度 CFI＝.909, RMSEA＝.060 (90%CI .058-.063) と概ね適合水準を満たした．

信頼性 6つの全ての下位尺度でクロンバックの α 係数が0.7以上であり，十分な内の一貫性を有する．

並存的妥当性 以下の4つの関連尺度を用いた：日本語版顧客関連ソーシャルストレッサー尺度（CSSJ）（島田・桐生・Dormann, 2023），Kessler Psychological Distress Scale (K6)，Utrecht Work Engagement Scale (UWES)，およびWHO-HPQ（主観的生産性指標）．CRRS総得点はCSSJ（ $r = -.165$, $p < .001$ ）およびK6（ $r = -.309$, $p < .001$ ）と弱い負の相関を示し，一方でUWES（ $r = .346$, $p < .001$ ）およびWHO-HPQ（ $r = .368$, $p < .001$ ）とは弱い正の相関を示した．これらの結果は，「対応力が高いほどストレス指標は低下し，業務エンゲージメントおよび生産性は向上する」という事前仮説と整合的であった．

【考察】本研究は，困難な顧客や状況に直面した際に自身のストレスを調整しつつも適切に対応できる力を測る，顧客対応力尺度（CRRS）を提案した．適合度を同一データで検証した点と，接客業全体を対象としたため業種横断の一般化が未確認であることは課題である．今後は現場導入し，カスハラ研修の効果指標として従業員が自らの顧客対応力を可視化・自己モニターする支援に活用したい．

【謝辞】本研究において，富士通株式会社の飯田智絵氏には多大なるご助力を賜りました．心より感謝申し上げます．

【利益相反】本研究は富士通株式会社の研究費で実施した．

【引用文献】

UA ゼンセン：「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料，2024．Available at https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5_記者レク資料.pdf

島田恭子，桐生正幸，Christian Dormann：顧客関連ソーシャルストレッサー日本語版尺度作成の試み，2023年度日本行動医学会学術集会，2023．

（いわさき しょう・しだら かずひろ・よしおか たかひろ・こんの たけし・しまだ きょうこ・きりう まさゆき）

表1．因子別サマリ．

因子	下位概念	項目数	Cronbach's α	代表項目
F1	ストレスの自己管理	8	0.885	イライラしそうなときでも，リラックスすることができる。
F5	楽観性	2	0.793	問題が生じたとき，「何とかかなる」と希望を持つ。
F6	自己肯定感	2	0.757	自分のことをそれなりに評価できる。
F2	コミュニケーション力	7	0.904	客が怒っている時に，上手く落ち着かせることができる。
F3	ホスピタリティ	6	0.839	思いやりをもって，人と接するようにしている。
F4	問題解決力	5	0.773	問題が生じたとき，今までの体験を参考に考える。

AI 技術と心理学の融合によるカスタマーハラスメント 対応教育プログラムの開発と実証

コールセンター従業員を対象とした実証実験による教育効果の検証

○紺野剛史¹ 岩崎翔¹ 設楽一碩¹ 吉岡隆宏¹ 島田恭子^{2,3} 桐生正幸^{2,3}

(¹富士通株式会社 ²一般社団法人ココロバランス研究所 ³東洋大学)

キーワード：心理尺度、ロールプレイ訓練、カスタマーハラスメント

【目的】近年、サービス業従事者に対するカスタマーハラスメント（以下、カスハラ）は、深刻な社会課題として注目されている。UA ゼンセン（2024）の調査によれば、直近2年以内にカスハラ被害を経験した従業員は46.8%にのぼり、そのうち約半数が心身に持続的な悪影響を受けていると報告されている。こうした状況を受け、厚生労働省は2023年にカスハラによる精神障害を労災認定基準に追加し、東京都では2024年に全国初のカスハラ防止条例が制定されるなど、制度的な対策が進展している。一方、企業や組織においては、従業員のストレス軽減や生産性維持の観点から、実効性のあるカスハラ対応教育の整備が急務である。しかし、現状では有効性が科学的に検証された研修プログラムは乏しく、対応力の育成が困難な状況にある。

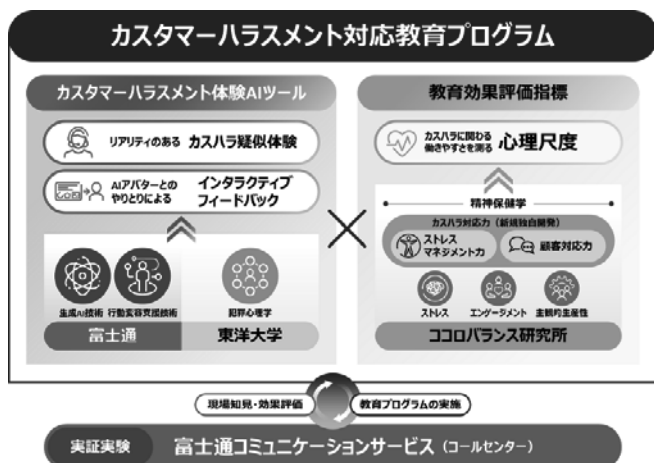
本研究の目的は、AI技術と心理学的知見を融合した「カスタマーハラスメント対応教育プログラム」を開発し、その有効性を実証的に検討することである。具体的には、AIを活用したロールプレイ訓練と、新たに開発した顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale: CRRS）を用いて、従業員の対応力、心理的負担、生産性への影響を多面的に評価する。

【アプローチ】本研究は、富士通株式会社、東洋大学、一般社団法人ココロバランス研究所の三者による産学連携の枠組みで実施された（Figure 1）。

富士通株式会社は、生成AI技術と行動変容支援技術を活用した「カスハラ体験AIツール」を開発した。本ツールは、体験者のバイタルデータ（心拍・呼吸）や発話内容をリアルタイムに解析し、AIアバターが個別にフィードバックを提供する。さらに、インタラクティブな対話機能を備え、体験者の納得感を高める設計となっている。

東洋大学は、犯罪心理学の知見に基づき、カスハラの典型的なシナリオを反映した訓練内容とフィードバック設計を担当した。

Figure 1
実証実験のイメージ図



ココロバランス研究所は、教育効果を測定するための新規心理尺度（CRRS）を開発し、ストレス、エンゲージメント、主観的生産性などの指標と組み合わせて、プログラムの効果を多角的に評価した。

【方法】

1. 顧客対応力尺度（CRRS）の開発

既存の対人スキル尺度やストレス対処尺度を参考に、カスハラ状況における対応行動を測定する44項目を作成。日本の人口構成比を考慮したオンライン調査により、接客業従事者1,299名からデータを収集した。因子分析（最尤法・プロマックス回転）により因子構造を抽出し、クロンバッチの α 係数により信頼性を既存尺度との相関により妥当性を検証。

2. ロールプレイ訓練の効果検証

富士通コミュニケーションサービス株式会社（CSL）のコールセンターに勤務するオペレーター12名（女性10名、男性2名、平均年齢43歳）を対象に、2024年12月3日から2025年3月31日までの期間で実証実験を実施。参加者は介入群（カスハラ体験AIツール使用）と統制群（特殊詐欺体験AIツール使用）に分け、2回のロールプレイ訓練を実施した。訓練前、訓練直後、1か月後の3時点で、CRRS、CSSJ（顧客満足度）、K6（心理的苦痛）、WHO-HPQ（主観的生産性）を用いたアンケートを実施。介入効果は群間比較により検証し、訓練中の成功体験の有無と対応力の変化量の関連も探索的に分析した。本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号: P240044）。

【結果】介入群において、1か月後のCRRSスコアが有意に向上した（ $t=2.10$, $p=0.045$, Hedges' $g=0.29$ ）。また、主観的生産性も有意に改善された（ $t=2.23$, $p=0.04$, Hedges' $g=0.44$ ）。これらの結果は、AIツールによる訓練が長期的に対応力と業務効率の向上に寄与する可能性を示している。

【考察】本研究は、AI技術と心理学的アプローチを融合した教育プログラムが、カスハラ対応力と主観的生産性の向上に有効であることを実証的に示した。特に、AIアバターとの対話を通じたフィードバックが、行動変容意欲を高め、長期的なスキル向上につながる可能性が示唆された。

【利益相反】本研究は富士通株式会社の研究費で実施した。

【引用文献】

UA ゼンセン：「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料，2024。Available at <https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5記者レク資料.pdf>

島田恭子，桐生正幸，Christian Dormann：顧客関連ソーシャルストレスサー日本語版尺度作成の試み，2023年度日本行動医学会学術集会，2023。

（こんの たけし・いわさき しょう・しだら かずひろ・よしおか たかひろ・しまだ きょうこ・きりう まさゆき）

カスタマーハラスメント体験 AI ツールを用いた訓練が 従業員の対応力と主観的生産性に及ぼす長期的影響

コールセンターにおける実証研究

○設楽一碩¹ 岩崎翔¹ 紺野剛史¹ 吉岡隆宏¹ 島田恭子^{2,3} 桐生正幸^{2,3}

(¹富士通株式会社 ²一般社団法人ココロバランス研究所 ³東洋大学)

キーワード：ロールプレイ訓練, 生成 AI, カスタマーハラスメント

【目的】近年、サービス業従事者に対するカスタマーハラスメント（以下、カスハラ）による、従業員のストレス増加・生産性低下が深刻な社会課題として注目されている。UA ゼンセンの調査によれば、直近 2 年以内にカスハラ被害を経験した従業員は 46.8%にのぼり、そのうち約半数が心身に持続的な悪影響を感じている。こうした状況を受け、厚生労働省は 2023 年にカスハラによる精神障害を労災認定基準に追加し、2025 年 4 月には東京都等で全国初のカスハラ防止条例が施行されるなど、国や自治体による対策が進んでいる。

一方で、企業や組織においても、従業員を守るための具体的な対応力育成が求められている。しかし、現状カスハラ対策に有効な研修等がなく、対策が困難である。

本研究の目的は、AI 技術と心理学の知見を融合した「カスタマーハラスメント体験 AI ツール」を開発し、その有効性を実証的に検討することを目的とした。具体的には、開発した AI ツールを活用したロールプレイ訓練と新規開発した顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale: CRRS）を用いて、対応力、心理的負担、生産性への影響を評価する。

【方法】AI ツールを活用したロールプレイ訓練と、新規開発した尺度 CRRS、および、関連する既存尺度を用いて、従業員のカスハラ対応力、心理的負担、主観的生産性への長期的影響を評価する。

参加者：富士通コミュニケーションサービス株式会社（CSL、現パーソルコミュニケーションサービス）のコールセンターに勤務する現役オペレーター 12 名（女性 10 名、男性 2 名、平均年齢 43 歳）を対象とした。

実験計画：参加者を介入群（カスハラ体験 AI ツール使用）と統制群（特殊詐欺体験 AI ツール使用）に分け、2 回の AI ロールプレイ訓練を実施した。訓練前・直後・1 か月後の 3 時点でアンケート調査を行った。

介入：

介入群：カスハラ体験 AI ツールを使用し、カスハラ顧客への対応をロールプレイ形式で体験。架空の専門家を模した AI アバターからフィードバックを受ける。

統制群：特殊詐欺体験 AI ツールを使用し、特殊詐欺顧客への対応をロールプレイ形式で体験。架空の専門家を模した AI アバターからフィードバックを受ける。

測定指標：

- CRRS（顧客対応力尺度）：顧客対応力とストレスマネジメント能力を測定
- CSSJ（顧客関連ソーシャルストレス尺度）：困難な顧客との遭遇頻度を測定
- K6（心理的ストレス反応）
- WHO-HPQ（主観的生産性の尺度）
- 行動変容意欲：顧客対応を変えようとする意欲を測定（独自質問）

分析方法：

群間比較による介入効果の検証に加え、訓練中の成功体験（カスハラに対処できたと感じた経験）の有無と対応力の変化量の関連を探索的に分析した。統計解析には、対応のある t 検

定、対応のない t 検定を用いた。効果量の指標として Hedges' g を算出した。

本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：P240044）。

【結果】介入群において、1 か月後の CRRS スコアが有意に向上した（ $t(5) = 2.10, p = 0.045$, Hedges' $g = 0.29$ ）。また、主観的生産性も有意に改善された（ $t(5) = 2.23, p = 0.04$, Hedges' $g = 0.44$ ）。これらの結果から、AI ツールの私用による長期的な対応力と業務効率の向上への寄与が示唆された。

一方、訓練直後の短期的な効果は限定的であったが、行動変容意欲は介入群で有意に高まった（ $t(10) = 2.08, p < 0.05$, Hedges' $g = 1.11$ ）。さらに、訓練中に成功体験を得た参加者は、対応力の向上が大きい傾向が見られた（ $t(9) = 1.24, p = 0.12$, Hedges' $g = 0.71$ ）。

参加者からは、AI ツールによる客観的評価の有用性、実業務に即したシナリオの導入、リアルタイムアドバイス機能の追加など、改善に向けた具体的な提案が寄せられた。

【考察】本研究は、AI 技術と心理学のアプローチを融合した教育プログラムが、カスハラ対応力と主観的生産性の向上に有効であることを実証的に示した。特に、AI アバターとの対話を通じたフィードバックが、行動変容意欲を高め、長期的なスキル向上につながる可能性が示唆された。一方で、短期的な効果が限定的であったことから、訓練設計にはさらなる工夫が求められる。成功体験の重要性が示されたことを踏まえ、難易度調整やリアルタイム支援の導入が、学習効果を高める鍵となる。また、参加者のフィードバックに基づき、実業務に即したシナリオや AI ツールの応答精度の向上も今後の課題である。

統制群と比較して顧客対応力に有意な向上が見られなかった理由として、統制群が元々カスハラへの関心が高い傾向にあったことや、特殊詐欺という異なる種類の問題への対応を体験したことが自身の対応について見直すきっかけになった可能性が考えられる。

本プログラムは、従来のマニュアル型研修では得られにくい実践的な対応力を育成する新たな手段として、企業の人材育成やメンタルヘルス対策に貢献する可能性を持つ。

【利益相反】本研究は富士通株式会社の研究費で実施した。

【引用文献】

UA ゼンセン：「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料, 2024. Available at https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5_記者レク資料.pdf

島田恭子, 桐生正幸, Christian Dormann: 顧客関連ソーシャルストレス日本語版尺度作成の試み, 2023 年度日本行動医学会学術集会, 2023.

(しだら かずひろ・いわさき しょう・こんの たけし・よしおか たかひろ・しまだ きょうこ・きりう まさゆき)

自傷行為の経験と解離傾向の関連の検討

一般健常群との比較から

○今井田貴裕¹ 小鹿祐祐²

(¹仁愛大学人間学部 ²人間環境大学心理学部犯罪心理学科)

キーワード：自傷行為・解離傾向・確認的因子分析

【目的】

自傷行為は自分を傷つける行為の総称である。これまでに、自傷行為は心理的苦痛を緩和するために行われること (e.g., 井上, 2017) や、自傷行為者は自己否定的であること (今井田・福井, 2021) がわかっている。既存の自傷行為の尺度は、自傷行為を行う傾向の強さを捉えることが目的である (土井, 2013) ために自傷行為の経験頻度を捉えることができなかったり、項目数が多い (岡田, 2002) ために心理的負担の懸念があったりした。したがって、既存の自傷行為に関する尺度では、臨床実践における自傷行為のアセスメントツールとして用いにくいと考えられる。そのため、心理臨床実践で活用できる自傷行為に関する尺度の条件として、自傷行為の経験を少数項目でとらえることが不可欠であった。

そこで、著者らは8項目で構成される自傷行為の経験尺度 (Measure of Experience Level of Self-Injury: MELSI) を開発した (今井田・小鹿, 2024)。MELSI は、精神疾患を有する人々のデータセットから、自傷の方法 (頭や手足・口・道具) で分類された3因子構造が見いだされた (今井田・小鹿, 2024)。しかし、この3因子構造の再現性を未検討である。

ところで、自傷行為の背景に解離の問題がある点がこれまでに指摘されてきた (e.g., Calati et al., 2017; Rallis et al., 2012)。解離とは、思考や感情などの心的過程が切り離されることにより一時的または持続的に人格の統合性が失われる体験のことである (田辺, 1994)。解離傾向が高まるにつれて、うつや自殺の可能性が高まるとされている (Maaranen et al., 2008)。なお、解離傾向の測定にはしばしば解離体験尺度 (Dissociative Experiences Scale: DES) が用いられるが、DES のカットオフ得点は30点であり、得点がそれ以上になると解離性障害の疑いがあるとされている (Bernstein & Putnam 1986)。よって、自傷行為を経験する人々の解離傾向の程度をそうでない人々と比較した上で把握する必要がある。

そこで、本研究では、自傷行為の経験する人々を対象に MELSI の因子構造の再現性を検討するとともに、自傷行為の経験する人々とそうでない人々の解離傾向の差を検討した。

【方法】

調査協力者 Web 調査サービスの Surveroid に依頼して、Web 上の質問票調査を実施した。省力回答者を抽出する項目に不備のなかった740名 (男性228名、女性512名) の協力を得た。平均年齢は24.36歳 ($SD=3.46$) であった。

質問票 自傷行為の経験を MELSI (今井田・小鹿, 2024) で測定した。同尺度は、頭や手足による自傷行為 (項目例、頭を壁や柱にぶつける)、口による自傷行為 (項目例、手や足を噛む)、道具による自傷行為 (項目例、刃物で体を傷つける) に関する8項目で構成され、回答は5件法 (1. 経験なし、2. ほとんどしなかった、3. した、4. かなりした、5. 頻繁にした) であった。解離傾向を DES (Bernstein & Putnam, 1986) の日本語版 (田辺・小川, 1992) で測定した。同尺度は、解離傾向 (項目例、まるでそれが実際に起こっていることに思えるほど、空想や白昼夢に引き込まれることがある) に関する28項目で構成される。回答は11件法 (「1. 0%」、 「2. 10%」、 「3. 20%」 ～ 「10. 90%」、 「11. 100%」) であった。

倫理的配慮 本研究は第一著者の前所属先の研究倫理審査委員会の許可を得た (倫理審査許可番号: 2024E-001)。

【結果】

まず、本研究のデータセットを自傷行為の非経験群と経験群に分類した。MELSI の全ての項目に1と回答した232名を自傷行為非経験群に、MELSI のいずれかの項目に2～5と回答した508名を自傷行為経験群にそれぞれ分類した。

その後、自傷行為経験群を対象に MELSI に対する確認的因子分析を実施した。その結果、適合度の指標は概ね良好 ($\chi^2(17) = 44.51, p < .001, CFI = .98, TLI = .97, SRMR = .03, RMSEA = .06$) であった。他方、信頼性分析を行った結果、頭や手足による自傷行為 ($\alpha = .78, \omega = .80$)、道具による自傷行為 ($\alpha = .83, \omega = .83$) は良好であったが、口による自傷行為 ($\alpha = .67, \omega = .66$) は低かった。また、頭や手足による自傷行為 ($M = 2.06, SD = 0.89$)、口による自傷行為 ($M = 2.25, SD = 0.91$) は左寄りのデータを示し、道具による自傷行為 ($M = 1.81, SD = 1.01$) は床効果を示した。以上の結果を Table 1 に示した。

Table 1

自傷行為経験群を対象とした MELSI の確認的因子分析の結果

NO	項目	M	SD	F1	F2	F3	h^2
1	顔や頭を殴る	1.85	1.08	.85			.72
2	爪を噛む	2.30	1.25		.52		.27
3	刃物で体を傷つける	1.89	1.14			.80	.64
4	頭を壁や柱にぶつける	1.95	1.05	.86			.73
5	唇を噛む	2.47	1.13		.55		.30
6	大量に服薬する	1.72	1.05			.89	.79
7	手や足を噛む	1.99	1.15		.81		.65
8	物を殴ったり蹴ったりする	2.38	1.08	.54			.29

注) F1は頭や手足による自傷行為、F2は道具による自傷行為、F3は口による自傷行為を示す

最後に、群別で解離傾向の差を検討した。Welch の t 検定の結果、自傷行為非経験群 ($M = 7.49, SD = 13.80$) よりも自傷行為経験群 ($M = 19.44, SD = 19.86$) の解離傾向のほうが有意に高かった ($t(621.46) = -9.46, p < .001, d = -0.66$)。

【考察】

本研究で用いたデータセットの740名の68.65%である508名が何らかの自傷行為を行っていた。よって、自傷行為が一般健常群にも広く蔓延している可能性が示された。これは、先行研究 (e.g., 井上, 2017; 山口, 2021) と同様の結果であった。

また、確認的因子分析の結果、MELSI は良好な適合度を示した。しかし、口による自傷行為の内的整合性が低く、道具による自傷行為に床効果が確認された。自傷行為者の多くが複数の方法を選択しない点 (関本・朝倉, 2019) を考慮すれば、MELSI の因子構造については、さらなる検討が必要であろう。

また、解離傾向は、自傷行為経験群のほうが自傷行為非経験群よりも有意に高かった。これは、自傷行為の背景に解離傾向がある臨床事例 (加藤, 2018) や基礎的研究 (岡田, 2003) を裏付ける結果であったといえよう。なお、近年では DES のカットオフの値について、15～25程度の値を用いることを推奨する報告 (e.g., 猪飼・大河原, 2013; Wise et al., 2000) も少なくない。その点を考慮すると、一般健常群の自傷行為者であっても病的解離の可能性を考慮する必要がある。

【利益相反】

利益相反関係にある企業はない。

【引用文献】

今井田貴裕, 小鹿祐祐 (2024) 自傷行為の経験尺度 (MELSI) と否定的自己概念尺度 (SSNS) の作成, 日本健康心理学会第37回大会抄録集. (いまいだ たかひろ・こじか ゆずゆ)

社会人以降の対人関係と孤独感

——職場と職場外におけるハラスメント被害経験の影響——

○藤後悦子 大橋恵 井梅由美子
(東京未来大学こども心理学部)

キーワード：ハラスメント被害、成人期、孤独感

【目的】社会人以降もメンタルヘルスの問題は重要である。社会人は、学生時代と比べると職場外でも家族内や親族、近所、子育ての親同士など多様な対人関係が存在する。対人関係のトラブルによる被害経験は、ハラスメントの文脈で語られることが多く、これらは、職場の中では徐々に顕在化されているが、職場外の地域や日常生活の実態はあまり明らかになっていない。

また、近年の成人期の問題に「孤独」がある。「令和5年版厚生労働白書」(厚生労働省, 2023)では、「孤独」と感じている年齢は男性では50代(47.6%),女性では20代(50.3%)が高かった。対人関係のハラスメントを受け、孤立し、孤独を感じている可能性もある。そこで本研究では、成人期の孤独感に社会人以降の対人関係のハラスメント被害体験がどのように関連するのか検討することとした。

【方法】1. 予備調査：2023年11月に通信制大学の子育てに関する演習授業を受講している社会人24名($M = 44.3$, $SD = 16.22$; 男性3名, 女性21名)に社会人以降のハラスメント被害経験の有無を尋ねた。その結果、75%が被害経験ありと回答した。被害の発生場所は、職場が最も多く、続いて地域活動、親戚となった。

2. 本調査：研究期間と手続き：2024年2月下旬にオンライン調査を実施した。

調査参加者：4000名(男性1674名; $M = 44.21$, $SD = 12.43$, 女性2326名; $M = 50.60$, $SD = 12.43$)であった。うち既婚者60.5%,子どもがいる者52.7%であった。

調査項目：デモグラフィック要因(年齢,性別,年収,県混の有無,子どもの有無),職場及び職場外でのハラスメント被害経験の有無,職場ハラスメント被害尺度(10項目)5件法,職場外ハラスメント経験尺度(15項目)5件法,日本語版 short-form UCLA 孤独感3項目版(Arimoto & Tadaka, 2019)を用いた。

倫理的配慮：東京未来大学の倫理審査の承認を得た。匿名性の担保,ネガティブな想起を伴うこと,自由意思,途中辞退が可能なこと,学術的使用について参加者から同意を得た。

【結果】要約統計量：10代8名(0.2%),20代345名(8.6%),30代733名(18.3%),40代1077名(26.9%),50代1020名(25.5%),60代以上817名(20.4%)であった。職業は,会社員1706名(42.7%),会社員(契約・派遣)228名(5.7%),経営者・役員96名(2.4%),公務員117名(2.9%),自営業182名(4.6%),自由業59名(1.5%)等であった。

ハラスメント被害経験の実態：ハラスメント被害経験なしは2683名(67.1%)であった。ハラスメント被害経験ありと回答した1317人の内訳(複数回答)は,職場560名(42.5%),家族248名(18.8%),友人関係217名(16.5%),近所181名(13.7%),地域の人間関係(12.5%),親同士の関係146名(11.1%),親族123名(9.3%),趣味のコミュニティ95名(7.2%),ネットの人間関係90名(6.8%)となった。

尺度構成と回帰分析：職場ハラスメント被害経験を因子分析(最尤法,プロマックス回転)し,因子負荷量0.4以下,ダブルローディングの項目を削除し再度因子分析した結果,

固有値3.87, 1.05, 0.99, 0.64...と2因子が確認でき,精神的攻撃6項目($\alpha = .82$),身体的攻撃2項目($\alpha = .83$)の2因子に分類された。

続いて,職場外ハラスメント被害経験を同様に因子分析した結果,1因子構造(15項目, $\alpha = .95$)が確認された。

次に孤独感を目的変数,その他の変数を説明変数としてロバースト回帰分析を実施した

(Table 3)。その結果,モデルは有意であり($F(7,691) =$

12.17 , $p < .001$), VIFは2.3以下であり多重共線性は問題なかった。職場ハラスメント被害経験の精神的攻撃($\beta = .30$, $p < .001$)の効果が有意であり,職場で精神的攻撃の被害に遭った者ほど,孤独感が強かった。

【考察】社会人以降のハラスメントの被害経験は,職場外被害も一定数いたものの,職場での精神的攻撃が孤独感と関連していた。孤独感とは精神的疾患や自殺,ひきこもりなど様々な問題につながる要因であるため,積極的に職場のハラスメント予防を行う必要性が示唆された。

【利益相反】 本研究における利益相反はない。

【引用文献】

Arimoto, A. & Tadaka, E. (2019). Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale ver 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. *BMC Women's Health*, 19,105.DOI:10.1186/s12905-019-0792-4
厚生労働省 (2023). 令和5年版厚生労働白書
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/22/dl/zentai.pdf>
(とうごえつこ・おおはしめぐみ・いうめゆみこ)

Table1

職場ハラスメント尺度の因子分析(最尤法,プロマックス回転)

項目	F1	F2	共通性
F1 精神的攻撃($\alpha = .82$)			
人格を否定するような言動を行われた。	.78	-.18	.47
できないことを強制的に押し付けられた。	.69	.05	.52
長時間にわたって叱責を繰り返行われた。	.65	.10	.52
集団で無視された。	.57	.11	.41
不当な噂を流された。	.54	.05	.33
自分だけ必要な連絡をもらえなかった。	.53	.11	.37
F2 身体的攻撃($\alpha = .83$)			
たたいたり,けられたりなど,身体的暴力を振るわれた。	-.04	.90	.77
物を投げつけられた。	.04	.79	.66
因子間相関	F2	.61	

Table2

職場外ハラスメント尺度の因子分析(最尤法,プロマックス回転)

項目	F1	共通性
自分だけ必要な連絡をもらえなかった。	.81	.65
自分だけ行事や飲み会などに誘われなかった。	.79	.63
仕事や役割には関係ない私的な雑用を強制的に行わされた。	.79	.63
できないことを強制的に押し付けられた。	.79	.62
プライベートの内容についてしつこく聞かれた。	.76	.58
長時間にわたって叱責を繰り返行われた。	.76	.57
集団で無視された。	.75	.56
物を投げつけられた。	.75	.56
たたいたり,けられたりなど,身体的暴力を振るわれた。	.75	.56
性的な嫌がらせをされた。	.74	.55
家族に対して,嫌なことを言われたり,されたりした。	.74	.55
不当な噂を流された。	.74	.54
SNSで誹謗・中傷された。	.73	.53
子どもに対して,嫌なことを言われたり,されたりした。	.72	.52
人格を否定するような言動を行われた。	.67	.45

Table3

ロバースト回帰分析の結果

変数名	孤独3項目
精神的攻撃	.30 **
身体的攻撃	-.05
職場外ハラスメント	.06
性別	-.04
結婚有無	-.05
子ども有無	.08 +
世帯年収	-.07 +
R^2	.11 **

** $p < .01$, + $p < .10$

性別：1男性,2女性 婚姻：1既婚,2未婚 子ども：1あり,2なし

中学受験をめぐる親子の心理的葛藤②

中学受験経験者に聞いた受験当時の親子関係と現在の幸福感

○井梅由美子, 藤後悦子, 大橋 恵
(東京未来大学)

キーワード: 中学受験, 教育マルトリートメント, 主観的幸福感

【目的】

年初の受験シーズンになると、ニュース等でも話題となるが、首都圏では20%程度の小学生が中学受験を経験する(首都圏模試センター, 2025)。中学受験には地域差も大きく、私立中学に通う生徒の全国平均は7.9%であるが、東京都では26.3%と(文部科学省, 2025)、一部の子のみが体験する特別なイベントではなくなっている。中学受験は専門の塾に通うなど多くの学習をこなす必要があり、子どもの年齢も若いことから親が過干渉になりやすい。そのため、教育虐待や教育マルトリートメントにつながる危険性もある(浅見, 2024)。こうした中学受験の経験はその後の心の健康にどのような影響を及ぼすのであろうか。

そこで本研究では、中学受験を経験した成人男女を対象にオンライン調査を実施し、中学受験時の親子関係やモチベーション等が現在の幸福感に与える影響について検討した。

【方法】

調査対象者 19~39歳の中学受験経験者700名。

調査時期と手続き 2025年1月末~2月初旬に調査会社に依頼し、オンラインにて実施した。

調査内容 ①フェイス項目として年齢、性別、就業形態、婚姻の有無、最終学歴、年収、中学受験の可否等を尋ねた。②現在の主観的幸福感についてDienerら(1985)の尺度を用いて尋ねた(5項目、5件法)。さらに、中学受験時を振り返ってもらい、③中学受験時のモチベーション(4項目、5件法)、④父母の教育マルトリートメント(浅見, 2024)(各10項目、5件法)、⑤親の受験への関与(7項目、5件法)、⑥中学受験の影響(大橋, 投稿中)(12項目、5件法)、⑦家族雰囲気(5項目、6件法)について等尋ねた。倫理的配慮 東京未来大学の倫理審査の承認を得た。調査の実施にあたって参加は自由意思であること、匿名性が担保されていること、学術的な利用のみ行うこと等を説明した。

【結果】

回答に不備があった者を除き、男性338名($M=30.22$ 歳, $SD=5.46$)、女性335名($M=29.71$ 歳, $SD=5.29$)、計673名を分析対象とした。

はじめに、各尺度について項目分析を行い、使用する項目を選定した。教育マルトリートメント尺度(父母それぞれ)、主観的幸福感、受験へのモチベーション、親の受験への関与、家族雰囲気については一因子でのまとまりが確認された。受験の影響については、因子分析の結果、2因子が得られた。第1因子は「中学受験のための勉強をしたことで

人間として成長できた」など「ポジティブな影響」、第2因子は「中学進学後、無気力になった」などが見られ、「ネガティブな影響」とした。各尺度の α 係数、平均値、および標準偏差はTable1に示す通りである。平均値の性差は、父母の教育マルトリートメント、受験の影響の2因子、家族雰囲気で見られ、いずれも男性の方が高かった。

つぎに、現在の主観的幸福感に関連する要因を明らかにするために、受験時の親や家族関係、受験の影響、モチベ

Table2
重回帰分析結果

	男性 β	女性 β
(中学受験時)		
教育マルトリートメント		
父合計	.252 **	.284 **
母合計	-.022	-.166
家族雰囲気	.351 **	.364 **
受験への関与	-.046	.082
受験の影響		
ポジティブ	.339 **	.251 *
ネガティブ	-.177 *	-.180 *
受験モチベーション	-.038	-.064
受験結果	-.065	-.099
(現在)		
婚姻状況	.100	.130 *
最終学歴	-.015	-.037
年収	-.014	.015
調整済R ²	.351	.387
	** $p<.01$	* $p<.05$

ョン、受験結果、フェイス項目等を説明変数として、男女それぞれ重回帰分析を行った(Table2)。分析の結果モデルは有意であり(男性 $F(11, 223) = 8.37, p<.01$; 女性 $F(11, 179) = 6.70, p<.01$)、多重共線性も問題なかった。男女とも父親のマルトリートメントがあるほど、家族雰囲気が良いほど、受験について良い影響を感じているほど、悪い影響を感じていないほ

ど現在の幸福感が高いことが分かった。さらに女性では、既婚であることが幸福感を高めていた。

【考察】

本研究では、中学受験経験者に当時の状況を振り返り回答してもらうことで、受験の経験が現在の幸福感に及ぼす影響について検討した。男女とも現在の幸福感に最も影響していたのは家族関係であり、家族の仲の良さやくつろいだ雰囲気が幸福感を高めていた。また、受験結果や最終学歴、年収等実際の結果ではなく、受験を自らを成長させる良い経験であったと考える等、捉え方の方が重要であることが推測された。ただし、女性は婚姻の有無が幸福感に影響していた。最後に、教育マルトリートメントは、父親に限っては予想に反してプラスに働いていた。これは父親の熱心さと受け止めたためであろうか。この点については今後さらなる検討が必要である。

【利益相反】 記すべき利益相反はない。

【引用文献】

浅見里咲(2024). 中学受験期に起きるエデュケーショナル・マルトリートメント 日本教育心理学会第66回総会
Diener, E. et al (1985). The Satisfaction with Life Scale. Journal of Personality Assessment, 49, 71-75.
首都圏模試センター(2025). 受験情報ブログ
<https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry004634.php>

文部科学省(2025). 令和6年度学校基本調査

【付記】 東京未来大学特別研究助成により行われた。

(いうめ ゆみこ・おおはし めぐみ・とうご えつこ)

Table1
各下位尺度の α 係数、平均値(標準偏差)

下位尺度名	α	男性	女性	t値
教育マルトリートメント				
父合計	.963	2.37 (1.06)	1.99 (0.99)	4.65 **
母合計	.960	2.36 (1.08)	2.10 (1.05)	3.01 **
幸福感	.906	3.02 (1.03)	2.94 (0.99)	0.97
受験モチベーション	.816	2.96 (0.94)	2.95 (0.95)	0.11
受験の影響				
ポジティブ	.902	3.15 (0.88)	2.99 (1.00)	2.21 *
ネガティブ	.904	2.72 (0.98)	2.37 (0.97)	4.66 **
受験への関与	.891	3.09 (1.11)	2.91 (1.10)	1.87
家族雰囲気	.922	3.93 (1.25)	3.67 (1.37)	2.53 *

** $p<.01$ * $p<.05$

Social Networking Addiction Scale 日本語版の開発

—因子構造と信頼性の検討—

○中谷智美¹ 福井義一² 堀 孝司³

(¹名古屋産業大学 ²甲南大学 ³甲南大学大学院人文科学研究科)

キーワード：SNS 依存, Social Networking Addiction Scale, 尺度開発

【目的】

全世界的規模のインターネット普及には、功罪両面がある。インターネットやスマホへの依存、ゲーム障害などは、悪影響の典型例であると言える。わが国におけるインターネット利用は、特に他者との交流を目的とした Social Networking Service (SNS) に偏っていることから、こうした依存の大半は SNS 依存であるといっても過言ではない。今後、わが国において SNS 依存の実態を捉え、エビデンスに基づいた対策を講じるには、それを正確に測定可能な尺度が必要不可欠であるが、現状ではそうした尺度は見当たらない。

そこで本研究では、SNS 依存を行動依存モデル (Griffiths, 2005) の 6 つの構成要素 (突出, 気分変容, 耐性, 離脱症状, 葛藤, 再燃) で捉えることが可能な Social Networking Addiction Scale (Shahnawaz & Reman, 2020) の日本語版 (SNAS-J) を作成し、その因子構造と信頼性を確認することを目的とした。

【方法】

調査協力者：一般成人と大学生の協力を得た。因子構造の検討のために 1,788 名 (男性 1,008 名, 女性 770 名, その他 10 名, $M_{age} = 35.10$ ($SD = 14.45$)) の、再検査信頼性の検討のために、852 名 (男性 486 名, 女性 361 名, その他 5 名, $M_{age} = 37.46$ ($SD = 14.36$)) のデータを使用した。

使用尺度：試作された SNAS-J (加堂他, 2023a, b; 澤田他, 2024) の一部の項目の翻訳を修正した。なお、質問票には他の尺度も含まれていた。

手続き：事前にインフォームド・コンセントが得られた者だけが、オンライン調査に参加した。

Table 1 18項目を対象とした探索的因子分析 (最小二乗法・オブリンミン回転) の結果

No.	項目	因子番号	I	II	III	IV	V	VI	共通性
I: 突出 ($\alpha=.89$)									
03.	勉強中でも、仕事中でも、SNSの更新をチェックしてしまう		.85	-.02	.01	.01	.04	-.02	.77
04.	どんな課題や活動を始めの前であっても、自分のSNSアカウントをチェックしてしまう		.85	.03	.03	-.02	-.05	-.02	.71
02.	朝、目が覚めたら、すぐにSNSを開く		.71	-.01	-.04	.02	.12	.03	.61
01.	勉強中でも、仕事中でも、頭の中ではSNSのことを考えてしまう		.70	.06	.05	.04	-.05	.03	.62
II: 離脱症状 ($\alpha=.91$)									
12.	SNSにログインできないときには、いつでもイライラする		-.02	.91	-.00	-.01	-.05	-.04	.71
11.	SNSにログインできる状況にないと、悲しく感じる		.01	.86	-.05	.01	.03	.01	.74
13.	SNSを使えないと、もどかしく感じる		.01	.72	.03	.02	.08	.06	.72
14.	SNSのための時間をとらないと、落ち着かなくなる		.10	.65	.11	.04	-.00	.08	.74
III: 再燃 ($\alpha=.93$)									
19.	SNSを使うのを止めようとしたのに、失敗したことがある		-.02	-.02	.94	-.03	-.02	-.01	.78
21.	何でもSNSにかかる時間を減らそうと試みたが、ことごとく失敗に終わった		.06	.02	.84	.04	-.04	.01	.82
18.	SNSにかかる時間を削るのに失敗したことがある		-.03	-.01	.83	.04	.05	.01	.75
20.	自分では、どうしてもSNSにかかる時間を削ることができない		.13	.10	.61	.05	.09	.03	.77
IV: 葛藤 ($\alpha=.81$)									
16.	両親や他の人からSNSの利用状況について尋ねられたら、嘘をつく必要がある		.04	-.03	-.02	.82	-.02	.01	.66
15.	自分がSNSにかけている時間の長さを隠そうとする		-.05	.05	.04	.80	.03	-.01	.70
V: 耐性 ($\alpha=.85$)									
09.	昔に比べると、SNSにかかる時間が増えた		.02	.03	.02	.03	.85	.00	.82
08.	近頃、SNSにかかる時間が増える一方だ		.24	.05	.11	.07	.46	.14	.76
VI: 気分変容 ($\alpha=.81$)									
07.	SNSをしているときには、いつでもリラックス感がある		.03	-.03	-.05	.03	-.05	.91	.77
06.	SNSは、気分を上げるのに役立つくれる		-.04	.08	.09	-.03	.08	.70	.64
因子間相関									
		I	.69	.65	.57	.63	.49		
		II	—	.58	.59	.50	.55		
		III		—	.66	.53	.38		
		IV			—	.45	.33		
		V				—	.52		

倫理的配慮：本研究は、第二著者の所属先のヒトを対象とした研究倫理審査の承認を得て実施された (承認番号 24-06)。

【結果】

全 21 項目を対象とした探索的因子分析 (最小二乗法・オブリンミン回転) の結果、原版と同様の 6 因子構造が得られたが、項目 5「イライラしたり、取り乱したりして、こころが落ち着かないときには、いつでも SNS を開く (気分変容)」, 10「充足感を得るには、以前よりも長い時間、SNS をする必要がある (耐性)」, 17「SNS をしなければならない、またはしたいがために、眠るべきだと分かっているのに、自分をごまかしてでも続けてしまう (葛藤)」が原版の想定とは異なる因子に高い因子負荷量を示した。そこで、これらの 3 項目を削除した 18 項目に対して同様の探索的因子分析を実施した結果、原版通りの単純構造が得られた。その結果を、Table 1 に示した。次に、21 項目版と 18 項目版を対象に、それぞれ確認的因子分析を実施した。その際、6 因子間に共分散を設定したモデルと、共分散ではなく一般因子 g を設定した階層的因子分析モデルの計 4 モデルで比較した。その結果、18 項目を対象とした階層 6 因子モデルの適合度が最も良好であった。Table 2 に各モデルの適合度を示した。

Table 2 確認的因子分析

構造	項目数	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	SRMR	AIC	CAIC
6因子	21	.913	.885	.946	.071	.048	1845.81	2158.70
	18	.949	.927	.971	.058	.032	941.94	1221.90
階層6因子	21	.943	.922	.967	.056	.035	1243.92	1589.75
	18	.956	.936	.976	.054	.034	824.03	1120.46

また、内的整合性を検討した結果、Cronbach の α 係数は十分な値を示した (総得点: $\alpha=.95$, 突出: $\alpha=.89$, 気分変容: $\alpha=.81$, 耐性: $\alpha=.85$, 離脱症状: $\alpha=.91$, 葛藤: $\alpha=.81$, 再燃: $\alpha=.93$)。さらに、再検査信頼性を検討した結果、気分変容 ($r=.64$) を除いて、高い値が示された (総得点: $r=.86$, 突出: $r=.80$, 耐性: $r=.77$, 離脱症状: $r=.77$, 葛藤: $r=.70$, 再燃: $r=.82$)。

【考察】

本研究から、SNAS-J は SNS 依存を行動依存の構成要素モデル (Griffiths, 2005) に基づいて測定可能な信頼性の高い尺度であることが確認された。ただし、除外された 3 項目が、原版と異なる因子に負荷した理由を、方法論的な誤謬や文化的差異、項目内容自体の問題のいずれに帰すべきかを特定し、尺度のさらなる改善につなげる必要があるだろう。

【利益相反】

この発表に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。

(なかたに ともみ・
ふくい よしかず・
ほり たかし)

本研究は、一般社団法人安心ネットづくり促進協議会 2023 年度研究支援事業による助成を受けて実施された。

大学生における行動的感情制御方略のスタイルと抑うつ・不安の関連

○村田康徳 加藤佳子
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
キーワード：行動的感情制御 抑うつ 不安

【目的】

感情制御方略がメンタルヘルスに与える影響は広く知られており、適応的・不適応的な方略についても研究されている。しかし通常個人は複数の方略を組み合わせて使用すると考えられる。そして、どのような行動的感情制御方略の組み合わせがあり、そのスタイルが抑うつ・不安とどのように関連するかは十分に検証されていない。本研究では Behavioral Emotion Regulation Questionnaire (BERQ) が測定する 5 つの行動的感情制御方略についてクラスター分析でスタイル（以下、BER スタイルとする）を検討し、さらに各 BER スタイルにおける抑うつや不安のレベルを比較することを目的とした。

【方法】

手続きと分析対象者 関西地方の国立大学生を対象として質問紙調査を実施した。最終的な分析対象者は 367 名（男性：148 名，女性：219 名， 19.31 ± 0.90 歳）であった。

調査内容

行動的感情制御方略 Kraaij & Garnefski (2019) の BERQ を翻訳した「日本語版 BERQ (加藤他, 2021) (20 項目)」を使用した。① Seeking Distraction (SD) ($\alpha = .75$)、② Withdrawal (WD) ($\alpha = .84$)、③ Actively Approaching (AA) ($\alpha = .83$)、④ Seeking Social Support (SSS) ($\alpha = .89$)、⑤ Ignoring (IG) ($\alpha = .81$) の 5 つの感情制御方略を使用する頻度を測定した。

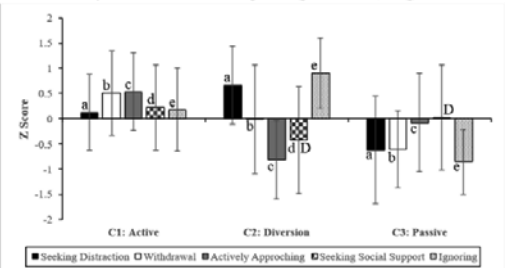
抑うつ症状 抑うつを測定する尺度として「Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) 日本語版 (島他, 1985) ($\alpha = .87$)」(20 項目)を使用した。

状態不安 不安を測定する尺度として State-Trait Anxiety Inventory (STAI) 日本語版 (清水・今榮, 1981) を用いた。なお、本研究では「状態不安」を測定する A-State ($\alpha = .91$) の 20 項目を使用した。

分析方法 BERQ の 5 つの下位尺度得点を標準化し、Ward 法による階層的クラスター分析をおこなった。その後、デンドログラムからクラスター数を決定した。

また抑うつおよび不安について、シャピロ・ウィルク検定を行ったところ、抑うつ ($p < .001$)・不安 ($p < .001$) とともに正規分布に従うとは言えなかった。そのためクラスター間の抑うつおよび不安の分散分析として、クラスカル=ウォリス検定をおこない、Bonferroni 補正付き Dunn 検定による多重比較をおこなった。

Figure 1
Subscale Scores of the Behavioral Emotion Regulation Questionnaire (BERQ) Across Clusters



Note. Lowercase letters indicate $p < .001$; uppercase letters indicate $p < .01$. (error bars show standard errors).

【結果】

クラスター分析によるスタイルの分類 (Figure 1)

デンドログラムより、3 つのクラスターに分かれると判断した。クラスター1 は AA や WD が高く、積極的に対処する「アクティブ型 (155 名)」，クラスター2 は SD や IG が高く AA が低い、問題回避的な行動が特徴的な「ディバージョン型 (88 名)」，クラスター3 はいずれの得点も低く、あまり行動を取らない「パッシブ型 (124 名)」と命名した。

BER スタイルでの抑うつ・不安の特徴 (Table 1, Table 2)

BER スタイルを独立変数、抑うつを従属変数とした分散分析の結果、BER スタイルによる主効果が認められた。多重比較の結果、アクティブ型 (17.52 ± 9.27) はディバージョン型 (14.44 ± 8.72) やパッシブ型 (13.94 ± 8.41) よりも抑うつの程度が有意に高かった。

また、不安を従属変数とした場合でも分散分析の結果、BER スタイルによる主効果が認められた。多重比較の結果、アクティブ型 (40.55 ± 10.12) はディバージョン型 (37.39 ± 8.98) よりも不安の程度が有意に高かった。

Table 1
Means, Standard Deviations, and Kruskal-Wallis Test of Depression and Anxiety Scores by Behavioral Emotion Regulation Questionnaire Clusters

Cluster	n	Depression		Anxiety	
		M	SD	M	SD
Active	155	17.52	9.27	40.55	10.12
Diversion	88	14.44	8.72	37.39	8.98
Passive	124	13.94	8.41	38.74	9.67

Kruskal-Wallis — $H(2) = 12.92, p = .002, \epsilon^2 = .03$ $H(2) = 7.99, p < .018, \epsilon^2 = .02$
Note. $N = 367$. Depression was measured with the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale. Anxiety was measured with the State Anxiety subscale of the State-Trait Anxiety Inventory.

Table 2

Results of Bonferroni-Adjusted Dunn Tests for Depression and Anxiety Scores

Comparison	z	p.unadj	p.adj	r
Depression				
Active - Diversion	2.62	0.009	0.027	.14
Active - Passive	3.31	0.001	0.003	.17
Diversion - Passive	0.35	0.725	1.000	.02
Anxiety				
Active - Diversion	2.71	0.007	0.020	.14
Active - Passive	1.83	0.067	0.202	.10
Diversion - Passive	-1.01	0.311	0.933	.05

【考察】

アクティブ型は他の 2 群と比較して、抑うつおよび不安のスコアが有意に高いことが示された。積極的に課題へ踏み込む姿勢は、現代の大学生が抱えるストレス（学業・就職・対人関係など）を顕在化させやすいことが考えられる。一方で、気晴らしや無視といった BER スタイルは感情的な負荷を回避し、抑うつ・不安を軽減していると考えられる。しかしながら、AA や SSS の活用の低さが問題解決を遅らせる懸念もある。

【利益相反】

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

加藤 佳子・伊藤 俊樹・岡崎 香奈・山根 隆宏 (2021). 日本語版 Behavioral Emotion Regulation Questionnaire の開発 (2) 心理測定特性、信頼性、妥当性の検証 日本心理学会大会発表論文集, **85**. https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0_PB-045
(むらた やすのり・かとう よしこ)

単身中高年者における孤独感と時間的切迫感が将来展望に及ぼす影響

○清水佐紀^{1,2} 村山陽²

(1 和洋女子大学人文学部心理学科 2 東京都健康長寿医療センター研究所)

キーワード：単身中高年者、孤独感、時間的切迫感、将来展望

【目的】

単身中高年者の孤立や貧困リスクの高さが示されており、その対策が求められている（西村，2021）。余暇時間に充実した活動を行うことはどの年代にも良い影響をもたらすことが多くの研究から示されている。その一方で、時間に余裕がない状態である時間的切迫感はストレス要因の1つである（Peter et al,2025）。内閣府の令和6年版高齢者白書によると、本邦の65歳以上の就業者数は20年連続で上昇しており、従来と比べ中高年者の余暇時間が減少することが予想される。心理学の領域では個人の将来に対する認識は将来展望と呼ばれ、個人のwell-being（Zhang J et al, 2019）や人生満足度（Brianza E et al, 2019）への肯定的な影響が示されているが、村山ら（2021）によれば、単身男性中高年者は中年後期から高齢期に至るまで将来に対する展望を諦める意識が強いことが示されている。

そこで本研究では、単身中高年者の孤独感と時間的切迫感が将来展望の諦めや不安に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【方法】

40-60代の調査会社Aのモニター1320人にWeb調査を行った。時間的切迫感の測定には、Time pressure scale（Roxbutgh, 2004）を逆翻訳して用いた（9項目4件法）。孤独感には、UCLA孤独感尺度（豊島・佐藤，2021）を用いた。将来展望については、将来不安と将来諦めという2因子からなる将来展望意識尺度（村山ら，2021）を用いた。生活時間の測定は、平日の睡眠時間、余暇時間を尋ねた。各尺度の得点は、時間的切迫感尺度は得点が高いほど時間に余裕がなく、UCLA孤独感尺度は得点が高いほど孤独を強く感じており、将来展望意識尺度は得点が高いほど将来に対する諦め、不安を感じていることとなる。

研究実施にあたり、東京都健康長寿医療センター倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：30健イ事第1647号）。

【結果】

協力者の属性は男性660名（50%）、女性660名（50%）、平均年齢は54.2歳であった。雇用形態は正規雇用が367名（27.8%）、非正規雇用が599名（45.3%）、自営業等（7%）であった。Spearmanの相関分析の結果をTable1に示した。将来展望（諦め）は孤独感との間に弱い正の相関（.227）が見られた。将来展望（不安）と各変数間では、孤独感との間に弱い正の相関（.384）、時間的切迫感との間に弱い正の相関（.328）、将来展望（諦め）との間に弱い正の相関（.367）が見られた。

将来展望（諦め）を従属変数、属性と平日の睡眠時間ならびに余暇時間、孤独感、時間的切迫感を独立変数として重回帰分析を行った（Table2）。その結果、性別、年齢は将来展望（諦め）に有意で正の影響を、平日余暇時間と孤独感将来展望（諦め）に有意で負の影響を与えていることが示された。調整済み決定係数の値は、0.061であった。次いで、将来展望（不安）を従属変数、属性と平日の睡眠時間ならびに余暇時間、孤独感、時間的切迫感を独立変数として重回帰分析を行った（Table3）。その結果、性別、年齢は将来展望（不安）に有意で正の影響を、平日余暇時間と孤独感将来展望（諦め）に有意で負の影響を与えていることが示された。調整済み決定係数の値は、0.303であった。

Table1 変数間の相関関係

変数	2	3	4	5	6	7	8
1 性別	-.03	.034	-.006	-.04	-.001	.088**	.002
2 年齢		.074**	.224**	-.075**	.231**	.079**	.090**
3 平日睡眠時間			-.002	-.018	.232**	.031	.048
4 平日余暇時間				-.085**	.230**	-.029	.044
5 孤独感					-.202**	-.227**	-.384**
6 時間的切迫感						.095**	.328**
7 将来展望（諦め）							.367**
8 将来展望（不安）							

**p<.01, *p<.05

Table2 重回帰分析の結果（従属変数：諦め）

変数	B	β	P値
性別	0.448	0.081	0.001**
年齢	0.022	0.063	0.016*
平日睡眠時間	0.000	0.006	0.811
平日余暇時間	-0.001	-0.065	0.014*
孤独感	-0.113	-0.078	0.004**
時間的切迫感	-0.022	-0.043	0.126
将来展望（不安）	0.394	0.377	0.001**

R²（調整済み）0.173

従属変数：将来展望（諦め）

**p<.01, *p<.05

Table3 重回帰分析の結果（従属変数：不安）

変数	B	β	P値
性別	-0.220	-0.042	0.072*
年齢	-0.002	-0.005	0.830
平日睡眠時間	-1.922	-0.001	0.973
平日余暇時間	0.000	-0.002	0.388
孤独感	-0.372	-0.269	0.001**
時間的切迫感	0.123	0.245	0.001**
将来展望（諦め）	0.304	0.318	0.001**

R²（調整済み）0.303

従属変数：将来展望（不安）

**p<.01, *p<.05

【考察】

将来展望意識尺度の各因子を従属変数に設定して重回帰分析を行った結果、各因子共に孤独感と関連があることが示された。一方で、諦めは余暇時間の長さと関連があり、不安は時間的切迫感と関連があるという相違が示された。単身中高年者の「自分の人生はどうなっても構わない」という将来への諦めに対しては余暇時間の確保、「先のことを考えると暗くなる」という将来への不安に対しては時間的切迫感の軽減が有効である可能性が示唆された。今後は、余暇時間の活動内容や時間的切迫感の軽減の方法について検討する必要がある。

【利益相反】

本発表に関し、開示すべき利益相反事項はない。

【主要引用文献】

村山陽・山崎幸子・長谷部雅美・高橋知也・小林江里香（2021）. 単身中高年者における将来展望を抑制する意識の検討 老年社会科学, 43（1）, 26 - 35.
 西村幸満（2021）. 生活不安定層のニーズと支援：シングル・ペアレント，単身女性，非正規就業者の実態 勁草書房
 Peter, M., Rigotti, T., Holtmann, J., Vahle-Hinz, T.（2025）. I'll be back! Examining adaptive change processes in emotional exhaustion and time pressure. J Occup Health Psychol, 30(1), 1-15.

（しみずさき・むらやまよう）

カロリー・塩分量の栄養表示が選択行動に与える影響

○杉山聡一¹ 幸田仁志² 来田宣幸²

(¹ 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 ² 京都工芸繊維大学基盤科学系)

キーワード：健康、カロリー、塩分

【目的】 近年、健康意識が高まるなか、飲食産業全般では、栄養情報を表示する取り組みが進められている。栄養表示により、消費者自身が健康に配慮した食品を選択することで、将来的な疾患のリスク低減につながると期待される。

ただし、栄養表示の効果は、その表示方法によって消費者の注意の向き方や選択行動に違いが生じる。井上 (2022) は、カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響について検討した結果、注目されやすい位置にカロリー情報を表示することで低カロリーの食品が選ばれやすくなる傾向を確認している。しかし、これらの報告における実際の摂取量の差は小さく、行動変容としての効果は限定的であった。この要因として、表示する栄養素を「カロリー」にした点が影響している可能性があり、行動変容を促す上では、表示する栄養素の種類についても検討する必要がある。

特に、塩分の過剰摂取は、世界的に重要な健康課題の1つである。日本 WHO 協会では、成人の世界平均ナトリウム摂取量が食塩相当量で1日当たり約 10.78 g といわれているが、これは WHO が推奨する 5 g 未満という基準を大きく上回っている。また、厚生労働省の食事摂取基準 2025 年度版において、食塩 (ナトリウム) は、「国民の栄養摂取の状況からみてその過剰な摂取が国民の健康に影響を与えている」として注目されている。したがって、栄養素のなかでも塩分量の表示が、行動変容に影響を及ぼす可能性がある。

そこで本研究の目的は、カロリーのみならず塩分量の表示が食品選択に与える影響を検討することとする。また、メニュー上で確認できる栄養表示の多さが選択行動に与える影響についても検討した。

【方法】 対象者は、一般の大学生 40 名であった。対象者には、「食事をする前のお腹がすいた状態を想像してください」と指示したうえで、提示されたメニューから食品を選択させた。メニューは、縦書き形式とし、各メニューには、定食 (10 種類)、小鉢 (5 種類)、デザート (5 種類) の 3 項目 (20 種類) を記載し、それぞれのカテゴリから 1 品ずつ選択する形式とした。料理名の上部には、カロリー (kcal) 及び塩分量 (食塩相当量、g) を表示した。栄養情報及び料理名は、実際の飲食店のメニューとその栄養成分を参考に作成した。価格は全て 1500 円で統一した。メニュー選択時の栄養表示条件は、以下の 4 条件を設定した。カロリーと塩分量を表示する条件 (カロリー・塩分条件)、カロリーのみを表示する条件 (カロリー条件)、塩分量のみを表示する条件 (塩分条件)、カロリーも塩分も表示しない条件 (なし条件) の 4 つとした。対象者はメニューの異なる 4 つのメニュー群に対して 4 条件で実施した。また、本研究は京都工芸繊維大学倫理審査委員会の承認 (承認番号：2025-26) を受けて実施した。

【結果および考察】 表示形式の違いによるメニュー選択行動の傾向を評価するため、選択されたメニューのカロリーおよび塩分量を表示形式別に示した。選択されたメニューのカロリーについては、表示なし条件 (905 ± 238 kcal) と比較して、カロリー条件で低い値であった (780 ± 232 kcal)。また、塩分量についても、表示なし条件 (5.91 ± 2.35 g) と比較して、塩分条件で低い値であった (4.85 ± 2.36 g)。この結果から、カロリーおよび塩分量表示によって高

カロリー・高塩分の食品の選択を抑制する行動に影響する可能性が示唆された。

カロリーと塩分の比較に関して、カロリー条件では、カロリー数は表示なし条件に対して 86.2 %であったのに対して、塩分については、塩分条件では、表示なし条件に対して 82.0 %を示し、塩分量のほうがより低下していた。このことは、カロリーと比較して、塩分の表示の方が、食品選択行動に与える影響が大きかった可能性を示唆している。この背景には、日本においてカロリー過多よりも塩分過多がより健康の課題と認識されていることが影響している可能性が考えられる。

次に、提示する情報量が多かった場合の影響について検討する。塩分のみを表示した条件を 100 %とした場合、塩分とカロリーの両方が表示された条件のカロリーは 95.9 %であった。同様に、カロリーのみを表示した条件を 100 %とした場合、塩分とカロリーの両方を表示した場合のカロリーは 93.3 %であった。単一の栄養成分のみが表示された条件では 80 %台まで低下したのに対し、複数表示の場合はどちらも 90 %台であり、食品選択行動に与える影響が小さかったといえる。また、カロリーと塩分量の低下率の差については、単独での効果と比較して複数の情報が提示された場合で、その差は小さい値となった。このことは、複数の栄養成分が同時に表示されることで、それぞれへの意識が分散し、行動選択への影響が弱まる可能性を示唆している。

以上より、カロリー、塩分の栄養成分の表示は、表示された成分の摂取を抑える方向での行動変容を一定程度促進する効果が確認された。また、カロリーと比較して塩分でその効果がやや大きかった点は、対象者の食生活に関する健康状況に依存する可能性が示唆される。さらに、提示される情報量が増加すると、行動変容の効果が低下することが示されたことから、行動選択に対する栄養表示については、多様な要因が影響していることを示すものである。

表 1 表示形式別のカロリーと塩分

	なし <i>M ± SD</i>	カロリー <i>M ± SD</i>	塩分 <i>M ± SD</i>	カロリー・塩分 <i>M ± SD</i>
カロリー (kcal)				
定食	573 ± 191	509 ± 195	547 ± 182	518 ± 205
小鉢	102 ± 84	94 ± 73	104 ± 99	82 ± 75
デザート	230 ± 145	177 ± 66	212 ± 109	228 ± 134
計	905 ± 238	780 ± 232	864 ± 266	828 ± 263
塩分 (g)				
定食	4.29 ± 1.89	3.96 ± 1.67	3.48 ± 1.59	3.48 ± 1.60
小鉢	1.32 ± 1.00	1.38 ± 1.03	1.11 ± 0.96	1.31 ± 0.99
デザート	0.31 ± 0.37	0.14 ± 0.12	0.26 ± 0.27	0.32 ± 0.34
計	5.91 ± 2.35	5.48 ± 2.06	4.85 ± 2.36	5.11 ± 1.84

【利益相反】 特になし

【引用文献】

井上裕珠 (2022). カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響. 日本応用心理学研究, 47 (3), 165-177.

(すぎやま そういち・こうだ ひとし・きだ のりゆき)

タッチングによる快体験の様相

～時間的変化と身体感覚・感情への気づき～

○小西奈美¹ 内堀恵美² (非会員) 大久保千恵³ (非会員)

(¹ 明治国際医療大学看護学科 ² 京都橘大学臨床検査学科 ³ 京都橘大学総合心理学科)

キーワード：タッチング 気づき 身体感覚

【目的】ふれるケアは、対象者の不安や疼痛緩和を図る看護ケア技術の一つであり、対象者にとって心身ともに安全に実施される必要がある。しかし、逆境体験や特性による感覚の乏しさを鋭敏さを有している場合もあり、ふれている時だけでなくその後の影響も考慮する必要がある。そこで今回、ふれるケアのなかでも身近に取り入れやすいタッチングを実施し、その体験における被タッチング者の気分や身体・感情への気づきについて経時的に検討した。

【方法】

1. 研究参加者：A 大学大学生・大学院生合計 34 名（男性 15 名、女性 19 名）。平均年齢 21.76（1.13）歳。

2. データ収集方法：

1) 質問紙：

(1) 二次元気分尺度 (Two-Dimensional-Mood-Scale-Short Term 以下、TDMS-ST) 8 項目から構成され「活性度」「快適度」「安定度」「覚醒度」の下位尺度が算出される。

(2) 内受容感覚への気づきの多次元的評(Multidimensional Assessment of Interoceptive Awareness(以下、MAIA)

32 項目の質問から構成され、8 つの下位尺度「気づき」「気が散らない」「心配しない」「注意制御」「感情への気づき」「自己制御」「身体を聴く」「信頼する」が得られる。

(3) NRS によるタッチングの快-不快評価

タッチングを受けた感覚について、0（不快）から 10（快）までの 11 段階で評価を求めた。

(4) タッチングを受けた感想自由記述

被タッチング中に考えたり感じたりしたことや、過去の経験など思い出したことがあったかなど受けた感想について記述を求めた。

2) データ測定手順

タッチングの有無別クロスオーバー試験とした。タッチングは座位の状態で行い、参加者とは初対面の女性看護師が、机にうつぶせをしている参加者の両肩に背後から 5 分間両手を置いた。統制群（以下、うつぶせ群）は、タッチングを受けずうつぶせをして過ごした。タッチング前に、不快時には遠慮なく申し出ること、自由に体勢を変えてよいこと、両足の足底は床につけることを伝え、衣類の締め付けなど苦痛がなく安楽な状態であることを確認して実施した。質問紙調査は、タッチングまたはうつぶせ実施前、直後、20 分後、24 時間後に TDMS-ST を、実施前（以下、実施前 MAIA）と 24 時間後に MAIA（以下、実施後 MAIA）を調査した。NRS と自由記載は、タッチング終了後に記入を求めた。

3. 分析方法

群別の気分状態・変化を検討するため、TDMS-ST の各下位尺度について、実施前の値から実施直後、20 分後、24 時間後の値の差を求め、その差を用いて二要因分散分析を行った。MAIA も同様に、実施前後の差について 2 群の比較を行った (t 検定)。さらに、不快-快感覚と自身への気づきを検討するため、NRS 評価と MAIA との相関を検討した。有意水準 $\alpha < 0.05$ とした。

3. 倫理的配慮

京都橘大学研究倫理委員会の承認（承認番号 23-31）を得て実施した。

【結果】

実施中に不快感を訴える参加者はいなかった。

1. TDMS-ST 下位尺度の時間的変化（図 1）

いずれの下位尺度も交互作用はみられなかったが、時間的な変化がみられた。「活性度」「覚醒度」は両群とも実施 20 分後にいったん低下するが 24 時間後には実施前より上昇した。ただし、タッチング群の「活性度」については、タッチング直後は実施前より上昇し、その後低下した。「快適度」は、タッチング群とうつぶせ群との間に有意な差がみられ、タッチング群は上昇するがうつぶせ群は低下していた。「安定度」は、両群とも 24 時間後に低下していた。

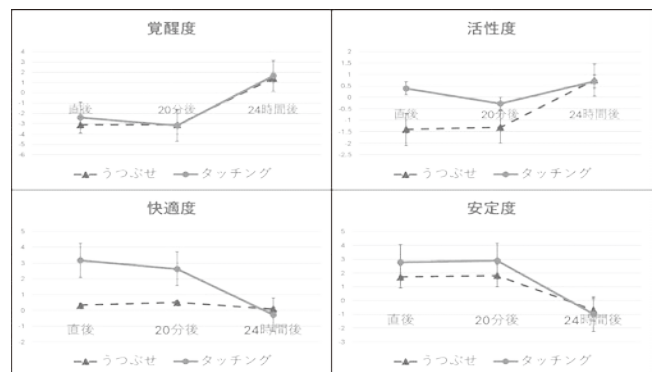


図 1. TDMS-ST 下位尺度の群別変化

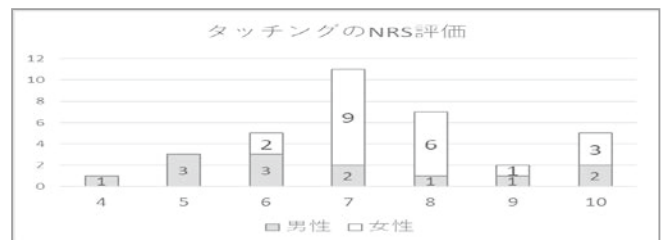


図 2. NRS によるタッチングの快-不快評価

2. MAIA

実施前後の変化について、両群に有意な差はみられなかった。

3. NRS によるタッチングの快-不快評価（図 2）

最頻値は「7」（11 名）、次に多かったのは「8」（7 名）で、最小値「4」1 名であった。また、女性は「6」以上の評価をつけていたが、男性は低評価もみられた。

4. NRS 評価と MAIA との関連

NRS 評価と実施前 MAIA との関連はみられなかった。NRS 評価と実施後 MAIA の下位尺度「気づき」($r=0.47$)「感情への気づき」($r=0.36$) とに有意な正の相関がみられた。

【考察】

今回のタッチングによる快感覚は 20 分程度持続し、快体験により「快不快の身体感覚への気づき」や、「身体感覚と感情状態との関連性への気づき」が高まる可能性が示唆された。また、手のあたたかさを感じ、母親や保健室、友人から受けたケアを思い出す者もいた。心身への気づきに乏しい患者への気づきを高めるケアを行う際には、過去に受けたあたたかい経験の有無や性別についても考慮し、思い出してもらいながらふれることでケアにつながる可能性が示唆された。

【利益相反】利益相反 (conflict of interest; COI) 無し

(こにし なみ・うちぼり えみ・おおくぼ ちえ)

花を用いた心理療法で撮影された生け花画像に関する 距離分析と印象評価分析の検討

○内田誠也¹ 田中英明¹ 本村明嘉² (非会員)

(¹一般財団法人 MOA 健康科学センター ²一般社団法人 MOA インターナショナル)

キーワード：心理療法、花画像、評価法

【背景および目的】

東京都内にある日本統合医療学会認定施設では、精神疾患を有する患者に対して、花を用いた心理療法が行われている。この療法では、画材を花に置き換え、花を用いて造形を行うことから、アートセラピーに類似していると考えられる。花は自然のエネルギーを吸収して育つため、本療法ではそれを活用し、人間の自然治癒力を高め、自己成長を促すことを目的としている。具体的には、患者とその保護者がペアとなり、それぞれが一輪の花をいけ、それらを並べて配置し、鑑賞しながら語り合い、楽しむ方法である。2023 年より、本療法で得られた写真画像を用いて、患者と保護者がいけた花の配置関係や印象を定量的に評価する手法を開発し、両者の心理状態および関係性との関連について検討を進めている。

本研究の目的は、分析対象の例数を増やし、花を用いた心理療法で生けられた花の写真画像を解析することで、患者と保護者の心理状態との関連を明らかにすることである。

【方法】

本研究は当財団の倫理審査委員会の承認を得た上で実施され、患者およびその保護者に対して書面により研究の詳細を説明し、同意を取得した。

対象は精神疾患を有する患者とその保護者からなる 5 組 (A～E 親子) で、各組とも本施設にて花を用いた心理療法を 5～6 回体験した。療法では、まず患者が花を 2 杯生け、次に保護者が花を 2 杯生けた。その後、患者が 4 杯の花を配置し、写真撮影を行い、同様に保護者も 4 杯を配置して写真を撮影した。

写真画像の分析は、「距離分析」と「印象評価分析」に分けて行った。距離分析では、写真に写る 4 杯の生け花の距離を計測し、平均距離 (Mean Distance : MD) を算出した。また、患者が生けた 2 杯の花の中心と、保護者が生けた 2 杯の花の中心との距離を、患者—保護者間距離 (Patient-Guardian Distance : PGD) として定義した。たとえば、患者の生けた花を保護者の花が挟み込むように配置された場合、MD に比べて PGD は短くなる。印象評価分析では、写真画像の印象について問う 20 項目からなるアンケートを作成し、「あてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の 3 段階で評価した。評価者は、患者および保護者と面識のない男女各 2 名 (計 4 名) であり、患者の状態についても情報を持たない状況で回答を行った。4 名の平均得点を、その画像の印象評価スコア (Flower Impression Score : FIS) とし、FIS が高いほどポジティブな印象を受けたことを示す。

また、セラピストは各回のセッションごとに、患者の状態、保護者の状態、両者の関係性 (Patient-Guardian Relationship Score : PGRS)、およびセラピー後の両者の状態を 7 段階尺度で評価した。これらのスコアと距離分析および印象評価分析との Spearman の相関係数を算出し、関連を検討した。

【結果】

表 1 に、PGRS と PGD および FIS の Spearman 相関の結果を示す。A 親子では、PGRS と PGD との間に正の相関が認められ、両者の関係が良好になるほど、両者が生けた花の距離が長くなる傾向が示された。また、PGRS と FIS との間にも正

の相関傾向がみられ、関係が良好なほど、他者がその花の画像からポジティブな印象を受けやすいことが示唆された。

B 親子では、PGRS と患者が配置した花の PGD に正の相関がみられた一方で、保護者が配置した花の PGD とは弱い負の相関がみられた。すなわち、関係が良くなるほど、患者の花の距離は広がり、保護者の花の距離は縮まる傾向があることを示す。また、PGRS と FIS にも正の相関傾向がみられた。

C 親子は、PGRS が常に高値で一定であったため、相関分析は行えなかった (表中“—”は解析不能を示す)。

D 親子では、PGRS と保護者が配置した花の PGD に弱い負の相関がみられ、関係が良好になるほど保護者の花の距離が短くなる傾向が示された。また、PGRS と FIS との間には弱い負の相関がみられた。

E 親子でも、PGRS と保護者が配置した花の PGD に負の相関がみられ、関係が良好になるほど保護者の花の距離が短くなることが示唆された。一方、PGRS と保護者の FIS には正の相関が認められた。

表 1 PGRS と PGD および FIS との spearman 相関

	患者が配置した 花の写真		保護者が配置した 花の写真	
	PGD	FIS	PGD	FIS
A親子	0.866	0.444	0.866	0.444
B親子	0.791	0.527	-0.105	0.369
C親子	—	—	—	—
D親子	0.000	-0.577	-0.577	-0.577
E親子	—	—	-0.800	1.000

【考察】

本研究で用いた評価手法により、4 例 (うち 1 例は弱い相関) において、セラピストが評価した患者と保護者の心理状態と、花の配置における患者—保護者間距離 (PGD) との間に正および負の相関が認められた。これは、患者が言語で十分に表現できない保護者への心理的態度が、花の配置という非言語的な表現に反映された可能性を示唆している。

相関分析が行えなかった 1 例については、初回の体験時からすでに患者と保護者の関係性が良好であったため、花の配置に心理的変化が表れにくかった可能性がある。

花の写真画像を用いた距離分析および印象評価分析によって、患者と保護者の心理的關係を客観的に可視化・定量化できる可能性が示されたと考えられる。今後はさらに対象者数を増やし、継続的な検討を行っていきたい。

【利益相反】本研究に関する利益相反 (conflict of interest; COI) はありません。

(うちだ せいや・たなか ひであき・もとむら はるか)

介護士を対象としたソーシャルスキル尺度の階層構造の検討

○三宅沙侑美¹ 山野洋一² 田中共子¹

(1 岡山大学 2 京都産業大学)

キーワード：ソーシャルスキル、介護士、尺度開発

【目的】

少子高齢化の進行に伴い、介護現場における介護士の役割は一層重要となっている。介護士は対人援助職であり、介護を行う上でソーシャルスキル（以下、SS）が必要とされる。我々はこれまで、介護現場における SS 向上のための教育プログラムの基盤を構築すべく、デイサービス介護士の SS 尺度群（Day service Care workers' Social skills Inventories：以下、DCSI）を開発した（三宅ら，2024）。同時に同報告では、尺度群を 1 つの尺度にまとめた 24 項目版（DCSI-24）を作成している。

本研究では、DCSI-24 の因子構造および因子間の関係性を検討することを目的とした。DCSI-24 は、その項目内容からデイサービス以外の介護士にも適用可能と考え、デイサービス介護士を対象とした三宅ら（2024）の調査に、介護士全般を対象とした追加調査のデータを加えて分析を行った。

【方法】

対象者と方法：調査は Web 調査会社を通じて実施し、A 社には 2023 年 12 月にデイサービス介護士調査、B 社には 2025 年 2 月に他の介護職調査を依頼した。なお、A 社のデータは三宅ら（2024）と同一のデータセットである。分析対象者は分析項目に完全回答した介護職に従事する 1069 名とした。

調査項目：属性、DCSI-24、KiSS-18（菊池，1988）等について評定を求めた。DCSI-24 は表 1 の項目から構成されている。

倫理的配慮：調査は調査会社とモニター間で契約されたプライバシー保護の規約に従った。調査は任意であること、研究目的で回答データを使用することを説明し、同意を得た。

【結果】

施設内訳はデイサービスセンター 655 名、デイケアセンター 40 名、介護老人福祉施設（特養）131 名、介護老人福祉施設（老健）67 名、介護療養型医療施設 21 名、介護医療院 21 名、介護付有料老人ホーム 99 名、グループホーム 77 名、その他 11 名であった（複数回答）。平均年齢は 47.32±11.46 歳、介護士平均経験月数は 133.8±115.6 カ月であった。

DCSI-24 の各項目の記述統計量と三宅ら(2024)から想定される構造を表 1 にまとめた。想定される構造をもとに確認的因子分析（高次因子分析）を行った結果、基礎スキルは実用スキルに影響するとしたモデルの RMSEA と SRMR は.100 を下回った。DCSI-24 の各項目と KiSS-18 と相関は.215～.409 で、いずれも有意であった（ $p<.01$ ）。

【考察】

DCSI-24 の高次因子分析の適合度は許容の範囲内であると考えられる。加えて、DCSI-24 には、基礎的スキルが実用的スキルに影響する階層構造が認められた。基礎スキルが実用スキルの土台となるという階層性の示唆は、介護士におけるソーシャルスキルの段階的な習得や教育設計において有用な知見である。今後は、この階層性を踏まえて、基礎スキルから体系的に学習可能な教育プログラムの開発と、その有効性の実証的検討が求められる。

【利益相反】

本研究において開示すべき COI はない。

【引用文献】

三宅沙侑美・山野洋一・田中共子（2024）「介護士が介護サービス利用者と信頼関係を構築するためのソーシャルスキル—デイサービスセンターにおける対人関係形成に関する心理教育法の開発に向けて—」『SOMPO 福祉財団 2022 年度福祉諸科学事業【ジェロントロジー研究助成】研究報告書』147-173.

【謝辞】

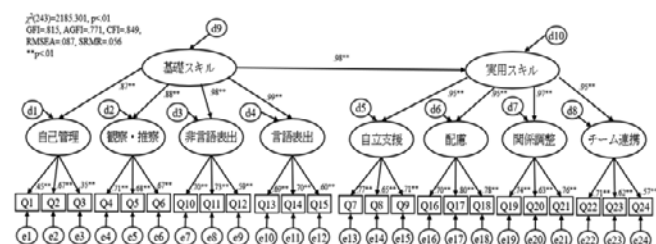
本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSP2126）の支援を受けました。本研究の一部は、公益財団法人 SOMPO 福祉財団 2022 年度福祉諸科学事業「ジェロントロジー研究助成」の助成を受けました。

表 1 DCSI-24 の記述統計量と想定される因子

想定因子	項目	平均値	標準偏差	KiSS-18 との相関
自己管理 $\alpha=.486$	1. 時間内に自分の仕事を終わらせ、他の職員へ負担をかけないようにする	4.87	1.14	.215**
	2. 苦手な利用者と接する時は、相手の良い所を探す	4.19	1.20	.371**
	3. 仕事上でのストレスは、溜め込まず発散して忘れる	3.96	1.37	.325**
	4. 利用者の表情や態度から感情を推し量る	4.77	1.01	.269**
観察・推察 $\alpha=.707$	5. 利用者と接する前にその人に関する情報を読み込んで、不明点は下調べをしておく	4.42	1.16	.294**
	6. フロア全体の利用者の中でレクリエーションを指導する時は、皆を見渡して準備ができていないか確認する	4.29	1.44	.324**
	7. 利用者に説明をする時は、利用者の注意を引いてから説明する	4.58	1.12	.401**
	8. 小さな目標を立てて、利用者自身に達成を目指してもらう	3.99	1.25	.403**
自立支援 $\alpha=.752$	9. 利用者にレクリエーションの説明をする時は、大部分をゆっくり話す	4.46	1.32	.325**
	10. 利用者と話すときは、しゃがんだりかがんだりして、目線の高さを同じか下にする	4.94	1.08	.268**
	11. フロア全体の利用者に声をかけする時は、目立つ所に立つ	4.53	1.33	.342**
	12. 利用者と話をしている時は、他の利用者に背中を向けないようにする	4.28	1.31	.313**
非言語表出 $\alpha=.712$	13. フロア全体の利用者へ話をする時は、利用者への質問を交えながら会話を展開する	4.27	1.29	.383**
	14. 利用者と目が合った時は、会釈や声をかける	5.02	1.01	.311**
	15. 天気、ニュース、新聞の記事を話題にする	4.65	1.14	.279**
	16. お茶を出すときは位置に気を付け、危険が少なく、飲みやすい、中身が見えやすい場所に置く	4.85	1.15	.305**
配慮 $\alpha=.802$	17. 利用者の性格や特性に合わせた声掛けをする	4.92	1.03	.381**
	18. 利用者にとって良くないことを伝える時は、周囲に筒抜けにならないように配慮する	4.83	1.08	.353**
	19. 利用者の要望にすぐ対応できない時は、具体的な代案を示しておく	4.37	1.11	.409**
	20. 関係が悪化している利用者同士は距離を離す	4.75	1.12	.293**
関係調整 $\alpha=.749$	21. 利用者が不満を溜め込まないように、気軽になんでも話せるような関係を作っておく	4.58	1.07	.420**
	22. 利用者の情報は、自分だけでなくどめず、職員間での共有を心掛ける	4.95	1.02	.339**
	23. 利用者の家族に、普段家にいるときの利用者の様子を尋ねる	4.18	1.35	.404**
	24. ケアマネージャーと、利用者に関する情報交換をこまめに行う	4.16	1.45	.338**

** $p<.01$

図 1 DCSI-24 の高次因子分析



(みやけさゆみ・やまのよういち・たなかともこ)

コロナ禍を過ごしてきた大学生の友人ネットワークと大学適応過程

2019 年度・2020 年度入学者の TEM 図

○上田仁¹ 松浦均²

(¹愛知県庁 ²星槎大学大学院教育学研究科)

キーワード：コロナ禍、TEM 図、友人ネットワーク

【目的】

2020 年から新型コロナウイルス感染症が拡大をし、大学生の学生生活には大きな影響が及ぼされた。2020 年度の入学式は多くの大学で中止となり、新入生はしばらく学校に登校できず友人関係がつくる機会が少なく、また、他の学年の学生もオンラインで自宅から授業に参加をすることになった。こうした影響を受け、大学生の孤立感・社会的に大きな問題となっていた。そこで、本研究では、2020 年度大学生の大学適応過程を明らかにすることとした。大学生の適応過程の研究において、友人の存在は大きいとされている（大久保，2005）。そこで、友人関係の形成・関係性の深化にも着目した。具体的に、2020 年度入学さらには、2019 年度入学者にインタビューを行い TEM 図を基に検討を行った。

【方法】

調査時期 2024 年 9 月から 2025 年 1 月にかけて実施。

調査対象者 A 大学を卒業した者 4 名（2020 年度入学者 2 名・2019 年度入学者 2 名で、男性 1 名・女性 3 名）。

調査方法 オンラインにて実施。

研究倫理 調査の概要、調査協力は自由であることや中断が可能であることを説明し、同意を得た方には同意書に記入してもらった。また、第 2 著者が所属している大学の研究倫理審査委員会にて承認を得た（承認番号 2024-18）。

調査項目 半構造化面接で①友人関係の変化②日常生活の過ごし方③学習の仕方④ソーシャルサポートの有無⑤精神状態⑥その他を設定してインタビューを行った。また、友人ネットワークを尋ねるために、同心円状に友人がどこに位置するか心理的距離を尋ねた。

【結果】

4 名のインタビューから作成した TEM 図は、図 1 に記した。EFP を「同じ大学に友人ネットワークがある（EFP①）」、「友人サポートを得る（EFP②）」、「コロナ禍の大学を

渋々受け入れる（EFP③）」、「人と会う喜びを感じる（2nd-EFP）」とした。また、コロナ禍初期では全員が友人と心理的距離ができていた。2020 年度入学者の語りから、大学入学は友人ネットワークがない状態から始まり、オンラインで交流する機会はあるが、より関係性が深化するのは対面授業で同じ共有の話題ができた、同じ学科の人と対面授業終わりで雑談をしたりすることであると明らかになった。2021 年度入学者については、コロナ禍初期では心理的距離ができ、すでに友人ネットワークは形成されているがわざわざ連絡をする機会が少ないことが心理的距離を生む背景であった。これらの結果から、コロナ禍というのが心理的距離を生むことはどちらの学年にも起きていたが、その理由が異なることが明らかになった。

【考察】

大学生の適応過程において友人ネットワークを形成することは重点的な課題であるが、2020 年度入学者にとってはオンライン授業だけでは関係性は形成できるが深化しにくいと考えられる。また、2019 年度入学者にとっても、すでにある友人ネットワークを利用することの敷居の高さがあった。以上のことから、単に授業だけの交流ではなく、雑談や共通の話題など、コンパニオンシップを高めた交流ができると大学の適応過程につながると考えられる。

【利益相反】

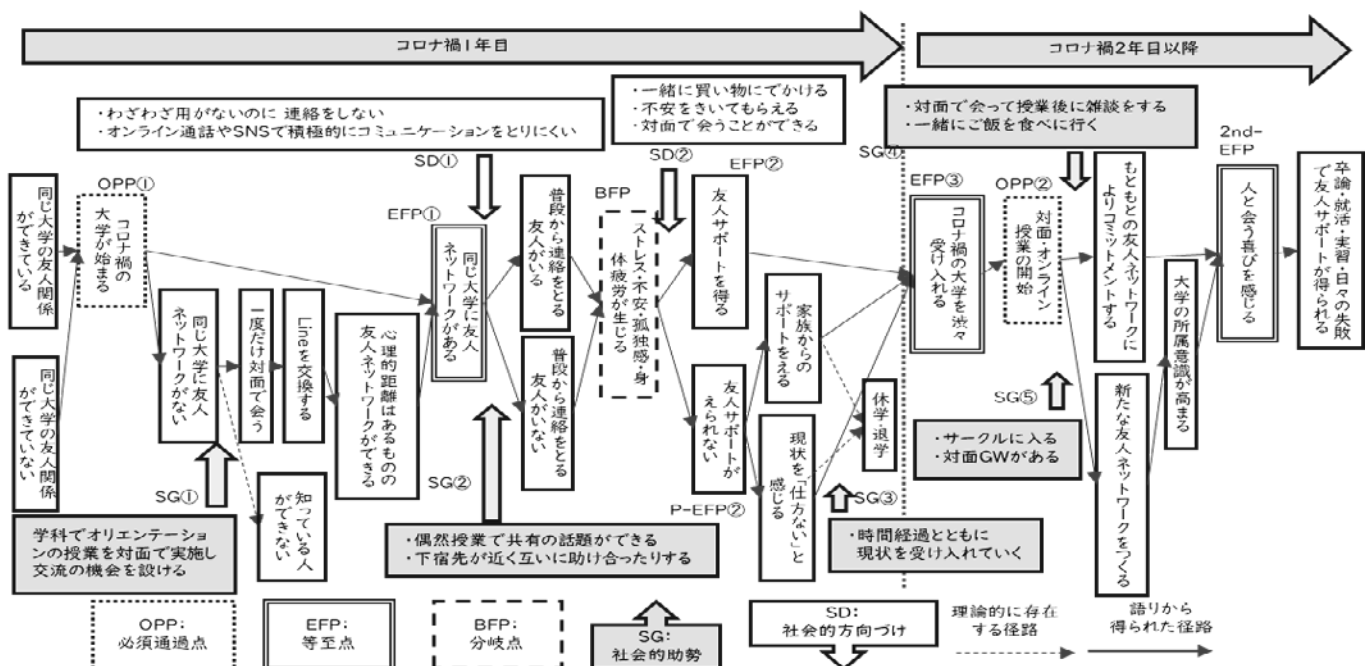
本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

大久保 智生（2005）. 青年の学生への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, 53(3), 307-319.

https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3_307

（うえだ じん・まつうら ひとし）



子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(1)

職場認知と子育て意識の関連

○池田琴恵¹ 谷口まち子²

(¹豊田工業大学 ²南山大学)

キーワード：キャリア・子育て・職場環境

【目的】

2007年、内閣府の仕事と生活の調和推進官民トップ会議において「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス、以下WLB）憲章」が策定され、制度的枠組みの構築や環境整備などの促進・支援策に積極的に取り組むことが示された。この策定から約20年が経過し、様々な制度・意識変革が進んでいるものの、現在も実生活の場では仕事と子育ての両立に困難や悩みを抱える親は少なくない。こうしたWLBの実現においては、仕事特性、職場特性、上司特性のすべての職場環境要因が影響を与えていることが示されている（加藤，2009）。しかしWLBは職場の要因だけではなく、生活と仕事との相互作用が想定されている考え方であり、生活の要因も影響を及ぼすと考えられるが、両者の関連は十分に検討されていない。

そこで本研究では、子育て期の親に着目し、職場認知と子育て意識がどのように関連しているかを検討することを目的とした。

【方法】

調査対象者：A市在住の就業している親を対象とした。調査協力者数は285名（女性238名(84%)、男性42名(15%)、その他/未記入3名(1%)）であった。

調査実施時期：2024年9月・10月

調査方法：A市教育委員会を通じて、市内の保育所・幼稚園・小学校で調査協力依頼書を配付した。調査協力依頼書には調査目的、調査実施者などと併せて、調査用WebサイトのQRコードを掲載した。当該調査用Webサイトを通じて回答を回収した。

調査内容：以下の質問項目を用いて、職場に対する認知と子育てに関する意識をたずねた。

(1)職場認知：川村・鈴木(2016)の看護職のワーク・ライフ・バランス尺度の26項目について、一部の看護職という表現を従業員と変更して用いた。また、職場におけるキャリアアップ、出産・育児、性別による昇進・昇給の差異に関する5項目を追加した31項目について、そう思う(4点)～そう思わない(1点)の4件法で実施した。

(2)子育て意識：佐藤ら(2020)の家族エンパワメント尺度を用いた。合計26項目について、かなり当てはまる(7点)～全く当てはまらない(1点)の7件法で実施した。

分析方法：因子分析およびα係数の算出による各下位尺度の信頼性を確認した後、下位尺度間の相関係数を算出したうえで、共分散構造分析を行った。

倫理的配慮：本研究は研究倫理審査【豊工大倫理第24-04号】を受けて実施された。

【結果】

(1)職場認知および子育て意識に関する尺度の信頼性の確認

職場認知の31項目について、まず天井・床効果のみられた5項目を除いて因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、固有値1.0以上の因子が5つ抽出された。川村・鈴木(2016)の因子構造と対照し、「上司の管理行動・キャリア/能力開発・生活尊重・職場への信頼・待遇/生活満足」の5つを下位尺度とした。

子育て意識の26項目について、天井・床効果のみられた6項目を除いて同様の因子分析を行った結果、3因子が抽出された。佐藤ら(2020)の因子構造と対照し、「親役割効力

感・地域とのつながり・育児支援サービスの活用」の3つを下位尺度とした。

(2)下位尺度間の関連性

職場認知および子育て意識の下位尺度間の相関係数を算出したところ、いずれの下位尺度にも有意な相関関係が認められた。次に共分散構造分析を行った結果、「親役割効力感」に対して、「生活尊重」および「待遇/生活満足」からなる職場の『WLB』のみが有意なパス(.46, $p<.01$)を示し、「上司の管理行動」と「職場への信頼」からなる『組織経営』、「キャリア/能力開発」から「親役割効力感」へのパスは有意ではなかった。ただし、『WLB』と『組織経営』および「キャリア/能力開発」は高い相関関係にあり、勤務形態や休暇申請、待遇などのWLBが高い状態の職場は、組織経営も高く、従業員が将来像を描きながら仕事ができる職場であることも示された。

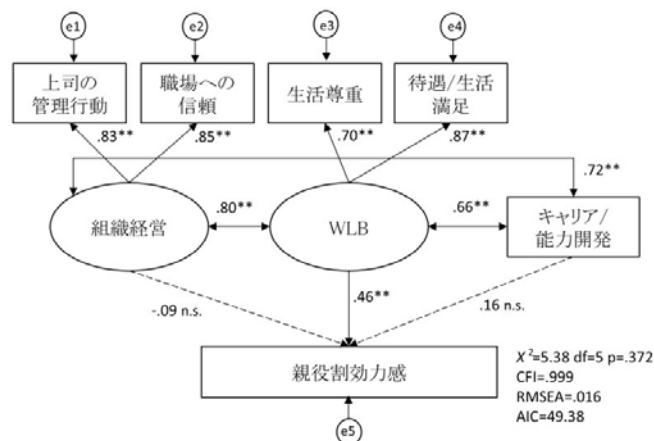


Figure 1 職場認知と親役割効力感の共分散構造分析の結果

【考察】

本研究の結果、自信をもって子育てができたり子育てを通じて自分も成長していると感じる『親役割効力感』に、気兼ねなく休暇をとることができたり出産や育児を歓迎する雰囲気を感じる「生活尊重」と給与や働き方の満足を示す「待遇/生活満足」からなる『WLB』が重要である可能性が示された。産休・育休制度が整備される中、制度を職場に入れるだけではなく制度の活用がしやすい風土づくりが重要であると考えられる。

【利益相反】本調査はA市の商工会議所と共同で行い、A市商工会議所から調査に係る費用の一部が筆者らに支払われた。またA市の教育委員会の後援(無償)を得て実施した。ただし本協力関係は調査内容や分析を歪めるものではない。

【引用文献】

加藤純子 (2009) ワーク・ライフ・バランスを実現する職場環境 日本労働研究雑誌, 583, 47-56.

川村晴美・鈴木英子 (2016) 看護職のワーク・ライフ・バランス尺度の信頼性・妥当性の検証 日本保健福祉学会誌, 22(2), 19-26.

佐藤美樹・荒木田美香子・金子仁子・三輪眞知子 (2020) 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の開発 日本公衆衛生雑誌, 67(2), 121-133.

(いけだ ことえ・たにぐち まちこ)

子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(2)

仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセス

○谷口まち子¹ 池田琴恵²

(¹ 南山大学 ² 豊田工業大学)

キーワード：ワーク・ライフ・バランス・職場風土・アイデンティティ

【目的】

2007年、内閣府の仕事と生活の調和推進官民トップ会議において「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス、以下WLB）憲章」が策定され、制度的枠組みの構築や環境整備などの促進・支援策に積極的に取り組むことが示された。この策定から約20年が経過し、様々な制度・意識変革が進んでいるものの、現在も実生活の場では仕事と子育ての両立に困難や悩みを抱える親は少なくない。WLBの実現においては、仕事特性、職場特性、上司特性の全ての職場環境要因が影響を与えていることが示されている（加藤，2009）。しかし、WLBは、職場の要因に加えて、個人の生活や価値観といった要因にも規定されるため、ライフステージの移行と共に変化していくと考えられる。それにもかかわらず、その過程は十分に検討されていない。

そこで、本研究では、働く子育て期の親に着目し、仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセスを検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者：A市在住の就業している親を対象とした。調査協力者数は285名（女性238名(84%)、男性42名(15%)、その他/未記入3名(1%)）であった。

調査実施時期：2024年9月・10月

調査方法：A市教育委員会を通じて、市内の保育所・幼稚園・小学校で調査協力依頼書を配付した。調査協力依頼書には調査目的、調査実施者などと併せて、調査用WebサイトのQRコードを掲載した。当該調査用Webサイトを通じて回答を回収した。

調査内容：A市で実施した仕事と子育てに関する調査の中の一部として、以下の文章を提示し、回答を自由記述で求めた。「子育てと仕事をする上で、今お勤めになっている会社や組織に対してどのような考えや要望がありますか。あなたの要望やお考えを自由に記入してください。」「その他、この調査を通じて伝えたいこと、知って欲しいことなどがあれば、自由にご記入ください。」

分析方法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA；木下2003，2020）を援用して分析を行った。

倫理的配慮：本研究は研究倫理審査【豊工大倫理第24-04号】を受けて実施された。

【結果】

190名から自由記述が得られた。M-GTAにより32概念が生成され、13サブカテゴリー、6カテゴリーにまとめられ、ストーリーラインが作成された。なお、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを「」で表記した。

親は「子どもの誕生に伴う変化」の中で【仕事と子育ての両立のバランスの模索】を始める。これは家族構成員として子どもが増えることで、「子どもとの時間への希求」が生じ、「働く理由」に占める<キャリア>、<生活>、<社会参加>の比率に変化が生じること、子どもにかかる<継続型ケアタスク><予定型ケアタスク><突発型ケアタスク>の混在する「家庭内のケアタスク」が急増するためである。その際、「旧来の価値観に基づく性別役割」が職場にあると、<制度の未整備><利用しづらい制度>といった「多様性を前提としない勤務形態」となることで、<人手不足><休暇のとりづ

らさ><業務量の多さ><長時間労働>による「労働環境の悪循環」が生じる。「労働環境の悪循環」に加え、「両立への理解の不足」や「ロールモデルの少なさ」が【仕事と子育ての両立を阻害する風土】になり、【仕事と子育てのバランスの不調和】を生じさせる。その結果、仕事や家庭など<多方面への負い目>や<両立に伴う葛藤>をもつこととなり、<望まない働き方>や<子育てのしづらさ>へとつながる。この【仕事と子育てのバランスの不調和】のみが続くこともあるが、【仕事と子育ての両立のバランスの模索】が並走する。

この時、<多様な勤務形態><休暇制度の整備>など「多様性を尊重する仕組み」と、職場内の<良好な関係性>を基盤とした<家族を大切にすること><両立への理解がある上司><子育て経験のある社員の多さ><子育て経験のない社員の理解><理解のある取引先>といった「両立への理解」を感じる【仕事と子育ての両立を支える職場風土】の中では、<快く休みを取得させてくれる>と思えるため、<気兼ねなく休みをとることができる>ようになる。【仕事と子育ての両立を支える職場風土】においては、親が「新たなバランスの受容」ができていた状態であると、<コントロール感><心理的安心感>を伴う【仕事と子育てのバランスの安定的再構成】につながる。ただし、親の「理想と現実のバランスが不一致」である場合、職場での<コントロール感><心理的安心感>はあるものの、自身の生き方としては<両立への葛藤><選択に伴う後悔>といった【仕事と子育ての両立のバランスの一時的安定】にとどまる。こうした状態は永続的なものとは限らず、【仕事と子育ての両立のバランスの模索】と循環しながら進む。

【考察】

子どもの誕生は、親のWLBに混乱をもたらすアイデンティティの危機として捉えることもできる。子育てをしながら働く親にとって、旧来の性別役割に対する価値観に基づいた職場風土は両立を阻害し、WLBの不調和を生み出すことが示された。これは自分の生き方を問い直す危機といえよう。こうした危機を乗り越えていくために、職場におけるWLB支援においては、多様性を前提とした柔軟な制度設計と、家庭生活を尊重してくれる仕事と子育ての両立への理解の両方が機能する職場風土の形成が重要である。ただし、両立支援的な職場風土があっても、個人内で理想と現実のずれがみられる場合は、WLBの安定は一時的なものに留まる可能性がある。従って、ライフステージの移行に伴う親の価値観・生活状況の変化への理解を基盤とした多層的・包括的なアプローチが不可欠である。今後は職場のあり方と個人の価値観の相互作用を捉え、個人が主体的にWLBを再構築できる支援の在り方を検討することが求められる。

【利益相反】

本調査は、A市の商工会議所と共同で行い、A市商工会議所から調査に係る費用の一部が筆者らに支払われた。また、A市の教育委員会の後援（無報酬）を得て実施した。ただし、本協力関係は調査内容や分析を歪めるものではない。

【引用文献】

加藤 純子（2009）ワーク・ライフ・バランスを実現する職場環境 日本労働研究雑誌, 583, 47-56.

（いけだ ことえ・たにぐち まちこ）

留学生との交流における意思決定バランスと行動変容ステージの関係

○田中共子¹ 山野洋一² 三宅沙侖美¹
(¹岡山大学 ²京都産業大学)

キーワード：Pros と Cons、日本人大学生、異文化交流

【目的】

近年の留学生政策の拡大やグローバル人材育成の必要性が注目される中で、日本人学生の異文化交流への消極性が課題となっている。我々は、彼らが実際に留学生との交流に踏み出していく過程を段階的に把握し、段階を進んでいく際の意思決定に注目した。行動の意思決定において、恩恵と負担の知覚バランスに変化が生じて、行動変容が進むとみるトランスセオリティカルモデルの意思決定バランス理論 (Prochaska & DiClemente, 1983) を用いて、その心理的機序を探る。本研究の目的は、日本人大学生を対象に、留学生との交流における Pros (恩恵) と Cons (負担) の認識が、その交流の行動変容ステージでどう異なるのかを明らかにすることであった。

【方法】

対象者と手続き：A 大学 (国立の総合大学) 所属の日本人学生及びその近隣の大学に所属する日本人学生 126 名 (平均年齢と標準偏差は 20.05±2.50 歳) であった。調査システムは Google Forms による無記名自記式で、2 つの講義時間中と縁故法で参加者を募集した。調査は 2024 年 11 月 14 日から 2 週間であった。なお、本研究は山野ら (2025) の調査と同様のデータセットである。

質問項目：「日本人大学生における留学生との交流意欲に関する意思決定バランス尺度 (以下、意思決定バランス尺度)、交流ステージなどから構成した。

意思決定バランス (表 1)：田中 (2025) の質的調査で明らかとなったカテゴリから 22 項目を作成し、因子分析により、Pros7 項目、Cons7 項目の 2 因子から構成される尺度である。Pros と Cons は独立した因子とされる (山野ら, 2025)。

交流ステージ：「外国人留学生との交流について、今のあなたの考え方や状況についてお聞きします。」という問いに「1. 留学生と交流しておらず、特に交流を始めたいと考えてはいない」、「2. 留学生と交流してみたいが、自分で交流の機会を探すほどではない」、「3. 留学生と交流してみたいので、自分から機会を探してみようと思う」、「4. 留学生と交流して、半年以内である」、「5. 留学生と交流して、半年以上である」の 5 件法で回答を求めた。TTM に倣い、1 は前熟考期、2 は熟考期、3 は準備期、4 は実行期、5 は維持期と想定した。

倫理的配慮：調査への参加は任意であることを説明し、回答データを研究目的で使用することに同意を得た。

【結果】

対象者の属性は 1 年生 63 名、2 年生 12 名、3 年生 24 名、4 年生 23 名、その他が 4 名であった。学部は文系 73 名、理系 30 名、国際系 1 名、その他 22 名であった。交流ステージは前熟考期 26 名、熟考期 77 名、準備期 6 名、実行期 6 名、維持期 15 名であった。該当者が少ないステージがあったため、「前熟考期：26 名」「熟考・準備期：83 名」「実行・維持期：17 名」に集約して分析に用いた。

留学生交流の Pros 得点及び Cons 得点 (T スコア：平均点を 50、標準偏差を 10) を従属変数、3 段階の行動変容ステージを独立変数として分散分析を行った。分散分析の結果、図 2 に示す Cons 得点において、ステージの主効果がみられた ($F(2,123) = 23.23, p < .001$)。

表 1 意思決定バランス尺度の項目：山野ら(2025)より作成

留学生との交流のPros	
Q6.外国人留学生と交流することは、視野を広げるきっかけになる	
Q9.外国人留学生と交流することは、語学の上達に役立つ	
Q11.外国人留学生と交流することは、将来役に立つ	
Q18.外国人留学生と交流することは、自分を振り返る機会になる	
Q19.外国人留学生と交流することは、交友関係を広げる	
Q20.外国人留学生と交流することは、コミュニケーション力を向上させる	
Q22.外国人留学生と交流することは、異文化を知る機会になる	
留学生との交流のCons	
Q1.外国人留学生と交流することは、疲れる	
Q2.外国人留学生と交流することは、高度なコミュニケーション力が求められる	
Q5.外国人留学生と交流することは、言語の壁がある	
Q10.外国人留学生と交流することは、緊張する	
Q15.外国人留学生と交流することは、怖い	
Q16.外国人留学生と交流することは、勇気が要る	
Q21.外国人留学生と交流することは、気恥ずかしい	

教示文：留学生と交流することについて、あなたは以下のこと、どのくらい感じますか。
『6.非常にそう感じる』『5.そう感じる』『4.少しそう感じる』『3.あまりそう感じない』『2.そう感じない』『1.全くそう感じない』の中から一つを選んでください。」

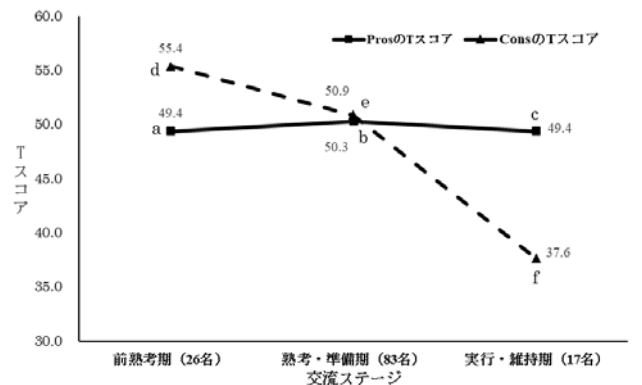


図 1 交流ステージ別の Pros と Cons の得点

【考察】

段階を追っての Pros と Cons の逆転現象は、意思決定バランスに関する従来知見と一致するが、Pros 得点に変化に乏しい一方、Cons 得点は段階を追って有意な低下を示した。回答分布からは交流と非交流の二極化が伺われる。日本人学生が留学生との交流に踏み出していくには、Cons 得点を Pros 得点より下げる介入が有用で、異文化接触の予習機能を持つ異文化間教育として文化アシミレーターなどが役立つであろう。

【利益相反】

本研究において開示すべき COI はない。

【引用文献】

- Prochaska & DiClemente, 1983 The transtheoretical model of health behavior change. American J. of Health Promotion, 12, 38-48.
- 田中共子 (2025) 「日本人大学生における留学生との交流認識に関する探索的検討」『異文化間教育学会第 46 回大会』東京大学(2025.6.21~22)
- 山野洋一・三宅沙侖美・田中共子 (2025) 「日本人学生における留学生との交流に関する意思決定バランス尺度の作成」『日本アカデミック・アドバイジング協会 第 5 回年次大会』同志社大学(2025.8.23)
- [謝辞] 岡山大学の大倉七菜さんの卒業研究データを再構成しました。発表のご快諾とご協力に感謝いたします。
(たなか ともこ・やまの よういち・みやけ さゆみ)

「きょうだい児」に関する態度分析 —YouTube のコメント欄を用いて—

○工藤 咲
(立正大学大学院 心理学研究科)

キーワード：きょうだい児 内容分析 障害者

【目的】

「きょうだい児」とは、障害児・障害者の兄弟姉妹を指す (Sibkoto, 2023)。きょうだい児は「同胞」「きょうだい」などさまざまな表記のされ方があるが、本研究では全ての年齢の当事者を含め「きょうだい児」と記す。

戸田 (2005) は、きょうだい児が家庭内で「親に負担をかけること」や「親の負担を軽減すること」などの役割を担っていると指摘している。そのような役割を負うきょうだい児は他者に配慮して行動する他者志向性が強いとされる (清水・板倉, 2021)。そのため、困難を抱えている際に顕在化しにくいと推測される。また、滝島 (2022) はきょうだい児に対する社会の理解が十分でないことを示しており、それが彼らの生きづらさに影響を与えていると推測される。きょうだい児の生きづらさを理解し状況を改善するためには、きょうだい児に対する一般の人々の認識を把握することが必要である。そこで本研究では、YouTube 上のコメント欄を対象に、きょうだい児に対する一般の人々の態度を分析することを目的とする。

【方法】

データ収集 「きょうだい児」をキーワードに、YouTube にアップロードされた動画を検索し、その中から最もコメント数の多かった番組 (ABEMA Prime「障害児を兄弟姉妹に持つ“きょうだい児”進路や恋愛も左右？必要な理解は」／2021年1月11日放送) を分析対象として選定した。

調査時期と分析対象 この番組に寄せられたコメント 3,072 件 (2025 年 3 月 24 日までに投稿されたもの) のうち、「いいね」数が多い上位 100 件を抽出し、内容分析を行った。その中で、番組構成に対する意見やゲストに関する言及が主となっている 29 件は分析対象から除外し、残り 71 件のコメントを分析対象とした。各コメントを意味ごとに区切り、合計 94 件の有効記述が得られた。

回答者の立場 コメント内に「きょうだい児である」と明記されているものを「本人」による回答とし、それ以外を「その他」と分類した。本研究では「きょうだい児を育てる親」など、間接的に当事者とも言える投稿も全て「その他」に分類した。これは、きょうだい児本人の視点とそれ以外の視点の違いを明らかにしたいと考えたためである。

【結果】

KJ 法を用いてコメントを分類したところ、全体は 6 つの大カテゴリーと 15 の中カテゴリーにまとめられた (Table 1)。大カテゴリーのうち「障害者家族の役割」は家族が当然に担うべきとされる障害者に関する責任、「きょうだい児の実態」はきょうだい児の体験を記述したものであった。「社会の現状と望まれること」は現状の支援制度の不備、「結婚と遺伝」は遺伝や将来への不安、「きょうだい児への第三者側の視点」は共感や同情などを記述したものであった。

さらに 15 の中カテゴリーに含まれるコメントの比率が「きょうだい児」「その他」で異なるか χ^2 乗検定を行なった。その結果、有意差が確認され ($\chi^2(5) = 19.61$, $p < 0.001$)、コメントの内容が立場により異なることが示され

た。残差分析の結果、きょうだい児では「きょうだい児の実態」、その他では「社会の現状と望まれること」が有意に高かった。

Table1 回答者の立場別に見た抽出されたカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	きょうだい児 (31件, N=19)	その他 (63件, N=52)
障害者家族の 役割	障害者家族の実態	41.9% (13)	33.3% (21)
	親の責任		
きょうだい児 の実態	障害者の面倒は見 たくない	41.9% (13)	11.1% (7) ↓
	役割を果たせない 罪悪感		
	きょうだい児であ ることの良さ		
社会の現状と 望まれること	役割からの解放 の道のり	0% (0) ↓	19.1% (12) ↑
	進路の不自由さ		
結婚と遺伝	障害者の家族との 結婚に対する考え	16.3% (5)	27.0% (17)
きょうだい児 への第三者側 の視点	きょうだい児に 対する気持ち	0% (0)	4.8% (3)
その他		0% (0)	4.8% (3)

【考察】

本研究は、きょうだい児に対する一般の人々の態度構造を分析することを目的とし、動画に寄せられたコメントを分類・量的に分析を行なった。その結果、きょうだい児に対する態度はきょうだい児本人とその他では注目する視点に差がみられることが明らかになった。当事者は「きょうだい児の実態」を言及していたが、その他は「社会の現状と望まれること」について多く言及していた。これは、誤った理解や期待が当事者に無自覚に押しつけられている可能性を示唆している。今後は、一般の人々がきょうだい児に対してどのような認識や態度を持っているかを定量的に明らかにし、当事者の困難の可視化と理解促進につながる社会的支援のあり方を検討していくことが必要である。

本論文において開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

- Shibkoto (2023). きょうだい児とは <https://sibkoto.org/about-sibling> (2025 年 6 月 2 日アクセス)
- 清水 溪介・板倉 憲政 (2021). 障害児・者のきょうだいの子ども時期における家族内役割と青年期における過剰適応との関連. 家族心理学研究, 34(2), 142-156.
- 滝島 真優 (2022). 学校教育における慢性疾患や障害のある子どものきょうだい支援の課題——教員によるきょうだい児の認識とかかわりの現状分析から—— 社会福祉学, 62(4), 44-57.
- 戸田 竜也 (2005). 『「よい子」じゃなくていいんだよ—障害児のきょうだいの育ちと支援—』新読書社.
(くどう さき)

17 歳身長分布での変動係数の経年増大等

関与及び影響する諸領域での応用心理学的考察

○廣島 克佳
(マンション管理士)

キーワード：ジェンダースtereotype 人間工学 認知能力

【目的】近年の日本人若年層の身長の高さが大きい印象を受ける。平均身長のみならず、身長分布からの影響及び分布に影響を与える要因が様々に考え得る。そこで、同一年齢コホート内での身長分布が経年的に変化しているかを統計的に検討し、結果に対し応用心理学的な考察を加える。

【方法】

(1) 分析対象

統計法に基づいて文部科学省が実施する「学校保健統計調査」においては、調査年度毎に性別年齢コホート毎の児童生徒の発育状況及び健康状態のサンプリングデータが収集・公開されている。最高齢である 17 歳コホートデータは成人に近いものと期待でき、サンプリング率も全生徒数の 5.2% (2024 年度) 程度である。1976 年度以降は身長分布データが公開されており、これらの内 1996 年度以降最新の 2024 年度分までは表計算データとして公開されている。本発表ではこの 1996 年度以降を分析対象とした。

(2) 分析方法

肥田野他 (1961) により、17 歳年齢コホートの男女毎に平均値・変動係数 (変異係数)・歪度・尖度及び年度毎男女平均値差を算出し、それらの経年変化等に関わる検定等を実施した。各計算には Microsoft Excel 2019 及び超漢字 V 表計算機能を用いた。

本データは身長を 1cm 単位に四捨五入したものを各級としている。また、年度毎の年齢コホート・男女別毎の調査実施者数を 1000 人に換算した値を掲載しており、小数点 2 桁以下を四捨五入している。よって各級の換算人数の合計が 1000 に合致しない場合が多々あり、この場合は計算上の人数として各級毎の換算人数を合計した値を用いた。

年度による各指標の推移に関し直線回帰係数等を算出し、両側 5% を有意水準とする t 検定を行った。自由度は全て 27 であり、閾となる t_0 は約 ± 2.0518 となる。

【結果】

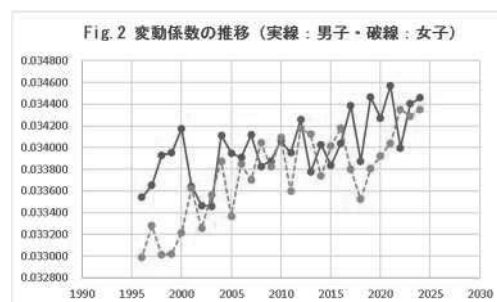
男子平均値は $\gamma = -0.6797$, $t = -4.8157 < -t_0$, 女子平均値は $\gamma = -0.4041$, $t = -2.2957 < -t_0$, 年度「男子平均値-女子平均値」は $\gamma = -0.3684$, $t = -2.0592 < -t_0$ となり、平均身長が両性共低下しつつ男女差が縮小する傾向 (Fig. 1) を示した。



男子の変動係数は $\gamma = 0.6755$, $t = 4.7601 > t_0$, 女子の変動係数は $\gamma = 0.8047$, $t = 7.0430 > t_0$ であり、いずれも年々増大即ち身長分布の広がりが拡大する傾向を示した。(Fig. 2)

男子の歪度及び尖度は有意ではなかった。女子の歪度は $\gamma = 0.4633$, $t = 2.7165 > t_0$ で 0 より大の領域で増大即ち分布が高身長側に傾いていく傾向を示した。尖度は有意ではなかった。

なお、何れの年度・性別においても歪度は 3.0 をやや超える程度であり、正規分布に近かった。



【考察】いわゆるバブル経済崩壊の後、男女各集団内での身長の格差が拡大する一方、男女共身長が減少しつつ男女差が縮小する傾向が認められた。これらの現象の要因及び影響について、以下のように考察した。

(1) 栄養及び経済的要因について

栄養状態とその要因としての経済状況が成人の身長に及ぼす影響が明らかである (Perkins 他, 2016)。よって、変動係数の経時的増大は、経済格差の拡大を強く示唆する。

(2) ジェンダー関連

女子歪度の上昇の効果もあり、男性よりも高身長な女性の比率が上昇していくと予想される。井上他 (2002) はジェンダースtereotypeの定義を記述している。この一つとして男は女に比べて高身長であるべきとの観念を認識し得るが、変更が迫られる。近年、sanorin (2025) に見られるように男性よりも大柄の女性が自然な様態で登場するコミック作品が散見され、変更が進行している可能性がある。

他方、親の栄養等における男女への態度差が、身長減少の男女差を生じている可能性がある。

(3) 身体計測的人間工学上の問題

服飾等の消耗品よりも、建築物や公共交通機関等での身体計測的領域の問題が大きくなり続けると考えられる。

(4) 逆フリン効果及び知能分布の拡大

Magnusson 他 (2006) が身長と最終到達学歴の間に関連を見出す等、身長と認知能力の間に相関が認められる。身長の縮小及び変動係数の増大は知能の低下及び格差を伴い、多様な困難を生じる可能性がある。

【利益相反】本研究及び発表に利益相反はない。

【引用文献】

- 肥田野直他 (1961). 心理教育統計学, 培風館
井上輝子他編 (2002). 岩波女性学事典, 岩波書店
Magnusson, Patrik, et al (2006). Height at age 18 years is a strong predictor of attained education later in life: cohort study of over 950000 Swedish men. International Journal of Epidemiology. 35(3):658-663
文部科学省 (1960). 学校保健統計調査. (URL 省略)
Perkins, Jessica, et al (2016). Adult height, nutrition, and population health. Nutrition Review. 74(3):149-165
Sanorin (2025). 僕の彼女はデッサンワイイ. KADOKAWA (ひろしま かつよし)

アタッチメントと他者のユーモアに対する魅力に関する日中調査

○中尾達馬¹ 李同归^{2,3} (非会員)

(¹琉球大学教育学部 ²北京大学心理与认知科学学院 ³行为与心理健康北京市重点实验室)

キーワード：アタッチメントスタイル ユーモアスタイル 日本・中国

アタッチメントとユーモアに関しては、アタッチメントの内的作業モデルが、ユーモアの生成や受容を方向付ける認知的な枠組みとして機能する、という視点から研究知見が蓄積されてきた。たとえば、Luevano et al. (2021)は、アタッチメントスタイルと潜在的パートナー（将来結婚をして家庭を築く可能性があるくらい自分にとって大切なパートナー）が示すユーモアスタイルへの魅力度との関連性について、アメリカで調査を実施した。その結果、アタッチメント不安(以下「不安」)とアタッチメント回避(以下「回避」)は、共に、潜在的パートナーが示すポジティブ・ユーモアスタイル（親和的ユーモアスタイル、自己高揚的ユーモアスタイル）への魅力度とは有意な負の相関があり、潜在的パートナーが示すネガティブ・ユーモアスタイル（自虐的ユーモアスタイル、攻撃的スタイル）への魅力度とは有意な正の相関があった（表1上段）。したがって、不安定なアタッチメントを持つ人は、良好な関係性を育むユーモアスタイルには惹かれず、関係性に害をなす可能性のあるユーモアスタイルに惹かれるということが示唆された。

しかし、この現象は文化に関わらず生じることなのであろうか。同じユーモアであっても、文化によっては受け取り方が異なるため（林，2023）、先の西洋で得られた知見は、東洋では再現されない可能性がある。そこで本研究の目的は、Luevano et al. (2021)の結果が東アジア（日本、中国）でも再現されるかどうかを明らかにすることであった。

【方法】

調査協力者 調査協力者は、沖縄県の大学に通う日本人大学生 89 名($M=18.74$, 男性 32 名, 女性 56 名, 答えたくない 1 名)と北京市・河南省・湖南省北京市・河南省・湖南省の短大・大学に通う中国人短大・大学生 561 名($M=19.19$, 男性 319 名, 女性 242 名)であった。恋愛経験のある者は、日本人大学生 44 名, 中国人短大生・大学生 433 名であった。

質問紙 質問紙は人口統計的質問（学部, 学年, 年齢, 性別, 恋人の有無）と以下の尺度から構成されていた。

アタッチメント不安・アタッチメント回避(以下「不安」「回避」, ECR: Brennan et al., 1998) 日本語版は中尾・加藤 (2004), 中国語版は李・加藤 (2006) を用いた (36 項目・7 件法)。

潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度 (Luevano et al., 2021) Luevano et al. (2021)は HSQ (Humor Styles Questionnaire, Martin et al., 2003)に基づき、本指標を作成した。日本語版は、日本語版 HSQ (吉田, 2012)に基づき第一著者がこの指標を作成した（教示：これからいくつかのセリフが出てきます。それぞれについて「将来付き合うかもしれない恋人候補が、もしこれらのセリフのようなことを言ったとしたら...」、あなたはその人に対してどのくらいの魅力を感じますか。項目例：「ふだんは人と一緒に笑ったり冗談を言いあったりはしない」と言うその人（恋人候補）に、私は...、評定尺度：1＝「全く魅力を感じない」から 7＝「とても魅力を感じる」(32 項目・7 件法)。中国語版は、第二著者がこの指標を作成した。

手続き・COI 2025 年 5－6 月に web 調査を実施した。本研究に関して開示すべき利益相反はない。

【結果と考察】

先行研究に基づき、各下位尺度得点（加算平均値）を算出した。 α 係数は、日本人＝.67－.91, 中国人＝.72－.93 と概ね許容範囲の内的整合性が得られた（親和的ユーモアと攻撃的ユーモアは、全項目版では α 係数が低かったため、本研究では、数項目を削除した短縮版を用いた）。

2（国：日本、中国） $\times$ 2（性別、男性、女性） $\times$ 2（恋愛経験：有、無）を独立変数とし、潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度を従属変数とする 3 要因分散分析を行った。これら 3 要因は全て調査対象者間要因である。分析の結果、(1)親和的ユーモアで、国 $\times$ 性別の交互作用が、(2)自己高揚的ユーモアで、国の主効果、国 $\times$ 性別と国 $\times$ 恋愛経験の交互作用が、(3)攻撃的ユーモアへの魅力度で、国の主効果が有意であった。下位検定の結果、次の結果が得られた：(1)日本人女性は、日本人男性や中国人男性・女性に比べて、親和的ユーモアへの魅力度が有意に高かった（それぞれ $M=4.67$, $M=4.01$, $M=4.18$, $M=4.09$ ）。(2)日本人は、中国人に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度が有意に高かった（それぞれ $M=4.73$, $M=4.16$ ）。日本人は男女で、自己高揚的ユーモアへの魅力度に有意差はなかったが（それぞれ $M=4.85$, $M=4.67$ ）、中国人においては、女性は、男性に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度は有意に高かった（それぞれ $M=4.35$, $M=4.01$ ）。日本人の恋愛経験あり群は、日本人の恋愛関係なし群や中国人の恋愛関係あり群・なし群に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度が有意に高かった（それぞれ $M=4.95$, $M=4.52$, $M=4.15$, $M=4.17$ ）。(3)中国人は、日本人に比べて、攻撃的ユーモアへの魅力度が有意に高かった（それぞれ $M=3.59$, $M=2.57$ ）。

アタッチメントスタイルと潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度とのピアソンの相関係数を算出した

(Table 1)。その結果、アメリカと日本は、「不安」「回避」はポジティブ・ユーモアスタイルと有意な負の相関があり、ネガティブ・ユーモアスタイルとは有意な正の相関があるという類似した方向性での結果が得られた。しかし、中国に関しては、予測に反して、「不安」と潜在的パートナーが示す自己高揚的ユーモアとの間には有意な正の相関が、攻撃的ユーモアとは負の相関が得られた。今後は、なぜこのような結果が得られるのか、中国文化の特徴（面子と個人的な関係（グアンシー）、など）を考慮しながら、さらなる検討が必要であろう。

Table 1 アタッチメントスタイルと潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度

アタッチメント	ポジティブユーモアスタイル		ネガティブユーモアスタイル	
	親和的	自己高揚的	自虐的	攻撃的
アメリカ N=788	「不安」 -.36**	-.14**	.44**	.22**
	「回避」 -.54**	-.27**	.41**	.27**
日本 N=89	「不安」 -.23*	.04	.23*	.12
	「回避」 .06	-.25*	-.15	-.03
中国 N=561	「不安」 -.52**	.40**	.49**	-.30**
	「回避」 .03	-.27**	-.05	.28**

注) 表中の数字は、ピアソンの積率相関係数である。アメリカデータは Luevano et al. (2021)より抜粋した。** $p<.01$, * $p<.05$ 。

(なかお たつま・り とき)

ありのまま信念が新規職場適応に与える影響

谷口 淳一
(帝塚山大学心理学部)

キーワード：ありのまま信念、新規職場適応、真正の自己表現

【目的】本研究では、社会人を対象として、ありのまま信念の強さが新たな対人関係の形成を阻害するのかを検討した。

新規の環境に適応し、新たな対人関係を形成する際には、効果的な自己呈示を行うことが重要な課題となる。効果的な自己呈示とは、自己確証目標と自己高揚目標という 2 つの目標をともに充足するような自己呈示であり、本研究では、真正の自己表現とポジティブな部分の呈示として扱う。新たな人間関係を形成しようとする初対面場面では、ポジティブな評価を得ることが求められ、自己高揚目標が高まりやすい。そのため、自己確証目標との間に葛藤が生じ、自己呈示の選択に制約資源が消費され、結果として、効果的な自己呈示が行えないと推測される。また、自尊心が低い場合により 2 つの目標の葛藤が大きくなると考えられる。

自己確証目標を高める個人差として、「ありのまま信念」が挙げられる。ありのまま信念とは、“ありのまま”に他者に接することが望ましいという価値観を内在化している個人差である (谷口, 2017)。ありのまま信念が強ければ自己確証目標が活性化しやすいと予測される。つまり、自尊心が低い場合にありのまま信念が強ければ、自己確証目標と自己高揚目標の葛藤はより大きくなり、適切な自己呈示を行えず、結果として新規職場環境へ適応できないと予測される。仮説：自尊心が低い場合に、ありのまま信念が強いほど真正の自己表現、自分のポジティブな部分の自己呈示を行えず、新規の職場環境に適応できないだろう。

また、非真正の自己表現、ネガティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさの程度についても探索的に検討する。

【方法】分析対象者 インターネット調査会社の登録モニターで、「現在、特定の企業・組織に勤務しており、その企業・組織に勤め始めてから 6 ヶ月以内の 20 代～40 代」の 646 名 (男性 301 名、女性 345 名、平均年齢 35.60 ($SD=8.33$) 歳) を分析対象とした。(谷口他(2024/社心大会)と同一データ) 調査項目 1)自尊心(山本ら,1982, 9 項目, 5 件法)、2)ありのまま信念(谷口, 2017, 12 項目, 5 件法)、3)現在の職場の同僚に対する真正・非真正の自己表現の程度(谷口・宮川, 2023, 8 項目, 6 件法)、4)同僚へのポジティブ/ネガティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさ (谷口他, 2022, 各 1 項目, 5 件法)、6)現在の職場への適応 (高木, 2003, 13 項目, 5 件法)。

【結果】ありのまま信念 12 項目について因子分析を行ったところ、谷口(2017)同様に「ありのまま保持」と「ありのまま呈示」の 2 因子が得られた。本発表では「ありのまま呈示」を用いた分析のみを報告する。「誰に対しても、ありのままの自分を見せるべきである」など 5 項目から構成されており、合成変数を求めて分析に用いた ($\alpha=.75$)。

「ありのまま呈示」と自尊心、交互作用項を説明変数、職場適応と 5 種類の自己呈示をそれぞれ目的変数とする重回帰分析を行った(Table 参照)。職場適応、真正の表現、非真正の自己表現、ポジティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさについて、自尊心が正の有意な関連を示していた。また、職場適応、真正の自己表現、ポジティブな部分の呈示、ネガティブな部分の呈示については「ありのまま呈示」が正の有意な関連を示していた。さらに、非真正の自己表現については交互作用項が有意となっていた。下位検定を行ったところ、自尊心が高い(+1SD)場合には、ありのまま呈示の有

意な正の関連が示されていたが($b=0.18, p=.005$)、自尊心が低い(-1SD)場合には、ありのまま呈示は有意な関連を示していなかった($b=-0.03, p=.590$) (Figure 参照)。

【考察】自尊心の高低に関わらず、ありのまま信念が強いほど真正の自己表現、ポジティブな部分の自己呈示を行い、また職場に適応しているという結果から、仮説は支持されなかった。ありのまま信念が強いことで自己確証目標と自己高揚目標が葛藤すると予測したが、実際は葛藤していないのかもしれない。ありのまま信念が強いほど、ネガティブな部分の自己呈示もより行っていたが、自らのポジティブな部分についてもまさにありのままに呈示しようとすることで、自己高揚目標を充足し、結果として職場にも適応できていたとも考えられる。

また、非真正の自己表現に関わる交互作用の結果も興味深い。自尊心が高い場合に、ありのまま信念が強いほど非真正の自己表現をより行っているというのは一見、理解しがたい結果であるが、次のようにも解釈できる。自尊心が高い人は相手から受容されているという安心感もあることから、ありのまま信念が強いほど、相手もありのままにふるまえるように配慮し、非真正の自己表現をより行うとも考えられる。

※本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究(C)課題番号 16K04277) の助成を受け実施した。

(たにぐち じゅんいち)

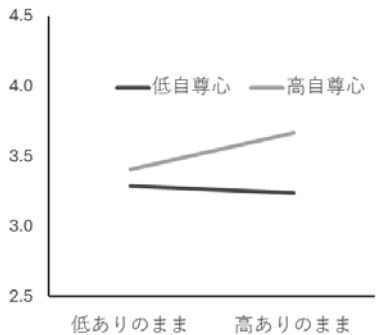
Table 各自己呈示についての重回帰分析結果

	職場適応	AE	IAE	Posi呈示	Nega呈示	Positivity
自尊心	.24 ***	.32 ***	.15 ***	.30 ***	.05	.18 ***
ありのまま呈示	.08 *	.25 ***	.06	.14 ***	.14 ***	.00
群×ありのまま呈示	.06	.05	.11 **	.00	-.02	.01
R^2	.07 ***	.19 ***	.04 ***	.12 ***	.03 ***	.03 ***

表の数値は、標準化偏回帰係数 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

AE：真正の自己表現、IAE：非真正の自己表現、Posi呈示：ポジティブな部分の自己呈示、Nega呈示：ネガティブな部分の自己呈示、Positivity: 自己呈示のポジティブさ

Figure 自尊心×ありのまま呈示の新たな職場の同僚に対する非真正の自己表現



マッチングアプリに対して大学生が持つ印象

——地域差と NIMBY の関連——

○ 井川純一¹

(¹ 東北学院大学)

キーワード：マッチングアプリ、地域差、NIMBY

【目的】

2023 年の調査 (MMD,2023) では、特に若年層においてはマッチングアプリの利用頻度が高くなり、すでにネットにおける出会いは一般化していることが示唆される。

本研究では、オンライン上の出会いと対面上 (以下リアル) の出会いに関するイメージの差異について検討する上で、NIMBY (Not In My Back Yard : 全体としては賛成だが、身近な人には反対する傾向) と地域差に着目して検討する。

ネット恋愛に関するイメージ調査 (2020) では、オンラインによる出会いに対しての抵抗やネガティブな印象を持つ人々が多いことが分かっている。しかし、ネット上での出会いが一般化しつつある現状では、そのネガティブな印象は減少しつつあると考えられる。しかし、一般論としてはネガティブな印象が減っていたとしても、自己の交際相手など親密な他者に関連する場面では依然としてネガティブな印象が残っている可能性がある。また、若者人口が多い都市圏においてはリアルでの出会いの機会が高く、人口の少ない地方都市と比較するとネット上での出会いを選択する必要性は低くなる。この観点から考えると、地方都市のほうがネットでの出会いを求める可能性が高く、ネガティブな印象が小さくなるかもしれない。一方、コミュニティが小さい場合には、他者からの評判の影響が大きという点を考えれば、地方都市のほうがネットでの出会いにネガティブな印象を持つことが予測される。

【方法】

調査参加者 東京都内 ($N=74$)、及び地方都市 ($N=246$) の国公立大学生 (男性 194 名、女性 126 名、平均年齢 20.853 歳) を対象とした。

手続き 2025 年 1 月-3 月、学習支援サービス上のコースニュースで調査サイトを公開し、学生は適宜調査に参加した。

オンラインでの出会いに関する実態調査 出会い系アプリを利用した恋愛経験 (あり・なし・恋愛経験なし)、アプリ利用への抵抗感、評判懸念 (アプリを利用していることを周囲に知らせる程度)、友人の利用経験。それぞれ 5 件法。

シナリオ実験 対象条件 (恋愛感情を持つ異性の元恋人 / 異性の友人の元恋人)、手段条件 (アプリ / 対面) を操作した 4 種類の短文シナリオを使用し、特性形容詞尺度 (林, 1978) 20 項目 (SD 法 7 段階) を用いて、対象人物の A さんの印象を評定した。

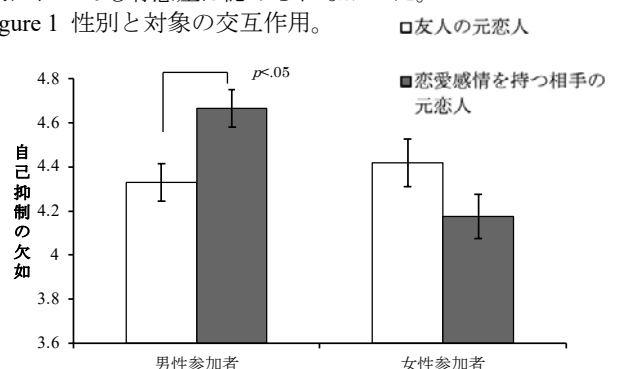
【結果】

調査対象者のうち、マッチングアプリを通じた恋愛経験があるのは都市圏 (11.8%) よりも地方都市 (5.4%) が低かったが、有意差は認められなかった ($\chi^2(2)=3.47$, $V=.10$, $p=.18$)。一方、友人のアプリ利用者は都市部が高くなった ($t(214.05)=7.20$, $r=.29$, $p<.01$)。評判懸念を従属変数、性別及び地域を独立変数とした分散分析を行ったところ、性別 ($F(1, 316)=6.02$, $\eta^2=.02$, $p<.05$)、地域差 ($F(1, 316)=10.96$, $\eta^2=.03$, $p<.01$) 及び交互作用 ($F(1, 316)=6.58$, $\eta^2=.02$, $p<.05$) が認められ、地方都市及び女性のほうがマッチングアプリの利用を周囲に隠す傾向が明らかとなった。また、抵抗感についても同様の分析を行ったところ、地域差は認められなかったものの ($F(1, 316)=0.38$, $\eta^2=.00$, $p=.54$)、女性の

ほうが抵抗感があることが明らかとなった ($F(1, 316)=5.37$, $\eta^2=.02$, $p<.05$)。

シナリオ実験における印象評定尺度について、探索的因子分析を行ったところ、「軽率、恥知らず、責任感のない」などの得点が高くなる自己抑制の欠如 ($\alpha=.82$)、「近づきがたい、非社会的・沈んだ」などの得点が高くなる対人回避傾向 ($\alpha=.81$) が抽出された。両尺度得点を従属変数とし、対象条件 (恋愛感情を持つ異性 / 異性の友人)、手段条件 (アプリ / 対面) 及び調査参加者の性別の 3 要因及び地域差を共変量として投入した分散分析を行った。自己抑制の欠如については、アプリ利用者 ($F(1, 311)=15.47$, $\eta^2=.05$, $p<.01$) のほうが高く認知され、男性参加者のほうが高く評定 ($F(1, 311)=4.47$, $\eta^2=.01$, $p<.05$) する傾向が認められた。また、対象条件と性別の交互作用に着目したところ、女性参加者の場合には、友人と恋人の間で差は認められなかったが、男性参加者の場合には、恋愛感情を持つ相手の元恋人に対する自己抑制の欠如の評定が高くなっていた ($F(1, 311)=9.41$, $\eta^2=.03$, $p<.01$, Figure 1)。なお、対人回避傾向についてはどの変数においても有意差は認められなかった。

Figure 1 性別と対象の交互作用。



【考察】

出会い系アプリ利用に対する抵抗感、評判懸念については都市部よりも地方都市、男性よりも女性のほうが高くなった。実際にアプリを利用した恋愛経験の割合からも、地方都市よりも都市部のほうがアプリ利用の一般化が伺える。

シナリオ実験を用いて、NIMBY と地域差について確認したところ、リアルよりもアプリの利用者のほうが自己抑制の欠如が高く評定され、ネガティブな印象が依然として継続していることがわかる。また、女性参加者では差が認められなかった手段の効果が、男性参加者では認められ、男性の場合が恋愛感情を持つ異性の恋愛相手に対してよりネガティブな印象を持つことが明らかとなった。

一方、想定したアプリと NIMBY の関係については認められなかった。本研究では、利用者への印象を間接的に検討するため、対象の元恋人という設定としたため、明らかな効果は認められなかった可能性がある。

【利益相反】本研究において、開示すべき利益相反(conflict of interest: COI) はない。

【引用文献】

林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.

(いがわ じゅんいち)

若手リーダーはいつ「矛盾」を活かせるのか？

ーパラドキシカル・リーダー行動に与える年上部下比率の曲線効果と外向性の調整効果

竹内 規彦

(早稲田大学商学大学院)

キーワード：上司部下間の年齢逆転現象、パラドキシカル・リーダー行動、リーダー関係エネルギー

【目的】 日本の総人口に占める 65 歳以上の比率は 2024 年に 29%を超え、55 歳以上の就業者数も過去 10 年で約 1.4 倍に拡大した（総務省統計局, 2014, 2024a, 2024b）。加えて、大企業では役職定年制が普及し、管理職ポストを離れたシニアが「専門職」や「嘱託」として在籍し続ける傾向が強まっている。この結果、課長級・部長級の若手リーダーが自分より年上の部下を抱える「年齢逆転現象」が多くの職場で散見されている。地位特性理論（status characteristics theory）では、年齢は文化的に一般化された能力期待（例えば、年長者は経験豊富で有能という期待）を抱かせる属性であり、年上部下の存在は若手リーダーに地位脅威をもたらすと説明している（Berger & Zelditch, 1966）。一方で、年上部下はリーダーに対して豊富な経験や外部ネットワークという資源も提供するため、その比率が適度であればリーダーの柔軟な行動や部下との関係性から得られる活力を促進するだろう。資源保存理論（conservation of resources theory）では、人は保有資源が脅威を上回るときに探究的な行動を取り、資源喪失を予想すると防衛的になると説明している（Hobfoll, 1989）。これら両理論を統合すると、職場における年上部下比率が低い状況では資源効果が優勢である一方、一定点を超えると脅威が資源を凌駕することが想定される。

そこで本研究では、資源と脅威の均衡バランスを反映する年上部下比率が、上司のパラドキシカル・リーダーシップ行動（paradoxical leader behavior: 以下、PLB）の発揮度に曲線的（逆U字型）影響を与え、その結果、部下から得られるリーダーの関係エネルギー（leader relational energy: 以下、LRE）を促すことを仮定する曲線媒介モデルを提起する。PLB とは、距離と近接、統制と自律、自己志向と他者志向など相反する要求を同時に満たすリーダー行動であり（Zhang et al., 2015）、複雑な組織・職場環境に適応する上で不可欠とされる。また、LRE は、上司が部下との相互作用によって得られる活力状態を指す（Owens et al., 2016; Zhang & Chen, 2022）。

さらに、本研究は、性格 5 大因子の「外向性」が年上部下比率と PLB の逆 U 字曲線の関係をどのように調整するかを検証する。外向性は社会的接触を通じ活力を獲得できる個人資源である一方、他者からの評価に敏感で地位脅威を感じやすい（Judge et al., 2002）。最近のメタ分析結果では、外向性が仕事場面のポジティブ感情と強く結びつく一方、対人ストレスの高い状況下では負の影響を及ぼす二面性を示唆している（Zhou et al., 2021）。したがって、外向性が高いリーダーは年上部下が少数派の時に資源を最大化し PLB が高まるが、多数派になると脅威感受性が増幅し PLB の低下が急激になると仮定する。以上から、本研究では、地位特性理論と資源保存理論の視点を組み込んだ曲線効果を含む調整媒介モデル（図 1）を提起し、縦断データを用いた検証を行う。

【方法】 従業員 100 名以上の日本企業に勤める課長・部長級のリーダーを対象として、6 か月間に複数回の定点観測を含めた縦断的調査を実施した。本研究では調査期間に直属部下のメンバー構成に変化がなかった 893 名（平均年齢 43.6 歳、部下 2~11 名）を分析に使用した。測定尺度は以下の通りである。年上部下年齢比率（%）は Time 1 時点において、①直

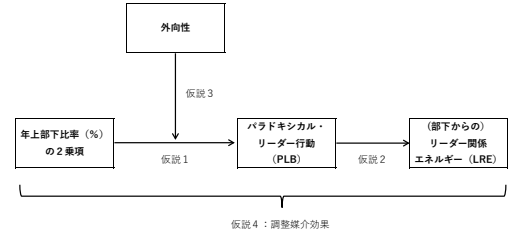


図 1. 本研究の仮説モデル

属の部下総数と②自分より年上の部下数の回答を求め、 $\textcircled{2} \div \textcircled{1} \times 100$ により算出した。

PLBは

Time 2 時点にて、Zhang et al. (2015) の 22 項目 ($\alpha = .95$) により測定した。LREは Time 3 時点において、Huang et al. (2023) の 5 項目 ($\alpha = .91$) をもとに測定した。外向性は Time 1 にて、Wallace & Chen (2006) の 8 項目 ($\alpha = .81$) を使用した。統制変数：性別、年齢、勤続年数、学歴、企業規模、部下数、年上部下比率（線形項）。なお、年上部下比率の 2 乗項は、事前に変数を中心化（Aiken & West, 1991）を行っている。

【結果】 SPSS の Process Macro による解析の結果、年上部下比率の 2 乗項は PLB に有意な負の効果 ($b = -.06, p < .05$) を示し、PLB は LRE に有意な正の効果 ($b = .24, p < .001$) を示した。また、年上部下比率（2 乗項）と外向性（線形項）の交互作用項は、PLB に対して、有意な負の効果 ($b = -.047, p < .05$) を持つことが明らかとなった。上記の調整媒介効果（ブートストラップ: $n = 5000$ ）は、 $MM = -.011 [-.025, .001]$ で 95%信頼区間に 0 含まず有意であった。具体的には、高外向性（+1SD）条件において、年上部下比率（2 乗項）の負の効果が最も強く、低外向性（-1SD）条件では非有意であった。図 2 のプロットより、高外向性リーダーは年上部下比率が約

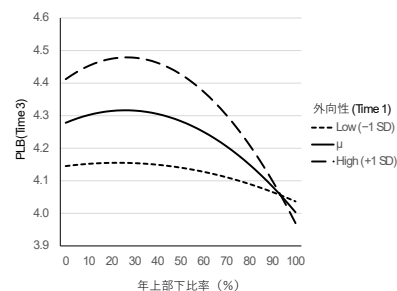


図 2. リーダーの外向性が年上部下比率とパラドキシカル・リーダー行動（PLB）の関係に与える調整効果

25%の時に PLB がピークに達し、6 割を超えると急降下し、更に 9 割を超えた付近で低外向性のラインを下回ることが観察された。最後に PLB を介した LRE への間接効果は高外向性で最大で、低外向性では検出されなかった。

【考察】 外向性が高いリーダーは社交性を通じて少数の年上部下から得られる知識資源を最大化し PLB を高めるが、年上部下が多数派になると自己に対する評価不安が増幅し、脅威が資源を上回って PLB が急減するものと推察される。一方、外向性の低いリーダーは獲得する資源が少なく PLB の発揮度は相対的に低いものの、脅威に対する感受性も低いため下降幅が小さいと考えられる。したがって、外向性の高い若手リーダーを配置する際は、年上部下比率を 4 分の 1 程度とすると最も矛盾を生かしたリーダー行動を発揮し、自身の関係エネルギーを高められる一方、過半数を超えるような職場への配置には負の側面が顕在化するため注意が必要である。（たけうち のりひこ）

推し活の行動的側面の構造と推しの対象の関連について

ー探索的因子分析と多重コレスポネンデンス分析による検討ー

○山村豊¹ 菅野智子² 大森哲至³ 田宮憲³

(¹桜美林大学 ²立正大学 ³帝京大学)

キーワード：推し活 推しの対象 多重コレスポネンデンス分析

【問題と目的】

問題 推し活とは、強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。菅野・山村(2024)は、推し活の心理的側面について検討した結果、「熱中」、「疑似恋愛」、「憧れ」、「情報収集(情報欲求)」、「同調」の5因子から構成されることが示唆された。しかし、推し活は「活動」であることから、心理的側面だけではなく行動的側面からの検討が必要であろう。またその活動は、何を推しているのかという対象によって違いがあると予想される。

目的 本研究では、推しの行動的側面(推し行動)に関する質問項目を作成し構造を検討するとともに、推しの対象との関連について検討する。

【方法】

調査対象者 推し活をしている大学生188名(男性55名、女性81名、その他2名)、平均年齢19.51±1.17歳であった。

実施時期・場所 2024年10~12月にかけて関東圏内の大学の授業で募集をし、授業後Googleフォームにて実施した。

質問項目 推し活については、ファン行動に関する先行研究(例えば、小城,2004; 向居ら,2016)で使用された質問項目などを参考に41項目を作成した。選択肢は、「いつもしている」(4点)から「まったくしていない」(1点)の4件法であった。また、推しの対象については、13種類(Fig.の□の12種類と「それ以外」)の中から最も推している対象を選択する単一回答法による質問項目を作成した。

手続き 調査対象者に承諾を得た上で、Googleフォームで作成した質問紙に回答を求めた。

【結果と考察】

推し行動の構造 推し活に関する41項目について、平均と標準偏差を算出したところ、天井効果や床効果がある項目はなかったため探索的因子分析(最尤法・Promax回転)をおこなったところ、因子負荷量の低い項目があった。それらを除いて再度探索的因子分析をおこなったところ、解釈可能な4因子が抽出された(累積寄与率57.39%)。

因子1は項目「推しの写真や動画を観る」など写真・動画の視聴、メディア情報のチェック、習慣的な思考など、見る・知る・考えるという生活に溶け込む内容となっていることから「日常的接触行動」、因子2は項目「推しのグッズをコレクションにする」などモノを通じた推しとの結びつきや物理的な推しの取り込みを求める内容となっていることから「アイテム所有行動」、因子3は項目「推しの言動を真似たり、取り入れたりする」など推しの言動・外見を取り入れ、その世界に没入する内容となっていることから「同一化・模倣行動」、因子4は項目「知人や友人を推しのライブやコンサートに誘う」など実際にコンサートやライブ、イベントに参加する内容となっていることから「現場参加行動」と解釈できる。

推し行動と対象との関連 因子分析で得られた4因子それぞれの下位尺度得点と推しの対象との関連を検討するため、各下位尺度得点の平均と標準偏差を算出し、平均+0.5標準偏差以上を高群、平均+0.5標準偏差未満~平均-0.5標準偏差以上を中群、平均-0.5標準偏差未満を低群としたうえで、推

しの対象12種類とのクロス集計にもとづいて、多重コレスポネンデンス分析をおこなった(Fig.)。その結果、寄与率が次元1で48.22%、次元2で30.91%であり、累積寄与率70%以上であったことから、2次元プロットによって因子と推しの対象との構造的関係を十分に可視化できると判断した。

次元1は、どの因子も得点が高いほど高群が、低いほど低群が、そしてその中間部に中群が布置していることから、推しへの関与度の軸と解釈できる。一方、次元2は、得点が高いほど「ドラマ・舞台」や「アニメ」「ボーカロイド」など架空性が高い推しの対象が布置であるのに対し、得点が低いほど「コミック」や「スポーツ」「お笑い」など直接的な体験や娯楽性の高い推しの対象が布置していることから、バーチャル体験的リアルの軸と解釈できる。これらを踏まえると、「ボーカロイド」「アイドル」「ノベル」「ドラマ舞台」は「接触高」「同一化高」「所有高」などと近いことから没入感が強く創作/フィクション的要素への共感が高い推し活、「K-POP」「スポーツ」は「現場中」「所有中」に近いことから現実的な活動とメディア消費がバランスした推し活、「お笑い」「ゲーム」「コミック」は「接触中」「同一化中」「所有低」などと近いことから日常娯楽的な推しで、強い没入はせずに楽しむ推し活と解釈できるだろう。

推し活は、その背景に心理的側面がある。本研究では行動的側面のみに焦点をあてて分析したが、今後は、菅野・山村(2024)がおこなった推し心理との関連も含めて検討したい。

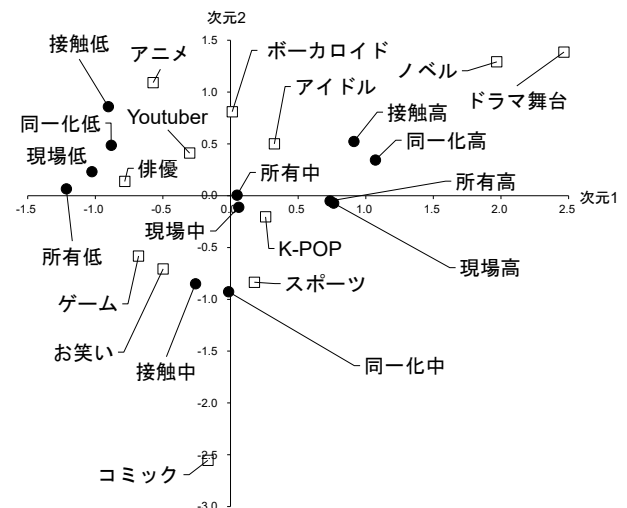


Fig. 多重コレスポネンデンス分析の結果

【主要引用文献】

菅野智子・山村豊(2024)「推し」の心理構造に関する探索的研究. 日本心理学会第88回大会.

(やまむらゆたか・すがのともこ・おおもりてつじ・たみやけん)

推し活の心理的側面と行動的側面の関連について

ークラスター分析とコレスポネンデンス分析による検討ー

○菅野智子¹ 大森哲至² 田宮憲² 山村豊³

(¹立正大学 ²帝京大学 ³桜美林大学)

キーワード：推し活 推し心理 推し行動

【問題と目的】

問題 推し活とは、強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。ファンに関する先行研究（例えば、小城,2004; 向居ら,2016）がファン心理とファン行動を区分するように、推し活についても心理的側面（推し心理）と行動的側面（推し行動）に分けて検討する必要がある。菅野・山村(2024)は推し心理について、山村・菅野ら(2025)は推し行動を検討したが、両者の関連については検討していない。

目的 本研究では、菅野・山村(2024)と山村・菅野ら(2025)にもとづいて、推し心理と推し行動の関連について検討した。

【方法】

調査対象者 推し活をしている関東圏内の大学生 55 名（男性 24 名、女性 31 名）、平均年齢 18.56 ± 0.68 歳であった。

実施時期・場所 2024 年 10 月中旬に関東圏内の大学の授業で調査対象者を募集した。

質問項目 推し活の心理的側面については、菅野・山村 (2024) の 30 項目（選択肢は「とても当てはまる」(5 点) ～ 「まったく当てはまらない」(1 点) の 5 件法）を使用した。また、行動的側面については、山村・菅野ら (2025) の 17 項目（選択肢は「いつもしている」(4 点) から「まったくしていない」(1 点) の 4 件法）を使用した。

手続き 承諾を得られた調査対象者に対して、授業終了後に Google フォームで作成した質問紙に回答を求めた。

【結果と考察】

推し心理によるタイプ分け 菅野・山村 (2024) に基づいて算出した各因子（熱中、疑似恋愛、憧れ、情報収集（情報欲求）、同調の 5 因子）の下位尺度得点によって調査対象者の階層性クラスター分析を行った。その結果 3 クラスターに分類することが適切だと判断した。

各クラスターの下位尺度得点の平均と標準偏差を算出したところ (Fig.1)、クラスター1 は全般に得点が低く、低関与的であることから「ライトフォロアー型」、クラスター2 は中程度の関与でありながら同調が最も高いことから「仲間・同調型」、クラスター3 は熱中・憧れ・情報収集が高く同調が低いことから「没入・個人型」と解釈した。

推し心理と行動の関連 推し心理のタイプと推し行動との関連を検討するため、山村・菅野ら (2025) に基づき「推し活」各因子（日常的接触行動、アイテム所有行動、同一化模倣行動、現場参加行動）の下位尺度得点からそれぞれ平均と標準偏差を算出し、平均+0.5 標準偏差以上を高群、平均+0.5 標準偏差未満～平均-0.5 標準偏差以上を中群、平均-0.5 標準偏差未満を低群とした。これら 3 群と推し心理のタイプについてコレスポネンデンス分析をおこなったところ、次元 1 の寄与率が 99～82% で、強い一次元構造が示された (Fig.2)。

推し心理の各タイプにおける推し行動をみると、ライトフォロアー型は、過度な経済的な負担をかけずに推し活を楽しんでいる群といえる。アイテム購入も現場参加もその都度選んで行っているタイプであった。一方、没入・個人型は、アイテム購入や現場参加が多く、同一化模倣行動も高い熱心な推し活をしている群である。推し対象に心酔しており、多く

の時間とお金を投入しているタイプである。そして、仲間・同調型は情報収集(情報欲求)が多いものの、アイテム購入や現場参加が少ない、時間的経済的負担が少ないような活動をしている群である。仲間とワイワイ推しを愛でることに重点を置いているタイプであった。これらのことから、推し心理と推し行動は一定の対応関係があり、推し心理のタイプによって推し行動が影響を受けることが示唆された。

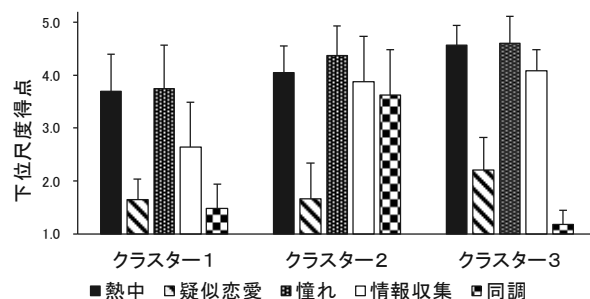


Fig.1 各クラスターの「推し心理」平均下位尺度得点

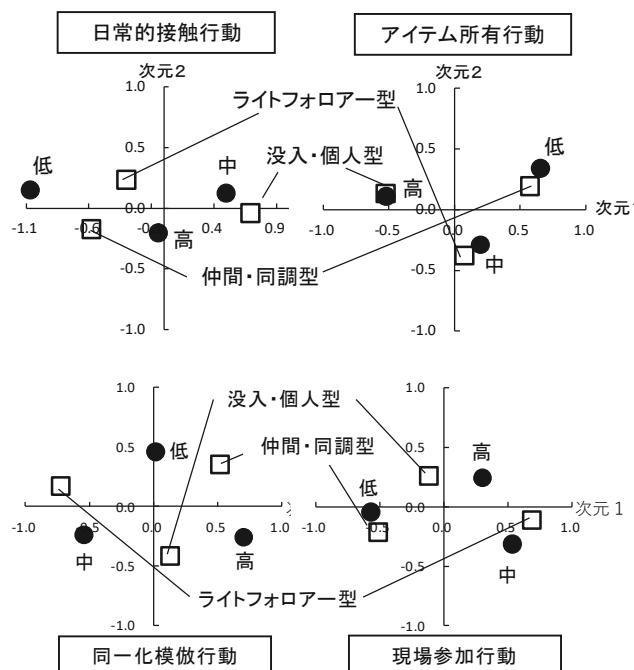


Fig.2 コレスポネンデンス分析の結果

【主要引用文献】

- 菅野智子・山村豊 (2024) 「推し」の心理構造に関する探索的研究. 日本心理学会第 88 回大会.
- 山村豊・菅野智子・大森哲至・田宮憲 (2025) 推し活の行動的側面の構造と推しの対象の関連について. 日本応用心理学会第 91 回大会.
- (すがのともこ・おおもりてつじ・たみやけん・やまむらゆたか)

あおり運転を誘発する運転行動の要因の検討

—STAXI を用いた怒り表出傾向との関連—

○今井靖雄¹ 小島治幸²

(¹ 金沢大学大学院人間社会環境研究科 ² 金沢大学人文学系)

キーワード：あおり運転・攻撃的行動・怒り感情

【目的】

近年、あおり運転は報告数が増加していることから、交通分野における重大な課題として注目されている。あおり運転によって、あおる側とあおられる側の両者とも危険な運転になっているだけでなく、当事者以外の交通参加者を事故に巻き込む可能性もあることから、その危険性が指摘されている。

あおり運転減少のため、これまではあおり運転を行う運転者の心理的な発生メカニズムや心理特性が検討されてきた。例えば、あおり運転に関する研究論文をレビューした中井(2021)は、運転中の他車とのコミュニケーション不足や他車の挑発的な運転行動が、運転者に強い怒りを引き起こし、結果として攻撃的な運転行動へと発展するプロセスが分析されている。さらにこの論文では、運転者の情動制御能力の低さという個人特性が、あおり運転を実施する重要な要因となりえると指摘している。

過去の判例や報告事例をレビューした川本(2017)は、他車の行動を不快に感じるのが、あおり運転のきっかけとなっていることや、あおり運転行動が単なる報復的な反応ではなく、“他の運転者に自らの行動を見直させる”という教育的観点があると示唆している。以上のように、あおり運転の研究は、あおり運転を行う運転者が対象とされてきた。

しかし、あおり運転は他車の行動によって誘発されていることが示唆されており、“思い知らせる”といった行動があおり運転になっている可能性がある。それに対して、全国の運転者 2,230 人を対象にチューリッヒ保険会社が行ったオンライン調査(2024 年 6 月実施)によると、あおられた 76.3%の運転者があおられた理由について“思い当たらない”と回答しており、あおられる側は無自覚に怒り感情を生起させる行動を行っていることが推測できる。このことから、あおり運転の減少のためには、あおり運転を誘発する運転行動を明らかにし、その行動を減少させるアプローチを取ることが有効と考えられた。

本研究では、“あおり運転”という運転場面における怒り感情の要因に注目している。怒りの要因は運転場面に特有ではなく、日常場面で感じる一般的な怒りの要因と共通する部分があることが指摘されている。たとえば藤井(2014)では、運転中に運転者が怒りを感じる状況を検討しており、“運転マナー”といった因子を抽出している。これらは日常場面の“他者への配慮がないことへの怒り”の因子と対応させて考えることができる。つまり、怒りを引き起こす要因は、場面が異なっても、心理的背景が共通する可能性があるといえる。本研究では、運転場面で使われてきた怒り誘発刺激だけでなく、幅広い怒り誘発刺激を作成するために、日常場面の怒りを扱った研究も参考にすることとした。

【方法】

“あおり運転を誘発する運転行動”の質問項目の作成

あおり運転を生起させる他車の行動を明らかにするため、以下の二段階の手続きを踏んで、「あおり運転を誘発する他車の行動」尺度を作成する。

場面を運転場面に限定せず、国内外の怒りと攻撃的行動に関する先行研究を精査する。それらの先行研究で示された怒りを生起させる因子を収集する。例えば、不公平に関する因

子や侮辱に関する因子などがあつた。このフェーズにおいて、日常場面では注目されにくいものの、運転場面では影響を及ぼすと考えられる”しつこい行動”と”突発的な行動”の因子を加えることとした。

次に、有識者および運転頻度の高い大学生とグループディスカッションを行いながら、先行研究から得られた各因子を基に、運転場面において怒りを生起させる具体的な行動をあげていく。例えば、侮辱に関する因子においては、「追い越しの際、こちらをみてにやにやしていた。」といった行動があげられた。

以上の手続きを経て、怒り感情を生起させる運転行動を 100 項目程度作成する。具体的な運転行動内容には、車間距離の極端な接近、ウインカーを使用しない車線変更、速度超過、長時間のクラクション使用、急な割り込み、追越し時の無理な加速などが含まれる。

怒り傾向の測定

参加者の個人差を評価するために、State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI ; Spielberger, 1999) 日本語版(44 項目)を用いる。尺度は、状態怒り(State Anger)、特性怒り(Trait Anger)、怒りの表出(Anger-Out, Anger-In)、および怒りの制御(Anger-Control)に関する下位尺度が含まれていた。

手続き

実験参加者は“あおり運転を誘発する運転行動”質問紙に回答させる。これらの質問項目に対して、実験参加者は「あなたがこれらの運転行動を見た時、この運転者はあおられると感じるか」の質問に 0(まったくおもしろくない)から 5(まったくそう思う)の 6 件法で回答させる。

続いて、STAXI を実施する。質問に対して、あてはまった程度を 1(まったくあてはまらない)から 4(非常によくあてはまる)の 4 件法で回答させる。

分析手法

”他車の行動に対する評価”のデータに因子分析を行い、因子得点を算出する。STAXI スコアを説明変数、得られた因子得点を目的変数とした重回帰分析またはおよび相関分析を用いて、怒りの種類や表出パターンの違いが他車の行動に対して不快感を感じる程度に影響を及ぼしているか検討する。

【利益相反】利益相反はありません。

【引用文献】

藤井義久(2014). ドライバーの怒り感情とその対処行動に関する研究. (Doctoral dissertation, iwate University).

川本哲郎(2019). 交通犯罪としての「あおり運転」の抑止に向けて. (Doctoral dissertation, Doshisha University).

中井宏(2021). あおり運転に関する研究の概観と抑止策の提案. 交通科学, 52(1), 3-12.

チューリッヒ保険会社(2024). あおり運転実態調査, <http://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000115.000042390.html> (最終アクセス 2025.6.13)

(いまい やすお・こじま はるゆき)

チーム・パラドックス・マインドセット尺度作成の試み

ーパラドキシカル・リーダー行動の影響を中心にー

○新保 智之¹⁾ 竹内 規彦²⁾

(¹⁾ 早稲田大学大学院商学研究科 (²⁾ 早稲田大学商学大学院)

キーワード：パラドキシカル・リーダー行動、パラドックス・マインドセット、リーダー・メンバー交換関係

【目的】 製造業では組織横断的に編成されるクロス・ファンクショナル・チーム (cross-functional team: 以下、CFT) の導入事例が増えている。CFT は各組織から必要に応じて召集され、役割の終了と共に解散される時限的なチームである。CFT は部署の壁を越えて全社的な課題解決を推進できる点がメリットである。一方、CFT で取り扱う問題・課題が、自部署の利害に反することもあり、それぞれの部署が集団浅慮に陥る可能性がある。従って、CFT で成果を出すためには、部署間の異なる利害関係がある状況、つまりパラドキシカルな(対立・矛盾するが相互に関連している) 状況をうまくマネジメントすることができるリーダーシップが必要不可欠である。

近年、パラドキシカル要素を同時に追求するリーダーシップとして、パラドキシカル・リーダー行動(paradoxical leader behavior: 以下 PLB)が注目されている。PLB とは、「一見矛盾しているように見えるが相互に関連し、矛盾する要求を同時かつ長期的に満たすリーダーの行動である」 (Zhang et al., 2015, p. 539)。Yang et al (2023) は、PLB がメンバー個人のパラドックス・マインドセット(individual-level Paradox Mindset: 以下、I-PM)を媒介して創造的逸脱に正の影響を与えると報告している。I-PM とは、「矛盾する要素間のテンションを受け入れ、活力を得る程度」 (Miron-Spektor et al., 2018, p. 27)である。一方、これまでの先行研究はリーダーとメンバーの 1 対 1 の関係性を前提とした個人ないしは 2 者間レベルでの研究がほとんどである。CFT をはじめとするチームレベルにおいては、個人のマインドセットに加えて、チーム・パラドックス・マインドセット (team-level PM: 以下、T-PM)、すなわち「所属するチームが緊張状態を受け入れ、緊張によって活力を得ることができるとメンバー個人が感じている程度」が重要な役割を果たすと考えられる。

そこで、本研究では(1)T-PM 概念及び測定尺度の提起、(2)PLB が I-PM に与える効果の CFT における追試、及び(3)PLB が T-PM に与える効果の検証を目的とする。(2)に関しては、社会的学習理論(Bandura, 1977; Neubert et al., 2013; Weiss, 1977, 1978)に基づき、リーダー・メンバー交換関係(leader-member exchange: 以下、LMX)が、PLB と I-PM との正の関係を正の方向に調整 (moderate) すると考えられる。LMX は、リーダーとメンバーの関係の質を表す (Graen & Uhl-Bien, 1995)。また、(3)の PLB が T-PM に影響を与えると仮説を立てた理由として、①Zhang et al. (2015) は、PLB が仕事の結果に影響を与える経路として、チーム環境を構造化すると同時に自律的な仕事ができる雰囲気を作り出すことを指摘している。CFT のリーダーがこのような職場環境づくりを行う過程で、メンバーがパラドックスな状況を肯定的に受け止め、その状況に適応するような態度や言動が増えることが想定される。ついで、②そのような周囲のメンバーの態度や言動を見聞きすることで、自身が所属する CFT は、緊張状態を受け入れ、緊張によって活力を得ることができるチームであるという知覚に至ると考えられる。以上の議論より、本研究では図 1 の分析枠組みを設定した。

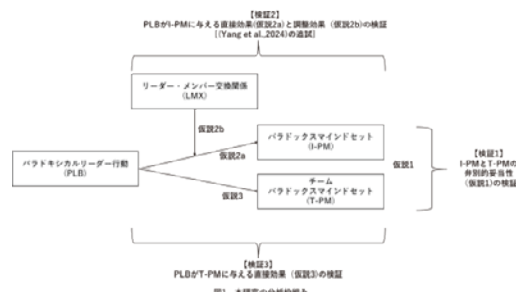


図1 本研究の分析枠組み

【方法】 (1) 調査対象：民間企業の CFT に従事する正規従業員を対象とした質問紙調査を実施した。オンライン調査を利用し、以下の 4 条件を満たすサンプルを収集した。[条件 1]職位が一般クラスから次長クラス[条件 2]従業員総数が 1,000 名以上の製造業に所属[条件 3]CFT に現在かかわっている、あるいはここ 1 年でかかわった経験があり、かつチームメンバー[条件 4]社内の 2 部署以上からメンバーを招集し、かつチームメンバー数が 4 名以上。結果、303 名の回答を得た。(2) 測定尺度：PLB Zhang et al. (2015) によって開発された 22 項目の尺度を使用した。確認的二次因子分析をもとに 5 つの下位次元全体のスコアを平均値化し、PLB の単一尺度を設定した。(α = .95) I-PM/T-PM I-PM の測定には、Miron-Spektor et al. (2018) によって開発された 9 項目を使用した。また、T-PM の測定には、上記 I-PM の尺度を参考に筆者が、I-PM 尺度の主語である「私は」を「私のチームは」とするなどの修正し作成した。LMX Jung & Takeuchi (2016) で使用した LMX-7 (Graen & Uhl-Bien, 1995) の 7 項目の日本語版尺度を使用した(α = .89)。統制変数 メンバーの性別、年代、最終学歴、職位、勤続年数、所属部署に加え、CFT のメンバー数、会社規模、リーダーの性別及び年代を設定した。

【結果と考察】 最初に、I-PM と T-PM の弁別性を検証するために確認的因子分析を実施した結果、I-PM の 9 項目中、1 項目の因子負荷量が低いことが判明した。そのため、I-PM の 1 項目及び T-PM の該当する項目の 2 項目を削除して再分析した。結果、想定された 2 因子モデルが 1 因子モデルよりも適合度が有意に高く、I-PM と T-PM の弁別性が確認された。I-PM、T-PM の信頼係数も良好であり、仮説 1 は支持された。次に、階層的重回帰分析の結果から、PLB は I-PM に正の影響を与えていたため、仮説 2a は支持された。一方、LMX が PLB と I-PM の正の関係を正の方向に調整する効果は有意でなく、仮説 2b は不支持であった。LMX の調整効果を確認した Yang et al. (2023) の先行研究と異なる結果を示した背景には、長期的な信頼関係を必ずしも前提としない CFT のような時限的なリーダーとメンバーの関係性では PLB が I-PM に与える直接効果が増幅しなかったと推察される。第 2 に PLB が T-PM に正の影響を与え、仮説 3 は支持された。この結果は PLB がリーダーとメンバーの 2 者間の関係性における個人のマインドセット醸成を超え、チーム全体でのマインドセット醸成・共有に効果がある可能性を示すものであり、既存の PLB 研究に部分的ではあるが付加価値を提供できた。(しんぼ と もゆき・たけうち のりひこ)

フロー体験が導く主観的キャリア成功

ーポジティブ感情と外部参照型目標難易度の媒介メカニズム

○劉 徳嘯¹⁾ 竹内 規彦²⁾

(¹⁾デル・テクノロジー株式会社 ²⁾早稲田大学商学大学院)

キーワード：フロー体験、主観的キャリア成功、職務特性

【研究目的】 キャリアは、個人にとって単なる職業の選択や働く手段にとどまらず、目標の達成、自己成長、価値観の醸成、さらには社会的な地位の構築など、幅広い機能を果たす重要な概念である(e.g., Greenhaus et al., 1995;

Hommelhoff et al., Li et al., 2023; 2020)。このような多面的な機能を持つキャリアの成功指標として、伝統的なキャリア研究で重視されてきた昇進回数や報酬水準などの客観的な指標では十分に捉えることができず、新たに「主観的キャリア成功」概念が提唱され注目を集めている(Ng & Feldman, 2014; Spurk et al., 2019)。

主観的キャリア成功は、個人が自身のキャリアに対して抱く満足感や幸福感であり、仕事上での成果や達成感、成就感といったポジティブな体験が積み重なった結果である(Greenhaus & Callanan, 2013)。その根底にはポジティブな心理状態との密接な繋がりと指摘されている (Judge et al. 1995)。このことは、主観的キャリア成功を導くための心理的なメカニズムの解明に「ポジティブ心理学」が応用できる可能性を示唆するものである。特に、ポジティブ心理学におけるフロー理論では、「フロー体験」(課題の挑戦度と個人のスキルレベルの最適な均衡状態で生じる「没入感」などの心理状態)が自己肯定感や心理的レジリエンスと正の相関を持つことが確認されており (Schmidt, 2003)、キャリアにおける内的な成功感の向上にも寄与することが推察される。

また、フロー体験は楽しさや充実感とも関連していることから (Asakawa, 2004)、その影響を評価する際にはポジティブ感情の働きにも注目する必要がある。一方で、ネガティブ感情 (たとえば、怒り・恐れ・嫌悪・悲しみなど)は、ポジティブ感情とは対極の位置づけで語られてきたが (Ekman, 1992)、キャリアの文脈においてもこれらがどのように影響を及ぼすかを明らかにすることは、主観的キャリア成功を包括的に理解するうえで意味のある試みであるといえる。

さらに、外発的な基準に基づく外部参照型の高難易度な目標が、個人による自己設定目標 (personal goals) に対して肯定的な影響を与えることが示されており (Lee & Bobko, 1992)、このことから、外発的動機づけが喚起されることで、キャリアにおける動機の活性化や意欲の向上に結びつく可能性があると考えられる。

その他、職務特性理論においては、業務内容や構造、業務の進行方法が従業員のモチベーションやパフォーマンス、満足感、健康などに与える影響が長年にわたり研究されてきた。特に、自律性の高い職務は、ストレスや不安、バーンアウトの軽減に寄与するとともに、職務満足感や組織へのコミット

メント、仕事への意欲向上に正の効果をもたらすことが知られている (Humphrey et al., 2007)。したがって、職務における自律性やフィードバックのあり方が、フロー体験の発生やその効果を調整する要因となる可能性がある。

以上の理論的背景を踏まえ、本研究では、現在就労中の日本人を対象に、フロー体験が主観的キャリア成功に及ぼす影響とその内的メカニズムを実証的に検討することを目的とする。図1は本研究で検証する仮説モデルである。

【方法】 調査対象は、日本国内に居住し就労している有職者である。企業に勤務する正規社員の他、今日多様化するキャリア形態を鑑み、派遣社員、契約社員、パート・アルバイト、個人事業主なども対象に含めた。調査は2024年10月に専門調査会社を通じてオンラインにて匿名性を確保し実施された。無作為抽出による機会サンプリングにより調査票が配信され、300名から有効回答を得た。

本研究の仮説の検証には以下の5つの尺度を用いた。フロー体験の頻度は The Flow Questionnaire (Asakawa, 2004) による7段階評価で測定した ($\alpha=.73$)。ポジティブ・ネガティブ感情は Positive and Negative Affect Schedule (Andrew et al., 1999) を使用し(それぞれ、 $\alpha=.77$ 、 $\alpha=.74$)、7段階評価で測定した。外部参照型目標難易度は Externally-referenced Goal Difficulty Perception (Kwan et al., 2013) を使用し、5段階・4項目で測定した ($\alpha=.90$)。主観的キャリア成功は Subjective Career Success Inventory (Shockley & Rosh, 2015)を用い、5段階で測定した ($\alpha=.96$)。職務特性は意思決定の Work Design Questionnaire (Morgeson & Humphrey, 2006)に含まれる意思決定の自主性、作業方法の自律性、ジョブからのフィードバック、他者からのフィードバックの4下位尺度で測定した (それぞれ、 $\alpha=.89$ 、 $\alpha=.89$ 、 $\alpha=.88$)。

【結果と考察】 本研究では、階層的重回帰分析を用いて各仮説の検証を行った。まず、フロー体験の頻度が主観的キャリア成功に正の影響を与えることが示され、仮説1が支持された。さらに、フロー体験はポジティブ感情および外部参照型目標難易度にも有意な正の影響を与え、仮説2aと仮説3が支持されたが、ネガティブ感情への影響を示す仮説2bは支持されなかった。続いて、ポジティブ感情が外部参照型目標難易度および主観的キャリア成功に影響する仮説4a、4bは支持された。一方、ネガティブ感情関連の仮説4c、4dは不支持となった。また、外部参照型目標難易度が主観的キャリア成功に与える影響も確認され、仮説5は支持された。さらに、職務特性による調整効果の分析では、意思決定の自主性が高い職務では、フロー体験の頻度と外部参照型目標難易度の関係が強まることが確認された。また、作業方法の自律性が高い場合には、ポジティブ感情および外部参照型目標難易度との正の関係が強まることがわかった。なお、他者からのフィードバックが高い職務では、ポジティブ感情との正の関係が強まることが示された。結論として、フロー体験が主観的キャリア成功に直接・間接的に肯定的な影響を与えることが明らかとなった。今後、従業員のキャリア成功感の維持・向上を説明する枠組みとしてフロー理論の更なる応用が期待される。(りゅう とくしょう・たけうち のりひこ)

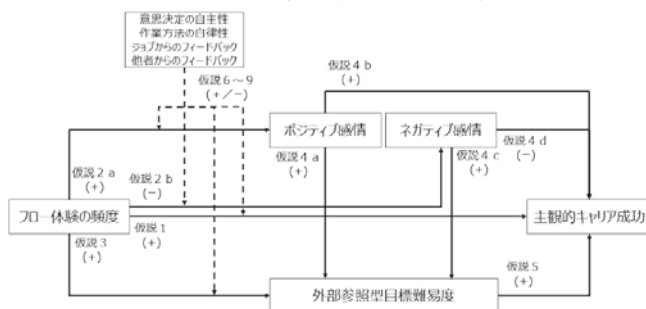


図1 本研究の分析枠組み

大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性の研究

○井上雄貴¹ 新里知佳野¹ 古澤伸晃¹ 百田尚史¹ 八木沢誠¹ 軽部幸浩² 藤田主一¹

(¹ 日本体育大学, ² 東京富士大学)

キーワード：大学男子剣道 心理的特性 身体的特性

【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた(新里他, 2023, 2024 等)。身体的側面について、例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている(椿他, 2009)。

そこで、本研究は、大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性について 2・3 年生と 1 年生で比較検討し、その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】

1. 対象者：都内 A 大学剣道部男子部員 41 名(平均 19.8 歳)。このうち特別練習生(2・3 年生)は 22 名、非特別練習生(1 年生)は 19 名であった。

2. 指標：心理的特性を測定するために YG 性格検査, TAIS (スポーツ特性一状態不安診断検査), DIPCA (心理的競技能力診断検査), 新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた (Table1)。

Table 1 測定指標

① 反応時間(光刺激, 全身反応; 踏み込み)	② 反応時間(光刺激, 部分反応; キー押し)
③ 反応時間(音刺激, 全身反応; 踏み込み)	④ 反応時間(音刺激, 部分反応; キー押し)
⑤ 動体視力(ランドルト環の判別)	⑥ タッピング(心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し)

3. 手続き：2025 (令和 7) 年 2 月 3 日, 2 月 4 日に、男子剣道部員に各種心理検査ならびに反応時間 (RT) の測定を実施した。RT は、全身反応測定器 IV 型 (竹井機器工業; T.K.K.1264p) を使用し、音 (1000Hz, 60dB) と光 (赤色) を要反応刺激とし、実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応 (踏み込み) と部分反応 (キー押し) であった。全身反応の測定時は、剣道着・袴, 剣道具 (胴・垂) を着用し、実際に竹刀を持たせ、より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は、対象者から 5m 離れたコンピューターのモニター上に左から右にランドルト環 (視角 1°) を移動させ、切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度、利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

本研究は、A 大学倫理審査委員会の承認 (024-H006) を受け、男子部員に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

Table 2 は、光刺激の全身・部分反応時間、音刺激の全身・部分反応時間の標準得点の平均値と標準偏差、タッピング(心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し) の打叩回数の平均値と標準偏差を示したものである。反応時間に関して 2・3 年生は、1 年生よりも反応時間が速かった。 t 検定をおこなったところ、全身反応 (踏み込み) に限り有意差は認められなかった。部分反応 (キー押し) に関しては、光・音刺

激ともに 2・3 年生は、1 年生よりも反応時間が有意に速かった。 $(t=-3.412, df=39, p<.01)$

タッピングに関して、心地良さ、利き手 1 分間早押し、非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ、心地よさに関しては、2・3 年生は 1 年生よりもゆつくりと打叩していたことが明らかとなった。また、利き手 1 分間早押しと非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ、2・3 年生は 1 年生よりも打叩回数が少ないことが明らかとなった。タッピングの打叩回数の結果について、2・3 年生と 1 年生の間に t 検定をおこなったところ、利き手と非利き手の打叩回数に有意差は認められなかった。しかし、心地良い打叩回数に関しては、有意差が認められた。 $(t=-3.719, df=39, p<.01)$

Table 2 測定結果

	2・3 年生		1 年生	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
反応時間 (ms)				
全身反応 (光)	257.9	34.57	273.6	35.75
部分反応 (光)	183.0	16.93	202.0	18.83
全身反応 (音)	259.1	40.97	279.5	40.82
部分反応 (音)	174.3	16.84	203.0	24.96
タッピング (打叩数)				
心地良さ	97.7	36.30	143.5	41.14
利き手 1 分間	290.4	45.11	310.3	47.17
非利き手 1 分間	343.9	36.20	345.4	31.66

今回の発表に関しては、身体的特性に関して発表を行なうが、A 大学剣道部男子部員は、2・3 年生と 1 年生の全身反応時間の差は僅かであった。しかし、部分反応に関しては 2・3 年生が 1 年生よりも早く、有意差も認められたことから、2・3 年生の方が 1 年生よりも「追い込み」(短距離を連続で早く打ち込む) 稽古を多く行なっていたことが速かった原因だと考えられる。一方でタッピングに関しては、2・3 年生は 1 年生よりも 3 項目とも打叩回数が少なかったことは、2・3 年生の方が心理的余裕を意図して持つようにしていたことが考えられる。光刺激の全身・部分反応時間、音刺激の全身・部分反応時間は、2・3 年生の方が 1 年生よりも若干ではあるものの、その反応時間が速かったことが A 大学剣道部に入部後の身体的特性の変化に繋がっていたのではないかと考えられる。

【参考文献】

- 新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2023). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性一特に反応時間について一. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集, 70.
- 新里知佳野・古澤伸晃・井上雄貴・百田尚史・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2024). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性の研究. 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 2.
- 椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明 (2009). 大学トップレベル剣道選手の全身選択反応時間, 移動時間, 動作時間の特徴. 武道学研究, 40(2), 35-41.
- (いのうえ ゆうき・しんざと ちかの・ふるさわ のぶあき・他)

大学剣道部員の心理的特性と身体的特性の研究

— 男子部員と女子部員の比較 —

○新里知佳野¹ 古澤伸晃¹ 井上雄貴¹ 百田尚史¹ 八木沢誠¹ 軽部幸浩² 藤田主一¹
(¹日本体育大学 ²東京富士大学)

キーワード：大学剣道部員 身体的特性 心理的特性

【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた（新里他，2023, 2024 等）。身体的側面について、例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている（椿他，2009）。そこで、本研究は、大学剣道部員の心理的特性と身体的特性について男子部員と女子部員で比較検討し、その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】

1. 対象者：都内 A 大学剣道部男子部員 41 名、女子部員 24 名で、当時の学年は 1～3 年生であった。

2. 指標：心理的特性を測定するために YG 性格検査、TAIS（スポーツ特性－状態不安診断検査）、DIPCA（心理的競技能力診断検査）、新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた（Table1）。

Table 1 測定指標

① 反応時間（光刺激，全身反応；踏み込み）	② 反応時間（光刺激，部分反応；キー押し）
③ 反応時間（音刺激，全身反応；踏み込み）	④ 反応時間（音刺激，部分反応；キー押し）
⑤ 動体視力（ランドルト環の判別）	⑥ タッピング（心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し）

3. 手続き：2025（令和 7）年 2 月 3 日・4 日に、剣道部員（男女）に各種心理検査ならびに反応時間（RT）の測定を実施した。RT は、全身反応測定器 IV 型（竹井機器工業；T.K.K.1264p）を使用し、音（1000Hz，60dB）と光（赤色）を要反応刺激とし、実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応（踏み込み）と部分反応（キー押し）であった。全身反応の測定時は、剣道着・袴、剣道具（胴・垂）を着用し、実際に竹刀を持たせ、より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は、対象者から 5m 離れたコンピューターの

モニター上に左から右にランドルト環（視角 1°）を移動させ、切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度、利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

本研究は、A 大学倫理審査委員会の承認（024-H006）を受け、剣道部員（男女）に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

Table2 の結果を t 検定したところ以下の事実が判明した。

①男子部員と女子部員の「光刺激の踏み込み」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間より有意に速かった（ $t=2.795$, $df=63$, $p<.01$ ）。

②男子部員と女子部員の「光刺激のキー押し」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間よりも速かったものの検定の結果有意ではなかった（ $t=1.955$, $df=63$, ns ）。

③男子部員と女子部員の「音刺激の踏み込み」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間より有意に速かった（ $t=2.448$, $df=63$, $p<.05$ ）。

④男子部員と女子部員の「音刺激のキー押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった（ $t=0.996$, $df=63$, ns ）。

⑤男子部員と女子部員の「動体視力」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった。（ $t=0.926$, $df=63$, ns ）。

⑥男子部員と女子部員の「タッピングの心地良さ」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった（ $t=0.858$, $df=63$, ns ）。

⑦男子部員と女子部員の「タッピングの利き手 1 分間早押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった。（ $t=1.164$, $df=63$, ns ）。

⑧男子部員と女子部員の「タッピングの非利き手 1 分間早押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった（ $t=0.207$, $df=63$, ns ）。

Table 2 男女部員の測定結果

	①光刺激の 踏み込み	②光刺激の キー押し	③音刺激の 踏み込み	④音刺激の キー押し	⑤動体視力	⑥タッピングの 心地良さ	⑦タッピングの利き手 1分間早押し	⑧タッピングの非利き手 1分間早押し
男子	265.2 (35.58)	191.9 (20.06)	268.57 (41.68)	187.601 (25.27)	61.1 (36.61)	118.73 (45.5)	299.63 (47.71)	344.58 (34.59)
女子	241.2 (29.27)	182.4 (16.22)	244.42 (31.79)	181.905 (15.64)	52.1 (40.32)	109.333 (37.03)	283.625 (62.27)	346.66 (45.78)

①～④の単位は ms。⑤の単位は %。⑥～⑧の単位は打叩数。（ ）内は SD。

【参考文献】

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一
（2023）. 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性 —
特に反応時間について—. 日本応用心理学会第 89 回大会
発表論文集，70.
新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・井上雄貴・百田尚史・軽
部幸浩・藤田主一（2024）. 大学剣道女子選手の心理的特性

と身体的特性の研究. 日本応用心理学会第 90 回大会発表
論文集，2.

椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明（2009）. 大学トップレ
ベル剣道選手の全身選択反応時間、移動時間、動作時間の
特徴. 武道学研究，40(2)，35-41.
（しんざと ちかの・ふるさわ のぶあき・いのうえ ゆうき他）

大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（1）

－ 因子分析の検討 －

○岡崎祐史¹ 大藤潤也² 大関貴久³ 森脇保彦⁴ 軽部幸浩⁵ 藤田主一⁶

(¹武庫川女子大学 ²至誠館大学 ³東日本国際大学 ⁴国士館大学 ⁵東京富士大学 ⁶日本体育大学)

キーワード：柔道の魅力、大学柔道競技者、因子分析

【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討することを目的とする。

【方法】

（1）調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

（2）調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

（3）事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn（1954）によるTwenty Statements Test（TST）を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

（4）本調査：事前調査で得られた1,370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

（5）手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

（6）本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

調査結果を因子分析（プロマックス回転）したところ、柔道に対するイメージは3因子で構成されていたことが明らかになった（Table.1）。因子Ⅰは、28項目（ $\alpha=0.974$ ）から構成され「柔道の精神」と命名し、柔道の哲学や価値観、自己修養に関する側面が強く反映された因子であると解釈できる。因子Ⅱは28項目（ $\alpha=0.972$ ）から構成され「体躯」と名付け、柔道が持つ運動的特性やフィジカルな鍛錬に対する認識を反映しているものと示唆された。因子Ⅲは、10項目（ $\alpha=0.933$ ）から構成され「礼儀」と命名し、柔道における礼に始まり礼に終わるという理念を反映しており、柔道の文化的・道徳的

側面に対する肯定的な認識が存在していることが示された。

以上の結果より、大学柔道競技者が捉える柔道の魅力は、精神性・身体性・道徳性といった多面的な要素で構成されていることが明らかとなった。

Table.1 因子分析の結果

	質問項目	Factor1	Factor2	Factor3
柔道の精神	礼に始まり礼に終わることで相手を敬う心を育むからである。	0.94074	0.0085	-0.2956
	相手への敬意である。	0.89183	-0.07851	-0.07496
	精神の鍛錬である。	0.83798	0.07905	-0.16031
	礼に始まり礼に終わることである。	0.8296	-0.09412	-0.00357
	自他共栄の精神を感じたときである。	0.79026	0.07294	0.02037
	相手への尊敬と感謝である。	0.78831	-0.05765	0.09488
	精神力の向上である。	0.78791	-0.00247	0.10903
	礼に始まり礼に終わる精神である。	0.768	-0.12044	0.15827
	嘉納治五郎の教えにある。	0.7643	-0.01296	-0.01509
	「柔よく剛を制す」の体現である。	0.75253	0.04973	0.07505
	団体戦のときの団結力である。	0.75216	0.14634	-0.01615
	自他共栄の精神にある。	0.72352	-0.07003	0.23075
	体が小さくても大きな人に勝つことである。	0.71635	0.04157	0.04227
	挨拶や礼儀作法を学び日常生活でも活かせるからである。	0.71564	-0.11375	0.28053
	相手を敬う心である。	0.71546	-0.10216	0.22512
	世代を超えたつながりである。	0.71126	0.06668	0.11849
	礼儀作法の美しさである。	0.69279	-0.00351	0.24089
	集中力と心の鍛錬である。	0.68079	0.13494	0.05144
	体格に関わらず活躍できることである。	0.65085	0.02992	0.1
	相手を尊敬することができることである。	0.64747	-0.08023	0.19749
	目標達成の喜びである。	0.64389	0.1767	0.05347
	自他共栄の精神を培った姿勢である。	0.64219	-0.17358	0.22436
	一本が決まったときである。	0.62211	0.08247	0.06842
	美しい礼の姿勢である。	0.61669	0.0789	0.2185
	精力善用・自他共栄の精神である。	0.61074	-0.11873	0.3804
	助け合いと支え合いである。	0.60731	0.25597	0.11601
	チームの団結力である。	0.58673	0.15395	0.14609
	日本の伝統文化への理解を深めることができることである。	0.56222	0.15449	0.12283
体躯	体幹の強さである。	-0.05722	0.85978	0.06393
	全身の筋力をバランスよく鍛えられることである。	-0.03577	0.83586	0.08098
	全身を使う運動で体力が向上することである。	-0.17796	0.81595	-0.22722
	体つきが変わることである。	-0.11108	0.81593	0.09993
	柔軟性の向上である。	-0.03743	0.80584	0.01685
	長い時間戦える持久力である。	0.15082	0.79875	-0.28572
	全身をバランスよく鍛えられることである。	0.23053	0.78882	-0.19191
	筋持久力の向上である。	-0.04645	0.78396	-0.00274
	全身を鍛えることである。	-0.04963	0.78105	0.15114
	基礎体力の向上である。	-0.22655	0.77423	-0.09699
	全身の筋力をバランスよく鍛えることである。	-0.15919	0.76275	0.16041
	筋肉量の増加である。	-0.15032	0.75893	0.17509
	怪我を乗り越える強さである。	-0.05391	0.75774	-0.20699
	健康的な身体づくりにつながることである。	-0.0933	0.75679	0.10207
	全身の筋力強化である。	-0.02035	0.75053	0.17211
	引き手の強さである。	-0.00515	0.74865	0.04185
	体力が向上することで怪我のリスクも減少することである。	-0.17082	0.74846	0.16788
	全身をバランスよく鍛えた体である。	-0.01031	0.70568	0.1289
	受身を通じた衝撃耐性である。	-0.13126	0.70323	0.255
	基礎体力がつくことである。	0.11136	0.70278	0.11736
	男女で団体戦に参加できることである。	-0.06042	0.69312	0.02235
	持久力の向上である。	0.25386	0.68153	-0.18281
	自分の体が技を施すのに最も良い位置と姿勢をとることである。	0.03955	0.6698	0.21934
	強靱な体力を得ることである。	0.02608	0.66974	0.27229
	筋肉質になることである。	0.07907	0.66925	-0.04391
	対人感覚である。	-0.03015	0.61684	0.354
	身体に対する自信である。	-0.06011	0.59521	0.25916
	背負い投である。	0.23484	0.59121	-0.23054
	相手を敬意を表すことができることである。	0.24032	-0.03003	0.67313
礼儀	礼儀の作法である。	0.20536	-0.02229	0.67258
	礼儀作法が身につくことである。	0.32688	-0.04704	0.66095
	精神力が身につくことである。	0.29816	0.04791	0.64165
	礼（座礼・立礼）をする姿である。	0.20984	0.13957	0.61986
	仲間と切磋琢磨できることである。	0.17651	0.17838	0.61179
	体の小さい者が体の大きい者を投げる姿である。	0.25587	0.16238	0.56852
	精神的成長である。	0.25739	0.16804	0.54595
	チームメイトができることである。	0.14239	0.16029	0.52322
	国際的な文化交流のツールである。	0.13509	0.24447	0.52018

【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移2004年～2024年（男女計）」

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. American Sociological Review, 19(1), 68-76.

佐藤吉高（2022）. 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～ お茶の水女子大学附属中学校研究紀要. 51, 223-238.

（おかざきゆうじ、おおふじじゅんや、おおぜきたかひさ、他）

大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（2）

— 男女間における魅力の差について —

○大藤潤也¹ 岡崎祐史² 大関貴久³ 森脇保彦⁴ 軽部幸浩⁵ 藤田主一⁶

(¹至誠館大学 ²武庫川女子大学 ³東日本国際大学 ⁴国士館大学 ⁵東京富士大学 ⁶日本体育大学)

キーワード：柔道の魅力、大学柔道競技者、男女の比較

【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討し、男女間における魅力の比較を検討し、知見を得ることとした。

【方法】

(1) 調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

(2) 調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

(3) 事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn (1954) による Twenty Statements Test (TST) を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

(4) 本調査：事前調査で得られた1370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

(5) 手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

(6) 本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

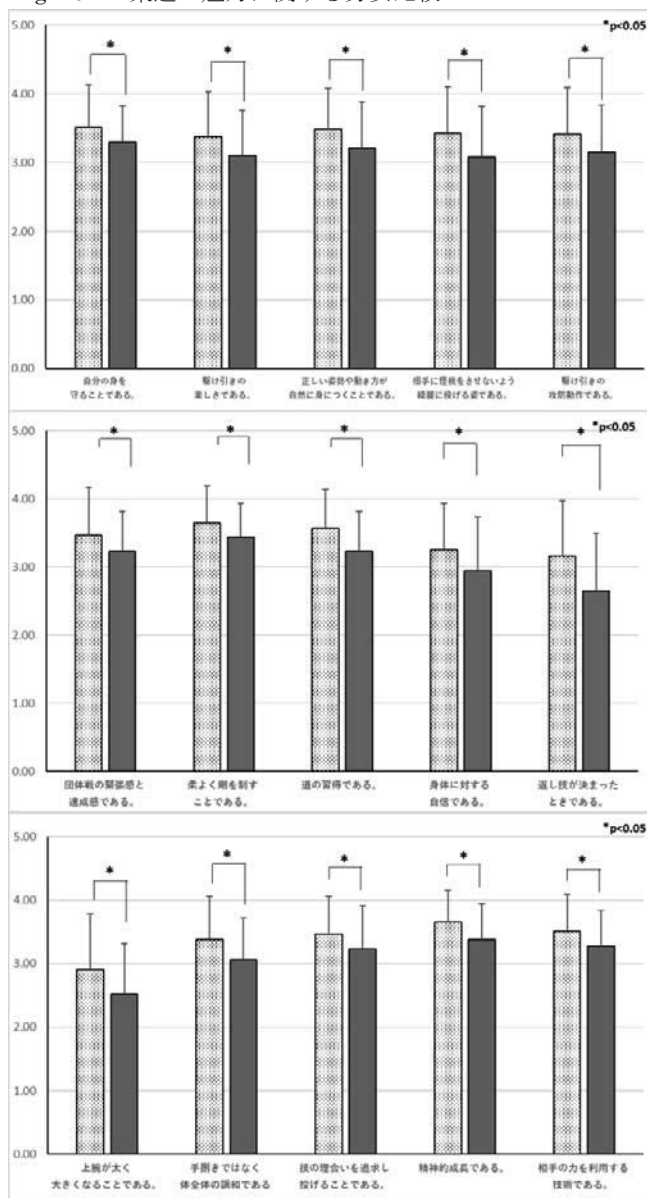
(7) 得られたデータは、IBM SPSS Statistics を用いて分析を行い、群間の平均値の差の検定には独立サンプル t 検定を用いることとした。

【結果と考察】

本研究では、柔道の魅力に関する138項目について男女間の認識差を検討した。その結果、138項目中15項目において独立サンプル t 検定により有意差 ($p < 0.05$) が認められ、いずれも男子学生の平均値が、女子学生の平均を上回る結果となった (Figure 1)。これらの結果は、柔道の魅力に対する男女の評価に部分的な差異が生じていると推察される。また、女子学生の評価も全体として高水準にあり、柔道が男女問わず一定の魅力を有する競技であることが垣間見えた。

今後は、性別のみならず、経験年数や競技レベルといった他の変数も加味し、柔道における魅力の多面的理解を深めていくことが求められるのではないかと考えられる。

Figure 1 柔道の魅力に関する男女比較



【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移 2004 年～2024 年（男女計）」

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. American Sociological Review, 19(1), 68-76.

佐藤吉高（2022）. 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～. お茶の水女子大学附属中学校研究紀要. 51, 223-238.

（おおふじじゅんや、おかざきゆうじ、おおぜきたかひさ他）

大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（3）

ー 共起ネットワークによる分析 ー

○大関貴久¹ 岡崎祐史² 大藤潤也³ 森脇保彦⁴ 軽部幸浩⁵ 藤田主一⁶

(¹東日本国際大学 ²武庫川女子大学 ³至誠館大学 ⁴国士館大学 ⁵東京富士大学 ⁶日本体育大学)

キーワード：大学柔道競技者、柔道の魅力、共起ネットワーク

【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討することを目的とする。

【方法】

（1）調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

（2）調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

（3）事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn（1954）によるTwenty Statements Test（TST）を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

（4）本調査：事前調査で得られた1,370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

（5）手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

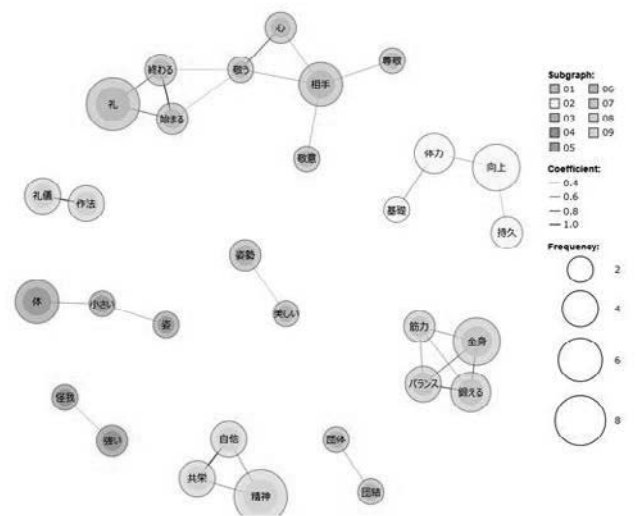
（6）本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【結果と考察】

回答されたデータを基に、因子分析を行ったところ66個の質問が抽出された。その抽出された質問項目に着目し、さらに共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析の結果、9個のサブグラフが抽出された（Figure 1）。1つ目

は「礼」「終わる」「始まる」「相手」「敬う」「心」「敬意」「尊敬」であった。2つ目は「向上」「体力」「持久」「基礎」であった。3つ目は「姿勢」「美しい」であった。4つ目は「強い」「怪我」であった。5つ目は「体」「小さい」「姿」であった。6つ目は「団体」「団結」であった。7つ目は「全身」「鍛える」「バランス」「筋力」であった。8つ目は「精神」「自他」「共栄」であった。9つ目は「礼儀」「作法」であった。

Figure 1 共起ネットワーク



これらの結果から、回答者たちは、柔道の魅力は「礼に始まり、礼に終わる」「相手を敬う心」「自他共栄の精神」という嘉納治五郎の教えに加えて、「礼儀作法」「体力向上」「全身の筋力をバランスよく鍛える」という日本古来の武道としての教えとスポーツとしての柔道というイメージを持っていることが明らかとなった。このことは、「柔道原理（自然体の理・柔の理・崩しの理）に基づいた攻防において、調和した体の使い方・動きを重視し体を護る日本古来の武道から、体力・筋力など強さが優先されるスポーツのイメージが顕著になったと考えられる。

【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移 2004年～2024年（男女計）」

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. American Sociological Review, 19(1), 68-76.

佐藤吉高（2022）. 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～. お茶の水女子大学附属中学校研究紀要. 51, 223-238.

（おおぜきたかひさ、おかざきゆうじ、おおふじじゅんや他）

大学生における剣道の寒稽古が心理的能力に及ぼす可能性

○百田尚史¹ 古澤伸晃¹ 新里知佳野¹ 井上雄貴¹ 八木沢誠¹ 軽部幸浩² 藤田主一¹

(¹日本体育大学 ²東京富士大学)

キーワード：大学生、剣道、寒稽古

【目的】

剣道は武道としての精神を受け継いでおり、寒稽古や暑中稽古といった環境条件が厳しい時に行う伝統的な修練方法があり、今でも多くの場で実践されている。

このような伝統的な修練方法について、星川・恵土(1987)は冬の早朝という過酷な条件で実施され、厳しい練習と寒さ、生活リズムの変化を克服し、精神面の向上を狙う武道独特の稽古法であると述べている。また小森(2020)は、寒気の厳しい時季に、一定期間継続して激しい稽古を行い、精神的鍛錬をかねて技能の向上をはかること、最も暑さが厳しい時季に一定期間継続して激しい稽古を行い、精神的鍛錬をかねて技能の向上をはかることであると述べている。

そこで、本研究では剣道の心理的側面を研究する一環として剣道の寒稽古に着目し、寒稽古期間中の初日・中日・最終日における心理的变化を明らかにし、これらの知見をもとに今後の剣道選手育成へ貢献することを目的とする。

【方法】

1. 対象者：日本体育大学剣道部員男子 46 名（3 年生・17 名、2 年生・12 名、1 年生・17 名）、女子 18 名（3 年生・4 名、2 年生・6 名、1 年生・8 名）合計 64 名であった。

2. 方法：事前事後アンケート、YG 性格検査、VAS 検査、剣道日誌を使用した。

3. 手続き：調査は 2025（令和 7）年 1 月 20 日～29 日の寒稽古期間に行い、1 月 18 日に事前アンケート、1 月 29 日に事後アンケート、寒稽古後に YG 性格検査と剣道日誌を実施した。事前アンケートでは、〔質問 1〕あなたは、今回の寒稽古に参加する目標（ゴール）は何ですか？〔質問 2〕あなたの寒稽古に対する抱負（期待）は何ですか？〔質問 3〕あなたは、今回の寒稽古をとおして、どんな自分になりたいですか？という 3 質問を用いた。事後アンケートでは〔質問 1〕今回の寒稽古の目標（ゴール）は達成できましたか？〔質問 2〕寒稽古に対する抱負（期待）は実現できましたか？〔質問 3〕今回の寒稽古で、なりたいた自分になりましたか？という 3 質問を用いた。以上の質問項目への回答を KHCoder を用いてテキストマイニングし、共起ネットワークを作成した。

本研究は、日本体育大学倫理審査委員会に「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書」を提出し、審査の結果、承認された（承認番号 024-H156）。なお、本研究の利益相反はない。

【結果と考察】

ここでは男子事前事後質問 1 の内容について述べる。Fig.1 事前質問（質問 1）では、6 つのサブグラフが抽出された。1 つ目は、精神・技術・体力を総合的に高める姿から『心身の強化』と命名した。2 つ目は、厳しい環境下における鍛錬意識が強く『自己鍛錬を目指す取り組み』と命名した。3 つ目は、自身の弱さを乗り越える姿勢が強く『心・技・体の向上』と命名した。4 つ目は、精神・技術・人間関係を重視した姿勢から『自己成長』と命名した。5 つ目は、自身の弱さと向き合う姿勢が強く『心身の成長と課題克服』と命名した。6 つ目は、基本動作や体力向上の目的が強く『個人の成長と目標』と命名した。

Fig.2 事後質問（質問 1）では、5 つのサブグラフが抽出された。1 つ目は、剣道面・生活面の成長から『心身の鍛錬と

自己成長』と命名した。2 つ目は、精神・体力の強化や生活リズムの改善から『精神・体力強化と目標達成』と命名した。

3 つ目は、精神・技術・生活の課題と継続的な取り組みから『課題意識と継続による成長』と命名した。4 つ目は、真摯な技術の習得と精神の鍛錬から『意識的な努力による技術・精神の成長』と命名した。5 つ目は、継続力・礼節・主体性の向上から『精神・体力の成長と自己改善』と命名した。

以上、事前調査では「強くなりたい」などの目標志向が中心であったが、事後調査では「課題意識と継続による成長」など、具体的な行動の継続と成果を伴う成長が示された。また、事前調査では抽象的な目標が主であったが、事後調査では「途中で妥協した」「気持ちの弱さに負けなかった」など、自己理解と内省が深まり、現実的な課題と向き合う態度が養われた。次に、社会的な視点において事前調査では、個人の成長が主軸であったが、事後調査では「先輩・先生との関わり」「礼節」など、他者との関係性を重視する視点が強くなったと考えられる。さらに、「休まず参加」「生活リズムが整った」など、生活習慣の改善や実行力の向上が見られ、行動の具体化と習慣化が促進されたと考えられる。以上のように、寒稽古によって精神的、身体的成長・自己理解の深化・社会性の育成・行動の変容の 4 つが心理的变化として明らかとなった。今後は女子との比較、心理的变化が中長期的にどのような影響を与えるかについて調査をしていきたい。

Fig.1 事前質問（質問 1）

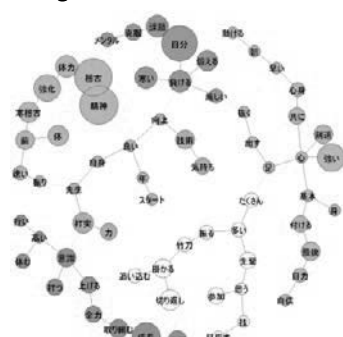
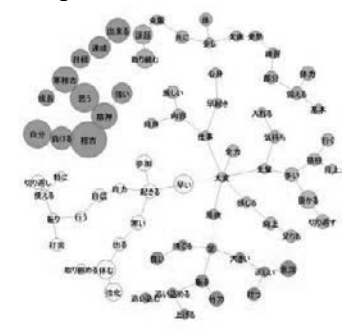


Fig.2 事後質問（質問 1）



【参考文献】

星川保・恵土孝吉(1987). 剣道のトレーニング. 大修館書店. 124-125.

小森富士登(2020). 剣道の指導法. 国士館大学武徳紀要, 36, 13-19.

(ももた なおひと・ふるさわ のぶあき・しんざと ちかの他)

大学生の武道に対するイメージの研究（1）

－ 初発反応の内容について －

○井上航人¹ 軽部幸浩¹ 藤田主一²

（¹東京富士大学,²日本体育大学）

キーワード：武道イメージ 礼儀 大学生

【目的】

2014（平成 26）年、日本武道協議会によって制定された武道の定義では、「武道は、武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道であり、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道の総称を言う。」となっている。つまり、「武道」は柔道をはじめとする 9 種類の武技を総称するものであるが、「武道のイメージ」を研究する場合は、特定の武技を目的にすることが多い。たとえば、柔道（石川他、2011）、剣道（国吉他、2023）などがその例である。

我われは、特定の武技のイメージではなく、広く武道のイメージを明らかにするため、大学生を対象に調査した（井上他、2024）。その結果、大学生は武道を「日本の伝統・文化」と考えており、また「自分や人を守る力が身に付く」「心や体を鍛えることができる」「礼儀が学べる」と考えていることが推察できた。

今回の研究の目的は、TST（Twenty Statements Test）を利用し「武道は…」という刺激後に対する反応のうち、学生が最初に何をイメージするのかを分析し、そこから得られた知見を基にして、武道発展の一助としたい。

【方法】

1. 対象者:A 大学の学生 104 名（男性 58 名、女性 46 名）。
2. 調査材料:Kuhn (1954) が開発した Twenty Statements Test (TST) を利用し、「武道は…」という刺激語を与えた。
3. 手続き:調査は、2024 年 5 月 9 日～5 月 17 日の間に実施した。対象者に目的や内容を説明した後、承諾を得たうえで無記名にて実施し回収した。
4. 分析方法:学生から得た 104 行の初発の回答を基にテキストマイニングソフト（KH Coder 3.02c official-package）を使用し、描画する共起関係の選択は、Jaccard 係数を基にして上位 60 を指定し行った。

本研究は、A 大学研究倫理委員会の承認（2024—1）を受け、大学生に研究計画を説明し、参加の同意を得て実施した。

【結果】

クラスター分析では、学生から得た 104 行の初発の回答を非階層クラスタリングにより 5 つに分類した。出現頻度の多い単語は多い順に「礼儀」「日本」「スポーツ」「強い」「自分」「正しい」「心」であった。また、共起ネットワークによる分析の結果、一番出現頻度の多い単語は「礼儀」であり、関連するフレーズとして「正しい」「学ぶ」「作法」が挙げられる。次に出現頻度の多い単語は「日本」であり、関連するフレーズとして「スポーツ」「伝統」「文化」「続く」が挙げられる。それ以外では、「自分」とそれに関連する「守る」といったフ

レーズも出現した。

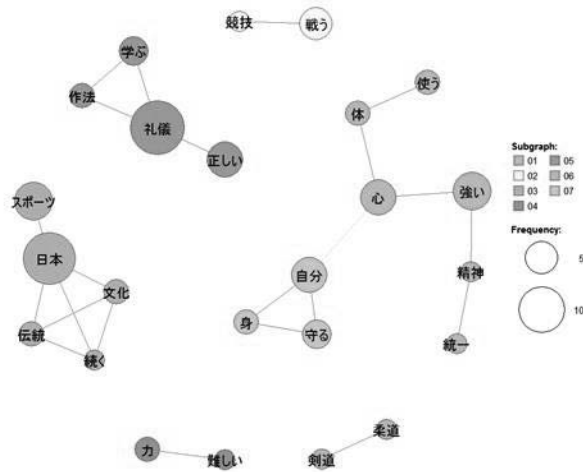


図 1.初発反応の共起ネットワーク

【考察】

分析結果から、大学生の多くが「武道は…」に対し最初にイメージするワードが「礼儀」であることが明らかになった。これは武道が礼法を特に重要視しており、中学高校における武道教育で礼儀に関する教育がなされていることが要因であると推察できる。また、「日本のスポーツ」「日本の伝統・文化」というワードを最初にイメージする学生が多いことも明らかになった。

井上他（2024）の研究で得た 1,070 行の分析結果では、一番出現頻度の多かったワードは「スポーツ」であり、「人」「競技」といったワードも多く出現していた。これらの単語は初発反応では出現頻度が少なく、「武道」に対する初発反応とそれ以降にイメージするワードに違いがあることも明らかになった。

今回の研究では「武道は…」の刺激後に対する大学生の意識調査・初発反応を分析したが、今後はこれを「柔道は…」や「空手は…」という他の種目を刺激語に置き替えることで、各種目に対するイメージの比較を行っていきたい。

本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

- 井上航人・軽部幸浩・藤田主一（2024）.武道のイメージに関する研究－大学生は武道をどのようにとらえているのか－日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 4.
- 石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣（2011）.共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化 大学体育研究 33, 11-20, 2011.
- 国吉恵一・藤原靖浩（2023）.大学生の武道に関するイメージに関する一考察－「剣道」の授業における学生のレポートから－ 京都産業大学教職研究紀要 18, 15-25, 2023.
- （いのうえ こうと・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

大学生の武道に対するイメージの研究 (2)

ー 最も強いイメージについて ー

○軽部 幸浩¹ 井上 航人¹ 藤田 主一²

(¹東京富士大学, ²日本体育大学)

キーワード：武道イメージ, 大学生, 共起ネットワーク

【目的】

2014（平成 26）年，日本武道協議会によって制定された武道の定義では，「武道は，武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で，心技体を一体として鍛え，人格を磨き，道德心を高め，礼節を尊重する態度を養う，人間形成の道であり，柔道，剣道，弓道，相撲，空手道，合気道，少林寺拳法，なぎなた，銃剣道の総称を言う。」となっている。

つまり，「武道」は柔道をはじめとする 9 種類の武技を総称するものであるが，「武道のイメージ」を研究する場合は，特定の武技を目的にすることが多い。たとえば，柔道（石川他，2011），剣道（国吉他，2023）などがその例である。我われは，特定の武技のイメージではなく，広く武道のイメージを明らかにするため，大学生を対象に調査した（井上他，2024）。その結果，大学生は武道を「日本の伝統・文化」と考えており，また「自分や人を守る力が身に付く」「心や体を鍛えることができる」「礼儀が学べる」と考えていることが推察できた。

今回の研究の目的は，TST（Twenty Statements Test）を利用し「武道は…」という刺激後に対する反応のうち，最も重要と考える反応文を検討することで，「武道」が包含している本質を知るために学生への意識調査を行い，そこから得られた知見を基にして，武道発展の一助としたい。

【方法】

1. 対象者：A 大学の学生 104 名（男性 58 名，女性 46 名）。
2. 調査材料：TST 利用し「武道は…」という刺激語を与えた。
3. 手続き：調査は，2024 年 5 月 9 日 ～ 5 月 17 日の間に実施した。対象者に目的や内容を説明した後，承諾を得たうえで無記名にて実施し回収した。
4. 分析方法：学生から得た最も強いイメージの 86 行の回答を基にテキストマイニングソフト（KH Coder 3.02c official-package）を使用し，描画する共起関係の選択は，Jaccard 係数を基にして上位 60 を指定し行った。

本研究は，A 大学研究倫理委員会の承認（2024-1）を受け，大学生に研究計画を説明し，参加の同意を得て実施した。

【結果】

クラスター分析では，学生から得た 86 行の回答を非階層クラスタリングにより 6 つに分類した。出現頻度の多い単語は「日本」「礼儀」「スポーツ」「身」「守」であった。また，共起ネットワークによる分析の結果，一番出現頻度の多い単語は「日本」であり，関連するフレーズとして「文化」「伝統」であった。次に出現頻度の多い単語は「礼儀」であり，関連

するフレーズとして「正しい」や「学ぶ」「忍耐」が挙げられる。それ以外では，「守る」とそれに関連する「身」「自分」といったフレーズが多く出現した。

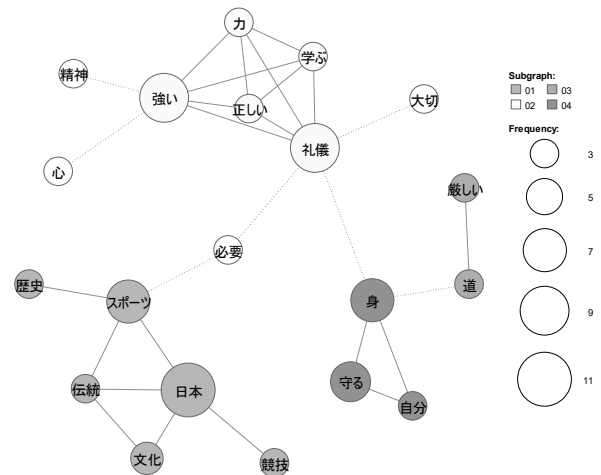


図 1. 武道の最も強いイメージの共起ネットワーク

【考察】

分析結果から，大学生の多くは武道を漠然とではあるが，スポーツと考えており，例えば「日本のスポーツ」「伝統のスポーツ」「忍耐のスポーツ」などと回答していた。武道を「日本の伝統・文化」と考えており，「自分の身を守る」「礼儀正しい」「礼儀を学ぶ」と考えていることが推察できる。また武道を「道」と捉えていることで「厳しい」というイメージもあった。

今回の研究では「武道は…」という刺激語を与えた 20 答法による意識調査を実施し，その回答の中で最も重要と思われる回答についての分析をおこなった。今後は「柔道は…」や「空手は…」という他の種目を刺激語に置き替えることで，各種目に対するイメージの比較を行ってみたい。

本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

- 井上航人・軽部幸浩・藤田主一（2024）. 武道のイメージに関する研究 ― 大学生は武道をどのようにとらえているのか ― 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 4.
- 石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣（2011）. 共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化 大学体育研究, 33, 11-20, 2011.
- 国吉恵一・藤原靖浩（2023）. 大学生の武道に関するイメージに関する一考察 ―「剣道」の授業における学生のレポートから― 京都産業大学教職研究紀要, 18, 15-25.
- （かるべ ゆきひろ・いのうえ こうと・ふじた しゅいち）

ニックス

日体大版剣道イメージ尺度 (NIKS) の作成 (5)

— 信頼性について —

○古澤伸晃¹ 新里知佳野¹ 井上雄貴¹ 百田尚史¹ 八木沢誠¹ 軽部幸浩² 藤田主一¹
(¹日本体育大学 ²東京富士大学)

キーワード：剣道 イメージ NIKS

【目的】

これまで我々は、剣道イメージについて研究を進め、その知見をもとに剣道イメージの構造を明らかにしてきた(古澤他, 2023, 2024)。さらに、研究を進める過程で、剣道を「習う者」と「指導する者」との立場からその心理的構造を測定するために、日体大版剣道イメージ尺度 (NITTAIDAI Image of KENDO Scale ; NIKS) を新しく作成した。

本研究の目的は、再テスト法により NIKS の質問項目について信頼性を明らかにすることである。

【方法】

1.調査対象者 調査は、A 大学剣道部員と B 大学一般学生を対象として 2 回行われた。

A 大学剣道部員の 1 回目調査は 2024 年 6 月 24 日、2 回目調査は 2024 年 9 月 24 日に実施された。調査対象者は 1 回目 103 名、2 回目は 114 名であった。

B 大学一般学生の 1 回目調査は 2024 年 7 月 5 日、2 回目調査は 2024 年 10 月 4 日に実施された。調査対象者は 1 回目 45 名、2 回目は 57 名であった。

その中で、回答の不備などを除く 105 名を分析対象とした。

2.調査内容 質問用紙 (A4 用紙 1 枚) は、フェイスシート (学籍番号、年齢、性別、剣道の経験、スポーツ歴) に続き、調査は Lie スケール 6 項目を追加した 40 項目の質問で実施した。回答方法を 4 件法 (4 非常にそう思う, 3 そう思う, 2 そう思わない, 1 まったくそう思わない) とし、実施した。

3.手続き 調査への協力依頼は、次のように教示し同意を得ることで進められた。以下の質問内容を読んで、あなたがどう感じたかを答えてください。そう思ったところに○印をつけてください。正しい答えや、間違った答えはありませんので、気軽に思ったところに回答してください。

4.倫理的配慮

調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ、「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書 (研究課題名:剣道イメージの構造に関する分析的研究)」ならびに「説明書」「同意書」を提出し、審査の結果、承認された (承認番号 020-H172)。なお、本研究の利益相反はない。

【結果と考察】

NIKS を構成する因子 調査結果を因子分析したところ、剣道に対するイメージは 4 因子で構成されていたことが明らかになった (Table1)。因子Ⅰは、「剣道は正しい姿勢が養われる」などの 17 項目から構成されていた。因子Ⅱは、「剣道は子どもから高齢者まで楽しめる武道である」などの 6 項目から構成されていた。因子Ⅲは、「剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい」などの 7 項目から構成されていた。因子Ⅳは、「剣道は比較的危険が少ない競技である」などの 4 項目から構成されていた。

1 回目と 2 回目の回答において、再テストによる有意な差が認められなかったことにより、NIKS の質問項目について信頼性が認められたと考えられる。

【参考文献】

古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2023) 剣道イメージ尺度の作成と応用の可能性. 応用心理学研究、49(1), 52-53.
古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2024) 日体大版剣道イメージ尺度 (NIKS) の作成 (4) —指導者を対象にして— . 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 1.
(ふるさわ のぶあき・しんざと ちかの・いのうえ ゆうき他)

Table 1 因子分析の結果

質問内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
1 剣道は正しい姿勢が養われる。	0.83	-0.12	0.03	0.00
2 剣道は姿勢が良くなる武道である。	0.82	-0.29	0.15	0.14
3 剣道は礼儀が身に付くようになる。	0.75	0.04	0.01	-0.05
4 剣道は礼儀作法が身に付く武道である。	0.67	0.14	-0.13	-0.13
5 剣道は返事ができるようになる。	0.64	0.09	0.08	0.00
6 剣道は挨拶ができるようになる。	0.63	0.15	0.00	0.00
7 剣道は剣道具姿がかっこいい。	0.62	0.00	-0.07	0.17
8 剣道は正座が身に付くようになる。	0.60	0.00	0.16	-0.01
9 剣道は剣道着・袴姿がかっこいい。	0.58	0.04	-0.06	0.09
10 剣道は礼節を重んじる武道である。	0.58	0.07	-0.21	-0.12
11 剣道は日本の心である。	0.55	0.12	-0.06	0.31
12 剣道は心身を鍛錬する武道である	0.54	0.25	-0.14	-0.06
13 剣道は相手を敬う心を養う武道である。	0.54	0.19	-0.17	0.00
14 剣道は凛とした美しい競技である。	0.54	0.05	-0.13	0.20
15 剣道は怪我予防のためにウォーミングアップが大切である。	0.53	0.17	-0.07	-0.22
16 剣道は鍛錬の度合いで品格に差が出る。	0.52	-0.05	0.11	0.18
17 剣道は怪我予防のためのトレーニングが必要である。	0.51	-0.19	0.18	0.00
18 剣道は子どもから高齢者まで楽しめる武道である。	-0.06	0.77	-0.17	0.07
19 剣道は生涯スポーツである。	-0.07	0.71	-0.14	0.14
20 剣道はアキレス腱を切る人が多いスポーツである。	-0.16	0.67	0.27	-0.03
21 剣道はやればやるほど奥が深い武道である。	0.18	0.59	-0.19	0.03
22 剣道は日本を代表する武道である。	0.13	0.51	-0.16	0.17
23 剣道は裸足で稽古することに意味がある。	0.08	0.51	0.05	0.22
24 剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.01	0.00	0.78	-0.03
25 剣道は発声がうるさい武道である。	0.03	0.04	0.74	-0.09
26 剣道は無駄に声を出す武道である。	0.03	-0.11	0.71	0.09
27 剣道は冬に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.05	0.05	0.70	0.12
28 剣道は冬は寒く夏は暑いので子どもたちには向かない。	-0.04	-0.06	0.68	0.10
29 剣道は体の一部に障がいがかきやすい。	-0.10	0.30	0.55	0.06
30 剣道は体が大きい人ほど有利である。	0.11	-0.05	0.53	0.18
31 剣道は比較的危険が少ない競技である。	-0.05	0.06	0.10	0.66
32 剣道は武道の中でも重大な事故は少ない。	0.02	0.03	0.19	0.62
33 剣道は面を打つことが一番大切である。	0.21	0.04	0.23	0.50
34 剣道は世界平和に貢献できる武道である。	0.16	0.31	0.03	0.50

表情解析 AI による入院患者の感情判定の試み

○稲野辺奈緒子¹ 松沼悟² 井上真郷³ (非会員) 岩藤和広⁴ (非会員) 小川久貴子¹ (非会員) 古屋健⁵

(¹ 東京女子医科大学看護学部 ² マクセル株式会社 ³ 早稲田大学理工学術院

⁴ 東京ネクスト南砂内科・透析クリニック ⁵ 立正大学心理学部)

キーワード：表情解析 AI、FACS、入院患者

【目的】医療ケア場面において、医療者が患者の感情状態を的確に把握し適切に対応することは医療実践の基盤であり、患者満足度や QOL の向上に直結する。特に入院患者は疼痛などの身体的苦痛に加え、不安や落胆などさまざまな感情を経験しており、医療者による細やかな配慮が求められる。しかし、限られた診療時間の中で、患者の感情変化を正確に把握することには限界がある。感情は多くの場合、言葉よりも表情などの非言語的手がかりとして表出されるため、医療者がリアルタイムでその変化を捉えて対応することは困難である。そこで我々は、患者の表情から感情状態を判定する AI ツールを開発することで、医療者と患者間のコミュニケーションを支援するシステムの構築を目指した。本研究ではその基礎的研究として、既存の表情解析技術を活用し、表情解析 AI による入院患者の感情判定を行い、内観報告との比較から、その有効性と限界について検討した。

【方法】対象者：外科病棟に入院中で手術後の患者である。データ収集方法：1) 撮影場面：患者の表情を中心とした動画撮影を行った。撮影は、患者の術後 1 日目から行い、看護師が患者と関わるケア（検温・コミュニケーション・術後に関する指導等）実践場面を撮影した。2) 内観報告：撮影後、原則 3 日以内に撮影場面の映像を患者に視聴してもらい、当該場面で経験していた感情（気持ち）について内観報告を求めた。その後、映像と内観報告を照合し、患者から抽出された感情の語彙を使用し感情のタグ付けをした。分析にあたって、類似する内容を統合して再分類した。

解析方法：1) MP4 動画から 1 秒毎に静止画フレームを抽出し、各抽出画像に対して表情解析を実施した。2) 解析コード内容は、患者の顔の検出を行い、ランドマーク特徴点検出から、顔・ポーズを検出させた。特徴量の抽出は、Action Unit 解析で、Ekman (1978) らの FACS (Facial Action Coding System) 理論による表情筋解析を基盤にした。3) CNN (Convolutional Neural Network) による表情解析 AI により 7 種の基本感情 (anger, disgust, fear, happiness, sadness, surprise, neutral) 要素の比率に分析した。4) 7 感情の中で観察時間中最大の比率を示した感情を、便宜的にその代表的感情とし解析に用いた。

倫理的配慮：東京女子医科大学倫理委員会の承認 (2023-0189) を得て実施した。

【結果】手術後患者 34 名 (男性 20 名、女性 14 名)、平均年齢 63.9 歳から計 103 件の動画を撮影した。動画の撮影時間は 0.5~30.6 分で、平均 6.1 分であった。このうち、顔の向きが正面で解析に使用した動画は 2~46 秒、平均 9.6 秒であった。表 1 には、感情を大きく 3 分類し、患者の内観報告と表情解析 AI による判定をクロス表として示した。Ekman に則り happiness を positive に、anger, disgust, fear, sadness を negative に、surprise, neutral を neutral とした。表 1 に示した通り、患者自身が neutral と内観報告した映像に対し、AI による判定の正答率は 72.7%であった。誤判定はすべて negative と判定された。negative と内観報告された映像に対しては、AI による neutral との判定が多く、正答率は 67.9%であった。positive と内観報告された映像に対する正答率は 66.7%で、neutral または negative と判定されるケースもみられた。

表 1 主観報告とAI判定のクロス表

		AI判定			合計	
		neutral	negative	positive		
内観報告	neutral	n	8	3	0	11
		%	72.7%	27.3%	0.0%	100.0%
	negative	n	17	36	0	53
		%	32.1%	67.9%	0.0%	100.0%
	positive	n	10	3	26	39
		%	25.6%	7.7%	66.7%	100.0%
	合計	n	35	42	26	103
		%	34.0%	40.8%	25.2%	100.0%

さらに、より詳細な感情分類による結果から、次の傾向が明らかとなった。neutral 群では「疑問」とタグ付けされた感情に対して正答率が低く disgust, fear と判定されていた。negative 群では「ショック」「疑問」「仕方ない」「無し」「落ち込み」といった感情に対して正答率が低く、多くが neutral と判定されていた。具体的にはショックは neutral、疑問は surprise、仕方ないは neutral, surprise、無しは neutral、落ち込みは neutral, surprise と判定されていた。positive 群では「すっきり」「安心」「関心」「嬉しい」の感情に対する正答率が低かった。すっきりは neutral、安心は neutral, surprise, disgust, fear, sadness、関心は surprise、嬉しいは neutral, surprise と AI により判定されていた。以上より、AI による表情判定は、neutral・negative・positive のいずれもおおよそ 70%前後の正答率を示した。一方で、患者が neutral と報告した表情が AI では negative と判定されやすく、逆に negative と報告された表情が neutral と判定されるケースもあった。また、positive とされた感情も neutral や negative に判定されることが確認された。

【考察】大分類による分析の結果、全体の約 70%において AI 判定は内観報告と一致していた。内観報告で negative、positive とされた表情が AI では neutral に判定されたケースが多く、今後、表情に現れにくい感情の判定精度を高める必要がある。また、詳細分類の結果によれば、内観報告で positive あるいは negative とされた表情が AI で surprise と判定されるケースが多かった。Ekman 理論では surprise は neutral に分類されるが、positive surprise と negative surprise が判定できれば一致率も高まると予想される。なお、内観報告で positive(「安心」)とされた表情が AI で negative と判定されたケースが 3 件あった。撮影後に内観報告を求めたため、撮影時とは異なる感情を想起していた可能性もある。AI の判定精度を高めるためには、内観報告の妥当性を高める工夫も求められる。

本研究は JSPS 科研費 JP 24K15217 の助成を受けた。

【利益相反】本研究で開示すべき COI はない。

【引用文献】Ekman P, Friesen W (1978). “Facial Action Coding System”, APA PsycTests., <https://doi.org/10.1037/t27734-000>.

(いな のべ なおこ・まつぬま さとし・いのう え まさと・いわどう かずひろ・おがわ くきこ・ふるや たけし)

待つだけの場面と待ち時間に労力を必要とする場面間の 選択行動に及ぼす労力の効果

ーヒトのデータを中心としてー

○久保 尚也
(駒澤大学文学部)

キーワード：選択行動 労力 待つ

【目的】

最小努力の原則によれば、同じ強化子がえられる複数の行動がある場合、生体は最も労力の少ない行動を選択するとされている (see. Hull, 1943)。しかし生体は、強化までの待ち時間に強化と関連のない行動を自発し、あえて労力を費やすことがある。この現象は、労力をかけずにエサを得ることができるともかかわらず、エサを獲得するためにあえて労力を費やすコントラフリーローディング (CFL) と類似している。

そこで本研究では、CFL の生起に関連していることが指摘されている“労力”という変数 (Tate & Vernon, 1974) に着目し、待つだけの場面と待ち時間に労力を要する場面間の選択行動に及ぼす労力の効果について検討した。

【方法】

実験参加者 大学生 10 名 (男性：4 名、女性：6 名) を実験参加者とした。

装置 タッチパネル機能を持つ、液晶一体型デスクトップパソコンを使用した。実験制御は Visual Basic2019 で作成したプログラムにより行った。

手続き 選択課題として、並立連鎖スケジュールを用いた (Fig. 1)。ターミナルリンク (TL) には、待ち時間の一部に労力を要する effort リンクとただ待つだけの wait リンクを配置した

並立連鎖スケジュールの流れは次の通りであった。各試行は、注視刺激である黒の十字が描かれた白色正方形の提示により開始し、参加者が注視刺激に反応した後、イニシャルリンク (IL) に移行した。IL では色の異なる effort ボタンと wait ボタンを左右並列に提示し、参加者が effort ボタンに反応した場合は effort リンクへ、wait ボタンに反応した場合は wait リンクへ移行した。

effort リンクに移行した場合は、即座に反応ボタンを提示し、参加者がこのボタンに x 回反応し、かつ、effort リンク移行から y 秒経過した後にコインの画像を提示した (conjunctive $FR\ x\ FT\ y$ 秒スケジュール)。wait リンクに移行した場合は、wait リンク移行から y 秒後にコインの画像を提示した ($FT\ y$ 秒スケジュール)。コインの色は effort リンクと wait リンクで異なり、各リンクともコインの画像を 5 秒間提示した。参加者がコインの画像に反応した場合は“コ

イン獲得”と 2 秒間表示され、その後、試行間間隔へ移行した。5 秒以内に参加者が反応しなかった場合は、コインの画像消失後に試行間間隔へ移行させた。試行間間隔は 2 秒とした。本研究ではコインを強化子として機能させるため、実験前に獲得したコインの枚数に応じて謝金を支払う旨の説明を行った。

実験は 3 試行を 1 試行ブロックとし、1 セッションに 16 試行ブロック実施した。各試行ブロックの第 1 試行は effort リンクを、第 2 試行は wait リンクを体験させる強制試行とし、第 3 試行は選択試行とした。IL における effort ボタンと wait ボタンの左右の提示位置は 1 試行ブロック内では同一としたが、4 試行ブロック以上連続して effort ボタンが左右の一方に提示されないよう設定した。

TL における FT 値は次のように決定した。第 1 試行は反応ボタンへの x 回の反応 ($FR\ x$) に要した時間の 2 倍とし、第 2 試行は第 1 試行と同じ値を用いた。第 3 試行は、wait リンクに移行した場合は第 1 試行と同じ値を使用し、effort リンクに移行した場合は第 1 試行と同様の方法で値を決定した。

実験条件 effort リンクの反応ボタンへの必要反応数 (FR 値) を操作した。条件として 10 回反応が必要な low-effort 条件と、30 回反応が必要な high-effort 条件の 2 種を設定し、各条件を同一参加者にそれぞれ 1 セッション実施した。effort ボタンおよび wait ボタンの色と各リンクのコインの色は、条件により異なった。

【結果と考察】

Fig. 2 に IL における effort ボタン選択率と二項検定の結果を示す。low-effort 条件では、3 名 (P1, P6, P9) が wait リンクを、2 名 (P4, P8) が effort リンクを選好し、残りの 5 名はどちらも選好しなかった。high-effort 条件では、2 名 (P1, P6) が wait リンクを、2 名 (P2, P4) が effort リンクを選好し、残りの 6 名はいずれも選好しなかった。このように本研究は、待つだけの場面と待ち時間に労力を必要とする場面間の選択行動に及ぼす労力の効果は確認できなかった。しかし本研究の結果は、これらの場面間の選択において最小努力の原則が機能しないことを示した点で重要といえる。

【利益相反】

本研究に開示すべき利益相反事項はない。

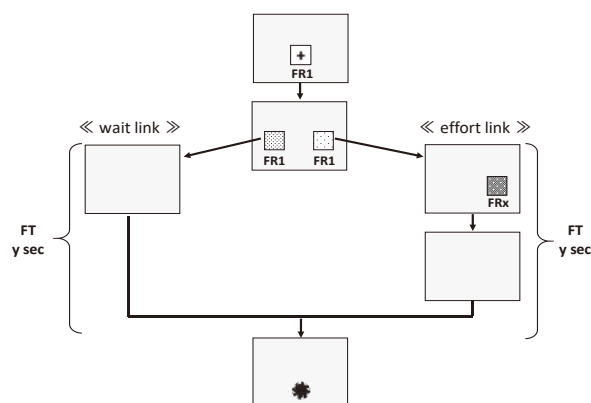


Fig.1 並立連鎖スケジュールの流れ

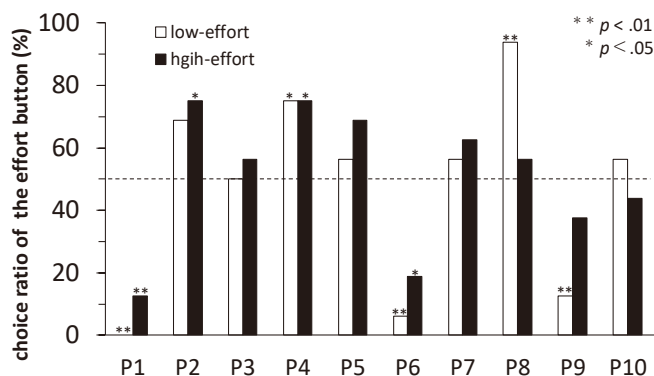


Fig.2 IL における effort ボタン選択率

(くぼ なおや)

妬みは他者と共有されるのか

探索的検討

○井上裕珠¹

(¹ 日本大学商学部)

キーワード：妬み・他者との共有・進化適応的機能

【目的】

妬みとは、他者が自分よりも優れていると感じる状況において生じる、不快感や苦痛を伴う感情であり、劣等感・敵意・不公平感といった心理的要素を特徴とする (Parrott & Smith, 1993; Smith & Kim, 2007)。妬みは、キリスト教において「七つの大罪」のひとつとして古くから道徳的に否定的な感情とされてきたように、一般的には好ましくない感情と見なされている。実際、妬みが他者への攻撃的行動や社会的関係の破壊につながる可能性があることは、多くの実証研究からも示されている。たとえば、van de Ven et al.

(2009) は、妬みがいじめ、陰口、誹謗中傷といった対人的に有害な行動を引き起こす一因となることを示している。また、Duffy et al. (2012) は、職場における妬みが人間関係の悪化や生産性の低下に寄与することを報告している。

一方で、妬みには単なる破壊的側面だけでなく、進化的・社会的文脈において適応的な側面があるという視点も近年注目されている。妬みは、自身の社会的地位を見直し、自己改善や目標達成への動機づけとなることもある (van de Ven et al., 2011)。さらに Inoue et al. (2015) は、妬みが集団内における資源の不公平な分配に対して調整を促す進化的適応機能を果たしている可能性を示唆しており、妬みを抱いた個体が利己的な他者の不公平な行動に異議を唱えることが、集団全体の利益に資する可能性を論じている。

こうした観点から、本研究では、従来ほとんど注目されてこなかった「妬みの共有」に焦点を当てる。すなわち、妬みという極めて個人的かつネガティブな感情が、他者と共有されるのか、またそのような共有がどのような状況で、どのような動機に基づいて生じるのかを探索的に検討することを目的とする。妬みが他者に共有されることにより、複数人による協調的な分配要求が可能となり、個人が単独で行動するよりも社会的・進化的に適応的であると考えられる。実際、感情共有のメカニズムについては、Rimé (2009) が、感情的出来事の共有は人間関係の強化や集団内での理解を深める役割を果たすと指摘しており、ネガティブな感情であっても共有されることが示唆されている。また、感情の社会的伝染 (social contagion) に関する研究でも、妬みのような感情が個人から集団へと伝播する可能性が示されている

(Hatfield et al., 1993)。

このように、妬みが他者と共有される可能性や、それがどのような状況で生じるのかについては、理論的にも実証的にも十分に検討されていない。本研究では、妬みという感情が実際に他者と共有される経験があるかどうか、またその際の状況や共有相手の反応、さらに共有しなかった場合の理由について、探索的に明らかにすることを目指した。

【方法】

参加者

本研究には、東京都内の大学に在籍する大学生 212 名 (男性 131 名、女性 75 名、ノンバイナリー／第 3 の性 1 名、無回答 1 名、平均年齢 20.14 歳) が参加した。

手続き

Qualtrics を用いてオンライン調査を実施した。まず、『うらやましい』や『ねたましい』と感じたときに、その気持ちを他の誰かに話した経験はありますか? という質問に対し、「はい」または「いいえ」で回答を求めた。

「はい」と回答した参加者には、①妬みを感じた状況、②妬みを抱いた相手、③その感情を共有した相手、④共有相手からの反応について、いずれも自由記述形式で回答を求めた。一方、「いいえ」と回答した参加者には、①妬みを感じた状況、②妬みを抱いた相手、および③妬みの感情を他者と共有しなかった理由について自由記述形式で回答を求めた。

【結果と考察】

本研究では、妬みが他者と共有されるのか、またそのような共有がいかなる動機や状況に基づいて生じるのかを探索的に検討した。その結果、参加者のうち 82.21% (171 名) が妬みの感情を他者と共有した経験があると回答し、17.79% (37 名) が共有経験がないと答えた。これは、妬みという感情が一般的にネガティブなものとして認識されているにもかかわらず、実際には多くの人が他者との関係性の中でその感情を表出・共有していることを示している。

共有の動機としては、「共感してほしかったから」「ストレスを発散したかったから」「妬みを抱くのは自分だけではないと確認したかったから」といった記述が多く見られた。これらの理由は、妬みの共有が自己の感情の理解や心理的安定を図るための対人的・情動的調整行動として機能している可能性を示唆している。特に「共感」や「孤立感の解消」を目的とする共有は、Rimé (2009) が指摘するように、感情共有が人間関係の強化や社会的絆の形成に寄与するという知見と一致する。

これらの結果は、妬みという感情が単なる内面的体験にとどまらず、他者との関係性や社会的文脈の中で意味づけられ、調整される動的なプロセスであることを示唆している。また、妬みの共有が協調的な資源配分の要求や、集団内の公平性の促進といった進化的に適応的な機能を持つ可能性についても、新たな視点を提供している。今後の研究では、共有の内容や程度が他者との関係性 (例えば親密さや地位の差) にどのように影響されるか、また共有後の心理的・行動的変化についてさらに詳細に検討する必要があるだろう。

【利益相反】 開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】 Duffy, M. K., Scott, K. L., Shaw, J. D., Tepper, B. J., & Aquino, K. (2012). A social context model of envy and social undermining. *Academy of Management Journal*, 55(3), 643–666. / Hatfield, E., Cacioppo, J. T., & Rapson, R. L. (1993). Emotional contagion. *Current Directions in Psychological Science*, 2(3), 96–100. / Inoue, Yumi, Hoogland, C. E., Takehashi, Hiroki, & Murata, Koji (2015). Effects of resource divisibility and expectations of sharing on envy. *Motivation and Emotion*, 39(5), 961–972. / Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64(6), 906–920. / Rimé, B. (2009). Emotion elicits the social sharing of emotion: Theory and empirical review. *Emotion Review*, 1(1), 60–85. / Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehending envy. *Psychological Bulletin*, 133(1), 46–64. / van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2009). Leveling up and down: The experiences of benign and malicious envy. *Emotion*, 9(3), 419–429. / van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2011). The envy premium in product evaluation. *Journal of Consumer Research*, 37(6), 984–998.

(いのうえゆみ)

どの世代が他者に「親になる資格」を求めるのか？

「親になる資格」の認識における世代差

○扇原貴志¹
(¹龍谷大学)

キーワード：「親になる資格」 世代差 子育て

【目的】

本研究の目的は、人々が暗黙裡に抱く「親になる資格」の認識の世代差を検討することである。近年、SNSの普及により、人々が他者の子育てについて発言することが容易になった。しかし、中には他者の不適切な・不十分に見える養育について、「ちゃんと子育てできない親は親になる資格がない」といった意見が出ることがある。他者の子育てに関する議論は話題になりやすく、炎上しやすい。

こうした風潮から、人々の間には他者が親になり子育てをする上での相応しさである「親になる資格」を求める意識があるのではないかと推測される。そこで、扇原（印刷中）は、「親になる資格」としてイメージされる事柄を親になる「心構え」と「条件」の2つの観点から自由記述で尋ねて検討した。この研究をもとに扇原（発表予定）は、「親になる資格」の認識尺度を作成し、5因子（親としての覚悟と子育ての土壌（以下、覚悟）、子どもに望ましい養育環境（以下、環境）、親としての使命感（以下、使命感）、経済的基盤（以下、経済）、人格的成熟と適応力（以下、成熟））を抽出した。本研究においては扇原（発表予定）の尺度を用いて「親になる資格」の認識の世代差を検証し、どの世代が「親になる資格」を求める傾向があるのか明らかにする。

【方法】

＜研究参加者＞アイブリッジ社の「Freeasy」を利用し、20歳から79歳の1200名（男性597名、女性595名、その他8名；平均年齢49.69歳（SD=16.55））を対象に2024年10月にオンライン調査を行った。標本抽出では10歳ごとにモニター登録した際の性別の数が均等になるように抽出にした（例：20代から男女100名ずつ、計200名）。＜尺度＞扇原（発表予定）の「親になる資格」の認識尺度を6件法で尋ねた。＜倫理的配慮＞本研究は立教大学研究活動マネジメント委員会による倫理審査を受け、承認された。

【結果】

「親になる資格」の認識尺度について、各下位尺度の得点を算出し、研究参加者の年齢から10歳刻みに20代～70代の6群の世代に分けた。その上で、世代を独立変数、各下位尺度得点を従属変数とする1要因被験者間の分散分析を

行った（Table 1）。その結果、全ての下位尺度で主効果が有意であった。そこで、多重比較（Tukey法）を行った結果、覚悟では30代より70代の方が得点は高かった。環境では30～50代より70代の方が得点は高かった。使命感では30代より60代の方が得点は高く、30・40代より70代の方が得点は高かった。経済では40代より20代の方が得点は高かった。成熟では30・50代より60代の方が得点は高く、20～40代より70代の方が得点は高かった。

【考察】

以上の結果をまとめると、経済のみ20代で得点が高く、それ以外の下位尺度では、総じて若年層より高齢層の方が、より厳しく「親になる資格」を求めている。近年の若年層を対象とした調査では、「子どもが欲しくない」という若者が増加しており、その理由として経済的不安があがることが多い（日本財団、2024；東京都、2024）。この結果と同様に、20代は他者が親になる上でも経済的安定を求めるのだろう。一方、40代は実際に子育てをしている世代であり「産んでみたら経済的には何とかなった」「金銭よりも大事なことがある」といった経験が得点の低さに関連していると推測される。他の下位尺度については、総じて高齢層の方が得点は高かった。実際に子育てを経験したり、子育てに関する事柄を見聞きたりしてきたために、他者に「親になる資格」をより強く求める可能性があるといえる。

【利益相反】本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【付記】本研究はJSPS科研費24K16584の助成を受けたものである。「親になる資格」の認識尺度の項目・因子分析結果は以下のURLから参照可能。<https://x.gd/nQ116>

【引用文献（一部）】

扇原 貴志（発表予定）. 人々が暗黙裡に抱く親になる「資格」とは？——「親になる資格」の認識尺度の作成——日本教育心理学会第67回総会発表論文集。
扇原 貴志（印刷中）. 親になる「心構え」と「条件」の記述の分類——「親になる資格」の認識の探求に向けて——日本家政学会誌。

（おうぎはら たかし）

Table 1
世代別にみた「親になる資格」の認識の各下位尺度得点の分散分析結果

	親としての覚悟と 子育ての土壌		子どもに望ましい 養育環境		親としての使命感		経済的基盤		人格的成熟と 適応力	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
20代	4.40	(1.03)	4.13	(0.99)	4.49	(1.09)	4.32	(1.14)	4.43	(1.06)
30代	4.26	(0.98)	4.00	(0.95)	4.32	(1.06)	4.18	(1.16)	4.31	(1.02)
40代	4.32	(0.98)	3.99	(0.86)	4.40	(1.00)	4.03	(1.07)	4.43	(0.94)
50代	4.40	(0.94)	4.07	(0.85)	4.45	(1.03)	4.07	(1.05)	4.48	(0.93)
60代	4.52	(0.73)	4.16	(0.65)	4.62	(0.78)	4.13	(0.77)	4.66	(0.73)
70代	4.55	(0.82)	4.34	(0.73)	4.71	(0.80)	4.26	(0.87)	4.70	(0.79)
合計	4.41	(0.92)	4.12	(0.85)	4.50	(0.97)	4.17	(1.02)	4.50	(0.93)
$F(df=5, 1994)$	2.96*	$\eta^2=.01$	4.67***	$\eta^2=.02$	4.43***	$\eta^2=.02$	2.40*	$\eta^2=.01$	5.29***	$\eta^2=.02$
多重比較	30代<70代*		30代・40代・ 50代<70代*		30代<60代*, 30代・40代<70代*		40代<20代*		30代・50代<60代*, 20代・30代・40代 <70代*	

* $p<.05$, *** $p<.001$

ながらスマホ育児が幼児のインターネット依存に及ぼす影響

3 波パネル調査による子どものインターネット利用時間の媒介効果の検討

○松尾由美¹

(¹江戸川大学)

キーワード：ながらスマホ育児・3 波パネル調査・インターネット依存

【目的】

子育てをしながら子どもの面前で養育者がスマートフォンを利用する「ながらスマホ育児」の子どもへの悪影響が懸念されている。一例として、養育者のスマートフォン利用をモデルとし、子どもが不適切なインターネット利用を学ぶ可能性が考えられる。本研究では 3 波パネル調査を実施し、ながらスマホ育児が幼児のインターネット利用時間を媒介し、インターネット依存を引き起こすのか学齢別に検討する。

【方法】

調査対象者 WEB 調査会社を通じ、モニター登録者の中から、年少～年長クラス相当の子どもと同居し、その子どもの養育に最も関わっていると回答し、研究参加に同意した保護者を対象に、1 波目(T1)を 2024 年 3 月、2 波目(T2)を同年 9 月、3 波目(T3)を翌年 2~3 月に実施した。全調査に回答し、不適切回答者を除いた 339 名(男性 5 名、女性 334 名)を分析対象とした。子どもの学齢の内訳は年少 105 名、年中 117 名、年長 108 名であった。

手続き 調査対象者に本研究の内容について WEB 画面上で説明し、参加に同意した場合のみ回答を求めた。該当の学齢の子どもが複数いる場合には、年長の子どもについて回答するように求めた。なお、本研究は著者が所属する江戸川大学の倫理審査委員会の倫理審査を受け承認された(R05-028A)。

調査項目 回答者・子の学齢・性別に加え次の項目等を尋ねた。
ながらスマホ育児時間総時間:最近 1 か月くらいの間、当該子どもが回答者のそばにいる時に、1 日平均してスマートフォンをどのくらい利用しているのか、平日(園や学校がある日)と休日(園や学校のない日)、それぞれについて尋ねた。選択肢は、「まったく利用していない(0 分)」から「8 時間以上」までの 14 個の選択肢と「わからない」の計 15 個であった。1 日当たりのながらスマホ育児時間について、選択肢の midpoint(例:「1~30 分まで」の場合は 15 分、「31 分以上~1 時間まで」の場合は 45 分)に変換し、学校・園のある日(平日)での回答を 5 倍、学校・園のない日(休日)での回答を 2 倍したものを合計し、ながらスマホ育児時間の指標とした。「わからない」は欠損値とした。

子どものインターネット利用時間:最近 1 か月の間、1 日に平均して当該子どもがどのくらいインターネットを利用しているのか、平日(園や学校がある日)と休日(園や学校のない日)、それぞれについて尋ねた。選択肢は「まったく利用していない(0 分)」から「8 時間以上」までの 14 個の選択肢と「わからない」の計 15 個の選択肢から当てはまるものを 1 つ選ぶように求めた。上述の「ながらスマホ育児時間」と同様の変換を行い、インターネット利用時間の合計値を算出した。

子どものインターネット依存:インターネット依存尺度(松尾ら、2024)の 10 項目について「1:まったくくない」から「5:とてもよくある」の 5 件法で回答を求めた。逆転項目 5 項目を逆転処理した後、平均点を算出した。

【結果】

ながらスマホ育児が子どものインターネット利用時間を媒介し幼児のインターネット依存に影響するのか検討するため、双方向の因果関係を含む交差遅延モデルを想定し、構造方程式モデリングを用いた多母集団分析を実施した。子どもの性別を統制変数とし、これらの変数からすべての変数にパスを引いた。パラメータ推定には一般化最小二乗法を用いた。制約のないモデル 1 と時点間の影響は同じと仮定して同一の変数間の T1→T2 からのパスと T2→T3 からのパスに等値制約を置いたモデル 2、さらに異

なる変数間の T1→T2 からのパスと T2→T3 からのパスに等値制約を置いたモデル 3 を比較し、適合度が高いモデル 1 を採用した。各変数間のパスの因果係数(標準化係数)の推定値を表 1 に示す。

どの学齢においても、T1 から T2、T2 から T3 にかけて、ながらスマホ育児時間が子どものインターネット利用時間を増加させる有意な正の効果が見られた。さらに T1 から T2 にかけて、子どものインターネット利用時間が子どものインターネット依存を高める有意な正の効果が見られた。また、T1 から T2 にかけて、ながらスマホ育児時間が子どものインターネット依存を高める有意な正の効果が見られ、学齢が上がるにつれてパス係数の値は小さくなる傾向が示された。子どものインターネット利用時間がながらスマホ育児時間を増やす有意な正の効果が T1 から T2 にかけてすべての学齢で、T1 から T3 にかけて年長児のみで見られた。

表 1 ながらスマホ育児、子のインターネット利用、子のインターネット依存の関係

		年少	年中	年長
ながらスマホ 子のネット利用	T1→T2	.18 **	.14 **	.17 **
	T2→T3	.15 *	.16 *	.12 *
	T1→T3	-.09	-.10	.05
ながらスマホ →依存	T1→T2	.13 *	.10 *	.09 *
	T2→T3	-.03	-.03	-.02
	T1→T3	.03	-.05	-.08
子のネット利用 →ながらスマホ	T1→T2	.20 *	.16 *	.22 *
	T2→T3	-.04	-.04	-.03
	T1→T3	.25 †	-.05	.35 *
子のネット利用 →依存	T1→T2	.21 **	.17 **	.20 **
	T2→T3	.03	.04	.02
	T1→T3	-.02	-.14	.10
依存→ 子のネット利用	T1→T2	.18 ***	.20 ***	.23 ***
	T2→T3	.10	.10	.09
	T1→T3	.16	-.18	.02
依存→ ながらスマホ	T1→T2	-.10	-.11	-.11
	T2→T3	.01	.02	.02
	T1→T3	-.06	.10	-.02

【考察】

T1 から T2 かけてながらスマホ育児は子どものネット利用時間を増加させるものの、T2 から T3 にかけて子どものネット利用時間が子どものインターネット依存に及ぼす媒介効果は確認できなかった。一方で、ながらスマホ育児時間が子どものインターネット利用時間を増加させるだけでなく、子どものインターネット利用時間がながらスマホ育児時間を増加させる双方向の関係が示唆された。

【利益相反】 開示すべき利益相反関連事項はありません。

【引用文献】 松尾由美・田島祥・坂元章 (2024). 保護者評定によるインターネット依存尺度の作成. *Informatio: 江戸川大学の情報教育と環境*, 22, 111-118.

【謝辞】 研究は電気通信普及財団の研究調査助成を受けたものである。ここに記して感謝申し上げます。

(まつお ゆみ)

ポジティブイラショナルビリーフ尺度日本語版の作成（第2報）

○森本康太郎
(福井県立大学)

キーワード：ポジティブイラショナルビリーフ、尺度、日本語版

【目的】

これまで、ポジティブな認知的幻想を直接的に評価することを目的として、自己・コントロール・未来に対する楽観主義をポジティブイラショナルビリーフとして測定する尺度、Positive Irrational Beliefs Scale (PIBS) が作成されている (Collard, 2009; Collard, Cummins, & Fuller-Tyskiewicz, 2016)。PIBS は、情動的苦痛との負の関連や、主観的幸福感との正の関連を持つことが報告されている (Collard et al., 2016; Collard & Fuller-Tyskiewicz, 2021)。しかしながら、日本語でポジティブイラショナルビリーフを測定する尺度はこれまで開発されておらず、この概念と精神的健康や幸福感との関連性を検討するには、信頼性と妥当性のある尺度の作成が必要とされる。

こうした背景を踏まえ、森本 (2024) は PIBS の日本語版 (J-PIBS) を試作し、第1報では内的一貫性を中心とした初期的な信頼性の検証を行った。本研究 (第2報) では、J-PIBS に関して、再検査信頼性を含むより詳細な信頼性の検討と、構造的妥当性の検証を行うことを目的とする。

【方法】

1. 調査協力者：日本国内の18歳から70歳までの成人797名を対象とした（男性485名、女性312名、平均年齢37.6歳、 $SD = 14.7$ ）。
2. 調査時期：第1回調査は2023年12月14日～19日に実施した。
3. 調査材料：J-PIBSの試作版を用いた。PIBS原尺度 (Collard, 2009) の日本語翻訳にあたっては、原著者より許可を得たうえで、以下の手順により翻訳を行った。まず、研究者が全項目を翻訳するとともに、専門翻訳会社ユレイタスにも翻訳を依頼した。次に、独立して作成された両翻訳を比較・検討し、調整を加えた統合版を作成した。この統合翻訳をもとに、ユレイタスの逆翻訳専門スタッフによって逆翻訳を行い、さらに別担当のネイティブスピーカーが原文と逆翻訳文の照合を行った。その結果、意味の齟齬を生じさせる表現上の相違は見られなかった。最終的に、全項目について日本語表現の自然さと適切性を研究者と組織行動論の専門家が確認し、第18項目に軽微な表現調整を施したうえで、全項目を確定した。
4. データ収集：クロス・マーケティング社の登録パネルから募集し、研究の趣旨を説明したうえで同意を得た参加者に対して、ウェブ上で回答を求めた。
5. 再検査手続き：J-PIBSの再検査信頼性を検証するため、同一の参加者に対し、第2回調査（2023年12月21日～26日）を第1回調査の1週間後に実施した。第1回調査終了時に、再調査の目的と手順を説明し、参加者の同意を得たうえで第2回目の回答を依頼した。再検査間隔として1週間を設定したのは、測定対象である認知的傾向が短期間で大きく変化しにくいこと、および記憶効果や反応の学習効果が最小限に抑えられるとされているためである (Streiner & Norman, 2008)。
6. 倫理的配慮：調査の実施にあたり、福井県立大学「人を対象とする研究等における人権擁護・倫理委員会」による承認を得ている（承認番号：S2023007）。

【結果と考察】

第1報において因子構造の確認を行った結果、原尺度と同じ4因子構造モデルは統計的に支持されず、3因子解の採用が妥当であると判断された。そこで本研究では、3つの下位尺度から構成されるモデルとして、それぞれの信頼性および

構造的妥当性を検討した。

第1下位尺度（4項目）の信頼性係数は、1回目測定においてCronbachの $\alpha = .865$ 、McDonaldの $\omega = .867$ 、2回目測定において $\alpha = .889$ 、 $\omega = .890$ と、いずれも高い内的一貫性を示した。再検査信頼性として算出した級内相関係数 (ICC(3,1)) は.712 (95%CI [.676, .745]) であり、良好な水準にあった。第2下位尺度（3項目）についても、1回目の $\alpha = .789$ 、 $\omega = .769$ 、2回目の $\alpha = .806$ 、 $\omega = .812$ と安定した信頼性が確認され、ICC = .732 (95%CI [.698, .763]) と、こちらも良好な再検査信頼性を示した。一方、第3下位尺度（2項目）は、1回目の $\alpha = .660$ 、 $\omega = .672$ 、2回目の $\alpha = .705$ 、 $\omega = .715$ と他の下位尺度と比較して低く、ICCも.554 (95%CI [.509, .593]) と中程度以下の水準にとどまり、測定の安定性に課題が認められた。

構造方程式モデリングによるモデル適合度の検討では、3因子モデルにおいてGFI = .975、CFI = .976、RMSEA = .060、SRMR = .034、AIC = 133.653と良好な適合度が得られていた。本研究では第3下位尺度の信頼性の低さを考慮し、これを除外した2因子モデルで再分析を行ったところ、GFI = .978、CFI = .980、SRMR = .036と引き続き良好な適合度を示した。またAICは93.671を示し、より簡潔なモデルであることが示された。RMSEAは.070とわずかに上昇したが、許容範囲内にとどまっていた。以上の結果を踏まえ、本研究では第3下位尺度を除外し、第1および第2下位尺度から成る2因子構造モデルを最終的な測定モデルとして採用した。

なお、当初第1下位尺度は原尺度と同様に「不完全さの拒否」と命名していたが、4項目の内容を精査した結果、その内容が「不合理な万能感」を示していると解釈されるため、下位尺度名を「不合理な万能感」に改称した。第2下位尺度については、原尺度と同様に「不合理な楽観」とした。

これらの結果は、第1および第2下位尺度が測定対象とするポジティブイラショナルビリーフの構成概念について、十分な信頼性および構造的妥当性を有していることを示している。今後は、本研究で確立された2因子モデルに基づき、J-PIBSの構成概念妥当性検証を進めていく予定である。

【利益相反】

本研究については、開示すべき利益相反関連事項はない。

【主要引用文献】

Collard, J. J. & Fuller-Tyskiewicz, M. (2021). Positive irrational beliefs and mental health. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 39, 335–354.

Table 1 確認的因子分析の結果

	項目	M	SD	因子 負荷量	共通性
F1：不合理な万能感					
6	私は状況を見誤ることはない。	1.82	0.70	.89	.76
5	私はミスをしたくない。	1.52	0.65	.82	.60
7	私は、自分が選んだことに失敗することはない。	1.80	0.69	.77	.69
8	私は決して間違ったことはない。	1.77	0.75	.65	.48
F2：不合理な楽観					
15	私は、自分には良いことしか起こらないと思っている。	1.90	0.78	.91	.74
17	私はこれからも常に幸運だろう。	2.11	0.83	.75	.63
16	私は、最高のものだけを期待している。	2.15	0.81	.58	.38

(もりもと こうたろう)

英国保育者がポジティブに評価する雇用の特徴

管理職と保育者の視点の違いに注目して

○山本 睦¹
(¹ 常葉大学保育学部)

キーワード：英国保育者、Flexibility、園の環境

【目的】

山本(2024)は、保育園の管理職複数同時インタビューを対象とした日英比較分析において、管理職のマネジメントが分業されている英国と分業されていない日本では、会話の接続に大きな違いがあることを示した。

本研究では、すべて1対1の対面状況で実施したインタビュー・データを意味論的に分析した。これまで「園の環境評価」とは、「子どもにとって良い環境」をターゲットにした評価(埋橋,2016; 太田ら,2022)であり、保育者は評価者としての役割を担うが、「保育者にとって良い(就業)環境」の視点はない。英国と日本では、保育実践における集団性に大きな違いがあり(山本,2023)、また資格制度とその処遇についても区別の明確さの視点において異なる。

そこで本研究では、「園内業務の分担」についてのインタビューを実施し、その回答を「評価」の側面と「分担」も含めた業務上のルールやその価値の側面について、意味論レベルでカテゴリー分けをし、高頻度に出現した内容を抽出することを目的とする。

【方法】

対象：2022年6月と10月にインタビューに参加した保育者9名、管理職8名。

手続き：筆者が各施設を訪問し、管理職と保育者を別々にインタビューした。本研究では管理職が複数同時にインタビューに参加した場合は除き、すべて1対1の対面インタビューで実施した。最初に役職名や保有資格、園の特徴(収容幼児数、職員数、運営形態など)を質問した。その後、「業務の分担」の内容について質問を行った。

分析方法：カテゴライズは話された内容に沿ってカテゴライズした。「評価」については147セグメント、「分担」については249セグメントが抽出された。2名の研究者による一致率を検討した結果、Cohenの κ 係数は、「評価」については0.99、「分担」については1.00となった。

【結果と考察】

	英国 > workers	英国 > 管理職	合計
園内業務の分担	0	5	5
賃金・報酬・雇用システム	13	20	33
分担の内容	20	26	46
困難の解決	15	20	35
環境構成 配置	7	44	51
代替可能性	8	10	18
やるべきこと・就業ルール	15	33	48
不満な点	5	8	13
合計	83	166	249
N = 文書	9	8	17

1.管理職と保育者の「分担」に関するカテゴリーの出現頻度
Table1 「分担」に関する内容と頻度

249セグメントを意味内容で分類し、管理職と保育者間で出現の偏りがあるかを検討した。その結果、 $\chi^2(7) = 16.6756, p < .05, \text{Cramer's } V = 0.26, \text{検出力} .8569$ で有意な結果が得られた。残渣分析により、「環境構成 配置」のカテゴリーにおいて、管理職が有意に多いことが示された。

2.「環境構成 配置」の具体的な内容

「環境構成 配置」の内容を更にカテゴライズしたところ、Table2の一次カテゴリー5つが抽出された。最も多か

Table2. 「環境 配置」× ポジティブな評価の内容・度数	英国
ベア・システムの採用	3
> シフト・システム	2
> ベア・システム	1
園の雰囲気	10
> 異動(昇進・病氣・欠員補充)	1
> 不利益なし	1
> 家族的雰囲気	2
> 子ども主体	1
> 協働的雰囲気	1
> 野外での活動	1
> 保育者に支援的な環境	2
> 教育理念の一貫性	1
子どもの少なさ・保育者の多さ	16
> 正規職員の多さ	6
> 登録と同時に保育する子どもの数が異なる	2
> スタッフ全員で全ての場所で働く	1
> 保育士は家族を担当する	1
> 分業の効果 子ども・スタッフ比率の管理	3
> 担当する子どもの少なさ	3
担当クラス(継続性・有資格者の配置)	10
> 乳児と幼児、双子の配置分け	4
> 自分の子どもとは別部屋	1
> 各部屋の担当を継続	3
> ルーム・リーダーが計画責任者	1
> 部屋ごとに有資格者を配置	1
Flexibility(環境・子どもの通園・労働時間)	12
> 労働時間のflexibility	1
> 多業種の運営	1
> 開園は1年中	1
> KeyのFlexibilityと移行期間の設定	3
> 子どもの通園のFlexibility	4
> 環境のflexibility	2

れる。
【利益相反】利益相反はありません。

【引用文献】
太田麻美子・三輪正太郎・小原愛子・岡田直美(2022) 幼児教育における評価指標の現状と分析：発達評価と環境評価の観点に基づいた分析を中心に. *教育経済学研究*, 2, 27-41.
こども家庭庁(2023) こども大綱.
埋橋玲子(2016) 保育の質的尺度 ECERS-R との関係及び日本での『保育環境評価スケール』実践からの示唆. *イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ, 秋田喜代美・淀川裕美(訳)「保育プロセスの質」評価スケール：乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を促えるために*. 明石書店, 101-108.
山本睦(2023) 創造性を育む英国の保育実践：「本物の学習」に着目して. *保育・幼児教育研究年報*, 1, 25-35.
山本睦(2024) 保育施設での複数管理職との会話における＜訂正＞と＜同意＞の日英比較. *常葉大学保育学部紀要*, 12, 1-10.

(やまもと ちか)

自己批判の質的変容を促進する教育プログラム開発の試み

失敗後の動機づけを効果指標とした予備的検証

○巻田晴香¹ 及川昌典（非会員）²

(¹同志社大学大学院心理学研究科 ²同志社大学心理学部)

キーワード：自己批判，動機づけ，心理教育

【目的】

失敗経験は動機づけを低下させ、学業不振や社会的孤立、さらには引きこもりといった深刻な社会的問題に発展するリスクが指摘されている（内閣府, 2019；文部科学省, 2022）。このような背景から、失敗後の動機づけをいかに維持・回復させるかは、応用心理学における重要な課題である。

従来の研究では、自己批判は一般的に、動機づけを損なう要因として扱われてきた（Dweck & Reppucci, 1973）。しかし近年では、自己批判には動機づけを高める側面もあることが示されつつある。たとえば Norem（2008）は、適切に活用された自己批判が改善の契機となることを指摘している。

こうした新たな視点を発展させ、巻田ら（2023, under review）は、能力への自己批判と努力への自己批判を区別することの重要性を指摘し、前者は動機づけの低下と関連するが、後者は動機づけの促進と関連することを示している。こうした知見は、失敗後の心理的回復プロセスに重要な示唆を与える。

本研究では、このような新たな知見を応用し、自己批判の質を変容させる教育的介入の有効性について実証的に検討する。特に近年では、オンライン形式の教育プログラムへの需要が高まっている。対面型の指導に比べて注意資源が限定されがちなオンライン形式の教育プログラムでも、努力への自己批判を促進し、能力への自己批判を抑制できる可能性を明らかにすることは、動機づけの回復支援に関する理論的貢献、自己批判の機能に関する理解の深化、オンライン心理教育の新たな可能性の提示の3点において実践的な意義がある。

以上を踏まえ、本研究では以下の仮説を検証する。

1. プログラム参加後、能力への自己批判は低下するだろう。
2. プログラム参加後、努力への自己批判は増加するだろう。
3. プログラム参加後、自己改善および状況解決に向けた動機づけが高まるだろう。

【方法】

参加者 本研究は研究倫理審査を経て実施された（承認番号：KH25018）。大学生37名が参加し、同意取得後に予備実験を行った。動画視聴ページの滞在時間が動画の長さに満たなかった14名を除いた23名（男性6名、女性17名、平均年齢19.91歳、 $SD = 1.04$ ）を分析の対象とした。

手続き

（1）失敗経験の記述と初期評価

参加者は、目標達成に失敗し、自己批判（行動や性格に対する否定的評価）を行ったエピソードを想起し、その内容について自由記述を行った。また、発生から経過した日数も回答した。その後、当該失敗に対する能力・努力への自己批判（5項目）、および状況解決・自己改善に関する動機づけ（7項目）について、7

件法（1＝全くそう思わない～7＝非常にそう思う）で回答した（巻田ら, 2023, under review に準拠）。

（2）教育動画の視聴

能力・努力への自己批判と動機づけの関係を解説する教育動画を視聴した。この動画は Kambara et al.

（2023）の介入動画を参考に、公認心理師の助言を得て作成された。動画の内容は3部構成であり、第1部では自己批判の定義とその心理的影響、第2部では自己批判の質と動機づけとの関係、第3部では理解度を確認するクイズとその解説が含まれていた。各動画の長さは2～4分程度であった。

（3）動画内容理解度の測定

動画視聴後、動画の内容に関する正誤問題に回答を求めることで、参加者の理解度を確認した。

（4）自己批判の再評価

参加者は再び最初の失敗経験を想起し、努力への自己批判を意識してその内容を記述した。その後、再度、能力・努力への自己批判、ならびに状況解決・自己改善の動機づけについて再評価を行った。

【結果と考察】

動画内容理解度 出題された正誤問題3問中、全てに正答した参加者は21名（91.30%）、1問の誤答があった参加者は2名（8.70%）だった。よって、注意資源が割かれにくいオンライン環境においても、多くの参加者が内容を理解できていたと考えられる。

能力、努力への自己批判 能力への自己批判2項目の内的整合性が低かったため、単項目で分析を行った。対応のある t 検定の結果、「自分の能力のなさについて批判する」は有意に低下したが（ $t(22) = 6.15, p < .001, d = 1.28$ ）、「自分がこの状況でうまくやれる能力を持っていないことを批判する」は低下傾向を示したが有意ではなかった（ $t(22) = 1.92, p = .067, d = 0.40$ ）。努力への自己批判は有意に低下した（ $t(22) = -3.24, p = .004, d = -0.68$ ）。

自己改善・状況解決の動機づけ 自己改善の動機づけ5項目のうち内的整合性が高かった2項目の平均得点は有意に増加し（ $t(22) = 2.46, p = .022, d = 0.51$ ）、状況解決の動機づけは有意な変化は認められなかった（ $t(22) = 1.59, p = .126, d = 0.33$ ）。介入の効果を高めるため、今後は筆記やホームワーク等の組み合わせなどが必要だろう。

【引用文献】

Kambara, K., Matsumoto, M., Hako, S., Shigematsu, J., Yokoyama, S., & Ogata, A. (2023). An intervention to promote concrete thinking style in young adults: Effects on depressive symptoms and its protective factors. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 81, 101857.

巻田晴香・及川昌典・及川晴（2023）. 努力または能力への自己批判が失敗後の動機づけに与える影響. 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第87回大会（まきた はるか・おいかわ まさのり）

潜在クラス分析による学校教員の心理的職務状態の分類

——バーンアウト症状と職務負荷認知および専門性向上意識を変数として——

○磯和壮太郎¹ 今井田貴裕²

(¹名古屋芸術大学教育学部 ²仁愛大学人間学部)

キーワード：学校教員、心理的職務状態、潜在クラス分析

【目的】

学校教員（以下、教員とする）の多忙や精神的健康が問題となっており、この問題解決のためにこれまでに様々な検討が行われてきた（e.g. 嘉村他, 2024）。しかしながら、例えばバーンアウトやそれを抑制する要因など、教員に係る個々の要因に対する検討は行われてきているものの、それらを総合した研究は管見の限り見られない。職務における教員の心理的な状態を類型化し、それを予測する要因を検討することには実益があろう。そこで本研究では、その先駆けとして潜在クラス分析による教員の心理的職務状態の類型化を行う。

【方法】

分析対象者 Web 調査サービス Surveroid に登録している教員を対象とし、2021 年 11 月下旬（調査 1）と 2022 年 2 月初頭（調査 2）に実施した調査において、回答に欠測値のない 281 名（ $M_{\text{age}} = 47.61$, $SD_{\text{age}} = 10.60$ ）を分析対象とした。

使用尺度 職務負荷認知（Perceived Job Demands: PJD）は学校教員の職務多忙感・負担感尺度（磯和・今井田, 2023a, b）にて測定し、全項目を用いて尺度得点を得た。専門性向上意識（Need for Professional Development: NPD）は学校教員の専門性向上意識尺度（磯和・今井田, 2020）にて測定し、全項目を用いて尺度得点を得た。バーンアウト症状は久保（1998）の日本版バーンアウト尺度（「患者」を「児童生徒」に修正）にて測定し、情緒的消耗感（Emotional Exhaustion: EE）、脱人格化（Depersonalization: D）、個人的達成感の低下（Degrees of Personal Accomplishment: DPA）それぞれの尺度得点を得た。

倫理的配慮 本研究は名古屋芸術大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（名古屋学第 246 号）。

【結果】

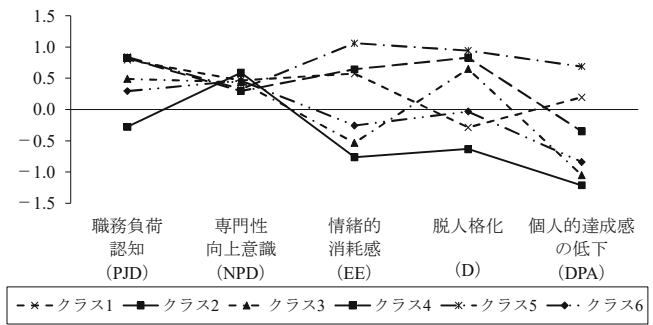
潜在クラス分析には Gaussian 混合モデルを用い、2～8 クラスのモデルを比較した。その結果を Table 1 に示した。適合度（BIC = -3840.97）、各クラスのカテゴリ化率（事後確率）の中央値（.88）、最小値（.40）、最小クラスサイズ（30 名）から、6 クラスモデルを採用した。このモデルは、統計的・実務的観点からも信頼性の高い分類と判断された。

Table 1
潜在クラス分析のモデル比較

モデル クラス数	適合度 BIC	事後確率		クラス別度数（全体N = 281）							
		最小値	中央値	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
2クラス	-3713.64	.50	1.00	73	213	—	—	—	—	—	—
3クラス	-3728.23	.40	.95	73	149	64	—	—	—	—	—
4クラス	-3747.84	.43	.94	41	86	33	126	—	—	—	—
5クラス	-3752.22	.35	.92	45	81	89	30	41	—	—	—
6クラス	-3770.62	.40	.88	41	33	46	47	30	89	—	—
7クラス	-3788.84	.39	.85	41	33	50	38	18	86	20	—
8クラス	-3816.69	.35	.85	41	32	17	39	17	81	21	39

次に、採用した 6 クラスモデルの各変数について、理論的中央値を 0、標準偏差を 1 として標準化したうえでその平均値を比較した。その結果を Figure 1 に示した。なお、紙幅の都合で統計値は略した。

Figure 1
各クラスのプロファイル



結果より、クラス 1 は PJD, NPD, EE が高く、D がやや低く、DPA が中庸であったため、「意欲維持・情緒消耗型」とした。クラス 2 は PJD がやや低く、NPD が高く、EE, D, DPA が低かったため、「理想型」とした。クラス 3 は PJD がやや高く、NPD と D が高く、EE がやや低く、DPA が低かったため、「安定・対人距離型」とした。クラス 4 は PJD, EE, D が高く、NPD がやや高く、DPA がやや低かったため、「意欲維持・中等度バーンアウト型」とした。クラス 5 は、すべての変数が高いかやや高かったため、「重度バーンアウト型」とした。クラス 6 は、PJD と NPD がやや高く、EE, D, DPA は中庸かやや低かったため、「活性・良好型」とした。また、推定された潜在クラスは、2, 6, 1, 3, 4, 5 の順に健康度が高いと考えられた。

【考察】

本研究の結果から、PJD, NPD, EE, D, DPA によって 6 つのクラスが推定された。PJD については、「理想型」を除いて高いかやや高かったことから、教員の職務負荷が高い状況がうかがえた。また、バーンアウト症状についても、EE のみが高い、D のみが高いといったクラスが見られたが、DPA のみが高いクラスは見られず、またいずれのクラスにおいても NPD は理論的中央値よりも高いかやや高かった。このことから、多くの教員は職務に対して多忙や負担を感じており、バーンアウトに陥る者もいるが、そのなかでも教職に対する専門性を高めようという意識は維持していると言えた。教育の質の維持・向上に向けて、このような教員が健全な状態で教職を全うできるよう、より健康度が高いクラスへ移行するための要因の究明が急がれる。

今後の課題として、大規模調査による再現性の確認や、心理的職務状態が理想的なクラスの前測要因、および、クラスの遷移要因を検討する必要がある。

【利益相反】

利益相反（conflict of interest: COI）関係にある企業はないが、名古屋芸術大学令和 4 年度特別研究費の助成対象である。

【引用文献】

嘉村 直樹・松尾 敏実・平田 淳（2024）. 教員のメンタルヘルス対策に関する一考察 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 8, 159-170.

（いそわ そうたろう・いまいだ たかひろ）

選択法によるTCT創造性検査の課題の性質

課題ごとの測定内容の検討

○高下 梓¹ 岸 学² (非会員) 黒岩 誠³ (非会員)
(¹松本看護大学看護学部 ²東京学芸大学 ³明星大学)

キーワード：創造性検査 選択法 大学生

【目的】近年、学校教育などにおいて、創造性の涵養（文部科学省，2017）や、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成（中央教育審議会，2021）の大切さが指摘されている。創造性の育成の場では、より簡便な評価方法が求められるものと考ええる。本邦における創造性の評価方法のひとつに、TCT 創造性検査（早稲田大学創造性研究会，2000）がある。この検査は独創性を評価の中心にすえ、独創的発想の出現の可能性を明確にする方法を取り、提示された課題に対して被検者が回答を自ら考えて記入する。反応の多様性、評価に高度な習熟が要求されること等から、選択法による検査作成の試みがなされてきた（黒岩他（2010），高野他（2010）；高下他（2011）；寺澤他（2014）など）が、2014 年の研究発表をさいごに約 10 年が経過し、途上のままである。本研究は、選択式の TCT 創造性検査において各検査課題が測定しようとしているものを明らかにするために、2013 年時点の調査データをもとにして、探索的な検討を行うことを目的とする。

【方法】

研究対象：東京都内にある 4 大学の大学生 602 名。

調査時期：2013 年

課題：記述式の TCT 創造性検査の反応例をもとに作成された選択法による TCT 創造性検査。課題別に 16 種の選択肢を示し、気に入った順に 3 つの回答を求めた。倫理的配慮：調査実施当時、所属機関における研究倫理審査の手続きは行われていなかった。研究協力者への協力依頼にあたっては、匿名性への配慮や、研究に協力しないことによる不利益はないこと等を伝え、個人の自由意志を尊重したうえで、質問紙調査が実施された。データ使用にあたっては、2013 年の調査に関わった研究者の承諾を得た。

Table 1 TCT 創造性検査の各課題

言語性	用途テスト	カンヅメのあきカンの使い方について容器的用途からどの程度かけ離れた発想ができるかをみる。
	原因推定テスト	エピソード中の人物の行動に対して意外と思える原因をどの程度設定できるかをみる。
	課題づけテスト	デパートに注文どおりの品物が届かなかったことに対して巧みな課題をどの程度作ることができるかをみる。
非言語性	四点描画テスト	四点の正方形的特徴にとらわれずにどの程度かけ離れた描画ができるかをみる。
	想像力テスト	立体視しやすい図形からどの程度意外なものを想像できるかをみる。
	図案発見テスト	まとまった図案からアンバランスな図案や分離図案がどの程度発見できるかをみる。

※発想タイプは、4種類の基本カテゴリー（d, m, o, e）にわけられる。
d：課題の常識的枠組みを受け入れた発想
m：課題の枠組みを受け入れながら視点転換を図る発想
o：課題の情報のうち特定の情報に着目し、不必要な情報を捨象した柔軟な発想
e：課題の枠組みに全くとらわれない、かけ離れた発想。

【結果】602 名の回答のうち、気に入ったもの（3 つ）に 1 つでも未回答がある場合と、重複回答がある場合は、その課題は回答欠損とみなして集計した。計 64 種類の反応例の「1 番気に入ったもの」の選択率は、0.00%の反応例が 1 つあった以外は、0.33%～31.06%の範囲であった。1 番から 3 番までの回答を総合した選択率は、1.00%～57.48%の範囲であった。課題ごとに提示した選択肢を基本カテゴリー別にまとめた選択率を Table2 に示す。選択率の高い順は、用途テストと想像テストでは $d > m > o > e$ ，原因推定テストと四点描画テストは $o > d > m > e$ ，課題づけテストでは $d > e > m > o$ ，図案発見テストは $d > o > e > m$ であった。

Table2 課題別の選択率

		d		m		o		e	
		n	%	n	%	n	%	n	%
言語性	用途	728	40.31%	519	28.74%	455	25.19%	104	5.76%
	原因推定	629	34.83%	316	17.50%	685	37.93%	176	9.75%
	課題づけ	643	35.96%	387	21.64%	249	13.93%	509	28.47%
非言語性	四点描画	485	26.90%	363	20.13%	721	39.99%	234	12.98%
	想像	696	38.67%	612	34.00%	266	14.78%	226	12.56%
	図案発見	1098	61.00%	140	7.78%	348	19.33%	214	11.89%

【考察】どの課題・基本カテゴリーにおいても、一定の被検者によっていずれかの反応例が選ばれていた。また、課題によって基本カテゴリー別選択率の特徴が異なることが示唆された。記述式検査の 6 下位検査では、それぞれ異なった情報処理法や活用能力を求めている（早稲田大学創造性研究会，2000）。また、記述式の TCT 創造性検査が被検者に自由な反応例の発想を求めるのに対して、選択法は気に入った反応例を選んでもらう課題である。このことから、選択法の場合には被検者自身が発想しえない反応例を目にする可能性があると同時に、反応例のどれを気に入っているかという主観性が問われる。検査方法は異なるが、これらの要因が選択式検査における選択率の特徴に関わっているものと考えられ、今後この点をさらなる分析によって検討したい。

【利益相反】本研究における利益相反（COI）はない。

【引用文献】

中央教育審議会（2021）.「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）Retrieve d June 3, 2025, from https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
黒岩 誠・久米 稔・高下 梓・成田 猛・内藤 美智子（2010）. 選択法による TCT 創造性検査におけるタイプ・グループの検討（1）そのⅠ 言語性テスト 日本教育心理学会 第 52 回総会発表論文集，427.
文部科学省初等中等教育局教育課程課（2017）. 初等中等教育における創造性の涵養と知的財産の意義の理解に向けてー知的財産に関わる資質・能力の育成ー Retrieved June 3, 2025, from https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tyousakai/kensho_hyoka_kikaku/2017/consortium_kentou/dai1/siryou4.pdf
高野 隆一・久米 稔・寺澤 美彦・伊賀 憲子・三島 正英（2010）. 選択法による TCT 創造性検査におけるタイプ・グループの検討（1）そのⅡ 非言語性テスト 日本教育心理学会 第 52 回総会発表論文集，428.
高下 梓・久米 稔・黒岩 誠・成田 猛・内藤 美智子（2010）. 選択法による TCT 創造性検査作成の試み（1）そのⅡ 四点描画テスト 日本心理学会第 74 回大会発表論文集，893.
寺澤 美彦・黒岩 誠・高下 梓・伊賀 憲子・高野 隆一・内藤 美智子・三島 正英・久米 稔（2014）. TCT 創造性検査と MSC 創造性構え検査のバッテリーとしての機能 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集，278.
早稲田大学創造性研究会（2000）. TCT 創造性検査 前野書店

（たかした あずさ・きし まなぶ・くろいわ まこと）

中老年における幸福感・未来展望の比較

量的調査と老年期の漁師への予備的面接調査

○白石奈津栄 三宅沙侑美
(岡山大学)

キーワード：幸福感，未来展望，老年期，漁師，混合研究法

【目的】

漁業従事者（以下、漁師）の高齢化と後継者不足は深刻化しており、地域経済や食料供給にも影響を及ぼす喫緊の課題である。白石他（2024）は、漁業の担い手確保の観点から、漁師の職業的魅力および事業継続に関わる要因に着目し面接調査を行う為に、幸福感と未来展望に関して質問紙調査を行い交差遅延効果モデルにより分析を行った。その結果、幸福感が未来展望における「開放」と「曖昧」の予測因子であることが示され、明るい未来展望を持つためには幸福感を高めることが重要である事が示された。これを踏まえ、漁師の幸福感や未来展望の実態を明らかにするため、中年期の漁師への面接調査を実施した。その結果、「大漁＝幸福」という価値観や、親の影響、伴侶との出会いが幸福感に関与していることが示唆された。中年期漁師の幸福感を高める為に、気候変動などに合わせ、価値観を脱成長にシフトすることが可能となるサポート（販路拡大など）が考えられた。一方で、老年期の漁師に関する知見は乏しい。そこで本研究では、中年期と老年期の幸福感・うつ・未来展望における年代差を検討し、その結果を基に仮説を立て、今後の漁師への大規模面接調査に向けて、老年期の漁師に予備的面接調査を行う。

1. オンライン調査

【方法】調査協力者および手続き 40 歳以上 585 名（男性 307 名，女性 278 名（ $M=66.30, SD=13.42$ ）歳）を分析対象とした縦断調査（Time 1：2022 年 7 月中旬，Time 2：2023 年 10 月上旬）を行った。また、量的研究の結果を踏まえて老年期の漁師 1 名に半構造化面接調査を行う。本研究は 2024 年基礎教育保障学会で発表したデータの再分析を行った。

（1）未来展望：白石・堀内（2022）の MFTP 尺度 12 項目。（2）幸福感：角野（1994）の SWLS5 項目，7 件法。（3）うつ：古川ら（2002）の K6 項目，5 件法。なお，（1）～（3）の項目の最後に不良回答チェック項目を配置した。本研究は岡山大学社会文化科学研究科研究倫理委員会（社_2022_03）の承認を得た。

【結果】js-STAR1.9.6 を用いて年代（中年，老年）と時期（Time 1，Time 2）を独立変数，SWLS，K6，MFTP（開放，制限，曖昧）を従属変数とする 2 要因混合計画の分散分析を行った（Table 1）。その結果，年代による以下の主効果が認められた。老年期の方が中年期よりも幸福感が高く（ $F=74.34, p<.01$ ），抑うつ傾向が低かった（ $F=39.42, p<.01$ ）。老年期の方が未来に対してより開放的（ $F=41.94, p<.01$ ）かつ制限を意識しており（ $F=14.70, p<.01$ ），一方で未来に対する曖昧さは低かった（ $F=30.82, p<.01$ ）。時期（Time 1 vs Time 2）による変化や，年代と時期の交互作用は認められなかった。

Table1 各変数における年代と時期による 2 要因混合計画の分散分析結果

	中年 (40-59歳, n=194)		老年 (60-99歳, n=391)		主効果			交互作用	
	Time 1	Time 2	Time 1	Time 2	年代(F値)	時期 (F値)	np ²	np ²	np ²
SWLS	2.99	3.00	3.96	3.96	74.34 **	.11	0.02 ns	.00	0.00 ns
	1.42	1.45	1.29	1.24	中年<老年				
K6	1.99	1.91	1.54	1.53	39.42 **	.06	3.43 +	.01	2.13 ns
	1.06	1.07	0.61	0.63	中年>老年		T1>T2		
開放	2.60	2.59	3.06	3.03	41.94 **	.07	0.53 ns	.00	0.05 ns
	0.94	0.92	0.78	0.78	中年<老年				
制限	3.38	3.34	3.56	3.61	14.70 **	.02	0.03 ns	.00	2.41 ns
	0.76	0.75	0.76	0.73	中年<老年				
曖昧	3.42	3.43	3.09	3.14	30.82 **	.05	1.46 ns	.00	0.72 ns
	0.68	0.70	0.70	0.70	中年>老年				

注) 上段は平均値，下段は標準偏差。T1 = Time 1, T2 = Time 2.

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

【考察】

中年期より高齢期の幸福感が高かったのは，先行研究 Carstensen らの社会情動的選択理論を支持する結果であった。この理論では老年期は情動的満足の得られる人間関係だけを選択することで感情的な幸福感を高めるとされているが，本研究では老年期漁師において中年期漁師と異なり，漁業組合や仕事仲間ではなく家族や住んでいる地域の方との関わりを中心とした幸福感の特徴を持つと仮説を立てて調査を行う。

2. 漁師への予備的面接調査

【方法】

対象者 縁故法で協力者を募り老年期の漁師 1 名（A さん）に面接調査を行った。

面接調査項目 （桜永・井上，2017）より，1 親からの影響 2 重要な出会い 3 伴侶からの影響 4 活躍する心を支えてきたものの，4 項目，未来展望研究の先行研究より，幸福感と未来などを問う項目を追加した。（倫理的配慮:本人には匿名で報告許可を得た）

【結果】

A さんは漁獲時に喜びを感じると述べ，孫の存在や妻との外出，地域活動，農作業なども幸福感の源であることが確認された。漁師になった背景には，父親の影響を受けて自然な形で家業を継いだ経緯があった。漁業活動では，妻の物理的支援や，子育て期における「子どものために働く」という心理的支えがみられた。漁師の未来については，後継者不足を深刻な課題と捉えており，経済的理由による離職，親が漁師でない新規参入者にとって船の購入や漁業組合加入に高額な費用がかかること，技術継承の困難さ，兼業の難しさが若年層の参入を阻む要因として挙げられた。

【考察】

A さんの漁師としての幸福感は，「大漁＝幸福」という価値観に加え，家族や地域との関わりなど多様な要素から構成されていた。これは，漁師の生活が漁獲だけでなく，社会的・心理的ネットワークによって支えられていることを示唆している。一方で，漁師の未来に対しては悲観的な見解が示され，特に後継者不足が深刻な課題として認識された。その背景には，収入の不安定さや新規参入の難しさ，技術継承の困難さ，継承を前提とした業界構造など，複合的な要因が関与していた。今後は，本調査を基に多様な年代・地域を対象とした大規模面接調査を行い，より包括的な実態の把握が求められる。

【利益相反】

本研究において開示すべき COI はない。

【引用文献】

角野 善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本版作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 192.

白石 奈津栄・堀内 孝 (2022). 多次元未来展望

(Multidimensional Future Time Perspective: MFTP) 尺度日本語版の開発と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 31, 159–162.

(しらいしなつえ・みやけさゆみ)

離乳期の我が子の特徴に対する親の説明と幼児期のアタッチメント安定性との関連

○福田佳織¹ 森下葉子² 尾形和男³

(¹東洋学園大学 ²文京学院大学 ³放送大学)

キーワード：心的特徴、アタッチメント安定性、離乳期

【目的】Meins et al.(1988)は、生後 35～38 ヶ月齢の子どもを持つ母親を対象に、我が子を説明してもらったインタビュー調査を行ったところ、安定型のアタッチメントを形成した子どもを持つ母親の方が、行動的または身体的特徴よりも心的特徴を用いて我が子を説明する傾向が示された。その後、さらに低月齢の子どもを持つ母親を対象に、子どもとの遊び場面での発話を分析し、乳児の心的状態に言及した頻度とその後のアタッチメントとの関連を示している(Meins et al., 2001; Meins et al., 2002)。

本研究では、上記の Meins et al.(1988)の対象児より幼い 7～10 ヶ月齢の子どもに対しても、心的特徴を用いて子どもを説明することとその後のアタッチメントとの関連性に同様の傾向が見られるか、また、父親においても、同様の結果が得られるかについて検討する。

【方法】(1)対象者：子どもが生後 7～10 ヶ月齢時点でインタビュー調査に、その後、子どもが 1 歳 8 ヶ月～5 歳時点で AQS(アタッチメント Q ソート法)の調査に協力した親 23 名(母親 11 名、父親 12 名)。(2)調査期間：2017 年 8 月～2024 年 11 月に調査を実施した(なお、2020 年 3 月～2023 年 2 月は調査中止)。(3)調査手続き：①離乳期に第一または第二執筆者が家庭訪問し、対象児の特徴を短い言葉で 5 つ表現してもらい、それぞれの特徴についての具体的な内容を尋ねた。インタビューは協力者の許可を得て録音された。なお、他の調査も同時に行ったため、調査全体の時間は 1 時間程度であった。その後、対象児が 2 歳前後の時点(コロナ禍による調査延長ケースの対象児 3 名は 4, 5 歳時点)で再度連絡し、調査の了承を得た家庭に第一および第二執筆者の 2 名で家庭訪問観察による母子 AQS、父子 AQS を実施した。調査時間は 1 時間半～2 時間であった。(4)分析：我が子の特徴について、離乳期の我が子の特徴に対する親の説明に関しては、インタビュー時に「○○ちゃん／くんの特徴を表すような形容詞、あるいは、短い語句など 5 つ挙げてください」と依頼し、その後、挙げてもらった 5 つの特徴に関連する具体的なエピソードを語ってもらった。調査後、それらを文字起こしし、Meins et al.(1988)の 4 つの分類(心的特徴、行動的特徴、身体的特徴、一般的特徴)のうち、心的特徴に該当する語りの部分をピックアップした。そして、各協力者が 5 種類挙げた子どもの特徴の語りを 5 ブロックとして分け、各ブロック内に 1 つ以上、心的特徴の語りがあった場合は「有」、1 つもなかった場合は「無」とした。5 ブロック中いくつかのブロックで心的特徴が出現したか、出現率を算出した。心的特徴のピックアップは、第一執筆者および第二執筆者が独立で行い、相違の箇所は話し合いにて調整した。アタッチメント安定性について、家庭訪問調査後、観察者 2 名は独立でカードをソートし、大きな相違の見られた箇所は話し合いにより調整した。そのソート結果を用い、所定の方法で AQS 得点を算出した。

【結果】(1)心的特徴の出現率：平均値等は Table1 の通りであり、父母間に有意差は見られなかった($t(21)=-.233$, n.s.)。(2)AQS 得点：平均値等は Table2 の通りであり、父母間に有意差は見られなかった($t(21)=-.299$, n.s.)。(3)心的特徴の出現率と AQS 得点との関連：心的特徴の出現率と AQS 得点との関連について、ピアソンの積率相関分析を行ったところ、Table3 の通りとなった。

Table1 心的特徴の出現率の平均値、標準偏差、レンジ

	出現率平均	標準偏差	レンジ
全体	44.35	30.12	0～100
父親	41.67	32.43	0～100
母親	47.27	28.67	0～100

Table2 AQS 得点の平均値、標準偏差、レンジ

	AQS 平均	標準偏差	レンジ
全体	.482	.236	-.082～.944
父親	.466	.194	.052～.730
母親	.496	.276	-.082～.944

Table3 心的特徴の出現率と AQS 得点の相関

	相関係数 (r)	p 値
全体	.528	.010
父親	.527	.078
母親	.563	.072

【考察】Meins et al.(1988)の対象児より幼い 7～10 ヶ月齢の子どもに対しても、心的特徴を用いて子どもを説明することとその後のアタッチメントとの関連性に同様の傾向が見られることが示された。父母別の分析では人数が少ないことから、父母ともに有意傾向の相関であったが、相関係数は父母ともに、関連性があることを語るに十分な大きさが認められた。Luyten, & Fonagy, (2015)は、自己や他者の行動の背後に感情、欲求、願望、態度、目標といった心的状態をみる能力をメンタライジングと呼んでおり、親のこの能力と子どものアタッチメントとの関連があると報告は多くみられる(例えば、Fonagy ら, 1991)。本研究において、親が乳児の我が子に心を見出している(つまり、心的特徴に言及できる)ことは、日頃から乳児のアタッチメント欲求と情動に対してメンタライジングしている可能性があり、それによってアタッチメント安定性が高まったのではないかと推測される。今後は、心的特徴以外の説明や心的特徴の説明量とアタッチメントとの関連についても検討する必要があるだろう。

【利益相反】利益相反 (conflict of interest; COI) なし。

【引用文献】

- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. (1991). Maternal Representations of Attachment during Pregnancy Predict the Organization of Infant-Mother Attachment at One Year of Age. *Child Development*, 62(5), 891-905.
- Luyten, P. & Fonagy, P. (2015). Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment, 6(4), 366-379.
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-Carter, D. (1988). Security of Attachment as a Predictor of Symbolic and Mentalising Abilities: A Longitudinal Study. *Social Development*, 7(1), 1-24.
- Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., & Tuckey, M. (2001). Rethinking Maternal Sensitivity: Mothers' Comments on Infants' Mental Processes Predict Security of Attachment at 12 Months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 42(5), 637-348.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal Mind-Mindedness and Attachment Security as Predictors of Theory of Mind Understanding. *Child Development*, 73(6), 1715-1726.

(ふくだ かおり・もりした ようこ・おがた かずお)

継続してきたことの挫折経験は恩恵が大きい

挫折経験の内容と自己成長と苦境耐性

○本多麻子

(東京成徳大学応用心理学部)

キーワード：挫折経験，適応的諦観，セルフ・コンパッション

【目的】

挫折経験は「学業，人間関係，部活動などが途中でくじけてだめになること，やり遂げる意欲や気力をなくすこと」と定義され，不本意な経験であるものの，挫折経験のとりえ方によってポジティブな変容や成長につなげられる（姜・清沢，2017）。ストレス・コーピング方略において，諦めることはネガティブで非適応的であるとされてきたが，適応的諦観とは「自己や状況のネガティブな側面をそのまま受け入れつつも，そこにこだわらない前向きな態度」と定義され，精神的健康の向上のためのレジリエンス要因ととらえられる（菅沼他，2018）。セルフ・コンパッション（SC）とは「傷ついた他者をいたわるように，自分に対して慈しみの気持ちを向けること」である（Neff, 2003）。SCには自分への優しさ，共通の人間性，マインドフルネスという肯定的側面と，自己批判，孤独感，過剰同一化という否定的側面があり，ウェルビーイングの向上や潜在能力の発揮をもたらす。積極的関与とは「積極的で充足感のある心の状態」であり，自信，専念，活力，熱狂の4因子から構成され，バーンアウトに対立する概念である（市村他，2010）。挫折経験のとりえ方と適応的諦観，SC，積極的関与の関連を検討した先行研究は数少ない。本研究では挫折経験の内容と挫折経験のとりえ方と適応的諦観，SC，積極的関与の関連を検討する。

【方法】

対象者 大学生 255 名（平均 20.8±1.6 歳）であった。研究実施に際し，大学内の研究倫理審査委員会の承認を得た。調査票 挫折経験のとりえ方尺度（姜・清沢，2017），挫折経験の影響尺度（姜・清沢，2017），適応的諦観尺度（菅沼他，2018），日本語版 SC 尺度（石村他，2014），競技者の積極的関与尺度（市村他，2010）を用いた。フェイスシートでは年齢，性別の記入と，目標達成における不本意な出来事の内容について学業，人間関係，継続してきたこと，その他から選択させた。目標に対する難易度，重要性，努力度についてそれぞれ 5 段階（0, 25, 50, 75, 100 %）で回答させた。調査手続き 大学の授業において集団式で実施した。あるいは個別に調査票を配布し，記入後に回収した。

分析方法 各質問紙の得点を算出し，相関を求めた。不本意な出来事の内容に基づき，学業，人間関係，継続の3群を設定した。群ごとに各質問紙の平均得点と SD を求めた後，分散分析を行った。

【結果】

相関分析の結果，適応的諦観は，自己成長，普遍，対人配慮，苦境耐性と正の相関があり，意欲喪失，自己脆弱感と負の相関があった。SC は自己成長と正の相関があり，ダメージ，意欲喪失，自己脆弱感，他者不信と負の相関があった。積極的関与は自己成長，対人配慮，苦境耐性と正の相関があり，意欲喪失，自己脆弱感と負の相関があった。

各群における各得点の平均，SD，統計結果を表 1 に示した。1 要因分散分析の結果，適応的諦観，SC，積極的関与の各得点に差はなかった。人間関係群の意欲喪失得点は継続群よりも高く，人間関係群の他者不信得点は学業群と継続群よりも高かった。継続群の対人配慮得点は学業群よりも高く，継続群の苦境耐性得点は人間関係群よりも高かった。

表1 各群における各得点の平均(上段)，SD(下段)，統計結果

群	学業	人間関係	継続	統計結果		
	(n=76)	(n=65)	(n=110)	F(2, 240)	p	偏η ²
適応的諦観	31.12	30.58	31.55	0.71	.492	.006
	0.63	0.64	0.49			
セルフ コンパッション	77.13	74.97	77.05	0.80	.451	.007
	1.40	1.43	1.10			
積極的関与	53.47	52.97	56.37	2.10	.125	.017
	1.46	1.49	1.14			
ダメージ	20.28	20.31	19.28	0.99	.372	.008
	0.68	0.69	0.53			
自己成長	23.26	23.54	23.47	0.08	.924	.001
	0.51	0.52	0.40			
普遍	11.96	11.49	11.74	0.52	.593	.004
	0.32	0.32	0.25			
意欲喪失	6.50	6.72	5.86	3.70	.026	.030
	0.26	0.27	0.21			
自己脆弱感	14.88	14.80	13.45	2.70	.069	.022
	0.56	0.58	0.44			
対人配慮	17.43	18.94	19.27	3.68	.027	.030
	0.55	0.56	0.43			
他者不信	9.66	12.51	10.61	8.72	.000	.068
	0.49	0.50	0.38			
苦境耐性	9.49	9.00	10.15	3.59	.029	.029
	0.34	0.35	0.27			

【考察】

挫折経験を自己成長ととらえるほど，適応的諦観，SC，積極的関与は高く，挫折経験を意欲喪失ととらえるほど，適応的諦観，SC，積極的関与は低かった。挫折経験の影響として，苦境耐性と対人配慮が高いほど，適応的諦観と積極的関与は高く，自己脆弱感が高いほど，適応的諦観，SC，積極的関与は低かった。継続群では人間関係群よりも苦境耐性と対人配慮が高く，意欲喪失と他者不信が低かった。挫折経験を自己成長ととらえて苦境に耐えるほど，割り切りや再選択などの建設的な諦めや自分を慈しみ，対象と積極的な関わりができると示唆された。人間関係における挫折経験と比較して，長期的な取り組みにおける挫折経験は苦境耐性や対人配慮を高めて，意欲喪失や他者不信を低めると示唆された。

【利益相反】利益相反はありません。

【引用文献】

- 市村 操一他 (2010). バーンアウトに対するポジティブ心理学的アプローチ 東京成徳大学臨床心理学研究紀要, 10, 127-144.
- 石村 郁夫他 (2014). 日本語セルフ・コンパッション尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 東京成徳大学臨床心理学研究紀要, 14, 141-153.
- 姜 信善・清沢 彩夏 (2017). 挫折経験のとりえ方が個人に及ぼす影響についての検討 富山大学人間発達科学部紀要, 11, 1-11.
- Neff, K. D. (2003). Ten development and validation of a scale to measure self-compassion. *Self and Identity*, 2, 223-250.
- 菅沼 慎一郎他 (2018). 精神的健康における適応的諦観の意義と機能 心理学研究, 89, 229-239.

(ほんだ あさこ)

高齢潜在看護師によるアドバイスの戦略

Web 版対人関係小集団訓練プログラムでのアドバイス内容の質的分析

宮島直子

(北海道大学大学院保健科学研究院)

キーワード：高齢潜在看護師、Web 版小集団訓練プログラム、アドバイザー、質的分析

【目的】わが国の看護師不足は大きな問題であり、様々な取り組みがなされている。その中で、潜在看護師の復職を目的とした報告が注目されるが、その対象の多くは定年退職前の潜在看護師であり、定年後の高齢潜在看護師への取り組みに関する報告は見当たらない。専門的知識と経験が豊富な高齢潜在看護師は、医療における貴重な人的資源であり、その活躍が期待される。そのため研究者が開発した Web 版対人関係スキル訓練プログラム (Sukitoki) のアドバイザー役として、高齢の潜在看護師が活躍できるのではないかと考えた。

そこで本研究は、高齢の潜在看護師に、アドバイザー役をお願いして、そのアドバイスの戦略から、高齢の潜在看護師のアドバイスの特徴を明確にすることを目的とする。

(Sukitoki プログラムの概要)

研究者は、看護職者の離職防止対策として、Web 版対人スキル小集団訓練プログラム (2017 年) を開発した。プログラムの構成員は、相談者 1 名、アドバイザー役 3 名、進行役 1 名である。インターネットを介してホームページからプログラムに参加する。画面はテキストチャットあり、文字だけでコミュニケーションを行う。Sukitoki プログラムは、不規則勤務の看護職者が参加できるように、いつでも、どこからでも参加できるというコンセプトで、リアルタイムではなく、決められた時間枠の中で、コメントを読んで、コメントを入力する方式を取り入れている。画面に入った際には、コメントのやりとりが連続して見えるようになっている。また参加者は匿名でイラストキャラクターを用いて行う。プログラムの大きな枠組みは SST (Social Skills Training) を取り入れた。

【高齢潜在看護師の定義】

本研究において、高齢潜在看護師とは、看護師の免許保有者のうち、衛生行政報告例で報告されている就業場所において就業していない 63 歳から 75 歳未満の看護師とした。

【方法】

調査対象：Sikitoki プログラムにアドバイザー役として参加した高齢潜在看護師 3 名の、一相談に対するコメントを抜き出し、一文を一データとして質的に分析した。文脈から意味内容を捉え、類似性を基にカテゴリー分類し、その特徴を記述した。

今回の相談内容 (個人情報保護のために一部支障のない範囲で情報を変えています)

A さん：総合病院の病棟看護師 7 年目です。ローテーションしてきたばかりの私に、上司から「あなたは役割を与えないとしないでしょ」と言われ、業務委員になりました。みんなが何らかの役割を引き受けてやっているといます。私としては今までの病棟でもその時々で一生懸命にやってきましたつもりです。まだ、私のことをよく知らない、これからの上司から言われる覚えはありません。マイナスなレッテルはどうしたらよいでしょうか。

アドバイザー役の 3 名は、60 代前半で、本プログラムの経験は 3 回目が 2 名、2 回目が 1 名であった。

相談内容との関係では、全員、ローテーションや異動の経験があり、2 名は管理職の経験がある。

アドバイザー役が行う 3 回のコメントの入力内容は下記である。

1 回目：挨拶とウォーミングアップへの参加 (ex.好きな食べ物)、相談者への質問

2 回目 (アドバイス)：相談者の良かった点のフィードバック、更に良くする方法の提示

3 回目：相談者への応援メッセージ

【結果】アドバイザー役からなされた相談者への質問は大きく次の 3 つの内容であった。「相手との関係で記憶に残っている他のエピソード」「業務委員に指名されたことで相談者の不利益になった事実があるか」「相談者の過去の類似した体験の有無」

質問への回答を得て行ったアドバイスは、全 1,323 文字、25 行であった。データからコードを抽出して、意味の類似性から最終的に 7 つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーを【 】、素データを「 」で示す。カテゴリーは【相談者を察する】【相談者を褒める】【いろいろな立場からの考えや気持ちを代弁する】【相手に直接尋ねてみることをすすめる】【状況が変わる可能性を示唆する】【少しずつ努力することをすすめる】【その他】であった。主なデータを下記に示す。

【相談者を察する】では、「ローテーションしたばかりで、日々の業務を覚えるのに必死であったと思います。」「一生懸命に頑張っているところに、業務委員という役割を与えられて、とても負担感があった事でしょう。」「今までと違う環境に置かれ、自分が当たり前だと思っていた仕事内容が、見方を変えると当たりの事ではなく感じる場面があるかも知れません。」「上司からの言葉について自分の中で流さないで悶々としながら考えているという A さんは看護師の仕事に真摯に向き合っていて凄いなと思います。」などのコメントがあった。【いろいろな立場からの考えや気持ちを代弁する】では、「私が上司の立場なら『担当ではない』(他でのエピソード)という表現が心に残ってしまうかも知れないと思いました。」「上司が委員を任命したことについては A さんに業務委員として何か期待することがあるのではないのでしょうか。」「自分が A さんの立場ならその判断をひと言伝えるかなと思いました。」「キャリア 7 年目となると他のスタッフからの役割期待は大きいと思います。」など。

【考察】高齢の潜在看護師は、相談者を多方面から察することできていた。それは、臨床経験が豊富で患者さんとの関わりの中で、対象を把握する力が養われているためと考えられた。また、相談者、相談者の悩みの相手やその周囲の人々をイメージ出来、その考えや気持ちを代弁することができていた。特に、相談者と同じローテーションの経験があることやローテーションしたばかりの後輩の相談にのった経験より、時間的経過の中で、その悩みがどのように変わっていくのかある程度予想がついているためと予想された。また、相手に直接尋ねることをすすめたり、少しずつ努力することをすすめたりすることは、臨床経験に加え、社会生活を送る上の基本的スキルとして、人生経験からの学びが活かされていることが予想された。そのような、豊富な臨床経験と人生経験に裏打ちされたアドバイスは、有効と見せた。

【利益相反】本研究における利益相反はありません。本研究は JSPS 科研費 20K10706 の助成を受けたものです。
(みやじまなおこ)

精神科多職種連携の実効性に及ぼす 心理的安全性の影響に関する探索的検討

○異儀田はづき¹ 古屋健²

(¹ 立正大学大学院心理学研究科博士後期課程 ² 立正大学心理学部)

キーワード：多職種連携, Interprofessional Collaboration, 心理的安全性, 成果

【目的】医療における多職種連携（Interprofessional Collaboration 以下 IPC）が有効に機能するには、その要因を体系的に解明し、必要な条件を明らかにすることが求められる。先行研究では、IPC の成果に直接影響を与えるプロセス要因として、チームの凝集性や信頼関係に関する因子が挙げられている（異儀田・古屋, 2023）。近年、チームのパフォーマンスを高める職場環境要因として心理的安全性が注目されている。心理的安全性とは、率直な発言や疑問、アイデアを安心して話せる対人関係のリスクが取れる環境を指す（エドモンドソン著/野津訳, 2021）。精神科 IPC についても、チームのアウトカムを高める要因のひとつとして心理的安全性の要因は注目される。そこで本研究では、精神科 IPC の実効性と心理的安全性との関連について、多職種カンファレンスの参与観察を通じて探索的に検討することを目的とした。

【方法】2023 年 9 月～2024 年 3 月に医療機関の精神科病棟にて多職種カンファレンスの参与観察を継続的に行い、話し合いの内容を記録した。毎回のカンファレンス終了時に参加者（看護師、医師、精神保健福祉士、心理士、薬剤師、作業療法士）に、その日の話し合いに関する評価 3 項目についての質問紙調査を行った。また観察期間終了時には、参加者を対象に心理的安全性 7 項目および IPC のアウトカム指標 6 項目（「主観的満足」と「医療ケアの質」各 3 項目）から成る質問紙調査を行った。本研究は立正大学心理学研究科研究倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号：G2022006）。

【結果】1. 多職種チームの構成と分類

その日の話し合いの評価 3 項目は 17 回の話し合いについてのべ 79 名、心理的安全性 7 項目と IPC のアウトカム 6 項目は 34 名から回答を得た。観察した多職種カンファレンスは、病棟、対象患者、実施方法、メンバー構成を基準に 5 チームに分類した。同じ病棟でも異なる患者に対し別メンバーで実施する場合は別チーム、複数患者を同一メンバーで連続して検討する場合は同一チームとした。

5 チームについて、心理的安全性得点とカンファレンスにおける発言の偏り（司会者を除く発言量 1 位と 2 位の独占率）をもとに、「心理的安全性低群（独占率が高い）」「心理的安全性中群（独占率が低い）」「心理的安全性高群（独占率が低い）」の 3 群に分類した。なお、心理的安全性高群は、発言の独占率は中群と同程度だが、カンファレンスでの発言内容にサポーティブな応答が多いことから、心理的安全性がより高いと判断し、高群に分類した。

2. 心理的安全性とその日の話し合いの評価との関連

心理的安全性とその日の話し合いに対する評価との関連を検討するため、心理的安全性 3 群間に、その日の話し合いに関する評価 3 項目と合計得点の評定平均に差があるかどうかを一元配置分散分析で検定した。その結果、「今日の話し合いでは成果は上がったと思いますか」「今日の話し合いに満足できましたか」の 2 項目と合計得点において、有意差が認められた。多重比較の結果、いずれの指標においても、低群よりも高群の得点が有意に高かった（表 1）。

表1 心理的安全性とその日の話し合いの評価の関連

		<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (<i>df</i>)
今日の話し合いでは率直に意見を述べることはできましたか	低群	24	4.6	0.8	0.566 (2, 76)
	中群	29	4.6	0.6	
	高群	26	4.8	0.6	
今日の話し合いでは成果は上がったと思いますか	低群	24	4.2	0.6	7.015 *** (2, 76)
	中群	29	4.4	0.6	
	高群	26	4.8	0.5	
今日の話し合いに満足できましたか	低群	24	4.1	0.9	5.234 ** (2, 76)
	中群	29	4.6	0.6	
	高群	26	4.7	0.5	
その日の話し合いの評価3項目合計得点	低群	24	12.9	1.9	4.734 * (2, 76)
	中群	29	13.6	1.3	
	高群	26	14.3	1.6	

****p* < .001, ***p* < .01, **p* < .05

3. 心理的安全性と IPC のアウトカムとの関連

心理的安全性と IPC のアウトカム指標との関連を検討するため、心理的安全性 3 群で、アウトカム指標（主観的満足、医療ケアの質、アウトカム 6 項目合計得点）の平均値に差があるかどうかを一元配置分散分析で検定した。その結果、「医療ケアの質」とアウトカム 6 項目合計得点で有意傾向が認められ、心理的安全性低群より高群の方が高かった（表 2）。

表2 心理的安全性と IPC のアウトカム指標との関連

		<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (<i>df</i>)
主観的満足	低群	10	9.9	2.8	2.203 (2, 31)
	中群	16	10.7	2.2	
	高群	8	12.1	1.4	
医療ケアの質	低群	10	11.0	2.1	2.84 † (2, 31)
	中群	16	11.5	1.9	
	高群	8	13.0	1.3	
6項目合計得点	低群	10	20.9	4.7	2.897 † (2, 31)
	中群	16	22.2	3.6	
	高群	8	25.1	2.6	

†*p* < .01

【考察】心理的安全性が高く発言が分散していたチームでは、その日の話し合いの満足度・成果評価の平均が有意に高かった。一方、アウトカム指標でも有意傾向が認められ、低群より高群で平均が高かった。このことから、心理的安全性の高さは連携の質に影響する可能性があり、連携への影響を介して IPC のアウトカムへも影響すると考えられる。本研究はサンプル数が少なく、因果関係の特定には限界があるが、精神科 IPC カンファレンスでは、心理的安全性が主観的評価に重要な役割を果たすことが示唆された。

本研究は JSPS 科研費 JP25K13946 の助成を受けた。

【利益相反】本研究で開示すべき COI はない。

【引用文献】異儀田はづき・古屋健（2023）精神科医療機関における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセスの検討、立正大学心理学年報, 14, 31-40。

エイミー・C・エドモンドソン著/野津智子訳（2021）恐れのない組織 - 「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす、英治出版株式会社。

（いぎた はづき・ふるや たけし）

推しへの思いにおける性差

○山岡重行

(聖徳大学心理学科)

キーワード：推しへの熱中、推し活、推しの性別、調査対象者の性別

【目的】近年、「推し」「推し活」という言葉が人口に膾炙するようになった。「推し活」とは、推しのライブやイベントへの参加、関連グッズの購入、推しの誕生日祝いなどさまざまなファン活動の総称であり、その対象が「推し」である。「推し」は実在するアイドルや俳優、芸人、スポーツ選手などだけでなく、実在しないアニメやゲームのキャラクター、さらには建築物や鉄道、食品など人間以外の様々な領域の対象も「推し」と呼ばれる。菊池（2020）は、低迷する日本経済の中で推し活（オタ活）の経済効果に日本政府や経済界が着目したために、「推し活（オタ活）」が社会的に肯定されるようになったことを指摘している。

本研究は、推しの性別と回答者の性別により推しに対する思いがどのように異なるのかを検討することを目的にする。例えば、男性アイドルのファンはほとんど女性だが、女性アイドルのファンは男性だけではなく女性ファンも多い。本研究では、推しに魅力を感じる側面や推しへの恋愛感情などの意識に性差が見られるかどうか検討する。

【方法】調査対象者 首都圏私立大学2校の19歳から24歳の大学生男女219名（男性57名、女性162名）平均年齢19.24歳（SD=1.142）

調査時期 2022年7月から10月。

使用尺度 本研究のために作成した「推しへの熱中尺度」8項目、男性の推しへの思いに関する質問16項目と女性の推しへの思いに関する質問16項目を使用した。推しへの思いに関する質問は、推しを「その男性／その女性」と表現した箇所以外は全く同じ質問である。回答方法はいずれも、「1:全くあてはまらない～5:とても良くあてはまる」の5件法である。

手続 心理学関連の授業を履修している学生を対象に調査を依頼した。Excelで作成した調査用紙をダウンロードしてもらい、回答記入後アップロードしてもらう形で回収した。

【結果】男性版と女性版の推しへの熱中尺度の同じ質問を合計したものに主成分分析を実施した。得られた成分は1つであり、.638-.821の負荷量を示した($\alpha=.882$)。

推しへの熱中度の平均点で調査対象者を二分し、推しへの熱中度高群と低群とした。本研究の従属変数に、推しへの熱中度(以下、熱中度とする)と回答者の性別を級間要因、推しの性別を級内要因とした3要因分散分析を実施した。

容姿 回答者の性別の主効果、推しの性別の主効果、それに回答者の性別と推しの性別の交互作用が認められた。女性回答者の方が男性回答者より、また推し男性よりも推し女性の容姿に強い魅力を感じていることを示す有意差が認められた。また、回答者の性別と推しの性別の交互作用から、男性回答者は推し男性の容姿に感じる魅力が他の群よりも低いといえる。

内面 熱中度の主効果と回答者の性別の主効果、それに3要因交互作用が認められた。熱中度高群は低群よりも、女性回答者は男性よりも推しの内面に強い魅力を感じている。3要因交互作用から、男性回答者は推し男性の場合、熱中度低群の方が高群より内面に魅力を感じる傾向が強いが、他の条件では熱中度高群の方が低群よりも推しの内面に魅力を感じる傾向が強いといえる。

能力 推しの性別の主効果と回答者の性別と推しの性別の交互作用が認められた。推し女性よりも推し男性の能力に強い魅力を感じている。交互作用から、男性回答者は推し女性の能力に対して感じる魅力が他の条件より低いといえる。

純粋さ 熱中度の主効果、回答者の性別の主効果、推しの性別の主効果、それに回答者の性別と推しの性別の交互作用が認められた。熱中度高群は低群よりも、女性回答者は男性よりも、推し男性よりも推し女性の純粋さに強い魅力を感じている。交互作用から、男性回答者は推し男性の純粋さに感じる魅力が他の条件より低いといえる。

恋愛対象 熱中度の主効果、回答者の性別の主効果、推しの性別の主効果、それに回答者の性別と推しの性別の交互作用と熱中度と推しの性別の交互作用が認められた。熱中度高群は低群よりも、男性回答者は女性よりも、推し男性よりも推し女性を恋愛対象と見なす傾向が強かった。交互作用から、回答者は異性の推しを同性の推しよりも恋愛対象視し、また、全体的には熱中度高群は低群よりも推しを恋愛対象と見なす傾向が高いが、男性回答者の推し女性に対する恋愛対象視には熱中度の差が見られないといえる。

推しの理想化 熱中度の主効果、推しの性別の主効果、回答者の性別と推しの性別の交互作用と熱中度と推しの性別の交互作用、熱中度と回答者の性別の交互作用が認められた。熱中度高群は低群よりも、推し男性よりも推し女性を理想化する傾向が強い。交互作用から、男性回答者は推し男性も推し女性も同程度に理想化するが、女性回答者は推し男性よりも推し女性を理想化する傾向が強い、また、熱中度高群は推し女性よりも推し男性を理想化する傾向が強いが、熱中度低群ではその差は見られない、女性回答者では熱中度高群は低群よりも推しを理想化する傾向が強いが、男性ではその差は見られないといえる。

推しのように生きたい 回答者の性別の主効果、熱中度の主効果、推しの性別と回答者の性別の交互作用が認められた。女性回答者は男性よりも、熱中度高群は低群よりも推しのように生きていきたいと回答する傾向が強かった。交互作用から、男女とも異性よりも同性の推しを自分の生き方の性役割モデルとしているといえる。

【考察】同性の推しのように生きてみたいと思い理想化することは、同性の推しが生き方の指針を与える存在となっていることが窺われる。熱中度が高くなると異性の推しを恋愛対象と見なすだけではなく、同性の推しほどではないにしても、異性の推しも生き方のモデルとしても見るようになるようである。特に熱中度が高い女性にとっての推し男性は理想化の異性像であり、推し女性は性役割モデルとして自分の生き方の指針として理想化された存在になり、全人格的に魅力を感じるようになる。同様に熱中度が高い男性の推し男性も推し女性も、女性ほど全人格的ではないにしても、生き方の指針として理想化された存在になる。熱中度が低い男性にとっての推し男性は人生の指針となる存在であるが、推し女性は恋愛対象として理想化された記号化された女性なのだろう。熱中度が低い女性にとっての推し女性は生き方の参考となる存在であるが、推し男性は恋愛対象でも理想の異性像でもなく単なる愛玩対象なのだと解釈できる。

【利益相反】利益相反なし (やまおか しげゆき)

待ち時間を分けることと残り待ち時間を伝えることの効果

○富田瑛智¹

(¹ 帝塚山大学心理学部)

キーワード：主観的待ち時間、知覚時間、PANAS

【目的】

近年、店内に空席があるにもかかわらず、店外で待たなければならない飲食店がある。本研究では、店外で待たせた後に店内で待たせることが知覚される待ち時間に対して何らかの効果があるのか、また、見込み待ち時間を提示することが知覚される待ち時間にどのような影響を及ぼすのか検討することで合った。

消費場面の待ち時間は Dubé-Rioux, Bernd, and France (1989)により3段階「事前プロセス」「プロセス中」「事後プロセス」に分類されている。「事前プロセス」は客が店に入店し注文行為を行うまでに発生する待ち時間、「プロセス中」は客が店員に注文を行う段階から食事を終えるまでに発生する待ち時間、「事後プロセス」は客が支払いを申し出て店を出るまでに発生する待ち時間とされる。

本研究が着目する待ち時間（入店前から料理が提供されるまでの待ち時間）は、Dubé-Rioux et al.(1989)の定義に従うと「事前プロセス」と「プロセス中」の一部と考えられる。Maister (2005)によると「事前プロセス」の待ち時間は「プロセス中」より長く感じるとされている。本来、注文後に発生する待ち時間（プロセス中）を、店外で待たせる注文前（事前プロセス）に替えることは客に待ち時間を長く感じさせる可能性がある。

一方で、客の待ち時間を店外と店内に分けることは待ち時間の分割ともいえる。待ち時間を分割することが待ち時間の知覚に与える影響はあまり検討されていない。

本研究では、待つことに関する主観的知覚時間（知覚時間）を「どれくらい待ったとおもつか」および予測時間（分）と定義し、店内と店外でそれぞれ待たせる条件（待ち時間分割条件）と、店内でのみ待たせる条件（待ち時間一括条件）で待つことの知覚時間は変化するか検討した。加えて、見込み待ち時間提示の有無（フィードバックの有無）により待つことの知覚時間が変化するかも検討した。

【方法】

実験参加者 大学生 35 名（女性 27 人、男性 8 人）、平均年齢 19.5 歳（ $SD=1.10$ ）であった。

実験計画 独立変数を待ち時間分割条件 2 水準（分割、一括）とフィードバック条件 2 水準（なし、あり）とした、2 要因参加者間計画であった。従属変数は主観的な待ち時間「どれだけ待ったと思うか」（実時間の予測（分）、主観的待ちの長さ（VAS：非常に短かったー非常に長かった）、日本語版 PANAS（佐藤・安田, 2001）とした。

手続き 待ち時間分割条件（分割条件）の実験参加者は実験室前で実験内容に関するカバーストーリー（前の実験が長引いている）を伝えられ実験室前で待機した。待ち時間一括条件（一括条件）の参加者は、実験室の中に入り、別のカバーストーリー（実験の準備が必要）を受け実験室の中で 20 分待機した。分割条件の参加者は待機から 10 分経過した後、実験室内に移動し、一括条件の参加者と同じ教示を受け 10 分待機した。フィードバックあり群は、分割条件、一括条件のいずれも、それぞれの場所で待機する残り時間をカバーストーリーと共に伝えられた。実験開始から 20 分経過した後、すべての群の参加者は、質問項目への回答を行い、実験参加報酬を受け取り、デブリーフィングを受けた。

【結果と考察】

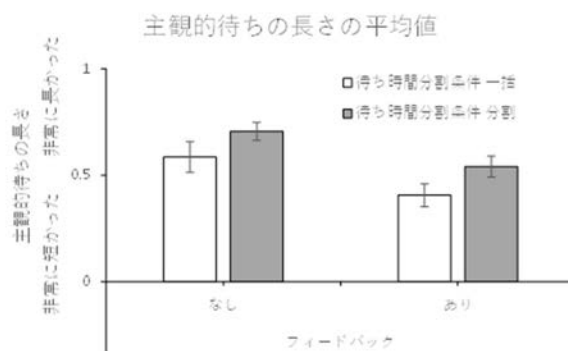
主観的な待ちの長さ（VAS）のデータを従属変数とし、待ち時間分割要因（分割/一括）とフィードバック要因（あり/なし）を要因とした二要因分散分析を行った。その結果、待ち時間分割要因に主効果が得られ $F(1, 31) = 4.72, p = .038$ 、一括条件のほうが待ち時間を短く評価していた。また、フィードバック要因にも主効果が得られ $F(1, 31) = 8.54, p = .006$ 、フィードバックあり条件のほうが待ち時間を短く評価していた。交互作用は得られなかった。主観的な待ち時間（分）の分析では主効果、交互作用は得られなかった。

待ち時間分割条件のほうが主観的待ち時間が長く評価されたため Maister (2005) の主張を支持する結果が得られた。一方で、待ち時間を 2 つに分割すると 1 回目の待ち時間が確定した後、2 回目の待ち時間が生じており、その結果 1 回目の待ち時間に 2 回目が加算され結果的に知覚時間が増えた可能性もある。

また、フィードバックあり条件のほうが主観的な待ち時間が短かった理由として時間イメージの影響が示唆された。フィードバックあり条件では、参加者は事前に待ち時間をイメージし、待った時間と比較することができた。しかし、イメージした時間の長さが実際に待ったと感じた時間より長かったため、主観的な待ち時間を短く感じた可能性がある。

本研究は、実験室環境での短時間条件での検討であったが、現実の待ち時間は本研究よりも長い場合が多々ある。比較的長い待ち時間の検討が必要であろう。

Figure 1 主観的待ち時間の平均値



◆引用文献

- Dubé-Rioux, L., Bernd H. S., and France L. (1989). Consumers' Reactions to Waiting: When Delays Affect the Perception of Service Quality, in Srull, Thomas K. (ed.), *Advances in Consumer Research*, 16, Provo, UT: Association for Consumer Research, 59–63.
- Maister, D. (1985). The Psychology of Waiting Lines, in Czepiel, John A., Michael R. Solomon, and Suprenant Carol (eds.), *The Service Encounter: Managing Employee/Customer Interaction in Service Businesses*, Lexington, MA: D. C. Heath and Company, Lexington Books, 113–123.
- 佐藤 徳・安田朝 (2001). 日本語版 PANAS の作成, 性格心理学研究, 9, 138-139.

(とみた あきとし)

大学生における防犯行動の促進要因の検討

—計画的行動理論に基づいたモデルの検証—

大久保智生

(香川大学教育学部)

キーワード：防犯行動，計画的行動理論，大学生

【目的】

現在、人口減少や少子高齢化の進行に伴い、地域での防犯活動の担い手不足が問題となっている（桐生, 2015; 大久保他, 2018）。地域防犯活動の活性化のためには、地域住民が犯罪を未然に防ごうとする防犯行動を積極的に行うことが重要であり、防犯行動を促進する要因について明らかにする必要がある（山口・大久保・桐生, 2025）。

防犯行動は自身で行う防犯行動と他人と協力する防犯行動に分類できる。自身で行う防犯行動とは自分自身が犯罪被害に遭わないための行動であり、例えば、ひったくりに遭わないためにカバンの位置を変えろといった行動がこれにあたる。こうした自分自身で行う防犯行動には、防犯情報の有用性の評価が影響を与えていることが指摘されている（大場他, 2005）。一方、他人と協力する防犯行動とは、他人との協力体制をとることによる防犯行動であり、例えば、地域防犯活動への参加がこれにあたる。こうした他人と協力する防犯行動には、楽観性や犯罪被害への不安が影響を与えていることが指摘されている（荒井・吉田, 2010）。この2つの防犯行動が犯罪被害を減らすために重要となるが、防犯行動に対して好ましい態度を持っていたとしても、行動に移すとは限らない。こうした態度と行動のずれを説明できる理論として計画的行動理論が挙げられる。

Ajzen (1991) は計画的行動理論を提唱し、行動を規定するのは必ずしも態度だけではないと指摘している。計画的行動理論では、行動を直接規定する要因として、「行動意図」があり、「行動意図」はある行動をとろうという動機であり、「行動意図」が強いほど行動につながっていくと想定されている。この行動意図を規定する要因として、「態度」、「主観的規範」、「行動統制感」が挙げられ、これらの要因の関係性が検討されてきている。

防犯行動を計画的行動理論から説明する試みとして、荒井・菱木 (2019) は対象行動として「防犯のために、イヤホンをはずして歩く」、「居住地域で行われている防犯活動に参加する」を取り上げ、計画的行動理論に基づいたモデルの有用性について検証を行っている。ただし、これらの防犯行動は女性を対象としたものであり、男性については検討されていない。したがって、本研究では、男性も含めた大学生を対象として、自身で行う防犯行動と他人と協力する防犯行動を2種類ずつ取り上げ、計画的行動理論に基づいたモデルの有用性について検討を行う。

【方法】

調査参加者 学生 341 名（男性 176 名，女性 163 名，回答しない 2 名）に対して調査を実施した。

調査内容 ①対象行動：自身で行う防犯行動として「防犯のために、カバンやバッグを肌身離さず持つようにしている」と「防犯のために、安全な場所にのみ行くようにしている」、他人と協力する防犯行動として「防犯における危険箇所の把握をするようにしている」、「地域のために、防犯パトロールを行うようにしている」という4つの対象行動を設定し、それぞれの頻度について7件法で回答を求めた。②行動意図：荒井・菱木 (2019) を参考に、4つの対象行動を提示し、それぞれに対する行動意図1項目について7件法

で回答を求めた。③対象行動への態度：荒井・菱木

(2019) を参考に、4つの対象行動を提示し、それぞれに対する態度4項目について7件法で回答を求めた。④主観的規範：荒井・菱木 (2019) を参考に、4つの対象行動を提示し、それぞれに対する主観的規範1項目について7件法で回答を求めた。⑤行動統制感：Ajzen (2002) や Rhodes & Courneya (2003) を踏まえ、行動統制感は自己効力感と制御可能性とに分け、荒井・菱木 (2019) を参考に、4つの対象行動を提示し、それぞれに対する自己効力感3項目、制御可能性2項目について7件法で回答を求めた。

【結果と考察】

本研究では、荒井・菱木 (2019) で使用された因果モデルの検証を行うため、構造方程式モデリングを用いた多母集団同時分析を行った。その結果、全てのパス係数に男女で等値制約をしたモデルが採用された。

自身で行う防犯行動の対象行動「安全な場所にのみ行く」では、行動意図に対して「態度」(男性: $\beta = .169$, $p < .001$, 女性: $\beta = .208$, $p < .001$)、「主観的規範」(男性: $\beta = .323$, $p < .001$, 女性: $\beta = .379$, $p < .001$)、「自己効力感」(男性: $\beta = .205$, $p < .001$, 女性: $\beta = .254$, $p < .001$) から正の影響がみられた。対象行動に対して「行動意図」(男性: $\beta = .605$, $p < .001$, 女性: $\beta = .545$, $p < .001$)、「自己効力感」(男性: $\beta = .237$, $p < .001$, 女性: $\beta = .265$, $p < .001$) から正の影響がみられた。

他人と協力する防犯行動の対象行動「防犯パトロールを行う」では、行動意図に対して「主観的規範」(男性: $\beta = .575$, $p < .001$, 女性: $\beta = .547$, $p < .001$)、「自己効力感」(男性: $\beta = .314$, $p < .001$, 女性: $\beta = .302$, $p < .001$) から正の影響がみられた。対象行動に対して「行動意図」(男性: $\beta = .675$, $p < .001$, 女性: $\beta = .687$, $p < .001$) から正の影響がみられた。

4つの対象行動すべてにおいて、主観的規範と自己効力感が行動意図を促進し、それが対象行動に影響していた。このことから、防犯行動を促進するためには、周囲の人が防犯行動をしている姿や、自分にもできそうという感覚を持つことができる機会が必要だといえる。

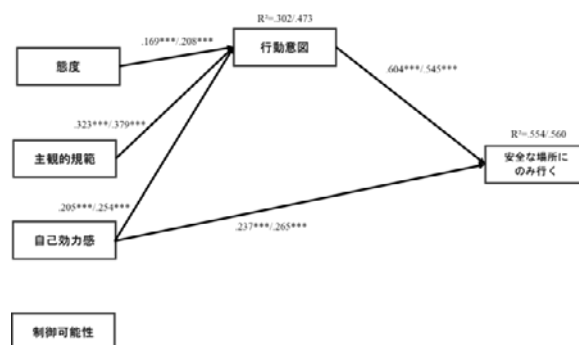


Figure 1 「安全な場所にのみ行く」のパス解析結果

【利益相反】

申告すべき利益相反 (conflict of interest; COI) なし。

(おおくぼ ともお)

男性の伝統的男性性とミソジニーがゲイに対する態度の多次元性に及ぼす影響

○池田 満¹

(¹ 南山大学人文学部心理人間学科)

キーワード:ゲイに対する態度, 伝統的男性性, ミソジニー

【問題と目的】 これまでの同性愛者に対する態度研究で、男性の男性同性愛者（ゲイ）に対する偏見や嫌悪が、女性と比較して、またレズビアンに対するものと比較して高いことが繰り返し確認されている（池田，2025）。このような一貫した結果が見られる要因として、個人の心理的特性だけでなく、男性が集団として形成し、維持する社会的な関係性や、その中で共有される規範が深く関与していると考えられる。こうした男性間の緊密な社会的つながりは「ホモソーシャル」と呼ばれ、しばしば女性蔑視（ミソジニー）や伝統的な「男らしさ」からの逸脱と見なされる要素を排除することで、結束を維持、強化しようとするといわれている。

本研究では、ゲイに対する男性の否定的な態度の背景に、男性のホモソーシャルな傾向の強さを想定し、その影響関係を明らかにすることを目的としている。しかし、ホモソーシャルを直接的、かつ包括的に測定する手法は開発されていない。そこで本研究では、ホモソーシャルを構成する概念である、ミソジニーと伝統的男性性の重視という2つの側面を測定し、ゲイに対する態度への影響を検討する。

【方法】 調査対象者と調査方法 筆者が担当する心理学系の授業の受講生 255 名を対象に匿名での質問紙調査を実施し、106 名から回答を得た。

尺度 伝統的男性性（TM）：伝統的な男性役割態度尺度（渡邊，2017）。ミソジニー（MISO）：好意的性差別意識尺度（吉岡，2017）。同性愛者に対する態度：同性愛者に対する受容感尺度（古長，2016）。これらに加えて、年齢、戸籍上の性、自認する性を尋ねた。

回答者と分析対象 回答者の平均年齢は 19.0 歳、性別は、戸籍上の女性は 78 名、男性は 28 名で、全員が自認する性別と一致していた。本研究では、自認する性をもとに、男性のみを分析対象とした。

【結果】 ゲイへの受容感を基準変数とし、ステップ 1 に TM と MISO の下位因子と性別、ステップ 2 に各下位因子と性別の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った

（Table 1）。その結果、個人的受容感については、ステップ 1 ($R^2 = .181, p < .01$)、ステップ 2 ($R^2 = .270, p < .01$) ともに有意な回帰式が得られた。社会的受容感についても、ステップ 1 ($R^2 = .248, p < .001$)、ステップ 2 ($R^2 = .280, p < .01$) ともに有意な回帰式が得られた。

個人的受容感に対しては、ステップ 2 のモデルにおいて、性別 ($\beta = -.86, p < .001$) と「ジェンダー差異」

($\beta = -.30, p < .05$) が有意な負の影響を、「パターンナリズム」($\beta = .43, p < .05$) が有意な正の影響を示した。さらに、「精神的・肉体的な強さ」と性別の交互作用項が有意な正の影響を示した ($\beta = .77, p < .05$)。これは、「精神的・肉体的な強さ」の重視が個人的受容感に与える影響が男女で異なり、男性においては「強さ」の重視が受容感を高める可能性が示された。

社会的受容感に対しては、ステップ 1 では「女性への優位性」($\beta = .25, p < .05$) が有意な正の影響を及ぼしていたが、この影響は交互作用項を投入することで有意でなくなった。一方で、「精神的・肉体的な強さ」が負の影響を与える傾向 ($\beta = -.26, p < .10$) が示された。

【考察】 本分析の結果、男性は女性と比較してゲイへの個人的および社会的受容感が有意に低いことが改めて確認された。一方、個人的受容感と社会的受容感では、伝統的男性性およびミソジニーの各下位因子による予測パターンに違いが見られ、ゲイへの態度の多次元性が示唆された。

個人的受容感において男性では「精神的・肉体的な強さ」の重視が受容的な方向に作用する可能性が示された。これまでの研究では、ゲイに対する男性のネガティブな態度を示す理由として、ステレオタイプの男らしさを重視する男性にとって、ゲイはこの価値規範に反しており、ゲイを否認することで自身の男らしさを再提示するというメカニズムが提案されていたが、本研究の結果から、この可能性は部分的に否定された。同様に、個人的受容感に対するパターンナリズムの正の効果についても、さらなる検討が必要である。

社会的受容感においては、交互作用が見られず、「精神的・肉体的な強さ」の重視が非受容と関連する傾向が見られたことは、伝統的男性規範の維持が、社会制度としてのゲイの権利容認を阻害する可能性を示唆する。

本研究は、伝統的男性性やミソジニーがゲイへの態度に与える影響の複雑さと、特に男性におけるその現れ方の多様性の一端を明らかにした。今後の展望として、交互作用のメカニズムを、質的アプローチなどを用いてさらに深く探求すること、さらに、伝統的男性性の重視やホモフォビア、ミソジニーを包括するホモソーシャルについての測定尺度の開発などが必要であろう。

【利益相反】なし

【引用文献】

葛西真紀子・松本麻里（2010）. 鳴門教育大学研究紀要, 25, 189-203.
古長治基（2016）. 性別および同性愛者タイプと同性愛者に対する受容感の関連, 九州大学心理学研究, 17, 45-51.
渡邊寛（2017）. 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証, 心理学研究, 88, p. 488-498.
吉岡真梨子（2017）. 好意的性差別意識と性役割意識との関連：パターンナリズム／マターナリズム・ジェンダー差異・異性愛重視の3要素に着目して 学習開発学研究, 10, 149-155.

（いけだ みつる）

Table 1. ゲイへの受容感に対する伝統的男性性とミソジニーの影響（一部）

	個人的受容感		社会的受容感	
	S1	S2	S1	S2
性別(女性:0, 男性:1)	-0.86 ***	-0.86 ***	-1.01 ***	-0.99 ***
精神的・肉体的な強さ	-0.05	-0.20	-0.21	-0.26 †
女性への優位性	0.03	0.00	0.25 *	0.17
ジェンダー差異	-0.21 †	-0.30 *	-0.14	-0.14
パターンナリズム	0.26	0.43 *	0.07	0.10
精神的・肉体的な強さ		0.77 *		0.24
R^2	0.181 **	0.27 **	0.248 ***	0.28 **
ΔR^2		0.08		0.03

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

犯罪不安には性差があるのか？

—犯罪不安，リスク認知，防犯意識，犯罪情報への関心，感情反応に着目して—

○皿谷陽子¹・今井田貴裕²

(¹人間環境大学心理学部，²仁愛大学人間学部)

キーワード：犯罪不安・性別・大学生

【目的】

犯罪不安 (fear of crime) は犯罪被害に対する主観的な感情的反応であり，知見は多い (e.g., Ferraro & LaGrange, 1987)。犯罪不安は，マスメディア等が発信する犯罪情報に接触することで形成される (鳶島, 2020) とされている。したがって，犯罪不安は，様々な情報に触れることによって形成されると考えられる。

さらに，犯罪不安は男性よりも女性の方が感じる人が多い (e.g., Stafford et al., 2007) とされている。我が国においても，女性は，犯罪に対する不安を強く感じることや，防犯意識が高いこと (笹竹, 2008)，犯罪被害リスクを知覚しやすいこと (島田, 2004) が示されている。このことから，犯罪不安の感じ方や，それに付随する心理的要因 (リスク認知，防犯意識，情報への関心，感情的反応) には，性別差が存在する可能性がある。

そこで本研究では，性別に着目し，一般大学生を対象に，犯罪不安の有無とリスク認知，防犯意識，犯罪情報への関心，犯罪に対する感情反応との関連を検討する。

【方法】

調査協力者 平均年齢 19.18 歳 ($SD=1.10$) の大学生 272 名 (男性 172 名・女性 100 名) の協力を得た。データセットは，今井田他 (2024) と皿谷他 (2024) と同一である。

尺度構成 各罪種への犯罪不安の有無は，日工組社会安全研究財団 (2019) の犯罪に対する不安感に関する調査研究を参考に 17 種類の犯罪 (暴行傷害，泥棒空き巣，チカン，特殊詐欺，交通違反など) への犯罪不安の有無 (0. なし，1. あり) を尋ねた。犯罪不安に関する質問項目は，高校生版犯罪不安 (藤井, 2009) により，3 下位尺度 (不審者に対する不安・外出に対する不安。1 人になることに対する不安) を使用した。選択肢は 5 件法 (1. 全く不安を感じない ～ 5. とても不安を感じる) であった。笹竹 (2008) の犯罪不安の尺度の 4 下位尺度 (リスク認知・犯罪不安・犯罪情報への関心・防犯意識) と荒井他 (2010) の犯罪に対する感情的反応に関する尺度の一部を使用した。選択肢は 5 件法 (1. 非常に当てはまらない ～ 5. 非常に当てはまる) であった。

倫理的配慮 所属先の倫理審査委員会の承認を経た。

【結果】

まず，17 種類の犯罪 (暴行傷害，泥棒空き巣，チカン，特殊詐欺，交通違反など) への犯罪不安の有無についての犯罪不安の累積得点 (17 点満点) を男女別に算出した。そして，犯罪不安の累積得点の平均を算出した (男性： $M=4.62$ ($SD=4.08$), 女性： $M=5.90$ ($SD=4.80$))。犯罪不安の累積得点で男女で違いがあるかを検討するために対応のない t 検定を行った。その結果，女性の方が男性に比べて高かった ($t(270) = -2.33, p=.02$)。

次に，犯罪不安得点と犯罪情報への接触，リスク認知，感情的反応，防犯意識との関連を検討するために男女別に Spearman の相関係数を算出した (Table1)。その結果，男性は，各犯罪不安下位尺度すべてに正の相関が認められた ($ps<.05$)。女性では犯罪不安の不審者に関する不安・犯罪情報への関心・防犯意識以外に正の相関が認められた ($ps<.05$)。

【考察】

本研究では，犯罪不安の有無とリスク認知，防犯意識，犯罪情報への関心，犯罪に対する感情的反応は，男女で異なる相関が示された。特に，女性は，犯罪不安と犯罪情報への関心・防犯意識の関連がないことから，犯罪不安があるからといって，犯罪情報への関心や防犯意識が高まるわけではないことが示された。これは笹竹 (2008) の結果とは異なる結果であった。この傾向は，女性の犯罪不安が感情的・情動的反応にとどまり，情報収集や行動変容と必ずしも直結しない可能性を示している (齊藤, 2016)。よって，犯罪不安の感じ方や，それに付随する心理的要因 (リスク認知，防犯意識，情報への関心，感情的反応) に，性別差が存在することが示された。

また，自身が犯罪に巻き込まれるかもしれないという当事者意識は存在していても，それが積極的な対処行動 (例：情報取得，防犯対策) に結びつかない層が一定数存在する可能性がある。性別によって犯罪への対処方略が異なる可能性を踏まえ，性別に応じた当事者意識や防犯態度の形成支援が今後の課題となると考えられる。

【利益相反】

利益相反のある企業は無い。

【引用文献】

- Ferraro, K. F., & LaGrange, R. (1987). The measurement of fear of crime. *Sociological Inquiry*, 57(1), 70-97.
- 笹竹 英穂 (2008). 女子大生の犯罪情報への関心および防犯意識の形成について—リスク認知および犯罪不安の観点から—。犯罪心理学研究, 46(1), 15-29.
- Stafford, M., Chandola, T., & Marmot, M. (2007). Association between fear of crime and mental health and physical functioning. *American journal of public health*, 97(11), 2076-2081.
- 齊藤 知範 (2016). 女性の犯罪不安と防犯行動:社会学的視点にもとづく計量分析.日本行動計量学会大会抄録集, 44, 318 - 321.
- 鳶島 修治 (2020). インターネットでのニュース接触が犯罪不安に与える影響.社会情報学, 8(3), 115 - 128.
- (さがらい ようこ・いまいだ たかひろ)

Table1.

犯罪不安の累積得点と各尺度の男女別層別相関分析の結果

		男性 (N=172)	女性 (N=100)
犯罪不安	不審者に対する不安	.29 ***	.18
	外出に対する不安	.23 **	.31 **
	1人になること に対する不安	.27 ***	.29 **
犯罪意識	リスク認知	.50 ***	.57 ***
	犯罪不安	.38 ***	.35 ***
	犯罪情報への関心	.18 *	.10
	防犯意識	.34 ***	.01
犯罪に対する感情的反応		.50 ***	.46 ***

注. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

夫婦間における家計についての会話の抑制経験

○渡辺伸子¹

(¹ 東北公益文科大学公益学部公益学科)

キーワード：家計，夫婦，会話

【目的】夫婦は、共同で家計を担うこととされている（e.g. 民法第 760 条）。しかしながら、家計について夫婦間で話すことは、立場の異なる二者において対立を生み、心理的な親密さを損なう可能性を孕んでいる。そこで、本研究では、家計について夫婦間で話し合う際に抵抗を感じるかどうかを明らかにしたうえで、抵抗を感じやすい具体的な家計の話題について明らかにすることを目的に調査を行う。

【方法】調査時期 2024 年 9 月 13 日から 20 日にかけて実施した。

調査内容 (a)家計についての会話を抑制した経験の有無を尋ねる項目（1 項目）、(b)(a)に「ある」と回答した場合、「頻度」を尋ねる項目（1 項目、5 件法）、(c)(a)に「ある」と回答した場合、「抵抗感」を尋ねる項目（1 項目、4 件法）、(d)(a)に「ある」と回答した場合、どのような家計についての話題で会話を抑制したのかを尋ねる項目（1 項目、自由記述回答）、(e)回答態度のスクリーニング項目（1 項目）、(f)日本語版経済的脅威尺度（FTS-J；5 項目、5 件法；渡辺・沼田，2023）、(g) 国民生活基礎調査（厚生労働省，2020）の「現在の暮らしの状況」（1 項目）。

調査対象者 関東地方に居住している、30 代から 50 代の者を調査対象者とした。また、年収が 600 万円未満であり、子どものいる核家族の形態で暮らしていることを条件とした。これらの条件を満たす者を探すため、スクリーニング調査を行ったうえで、該当した 1286 人に対し本調査を依頼した。その結果、回答態度に問題のなかった 964 人（男性 478 人、女性 486 人）のデータを分析に用いた。男性の年齢の平均は 44.6 歳（ $SD=7.8$ ）、女性の年齢の平均値は 44.0 歳（ $SD=7.7$ ）であった。調査には、株式会社クロス・マーケティング社の QiQUMO を利用し、パネルも利用した。

【結果】家計についての会話を抑制した経験（以下、抑制経験）のある者の割合は、男性で 35.8%（171 人）、女性で 48.6%（236 人）であった。抑制経験の有無と性別による χ^2 分析の結果は有意であった（ $\chi^2=16.15, df=1, p<.01$ ）。残差分析の結果、男性では抑制経験がない者が、女性では抑制経験がある者が、有意に多かった。また、男性では抑制経験がある者が、女性では抑制経験がない者が、有意に少なかった。

抑制経験の有無によって FTS-J の得点が異なるか検討するため、 t 検定を行ったところ、有意な差が見られた

（ $t(962)=8.87, p<.01$ ）。FTS-J の得点は、抑制経験あり群が 3.81（ $SD=0.87$ ）、抑制経験なし群が 3.32（ $SD=0.85$ ）であり、抑制経験あり群のほうが高かった。

抑制経験のある者の「頻度」の平均値は、3.16（ $SD=1.41$ ）、「抵抗感」の平均値は 3.07（ $SD=0.73$ ）であった。「頻度」の 3 のラベルは「2～3 ヶ月に 1 度くらい、話にくいと感じることがあった」、「抵抗感」の 3 のラベルは「話にくいという気持ちは強い」であった。

抑制経験のある者のうち、「どのような家計についての話題で会話を抑制したのかを尋ねる項目」（自由記述）に、意味のある言葉で回答した 394 人の記述を対象に、KH Coder を用いて計量テキスト分析を行った。出現回数が 20 回を超える語は、「子供」（44 回）、「お金」（40 回）、「生活」（32 回）、「学費」（23 回）、「購入」（23 回）、「収入」（22 回）、

「家計」（20 回）の 7 語であった。

共起ネットワークを抽出したところ、5 つのサブグラフが示された。第 1 サブグラフは、「お金」、「話」、「出費」、「毎月」、「支払い」、「貯金」など、毎月のお金の収支の話題であった。第 2 サブグラフは、「自分」、「購入」、「子ども」など、子どものものを購入する話題であった。第 3 サブグラフは、「子供」、「学費」、「教育」、「習い事」など、子どもの教育費の話題であった。第 4 サブグラフは、「家計」、「給料」、「低い」など、家計の状況の話題であった。第 5 サブグラフは、「生活」、「足りる」、「夫」、「小遣い」など、夫のこづかいを含めた、生活費についての話題であった。

【考察】本研究では、家計について夫婦間で話し合う際に抵抗を感じるかどうかを明らかにしたうえで、抵抗を感じやすい具体的な家計の話題について明らかにすることを目的に調査を行った。その結果、次の 4 点が明らかになった。

第一に、家計についての会話の抑制経験には、性差が見られることが明らかになった。抑制経験は、男性で少なく、女性で多かった。一方で、男性で約 3 割、女性で約 5 割が抑制経験があった。このことから、夫婦で家計について話題にする際、話にくいと感じることは、比較的一般的な経験であると考えられる。

第二に、抑制経験の有無によって、経済的脅威に差が見られた。抑制経験がある者は、ない者と比べ、より強く経済的脅威を感じていた。

第三に、抑制経験のある者について、抑制経験の頻度は「2～3 ヶ月に 1 度くらい」であり、家計についての会話への抵抗感は、「強い」という平均像が示された。抑制経験が比較的一般的な経験であることを勘案すると、無視できない頻度と抵抗感であると考えられる。

第四に、抑制経験がある者に、話にくい話題を尋ねたところ、抵抗を感じやすい家計の話題として、毎月の収支、子どもに必要なものの費用、子どもの教育費、家計の状況、生活費の 5 つの内容が見いだされた。主に、生活費と子ども費が話にくい話題であることが示された。

今後は、会話抑制の起きやすい生活費と子ども費の 2 つの家計の話題について、抵抗感に差があるのか検討していく必要がある。また、会話抑制に子の年齢や子の数など家族の発達段階による差があるのかどうか、より詳細な調査が必要であろう。加えて、抑制経験のない者が抑制を生じさせないために実施している行動があるのかどうか明らかにしていく必要がある。

【利益相反】利益相反（conflict of interest; COI）はない。

【引用文献】

厚生労働省 (2020). 2019 年 国民生活基礎調査の概況
渡辺 伸子・沼田 真美 (2023). 日本語版経済的脅威尺度 (FTS-J) の作成 心理学研究, 94, 319-328.

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 JP23K12880 の助成を受けたものです。

（わたなべ のぶこ）

信号機のない横断歩道における ドライバーの一時停止行動の心理的予測因に関する研究

— 罪悪感、向社会性、違反寛容度の役割 —

○木村年晶¹ 古川紘子² (非会員) 内山伊知郎³

(¹ 京都橋大学総合心理学部 ² 同志社女子大学広報部 ³ 同志社大学心理学部)

キーワード：信号機のない横断歩道、一時停止行動、青年と高齢ドライバー

【目的】

運転行動には、環境要因や状況判断だけでなく (Sucha et al., 2017), 規範意識, 向社会性, 罪悪感といった感情的反応を含む心理的要因も影響している (Lucidi et al., 2019)。中でも、罪悪感は規則的・道徳的行動を促進する動機づけの感情として機能することから (Tangney et al., 2007), 運転行動への影響を検討するうえで注目すべき要因である。しかし、これらの心理的要因が実際に一時停止行動にどのように影響しているのか、また青年ドライバーと高齢者ドライバーによってその影響が異なるのかについて、体系的に検討した実証研究はみられない。本研究は、信号機のない横断歩道における一時停止行動に関するドライバーの意思決定について、以下の2つの仮説を用いて検討する。

仮説 1：交通規則違反に対する寛容度が高いほど一時停止行動は少なくなり、交通場面における向社会性や罪悪感が高いほど一時停止行動が多くなる。

仮説 2：罪悪感が一時停止行動に及ぼす正の影響は、青年ドライバーよりも高齢ドライバーの方が大きい。

【方法】

参加者 大学生 195 名 (男性 113 名, 女性 82 名, 平均年齢 20.42 歳, $SD=1.11$ 歳), シルバー人材センター会員の高齢者 184 名 (男性 138 名, 女性 46 名, 平均年齢 = 71.42 歳, $SD=4.18$ 歳) を対象とした。

質問紙 ①交通規則に対する違反寛容度 (内山, 1987) : 9 項目のうち 4 項目 (信号無視, 横断歩道一時停止違反, 追い越し違反, 速度超過) を使用。回答は, 「絶対にいけないことである」から「いけないというより仕方がないことである」の 3 件法。②交通場面における向社会性 (谷田他, 2011) : 27 項目の運転版共感性尺度を使用。回答は, 「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の 7 件法。③日常場面における罪悪感 (石川・内山, 2022) : 21 項目のうち, 表現を一部修正した 17 項目を使用。回答は, 「感じない」から「非常に感じる」までの 4 件法。④横断歩道付近での一時停止行動: 歩行者の「年齢 (若者・高齢者) × 顔の向き (正面・横向き)」の 4 条件のイラストを提示。回答は, 「一時停止する」(1 点), 「停止せず通り過ぎる」(0 点) の 2 件法。

調査手続きと倫理 大学生への調査は講義時間内に実施した。高齢者には, 京田辺市シルバー人材センターを通じて質問紙を郵送し, 協力を依頼した。研究の実施については, 同志社大学心理学部にて承認を得ている (審査番号 KH147)。

【結果】

横断歩道付近での一時停止行動 青年群, 高齢群のそれぞれにおいて, 信号機のない横断歩道での一時停止行動の割合に差があるかを検討した。各群に対し Cochran の Q 検定を実施した結果, いずれも条件間で有意差が認められた (青年群 $Q(3)=338.92, p<.001$; 高齢群 $Q(3)=316.75, p<.001$)。各条件間の比較には Bonferroni 補正による McNemar 検定を行った。分析結果を Figure 1 に示した。

一時停止行動に及ぼす心理的要因の検討 青年群, 高齢群のそれぞれで, 横断歩道付近での一時停止行動 (4 条件) の

合計得点を目的変数とし, 10%水準で有意な説明変数を抽出した。その後, 年齢との交互作用項を含む重回帰分析を実施し, 結果を Table 1 に示した。交互作用が有意であり, 単純傾斜分析の結果, 青年群では違反寛容度および対人場面での罪悪感の得点が高いほど, 一時停止行動得点に有意に低下した。高齢群では有意な傾きは認められなかった。

Figure 1

一時停止行動の条件間比較の結果 all $p<.001$

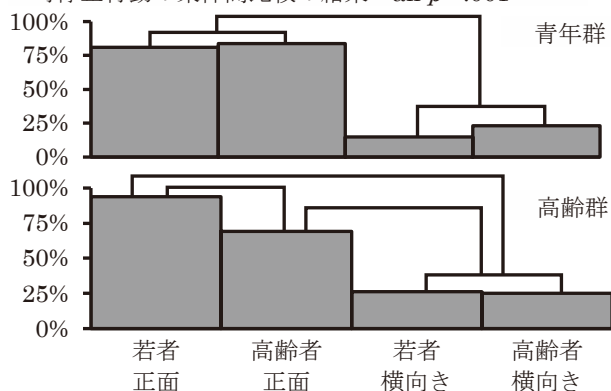


Table 1

一時停止行動の条件間比較の結果 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

変数名	Step 1		Step 2	
	β	B	β	B
違反寛容_速度超過	-.16	-.31 ***	-.16	-.30 **
向社会性_他者配慮	.15	.22 **	.18	.26 ***
向社会性_イライラ	-.14	-.17 **	-.14	-.17 **
罪悪感_規則場面	.18	.26 **	.14	.20 *
年齢群×違反寛容_追越し			.13	.48 **
年齢群×罪悪感_対人場面			.14	.55 *
R^2	.13 ***		.17 ***	
ΔR^2			.04 **	

【考察】

仮説 1 は支持されたが, 仮説 2 は支持されなかった。予想に反して, 青年群では対人場面での罪悪感が高いことが, 一時停止行動の減少と関連していた。これは, 後続車の流れを妨げたり, 歩行者を待たせたりすることへの懸念が高まり, 交差点を「急いで通過すべき」と判断していた可能性がある。その結果, 法的遵守が優先されなかったと考えられる。

【利益相反】

本研究において開示すべき利益相反はありません。

【引用文献】

- Lucidi, F., Girelli, L., Chirico, A., Alivernini, F., Cozzolino, M., Violani, C., & Mallia, L. (2019). Personality traits and attitudes toward traffic safety predict risky behavior across young, adult, and older drivers. *Frontiers in psychology, 10*, Article 536.
- Sucha, M., Dostal, D., & Risser, R. (2017). Pedestrian-driver communication and decision strategies at marked crossings. *Accident Analysis & Prevention, 102*, 41-50.
- Tangney, J. P., Stuewig, J., & Mashek, D. J. (2007). Moral emotions and moral behavior. *Annual review of psychology, 58* (1), 345-372.
- (きむら としあき・ふるかわ ひろこ・うちやま いちろう)

新人のキャリア満足度を高める組織要因の二重経路

～組織的インクルージョンと内部者地位知覚の効果の比較～

○山本しおり¹⁾ 竹内 規彦²⁾

(¹⁾ アフラック生命保険株式会社 (²⁾ 早稲田大学商学大学院)

キーワード：セルフ・エンハンスメント理論、社会的交換理論、キャリア満足度

【研究の目的】 企業で新規参入者（以下、新人）が早期に適応するための「組織社会化戦術」（organizational socialization tactics）は、研究者や実務家により長年検討されてきた（Allen, 2006; Maanen & Schein, 1979; Feldman, 1976）。新人の不安を軽減し必要な態度・知識の習得を支援することで、キャリア満足度など主観的なキャリア成功を高める効果が示唆されている（Seibert et al., 1999; Fang et al., 2011; Ng, 2005）。しかし、組織社会化の促進要因としては個人要因（価値観や性格など）に焦点を当てる研究が多く、組織要因を扱った研究は相対的に少ない（Ashforth et al., 2007; Cooper-Thomas, 2009; 竹内・竹内, 2011）。

組織サポート理論（Eisenberger & Stinglhamber, 2011; Kurtessis et al., 2017）によれば、従業員が組織からどの程度サポートを受けていると知覚するか（組織支援知覚）は、①社会的交換関係の促進と②セルフ・エンハンスメント動機（self-enhancement motive）の充足という2つのメカニズムを通じ、従業員の職場適応や心理的結果に影響を与えるとされる。前者は、組織から好意的に扱われると、従業員は互惠性の原則で恩返ししようとし、忠誠心や仕事熱意が高まる心理的メカニズムを指す（Blau, 1964; Kurtessis et al., 2017）。一方、後者は、人は「自分を肯定的に見たい」という欲求があり、職場で承認されるほど自己評価と将来のキャリア展望がポジティブになるというメカニズムを説明する（Sedikides & Alicke, 2019; Takeuchi et al., 2021）。そこで本研究では、上記の2つの視点が組織社会化戦術にも当てはまるという前提のもと、新人のキャリア満足度向上を2つの組織要因を起点に比較検討する。

第1に、「組織的インクルージョン」（organizational inclusion）は、個人が尊重されつつ、個人の目標と組織の目標の実現に向けて効果的に組織に参加できる状態を指す（Davidson & Ferdman, 2002; Mousa, 2020）。特に若者は、自己成長や能力発揮など内的報酬を重視するため（厚生労働省, 2023）、インクルージョンが高まるほど自己肯定感や組織支援知覚が高まり、セルフ・エンハンスメント動機が満たされる（Sedikides & Alicke, 2019; Perrot et al., 2014）。その結果、キャリア満足度が上昇するモデル（図1）を想定した。

第2に、「内部者地位知覚」（perceived insider status）は、「組織内で自身を内側の人間として認識している程度」（Dai & Chen, 2015, p. 66）と定義づけられ、組織の周辺から中心に組織からの受容度を指す概念である。そのため、新人が組織から正式に受け入れられているという認識が強まると、「互惠性の原則」（Blau, 1964）に基づき、組織から受けている支援を積極的に評価・還元しようとする（Kurtessis et al., 2017）。よって、組織支援知覚が自尊心を介さず、キャリア満足度を高める経路を仮定したモデル（図2）を提起する。

以上、組織社会化段階における新人は、①組織的インクルージョンを組織要因の起点とし、セルフ・エンハンスメント理論に基づくキャリア満足度向上の経路と②内部者地位知覚を起点とし、社会的交換理論に基づくキャリア満足度向上の経路を包摂した2つのモデルを提起し、組織要因と新人のキャリア満足度をつなぐ心理メカニズムの比較検討を行う。

【方法】 (1) データ収集手続き：民間企業に正規従業員として勤務する入社から5年以内の新卒及び中途採用者を対象にアンケート形式の調査を実施した。オンライン・プラットフォームを利用し310名からの有効回答を得た。内訳は、女性が50.6%（男性：49.4%）で

あり、20代が7割を占めた（平均年齢＝31.22）。

(2) 測定尺度：組織的インクルージョン Mousa (2020) による6項目を用いた（ $\alpha = .89$ ）。キャリア満足度 Spurr (2011) の5項目を使用した（ $\alpha = .86$ ）。組織に基づく自尊心 Pierce (1989) が作成した10項目を使用した（ $\alpha = .94$ ）。組織支援知覚 Eisenberger (1986) をもとに、佐藤 (2020)が日本語訳した短縮版の4項目を使用した（ $\alpha = .89$ ）。内部者地位知覚 Stamper & Masterson (2002) による6項目を使用した（ $\alpha = .83$ ）。自尊心 Rosenberg (1965) による10項目を使用した（ $\alpha = .81$ ）。コントロール変数 年齢、性別を設定した。



図1 セルフ・エンハンスメント理論に基づく組織的インクルージョンからキャリア満足度への影響経路モデル

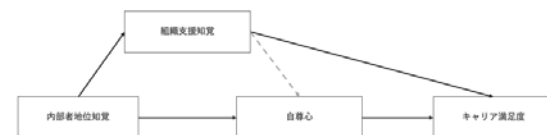


図2 社会的交換理論に基づく内部者地位知覚からキャリア満足度への影響経路モデル

【結果】 図1・2のモデルのパスに従い、階層的重回帰分析及びブートストラップ法に基づく媒介効果の検証を行った。以下が主要な結果である。① 組織的インクルージョンと内部者地位知覚のいずれも、キャリア満足度に正の関係を示した。② 組織的インクルージョンからキャリア満足度へのパスは、組織支援知覚と組織に基づく自尊心によって部分的に媒介されることが明らかとなった。③ 内部者地位知覚からキャリア満足度へのパスは、主に組織支援知覚を通じて媒介されることが確認された。

以上から、両要因がキャリア満足度に与える効果は、基本的にはポジティブでありながら、その背景にある心理メカニズムにはやや異なる側面があることが分かった。組織的インクルージョンは「自己肯定欲求の充足」を通じて組織に基づく自尊心を高めるルートが存在し、内部者地位知覚は「社会的交換」のフレームワークを通じて組織支援知覚を高めるルートが明瞭であった。

【考察】 本研究は、組織社会化戦術における組織要因として、組織的インクルージョンと内部者地位知覚を対比的に検討し、それぞれがキャリア満足度に及ぼす影響と媒介メカニズムを示した点で既存研究に付加価値を与えることができた。具体的には、従来は個人要因が中心だった組織社会化研究に、組織的インクルージョンという新たな組織要因の有効性を示した。この結果は、キャリア構築理論における、個人のキャリアに対する主観的な解釈は環境との相互作用を通じて発達する(Savickas & Porfeli, 2012)ことを裏付けている。特に、組織支援知覚と組織に基づく自尊心を媒介とする経路を特定し、Shore (2011) が課題としたインクルージョンと成果を結ぶ心理メカニズムの理解を促す研究知見を提供した点で、既存研究に一定の前進をもたらしたと言える。実践的には、新人・若手のキャリア満足度を高めるには、独自性と能力発揮を尊重する組織的インクルージョン施策が不可欠であり、上司・同僚からの支援の可視化や自己裁量を活かせる制度や風土の整備が重要であろう。

(やまもと しおり・たけうち のりひこ)

組織におけるサポートのパワーハラスメント抑制効果

—自己愛に注目したパワーハラスメント 6 類型別検討—

○仙波亮一¹

(¹ 京都橘大学経営学部)

キーワード：パワーハラスメント、自己愛タイプ、組織におけるサポート、自我脅威

【問題と目的】

組織機能阻害行動(パワハラを含む)の規定要因としては、自己愛が重要な役割を果たすことが示されている(田中, 2008)。また、自己愛と組織機能阻害行動の関係を扱った自己本位性脅威モデル(Baumeister et al, 1996)によれば、自己愛が強い人は、自己イメージが非常に肯定的であるため、否定的評価を受けると自我脅威を感じやすく、結果として組織機能阻害行動を引き起こす可能性が高いと考えられる。

仙波(2016)は、自己本位性脅威モデルに組織におけるサポートと自己愛タイプを組み込み、自我脅威の知覚から組織機能阻害行動に至るまでのプロセスと、組織におけるサポートがそのプロセスに与える影響を自己愛タイプ別に検討した。この手法をパワハラ研究に援用することで、組織におけるサポートがパワハラを抑制する効果について詳細に議論できると考えられる。そこで本研究では、自我脅威の知覚下において、組織におけるサポートが労働者のパワハラを抑制する効果について、自己愛タイプ別に検討する。なお、パワハラは 6 類型を分けて検討し、実践的意義を高めることを目指す。

【方法】

データ収集期間及び収集方法

2024 年 5 月に、インターネット調査会社に登録している労働者 1,622 名に対してアンケート調査を実施した。

調査項目

- ・フェイスシート：性別(女性 1, 男性 2)、年齢、職業
- ・パワハラに関する項目(6 項目, 10 件法)：厚生労働省の職場のパワハラ 6 類型(身体的な攻撃、精神的な攻撃、人間関係からの切り離し、過大な要求、過小な要求、個の侵害)に基づき、筆者が作成。得点が高いほど、その類型のパワハラを選択する傾向にある。
- ・自己愛人格目録短縮版(小塩, 1998)(30 項目, 5 件法)：3 つの下位尺度(自己主張性、注目・賞賛欲求、優越感・有能感)で構成されており、その下位尺度の得点が高いほど、そのタイプの自己愛傾向が強い。
- ・状態自尊心尺度(田端・池上, 2011)(4 項目, 5 件法)：合計得点が高いほど、自我脅威が強い。
- ・組織サポート尺度(田中・林・大淵, 1998)(3 項目, 7 件法)：合計得点が高いほど、組織からのサポート認知が強い。
- ・部下のサポートの認知尺度(小牧, 1994)(14 項目, 5 件法)：合計得点が高いほど、上司からのサポート認知が強い。

分析方法

労働者を状態自尊心尺度の中央値で高低に分け、低群を分析対象とする。次に、自己愛人格目録短縮版の因子得点に基づき、労働者を 3 タイプに分類する。その後、各自己愛タイプについて、パワハラを従属変数、性別、年齢、職業(第 1 ステップ)、自我脅威、組織におけるサポート(上司・組織サポート)(第 2 ステップ)、自我脅威と組織におけるサポートの交互作用項(第 3 ステップ)を各ステップの独立変数として階層的重回帰分析を行う。

【結果】

主効果

第 3 ステップにおいて、自己主張性タイプでは、「個の侵害」に対して組織サポートに正($\beta=.399, p<.01$)、注目・賞賛欲求タイプでは、「精神的な攻撃」に対して性別に正($\beta=.241, p<.01$), 「過大な要求」に対して性別、経営者・役員に正($\beta=.235, p<.01$; $\beta=.324, p<.001$)、「個の侵害」に対して性別に正($\beta=.250, p<.01$)、優越感・有能感タイプでは、「身体的な攻撃」に対して公務員に負($\beta=-.232, p<.05$)、「精神的な攻撃」に対して性別、経営者・役員に正($\beta=.212, p<.05$; $\beta=.249, p<.01$)、公務員、上司サポートに負($\beta=-.213, p<.05$; $\beta=-.247, p<.05$)、「人間関係からの切り離し」に対して上司サポートに負($\beta=-.239, p<.05$)のそれぞれ有意な主効果が認められた。

調整効果

第 3 ステップにおいて、優越感・有能感タイプにおいてのみ、全類型に対して自我脅威×上司サポートの正(身体的な攻撃： $\beta=.415, p<.01$, 精神的な攻撃： $\beta=.383, p<.01$, 人間関係からの切り離し： $\beta=.339, p<.05$, 過大な要求： $\beta=.294, p<.05$, 過小な要求： $\beta=.355, p<.05$, 個の侵害： $\beta=.315, p<.05$)の有意な調整効果が認められた。

【考察】

自我脅威を知覚した労働者では、自己愛タイプに応じてパワハラの影響が異なり、また組織サポートがパワハラの選択に与える影響にも違いが見られた。

自己主張性タイプでは、組織サポートを認知すると「個の侵害」を選択する傾向が高まり、注目・賞賛欲求タイプでは、男性や経営者・役員が「過大な要求」を選択し、男性は「個の侵害」を選択する傾向が示唆された。優越感・有能感タイプでは、公務員が「身体的な攻撃」「精神的な攻撃」を選択しない傾向があり、男性や経営者・役員は「精神的な攻撃」を選択する傾向が見られた。また、上司サポートを認知すると「精神的な攻撃」「人間関係からの切り離し」を選択しない傾向が見られた。調整効果においては、自我脅威を知覚するとともに上司サポートをも認知すると全種類のパワハラを選択する傾向が見られた。これらの結果は、組織におけるサポートが必ずしもパワハラの抑制に有効に働かず、むしろ過剰なサポートや誤ったサポートがパワハラの発生を助長している可能性を示唆している。

【主な引用文献】

- Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はありません。(せんばりょういち)

多次元尺度構成法による大阪府堺市銘菓の心理的特徴可視化の試み

○秋保亮太¹ 中村早希¹ 大本浩司¹ (非会員)

(¹ 帝塚山学院大学総合心理学部)

キーワード：心理的特徴の可視化，スイーツ心理尺度，ブランド態度

【目的】

地域の和菓子（銘菓）は嗜好品の域を超え、地理・歴史などの特性を反映した文化資産や、地域経済活性化の観光資源など、多様な側面を有する。しかし、和菓子の購入数量は年々減少傾向にあり、その存続が危ぶまれている（e.g., 長谷川, 2019）。これまで以上に銘菓の価値を向上・周知していくためには、従来とは異なるマーケティングが求められるだろう。この点に関して、感性工学では、製品の物理的特性に加えて使用時の感性も考慮した上で製品開発が行われる。こうした心理学的知見を用いた製品開発事例は多岐にわたるものの、銘菓をはじめとするスイーツへの応用に関しては発展途上段階にある（cf., 大本, 2022）。スイーツもまた、味や見た目だけでなく、喫食時に生じる感情などが購買行動や満足度に影響する点で感性の対象となりうる。すなわち、スイーツ喫食時の心理的反応を測定・可視化することで、その価値をより多面的に捉え、新たなポジショニングの手がかりを得られる可能性があるだろう。そこで本研究では、スイーツの中でも堺市銘菓に着目し、その心理的特徴を定量的に測定・可視化することで、従来とは異なる視点からのポジショニング戦略検討の基礎資料を提供することを目的とする。

【方法】

倫理的配慮 本研究は、帝塚山学院大学倫理委員会の承認を得た上で実施した（承認番号 2024-03）。

参加者 SAKAI マルシェ・ワールド茶会-の来場者 94 名（女性 71 名、男性 21 名、その他 2 名、平均年齢 43.24 歳、標準偏差 14.69）、A 大学の大学生 417 名（複数回答あり、女性 291 名、男性 126 名、その他 0 名、平均年齢 20.98 歳、標準偏差 0.66）が研究に参加した。

刺激 堺市銘菓として、大鏡（曾呂利）、大寺餅（大寺餅河合堂）、栗舟（菓庵さとや）、くるみ餅（かん袋）、芥子餅（本家小嶋）、古墳焼（宝泉菓子舗）、のどごし白玉しるこ餅（御菓子司天神餅）、スイートポテト（浜寺創菓庵美乃や）、斗々屋茶碗小（丸市菓子舗）、斗々屋茶碗特大（丸市菓子舗）、肉桂餅（八百源來弘堂）の 11 種類を用いた。

手続き 参加者は、銘菓 1 つを喫食後、下記測定変数に回答した。A 大学の大学生に関しては、最低 1 週間の間隔をあけた上で、複数の銘菓の評価を行った。

測定変数 喫食後の感情的変化や心理的反応を測定するため、大本他（2023）のスイーツ心理尺度（短縮版）のうち、「食べている時から食後」に関する 23 項目を用いた（e.g., 気分が良くなった）。また、喫食した銘菓に対する態度を測定するため、杉谷（2011）のブランド態度尺度から本研究の文脈に合う 15 項目を抜粋し、文言を修正して用いた（e.g., この商品（スイーツ）は際立った個性がある）。各項目について、5 件法で回答を求めた。

【結果】

因子分析 スイーツ心理尺度の因子構造を検討するため、大本他（2023）に従って 6 因子構造を想定した確認的因子分析を行った。その結果、複数項目の因子負荷量が .40 を下回ったため、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、快感情（ $\alpha = .89$ ）、喪失感（ $\alpha = .85$ ）、心身へのネガティブな影響（ $\alpha = .87$ ）、飲み物との組み合わせ（ $\alpha = .79$ ）の 4 因子が抽出された。同様に、ブランド態度尺度についても探索的因子分析を行った結果、肯定的態度

（ $\alpha = .94$ ）と個性知覚（ $\alpha = .76$ ）の 2 因子が抽出された。

多次元尺度構成法 スイーツ心理尺度の 4 因子およびブランド態度尺度 2 因子を用いて、計量的多次元尺度構成法（ユークリッド距離、バリマックス回転）を行った。その結果を Figure 1 に示す。各銘菓の次元 1 の値は、個性知覚との関連が最も強かった（ $r = .84$ ）。対して、各銘菓の次元 2 の値は、喪失感との関連が最も強かった（ $r = .95$ ）。

【考察】

次元 1 は、個性知覚との関連が強かったことなどから、親和性・独自性の軸と解釈した。Figure 1 において、右側の銘菓ほど個性があり印象に残りやすいのに対して、左側の銘菓ほど親しみやすく万人受けすると考えられる。次元 2 は、喪失感との関連が強かったことなどから、充足・余韻の軸と解釈した。上側の銘菓ほど名残惜しさがありもっと味わいたい欲求をもたらすのに対して、下側の銘菓ほど満足感や充実感のある喫食体験をもたらすと考えられる。本研究の知見は、今後のマーケティングや地域振興策検討の基礎資料として活用可能であると考えられる。特に堺市の新銘菓開発時には、競合の少ない心理的特徴を意識することで、従来の銘菓とは異なるポジションを確立できる可能性があるだろう。

【利益相反】

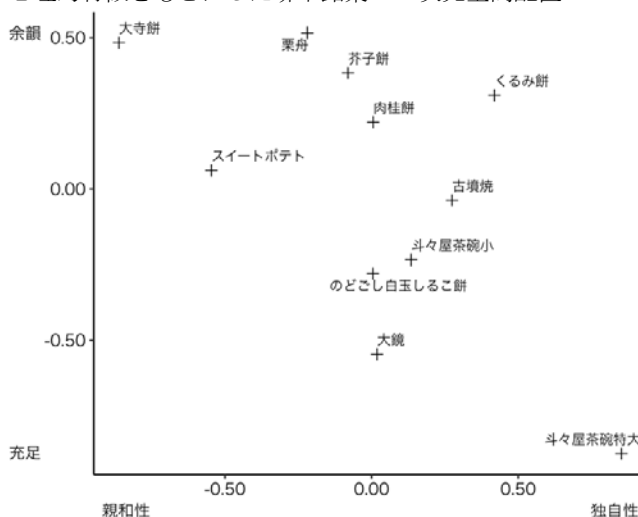
本研究は、さかい利品の杜から協力を得て実施された。

【引用文献】

- 大本浩司（2022）. スイーツに特化した心理学の社会実装—スイーツ心理学®の取組み事例— エモーション・スタディーズ, 8, 23-27.
- 大本浩司・児玉（渡邊）茉奈美・玉越勢治・澤井大樹（2023）. スイーツ心理尺度（短縮版）の作成 帝塚山学院大学研究紀要, 3, 55-74.
- 長谷川弓子（2019）. 伝統産業<和菓子>に民芸運動が与えた影響の一事例：中小企業、島根県松江市「風月堂」の販売戦略. 聖徳大学研究紀要, 30, 111-118.
- 杉谷陽子（2011）. 消費者の態度における感情と認知—「強い」ブランドの態度構造の検討 消費者行動研究, 17, 143-168.
- （あきほ りょうた・なかむら さき・だいもと ひろし）

Figure 1

心理的特徴をもとにした堺市銘菓の 2 次元空間配置



変革型リーダーシップと高業績 HRM システムが経営理念の浸透を通じて従業員のモチベーションに与える影響

～製造業の従業員における検証～

○脇坂正和 竹内規彦¹

(¹ 早稲田大学商学大学院)

キーワード：経営理念、変革型リーダーシップ、高業績 HRM システム

【目的】 日本の製造業は、グローバル展開が進む中で、単なる「ものづくり」ととどまらず、技術革新やデジタル化の進展を踏まえた価値創造型のビジネスモデルへの転換が求められている。このような中、労働力の不足、成長の鈍化、価値観の多様化、テレワークの普及・定着により、企業全体の結束力が弱まっていることが指摘されており、企業の経営理念が果たす役割がより一層重要視されている。

経営理念は、企業が組織として掲げる価値観や信念を表す重要な概念であるものの、統一された定義は存在しないとされている(柴田, 2017)。一般的には、企業が公式に成文化し、社内外に共有する信条や行動の指針として機能する(高尾, 2010)。また、経営理念は多様な名称で表現される場合が多く、経営理念、社是、ミッション、ビジョン、バリューといった言葉が使用されていることが特徴である(野林, 2024)。

こうした中、パーソル総合研究所(2023)の企業理念と人事制度の浸透に関する定量調査では、企業理念を十分に理解し、その内容に同意できる正規雇用就業者は半分にも満たないことが確認されている。本研究では、経営理念の浸透を促すリーダーシップと人事制度として、変革型リーダーシップと高業績 HRM システムに着目する。第1に、変革型リーダーシップは、従業員に新たな視点を与え、使命やビジョンを提示することにより、経営理念を感情的・象徴的に内面化させる装置として機能することが考えられる。一方、高業績 HRM システムは、従業員の能力開発や業績向上を目的とした体系的な人材マネジメントであり、経営理念を制度的・行動的に定着させる仕組みとして作用するだろう。したがって、両者が、異なる側面から相補的に働きかけることで、経営理念の組織内への浸透において重要な役割を果たすと仮定する。

また、本研究では、経営理念の浸透が従業員の心理的オーナーシップを醸成し、モチベーションが高まると仮定する。心理的オーナーシップは、対象に対し「これは自分のものだ」と感じる心理状態である。経営理念が従業員の価値観と一致し内面化されると経営理念に対する帰属意識が生まれ、心理的オーナーシップが形成される。これが内発的動機づけを高め、自発的な行動や組織への貢献意欲を促進すると推測する。

以上の議論を踏まえ、本研究では図1に示す変革型リーダーシップと高業績 HRM システムを起点とし、経営理念の浸透と心理的オーナーシップの醸成を経て、従業員のモチベーションに至ることを想定した仮説モデルを設定し、定量デー

タをもとに検証を行う。なお、モチベーションには、心理的エンパワーメント(Spreitzer, 1995)とプロソーシャルモチベーション(Grant, 2008)を指標として設定した。

【方法】 日本国内に事業所がある企業のうち、製造業に勤務している正社員を対象にした質問票形式によるオンライン・サーベイを実施した。

測定尺度については、以下の通りである。**経営理念浸透** 廣川・芳賀(2023)の尺度から「行動」「共感的理解」「認知」の下位次元を各々4項目の計12項目により測定した。クロンバックの α 係数はそれぞれ、.83、.88、.82であった。**心理的オーナーシップ** Linn & Jon(2004)が作成した7項目を単一尺度で使用した($\alpha=.83$)。**心理的エンパワーメント** Spreitzer(1995)の尺度から「有意義感」「有能さ」「自己決定感」「インパクト」の下位次元を各々3項目の計12項目により測定した。 α 係数はそれぞれ、.91、.89、.87、.86であった。**プロソーシャルモチベーション** Grant(2008)が作成した「自律的な向社会的モチベーション」の3項目及びRyan & Connell(1989)が作成した「統制的な向社会的モチベーション」を表す5項目の計8項目を単一尺度で使用した($\alpha=.81$)。**変革型リーダーシップ** Bass & Avolio(1990)をもとに高石(2013)が作成した「理想モデル」の4項目と「志気を鼓舞する動機づけ」「知的刺激」「個別配慮性」の各々3項目の計13項目を単一尺度で使用した($\alpha=.95$)。**高業績 HRM システム** Takeuchi et al.(2007)が作成した21項目のHRM施策項目を単一尺度で使用した($\alpha=.94$)。**統制変数** 性別、職位、職種を各々ダミー変数にて設定した。

【結果と考察】 分析モデルに従い、階層的重回帰分析を用いて、各仮説の検証を行った。以下がその結果である。

第1に、変革型リーダーシップは、経営理念浸透の「認知」・「共感的理解」・「行動」の各次元に一貫して正の影響を与え、仮説1a,b,cは支持された。第2に、高業績 HRM システムは、経営理念浸透の「認知」・「共感的理解」・「行動」に一貫して正の影響を与え、仮説2a,b,cは支持された。第3に、想定した経営理念浸透の3次元から心理的オーナーシップへの影響は、いずれも有意ではなく、仮説3a,b,cは棄却された。第4に、心理的オーナーシップは、心理的エンパワーメントの「有意義感」・「自己決定感」・「インパクト」には正の影響を与えた(仮説4a,c,d支持)が、「有能さ」への影響は確認されなかった。第5に、心理的オーナーシップは、プロソーシャルモチベーションに正の影響を与え、仮説5は支持された。

結論として、当初想定した経営理念浸透が心理的オーナーシップの醸成を図るという内的メカニズムは確認されなかった。一方で、変革型リーダーシップと高業績 HRM システムが理念浸透を通じてモチベーションに影響する重要なパスも確認できた。具体的には、両者は、(1)理念の「共感的理解」を促し、個人の有能感(efficacy)を高める、また(2)理念の「行動」喚起を促し、自らが従事する仕事に対する「インパクト」の実感度を高めるという2経路が浮き彫りになった。共感と行動といったより高度な次元での理念浸透が従業員のモチベーション改善に重要であることが示唆される。

(たけうち のりひこ・わきさか まさかず)

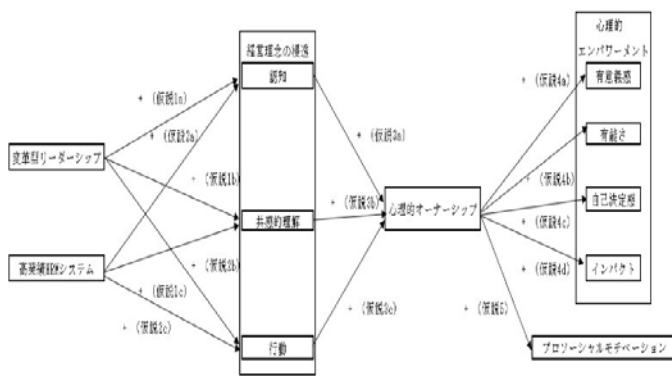


図1 本研究の分析モデル

安全教育参加に伴う保護者の危険認識の変化の理由

－ 交通安全教育の効果評価の視点に関する考察 －

○大谷 亮¹

(¹ (一財) 日本自動車研究所自動走行研究部)

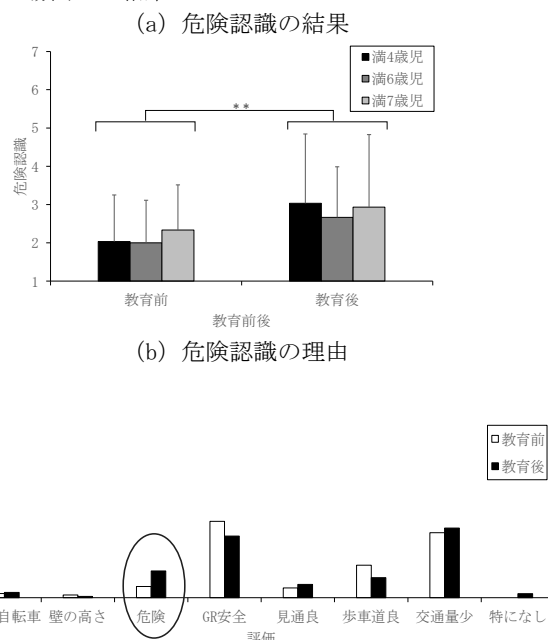
キーワード：歩行中の手つなぎ，交通安全，親子関係

【目的】子どもの交通安全教育を効果的に実施するために、保護者の参加が求められている (NHTSA, 2009)。先行研究では、子どもを対象にした交通安全教育に保護者が参加することで、交通場面に対する保護者自身の危険認識が高まるといった副次効果とともに、仮説に反して、明確な危険が存在しない場面に対しても危険認識が高まるといった結果が報告されている (大谷, 2024)。ただし、同研究では、保護者の危険認識が高まる理由については明らかとなっていない。本研究では、先行研究の結果 (大谷, 2024) の信頼性を確認するとともに、保護者が危険と認識する理由を調査し、交通安全教育を評価する上での配慮点について考察した。

【方法】調査はweb 会議ツールを用いて実施し、保護者とその子ども (以下、「対象児」) がオンライン上で調査者と対面する形式で行われた (以下、「対面調査」)。調査に参加した保護者は、満4歳、満6歳、または満7歳の最年長児をもつ保護者90名であった (対象児の年齢3区分×30名=90名)。保護者の平均年齢は37.3歳 (標準偏差5.2歳) であり、66.6%が女性であった。対面調査は、教育前調査、視聴覚教材を用いた子ども対象の安全教育、および教育後調査の3段階から構成された。教育前と教育後調査では、4種類の交通場面を画面上に提示した上で口頭と文字で状況を説明し、対象児と歩いている際に各場面を危険と思うか否かについて、保護者に7件法 (1. 全くそう思わない-2. そう思わない-3. あまりそう思わない-4. どちらでもない-5. ややそう思う-6. そう思う-7. とてもそう思う) で回答するよう求めた。4種類の交通場面は、場面1 (顕在的危険 (接近する対向車あり) と潜在的危険 (ガードレールなし/道路脇から車が出現する可能性あり) が存在)、場面2 (潜在的危険のみ存在)、場面3 (顕在的危険のみ存在)、および場面4 (顕在的および潜在的危険の存在なし) とした。また、子ども対象の安全教育では、場面1を提示した上で、顕在的危険と潜在的危険について解説した。対面調査は対象児の年齢区分別に親子ペアが3グループにわかれ、合計9回 (対象児の年齢3区分×3グループ) の調査を集団で実施した。調査日は2024年11月と12月の6日間であり、1回の調査時間は、休憩および本研究の対象外の調査を含め約90分間であった。調査の実施に際しては、著者が所属する組織の実験倫理委員会の承認を得た。

【結果】4種類の交通場面別に、対象児の年齢と教育前後の危険認識を2要因とする混合型分散分析を行った。その結果、全場面において教育前後の主効果がみられ、教育前に比べ、教育後は、危険が高く認識された (場面1, $F(1, 87) = 18.61$; 場面2, $F(1, 87) = 53.65$; 場面3, $F(1, 87) = 39.76$; 場面4, $F(1, 87) = 25.13$; $p < .01$; Fig. 1 (a))。また、場面1以外は、効果量が中または大と判定された (場面1, $\eta^2 = 0.05$; 場面2, $\eta^2 = 0.18$; 場面3, $\eta^2 = 0.07$; 場面4, $\eta^2 = 0.06$)。次に、危険認識の理由について、場面1と場面2では教育前後に有意差がみられ (場面1, $\chi^2(7) = 21.49$; 場面2, $\chi^2(7) = 24.48$; $p < .01$)、効果量は場面1で小および場面2で中と判定された (場面1, $V = 0.27$; 場面2, $V = 0.32$)。残差分析の結果、両場面とも教育後に「見通しの悪い駐車場からの車両の出現」に対して、より危険と認識する割合が高くなった。また、有意差はみられないものの、場面4 (Fig. 1 (b))

Figure.1 場面4の結果



では教育後に「漠然とした危険 (Fig. 1 (b) の「危険」)」の割合が増加した。

【考察】以上より、子ども対象の安全教育への参加により、保護者の危険認識が高まることが明らかとなり、先行研究 (大谷, 2024) の結果と一致した。潜在的危険を含む場面1と場面2について、教育後に危険を高く認識した理由として、見通しの悪い駐車場からの車両の出現を挙げており、子ども対象の交通安全教育への参加の効果がみられた。一方、危険が存在しない場面4を危険と認識した理由として、教育後に、漠然とした危険と回答する割合が相対的に多かった。この結果を踏まえると、子ども対象の交通安全教育への参加に伴い、明確な理由がないにもかかわらず、保護者の危険認識が高まる可能性がある。したがって、実施した教育によって保護者が必要以上に危険を認識していないかや、教育者が意図する内容を適切に理解したかを調べるのが、交通安全教育の効果把握する上で重要と考えられる。今後、明確な理由がないにもかかわらず、保護者が危険を過大評価することで、保護者自身の精神的負担や、子どもへの対応に負の影響が生じないかを検討する必要がある。

【利益相反】本研究に開示すべきCOIはない。

【引用文献】National Highway Traffic Safety Administration (NHTSA). (2009). Child pedestrian safety education—Applying learning and developmental theories to develop safe street-crossing behaviors—.

大谷亮. (2024). 子ども対象の安全教育参加に伴う保護者のリスク知覚の変化と教育可能性. 日本交通心理学会 2024 年度 (第 89 回) 福岡大会発表論文集, 33–36.

【謝辞】本研究は、一般社団法人日本損害保険協会 2024 年度自賠責運用益拠出事業の一部をまとめたものであり、ここに記して感謝申し上げます。

(おおたに あきら)

公正世界仮説と他者のヒューマンエラーへの許しとの関連

怪我の有無と完全主義の個人差の影響

○森泉慎吾

(帝塚山大学心理学部)

キーワード：公正世界仮説，許し，ヒューマンエラー

【目的】公正世界仮説によれば、人は一般的に、相応の報いを受ける世界に生きていると信じる傾向にある（Lerner & Miller, 1978）。言い換えれば、ヒューマンエラーによって負傷する事故が起きた場合、公正世界仮説に従い「罰が下った」とみなされる。一方で、負傷しなかった場合、公正世界仮説と反するため、仮に同じ原因のエラーであったとしても、許容されない可能性がある。本研究では、他者のヒューマンエラーへの許しの程度について、エラーによる負傷の有無の関連を検討することを目的とした。また、他者に対して完璧を求める程度には個人差があるため（Hewitt & Flett, 1991）、負傷の有無による許しの程度には、その個人差が影響する可能性がある。そこで本研究では、以下の仮説を立てた。

1. 他者に完璧を求めない者は、エラーを犯した者が怪我を負った場合、そうでない場合よりもエラーを許容しやすくなるだろう。
2. 他者に完璧を求める者では、エラーを犯した者が怪我を負うかどうかはエラーの許容に関係しないだろう。

【方法】

参加者 関西にある A 大学の学生 90 名（男子 25 名、女子 65 名）であり、平均年齢は 19.76 歳（ $SD=0.94$ ）であった。
場面設定 「コンビニエンスストアのアルバイト中、勤務を交代予定であった同僚から『寝坊で遅刻する』と連絡を受け、同僚が来るまで 2 時間残業させられた」状況を設定した。その際、同僚が道中に自転車事故を起こし全治 10 日の怪我を負い、頭に包帯と右目に眼帯をした状態で来店した条件（以下、「怪我あり」群 $n=47$ ）と、同僚が何事もなく来店した条件（以下、「怪我なし」群 $n=43$ ）を設けた。学籍末尾の数字が奇数の回答者を前者、偶数の者を後者に割り当てた。
質問項目 上記の場面について、加藤（2009）の許し尺度のうち「寛容さ」（例、同僚が後で個人的に許しを乞えば許してあげる）を構成する項目群について、本研究用に文言の修正等を行いつつ、計 7 項目に 4 件法で回答を求めた。また、完全主義について、Hewitt & Flett (1991) の自己志向的完全主義 15 項目（例、目標は高いほどやりがいがある）を邦訳したもの、および小堀・丹野（2004）でも使用されている他者志向的完全主義 15 項目（例、他人のやることはすべて一流でなければならない）について、それぞれ 4 件法で回答させた。その他、年齢、性別について回答を求めた。
手続き A 大学で開講される心理学系講義にて、Google form で作成した質問票の URL を LMS 経由で配信した。参加の報酬として、上記の授業の平常点に加点がなされた。

【結果】許し尺度の構成項目の平均を算出し、「許し得点」とした（ $\alpha=.85$ ）。また、自己志向的完全主義、他者志向的完全主義に関するそれぞれの項目も平均を算出し、「自己志向的完全主義得点」（ $\alpha=.84$ ）「他者志向的完全主義得点」（ $\alpha=.72$ ）とした。怪我の有無と完全主義、許しとの関連を検討するため、許し得点を目的変数、怪我の有無、自己志向的完全主義得点、他者志向的得点、およびそれらと怪我の有無との交互作用項を説明変数とする強制投入法による階層的重回帰分析を実施した。step 1 には性別（女性 0、男性 1 としてコード化）を統制変数として用いた。step 2 には怪我の有無（怪我なし 0、怪我あり 1 としてコード化）、自己志向的完全主義得点、他者志向的得点、step 3 にはそれらの交互作用項を投入

Table 1

分析に用いた量的変数の要約統計量

	α	平均	SD
許し得点	.85	3.13	0.62
自己志向的完全主義得点	.84	2.55	0.47
他者志向的完全主義得点	.82	2.06	0.35

Table 2

許し得点を目的変数とする階層的重回帰分析結果

説明変数	step 1		step 2		step 3	
	β	VIF	β	VIF	β	VIF
1. 性別	-.06	1.00	-.08	1.05	-.07	1.08
2. 怪我の有無			.30 **	1.04	.30 **	1.04
3. 自己志向的			-.10	1.07	-.10	1.08
4. 他者志向的			.04	1.08	.04	1.09
5. 2. $\times$ 3.					.06	1.05
6. 2. $\times$ 4.					-.06	1.03
Adj. R^2	.00		.11 *		.11	

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

した。なお、交互作用項の作成には中心化した各変数を用いた。その結果、step 2 にて怪我の有無と許し得点の有意な正の関連が見られ（ $\beta = .30, p = .005$ ）、怪我をしていると許し得点が増加した。その他の変数については有意な関連は見られず、交互作用項を含む step 3 の決定係数の変化量は有意でなかった（ $\Delta R^2 = .004, p = .84$ ）。Table 1 は、分析に用いた変数の要約統計量、Table 2 は回帰分析の結果である。

【考察】本研究の結果、ヒューマンエラーをした者が怪我をしているか否かによって、その者への許容度が異なることがわかった。その一方、自己志向的、他者志向的ともに完全主義との交互作用効果は見られなかったため、仮説はいずれも支持されなかった。本研究での完全主義得点の平均はいずれも低く、自己にも他者にも完全を求めている傾向にあったことが結果に影響した可能性がある。

【引用文献】

- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of personality and social psychology*, 60, 456.
- 加藤 司・谷口 弘一 (2009). 許し尺度作成の試み 教育心理学研究, 57, 158-167.
- 小堀 修・丹野 義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 34-43.
- Lerner, M. J., & Miller, D. T. (1978). Just world research and the attribution process: Looking back and ahead. *Psychological bulletin*, 85, 1030.

【付記】本発表に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。また、本研究の実施にあたり、帝塚山大学心理学部 2024 年度卒業生の山田朔也氏から多大なる協力を得た。ここに記して感謝致します。

(もりいずみ しんご)

広告における緊急性の表示が購買意図に及ぼす影響

カウントダウンタイマーの表示は商品の魅力を掻き立てるか？

○小島弥生

(北陸大学国際コミュニケーション学部)

キーワード：緊急性、購買意思決定、ネットショッピング

【目的】 ネットショッピングで消費者の購買意欲を掻き立てる要因を検討した Browne & Swarbrick-Jones (2017)は、要因の1つとして緊急性(urgency)、すなわち、時間制限の使用があることを示している。ECサイトで「この価格での販売の残り時間は○時間△分□秒」のようにカウントダウンタイマーが表示される状況が代表的な緊急性表示にあたる。ところが、実験的に作成した EC サイトで購入時間制限の表示の有無を比較した藤本・三木(2024)では、表示のない群のほうが高い購買率を示している。藤本・三木は予想に反する実験結果について、実験参加者の PC 操作行動の特徴から考察し、複数の商品を吟味する行動をとる実験参加者には時間制限が商品閲覧行動を邪魔するために購買意欲が低下する可能性があるとしている。

本研究では商品広告におけるカウントダウンタイマー表示やタイムセール表示が消費者の購買意図(意思決定)や商品への魅力の感じ方にどのように影響するかを検討する。仮説は「購買意図や商品魅力の感じ方はカウントダウンタイマー条件、タイムセール表示あり条件、タイムセール表示なし条件の順に高いであろう」とする。

【方法】 実験参加者 北陸地方の私立大学で心理学の専門科目を受講している学生 78 名(うち女性 56 名)に授業時間の一部を使って実験への参加協力を依頼し、集団状況で実験を実施した。実験参加に対し、実験での回答フォーム(匿名)とは別に授業担当者が配信する匿名の意見・感想フォームを提出することで授業評価点の一部に組み込むことを説明した。

手続き 口頭で上記の説明と参加は自由意思に基づくことを説明した後、条件別に回答フォームを各実験参加者へ配信した。最初に商品販売ページの閲覧を求めた。商品として某社製のワイヤレスイヤホンとスマートウォッチを用い、それぞれの商品ページの動画(独自に作成)を閲覧することを求めた。動画は条件によって表示内容の一部が異なっていた(Figure 1)。動画視聴後に回答フォームに戻って以下の質問への回答を求めた。まず、手元に 2 万円分のギフト券があるとの仮定の下、閲覧した商品の購買意図を 4 件法(1.買いたいと思わない～4.買いたいと思う)で回答させた。次に操作チェック項目として「売り出し期間が限定的である」、「安い」の 2 項目と従属変数の 1 つである「商品が魅力的」の 1 項目について 4 件法(1.当てはまらない～4.当てはまる)で回答を求めた。続いて、買い物意識尺度(大久保他, 2021)への回答を求めた(快楽意識と効用意識、各 5 項目・5 件法)。意識得点は評定値の合計値を用いた。最後に刺激に用いた商品や関連する持ち物についての質問を示し、回答を求めた。また、履修学生には外国籍の学生もいたため母語についての質問を行った。

Figure 1
実験刺激の構成



【結果】 分析対象者 外国籍の学生を除く 76 名($M_{age} = 19.4 \pm .92$)が分析対象者となった。カウントダウンタイマー条件に 26 名、他の 2 条件には 25 名ずつが割り当てられた。

操作チェック 緊急性と安さの認識について条件間に違いがあるかを 1 要因参加者間分散分析で確認したところ、イヤホン、ウォッチともに条件の主効果は有意にならなかった($F_s < 1.5$)。したがって、商品の安さは 3 条件で同程度に感じられているが、緊急性の操作は失敗していることが確認できた。

仮説の検討 買い物意識の 2 変数の中央値で実験参加者を高低 2 群に分け、商品の種別 $2 \times$ 緊急性 $3 \times$ 快楽 $2 \times$ 効用 2 の混合分散分析(商品の種別のみ参加者内要因)を、購買意図および商品魅力について実施した。その結果、購買意図に関しては有意な主効果、交互作用はみられなかった。

一方、商品魅力については快楽次元の主効果($F(1,64) = 4.63, p = .04, \eta^2 = 0.07$)、条件 $\times$ 効用次元の交互作用($F(2,64) = 3.94, p = .02, \eta^2 = 0.11$)、および、商品の種別 $\times$ 快楽次元の交互作用($F(1,64) = 5.05, p = .03, \eta^2 = 0.07$)が有意になった。まず、快楽次元の高い人($M = 1.86$)より低い人($M = 2.20$)のほうが刺激提示された商品に魅力を感じていた。次に、条件 $\times$ 効用次元の交互作用について単純主効果検定を行った結果、カウントダウンタイマー条件でのみ効用次元による有意な差がみられた(低群 $M = 2.40$ vs. 高群 $M = 1.61; t(64) = 3.06, p = .003, d = 1.41$)。また、効用次元の高い群でのみ条件の単純主効果が有意になり($F(2,64) = 4.29, p = .02, \eta^2 = 0.20$)、多重比較の結果、カウントダウンタイマー条件よりもタイムセール表示あり条件($M = 2.32$)のほうが刺激提示された商品に魅力を感じていた($t(64) = 2.92, p = .015, d = 1.26$)。最後に、商品の種別 $\times$ 快楽次元の交互作用について単純主効果検定を行った結果、快楽次元の高い群でのみウォッチへの魅力の感じ方がイヤホンよりも有意に低かった(イヤホン $M = 2.06$ vs. ウォッチ $M = 1.65; t(64) = 2.30, p = .03, d = 0.47$)。また、ウォッチに関してのみ快楽次元の低群($M = 2.33$)のほうが高群($M = 1.65$)よりも商品に魅力を感じていた($t(128) = 3.10, p = .002, d = 1.16$)。

【考察】 商品魅力を従属変数とした分析において条件の主効果は有意にならず、条件 $\times$ 効用次元の交互作用についても単純主効果検定で有意になった平均値の差は仮説とは異なる方向性(効用次元高群において、タイムセール表示条件のほうがカウントダウンタイマー条件よりも商品を魅力的と評定していた)の結果であったため、仮説は支持されなかった。効用次元高群においてのみであるが、カウントダウンタイマー条件において商品魅力が高まらなかったという結果は藤本・三木(2024)と類似の結果といえる。したがって、効率よく買い物をしたい意識が高い人にとって緊急性の表示は商品を選ぶ際に余計な表示と認識され、商品が魅力的に思えなくなる可能性が考えられる。

【利益相反】 本研究に関する利益相反(COI)は無い。

【引用文献】 Browne, W. & Swarbrick-Jones, M. (2017). *Qubit Digital Ltd.* / 藤本 渉・三木 良雄 (2024). 情報処理学会第 86 回全国大会講演論文集, 2024(1), 283-284.

【謝辞】 本研究は 2024 年度に北陸大学を卒業した供田夏鈴さん(現所属：株式会社 PKUTECH)の卒業論文を再構成したものである。供田さんと実験参加者の皆さまに感謝の意を表します。

(こじま やよい)

自動運転技術の社会的受容に対する影響要因

王 晋民

(千葉科学大学 危機管理学部)

キーワード：自動運転技術，社会的受容，リスク認知

【研究の背景と目的】

近年，自動車の自動運転技術は急速に発展しており，その適用条件や利用方法，さらには社会的受容についての議論が活発化している。新技術の社会的受容に関しては，従来よりリスク認知，利得認知 (Fischhoff *et al.*, 1978) や有用性，使用容易性 (Davis, 1989) など説明されている。本研究の目的はこれらの理論的枠組みに基づいて自動運転技術全般の受容性の影響要因について検討することである。

【方法】

対象者 中国人大学生計 451 名。

調査票の構成 Nastjuk *et al.* (2020) や Tham *et al.* (2022) を参考にして以下の項目を用意した。目的変数 (受容性) としては利用意向 (自動運転車の使用意向や購入意欲，推奨意欲) に関する 4 項目，独立変数としては (1) 自動運転技術の社会的利益 (自動運転車の普及可能性や社会全体の利益) に関する 5 項目，(2) 有用性・利便性 (自動運転車がもたらすと考えられる具体的な利便性や有用性) に関する 5 項目，(3) 使用容易性 (自動運転車の操作性や学習コストの受容性) に関する 4 項目，(4) 安全性 (安全性評価や潜在的リスクの受容) に関する 5 項目，(5) 信頼性 (技術やメーカーに対する信頼性) に関する 5 項目，(6) 車両への不安 (自動運転車への懸念や抵抗感) に関する 5 項目，(7) 法整備 (法的整備や責任明確化の評価) に関する 4 項目，(8) 個人情報流出不安 (自動運転車のデータ収集および利用に対する懸念と不安) に関する 4 項目である。(9) 緊急時対応 (緊急時や異常事態時対応の評価) に関する 5 項目を用意した。回答形式には 5 件法 (1=全くそう思わない，5=非常にそう思う) を採用し，年齢層，性別，専攻，居住地を含む人口統計学的情報 7 項目も調査した。

手続き 調査は 2025 年 1 月に実施された。中国の SNS など大学生に対する調査協力依頼文を掲載し，同意した参加者はデータ収集用ウェブサイトにて回答した。

【結果と考察】

回答状況 有効回答者は 451 人 (男性 235 人，女性 216 人) であり，年齢層は 20~23 歳が 189 人，24~26 歳が 173 人，26 歳超が 89 人であった。専攻は理系 213 人，文系 280 人。居住地別の内訳は超大都会が 280 人，それ以外が 171 人。

調査項目の確認 因子分析を実施し，目的変数および独立変数の妥当性を検証した。その結果，各変数に対応する項目が確認され，項目間の信頼性指標 α 係数はすべて 0.8 以上であった。

受容性の比較 t 検定の結果，性別 (女性:3.02; 男性:3.61, $t(449)=6.501$, $p<.001$)，居住地 (超大都会以外:3.16, 超大都会:3.43, $t(449)=2.76$, $p<.01$) において有意差が確認されたが，文系・理系専攻や自動運転に関する知識の程度による有意差は認められなかった。

受容性の影響要因 受容性を目的変数とした重回帰分析の結果 (決定係数 $R^2=0.46$, モデルの有意性 $F(15, 435)=24.685$, $p<.001$, 共線性指標 VIF はすべて 2 未満)，信頼性，使用容易性，緊急時対応，安全性，法整備の評価が高いほど，また車両への不安や個人情報流出不安の点数が低いほど，受容性が高いことが確認された。さらに，男性の受容性は女性より

高く，超大都会居住者の受容性は他の地域の居住者より高いことが判明した (Table 1)。性別ごとの重回帰分析では，男性では (決定係数 $R^2=0.586$, モデルの有意性 $F(13, 221)=24.108$, $p<.001$, VIF はすべて 2.05 未満) であり，緊急時対応，法整備，安全性の評価が高いほど，また個人情報流出不安や車両への不安が低いほど受容性が高まることが示された。一方，女性では (決定係数 $R^2=0.182$, モデルの有意性 $F(13, 202)=3.461$, $p<.001$, VIF はすべて 2 未満) であり，有用性評価が高いことや理系専攻であることが受容性向上と関連していることが確認された。本研究では自動運転全般の受容性を取り上げたが，今後，自動運転程度の分類に対応する検討も必要であろう。

Table 1. 社会的受容に関する重回帰分析の統計結果

目的変数： 社会的受容性	B	標準 誤差	標準化係数 β	95.0%CI	
				下限	上限
(定数)	1.368	.509		.368	2.368
社会的利益	.075	.046	.070	-.015	.164
有用性・利便性	.090	.048	.084	-.004	.184
使用容易性	.129 **	.048	.118	.035	.222
安全性	.114 *	.048	.105	.020	.208
信頼性	.125 *	.049	.121	.029	.221
車両への不安	-.126 *	.048	-.116	-.221	-.030
法整備	.094 *	.046	.094	.004	.184
個人情報流出不安	-.102 *	.047	-.094	-.196	-.009
緊急時対応	.129 **	.049	.111	.032	.226
性別	-.179 *	.077	-.089	-.330	-.029
専攻	.110	.072	.054	-.032	.251
運転免許	-.188	.130	-.052	-.443	.067
運転経験	.060	.075	.029	-.088	.208
自動運転知識	-.035	.056	-.022	-.146	.076
居住地	.199 **	.075	.096	.052	.346

注：* $p<.05$ ** $p<.01$ ；性別は男性 1，女性 2；専攻は理系 1，文系 2；運転免許は所持 1，所持 2；運転経験はあり 1，なし 2；自動運転知識は知らない 1，ある程度知っている 2，知っている 3；居住地は大都会以外が 1，大都会は 2。

【引用文献】

- Davis, F. D. (1989). Perceived usefulness, perceived ease of use, and user acceptance of information technology.
<https://doi.org/10.2307/249008>
- Fischhoff, B. *et al.* (1978). How safe is safe enough? A psychometric study of attitudes towards technological risks and benefits.
<https://doi.org/10.1007/BF00143739>
- Nastjuk, I. *et al.* (2020). What drives the acceptance of autonomous driving? An investigation of acceptance factors from an end-user's perspective.
<https://doi.org/10.1016/j.techfore.2020.120319>
- Tham, Y.J. *et al.* (2022). Underlying dimensions of benefit and risk perception and their effects on people's acceptance of conditionally/fully automated vehicles.
<https://doi.org/10.1007/s11116-021-10225-0>

【利益相反】本研究には開示すべき利益相反はない。

【謝辞】本研究は千葉科学大学呂偉宏氏の卒業研究 (2024 年度) の調査データを再分析したものである。記して感謝を申し上げます。
(おう しんみん)

状況に着目したコンピテンシーモデルのフレーム

片岡 大輔

(株式会社日本能率協会マネジメントセンター)

キーワード：コンピテンシー 行動項目 状況

【目的】

本報告では、状況に着目したフレームを用いたコンピテンシーモデルの事例について、紹介を行う。

【本論】

1. コンピテンシーの概念とコンピテンシーモデルの多様性
「コンピテンシー」という概念は、1990年代ころからわが国にもたらされ、主に企業における人的資源管理、とくに人事評価や育成の項目に用いられてきた。「コンピテンシー」は、多義的な概念であり、一律に定義することは難しく、能力・行動・思考のどれを扱うか／重視するか、またモデルの設計方法（リサーチベースか、価値／戦略ベースか）によって内容が異なる（加藤，2011）。「コンピテンシー」を広く考えれば、「成果をあげるための個人の何らかの要素」とすることができ、「コンピテンシーモデル」は「何らかの要素の項目を何らかの次元で構造化してモデル化したもの」といえよう。モデルは、ある企業のある職種・職位に特定した（オーダーメイドの）独自性の高いものもあれば、汎用的に用いることを想定した（ジェネリック・モデル）もある。

2. コンピテンシーモデルの事例

Boyatzis (1982)はコンピテンシーモデルとして、6領域を設定し、それらは(1)目標と行動の管理 (2)リーダーシップ (3)人的資源管理 (4)部下への指揮命令 (5)他者志向 (6)専門知識 から構成された。これは包括的なものであり、各領域は「粒度」がそろっていないように見える。時代が下ってSpencer and Spencer (1993)の「コンピテンシーディクショナリー」では、おなじく6領域として、(1)達成・行動 (2)援助・対人支援 (3)インパクト・対人影響力 (4)管理領域 (5)知的領域 (6)個人の効果性から構成しており、6領域の内容的な弁別性・独立性がいくぶん高まったように見える。

3. より高業績者らしさを記述できるモデルの構築

(1) 構想

コンピテンシーは、そもそも高業績者がどのような行動をとっているのかをまとめたものである。したがって、コンピテンシーモデルそのものをみて、高業績者がどのような行動をとるのが、わかりやすいものにしたいと考えた。また旧来の職務遂行能力は、観念的に創案された「能力」(それも「潜在的」なもの)から構成され、検証が考慮されていないものであり、こんにちの従業員の評価や育成の項目としては十分でないと思えた。したがって、まず、構成が観念的で測定が困難であろう「能力」や「意欲」をコンピテンシーとして取り扱わず、個別具体的な行動を収集し、各行動に共通するものを行動項目として考えることとした。そしてその行動項目を何らかのまとまりにまとめたものをコンピテンシー項目と名付け、それらコンピテンシー項目をさらに上位の次元で分類することを考えた。

(2) 方法

・クライアント企業：発表者の勤務先にリサーチやコンサルティングを依頼した25社（製造業12社、情報・通信5社、商業3社、その他5社）
・インタビュー：約100名 調査期間：1998年～2005年
・インタビュー方法：クリティカル・インシデント・メソッドもしくはビヘイビアル・イベント・インタビューとよばれるものに準じるものであった。第1段階（自由発言段階）・第2段階（質問段階）・第3段階（吟味段階）という手順で行った。1人の対象者当たり60～120分間程度の時間をかけて実

施し、対象者の発言を記録し、状況・意図・行動のセットを個別の行動項目として十数～数十個程度記述した。

分析の対象：各案件の納品物（コンピテンシー項目・定義・行動項目例） クライアント案件ごとに、収集した個別の行動項目を、他にもあてはまるように一般化を行い（例：「〇〇社に対して、△△という商品の提案に当たって～」→「顧客に対して、新商品の提案に当たって～」）、顧客との合議の上で、行動項目を束ねるものとしてコンピテンシー項目を設定し、定義の作成、コンピテンシーディクショナリー、説明資料、多面評価の納品を行ったものを分析の対象とした。

(3) ジェネリックなコンピテンシーモデルの構成

個別案件ごとにコンピテンシーモデルを構築し納品を行い、クライアントや社内メンバーと討議を行ううちに、各案件に共通したコンピテンシー項目の特質があることがわかってきた。すなわち低業績者と高業績者とで成果が異なる状況は、各クライアントのインタビュー対象者である程度共通であったということである。さらに、コンピテンシーの「思想」に基づくならば、その状況に着目することこそが本来的なものであるとの考えにリサーチャーやコンサルタントメンバーは至った。

すなわち以下の4つの状況に着目したフレームを構成した。1つ目は「あいまいな状況」であり、求められているもの（ニーズ、ゴール・ターゲット）・やり方が曖昧、何ができて何ができないのかははっきりしない状況である。高業績者は共通して、「見極める」ことを行っていた。2つ目は「変化している状況」である。仕事を進めていくうえで、周囲の環境が変化している状況であり、高業績者は「対応する」ことを行っていた。3つ目は「不足している状況」である。仕事に取り掛かるうえで、人材・物資・予算・情報・時間といった必要なものが足りていない状況であり、高業績者は「獲得する」ことを行っていた。最後の4つ目の「困難な状況」は先に挙げた3つの状況とは多少次元が異なり、実現や継続が困難な状況であり、「着手しやり続ける」ことを行っていた。

この4状況のフレームを、いくつかのクライアントに対して仮モデルとして提示したところ、おおむね理解を得られ、各クライアント独自のコンピテンシーモデルを構築する際にも、ひな形や一つの参照の対象としての活用が期待できた。

そこでクライアントのインタビュー対象者から得られた約1500の行動項目を、この4状況のフレームにもとづくコンピテンシーモデルに分類整理し、コンピテンシーディクショナリーを作成した。これは、クライアントの人事評価の内容の見直しや、人材育成のための多面評価の次元の構成にあたって活用できるものとなった。

【引用文献】

古川久敬（編）（2002）コンピテンシーラーニング 日本能率協会マネジメントセンター
加藤恭子（2011）コンピテンシー・モデリングに関する一考察～日本におけるモデリング・プロセスで生じる問題点～日本労務学会誌 12, 2, 25-41
Spencer, L., Spencer, S. (1993). Competence at work: models for superior performance. John Wiley & Sons. (梅津祐良, 成田攻, 横山哲夫(訳) (2011). コンピテンシー・マネジメントの発展 (生産性出版)
(かたおか だいすけ) (かたおか だいすけ)

フェンシング審判員の審判活動における参加動機の構造

○佐藤秀明¹ 来田宣幸² 権野めぐみ³
(¹ 日本大学 ² 京都工芸繊維大学 ³ 名古屋葵大学)
キーワード：審判員、半構造化面接、動機の構造化

【目的】スポーツは「する」行為にとどまらず、心理的、身体的、社会的側面における様々な恩恵をもたらしてきた。スポーツ立国を掲げる我が国では、スポーツの意義や価値は広く共有されており、「新しい公共」の理念の下、多様な人々が自らの興味や関心、適性などに応じて、「する」、「観る」、「支える」といった様々な形態でスポーツに積極的に参画できる環境の構築が推進されている。各スポーツ団体はこの理念に基づき、スポーツ活動を通じて社会の発展に寄与している。その中でも、スポーツを「支える」存在として、審判員は重要な役割を担っており、その活動は一種の社会貢献活動と位置づけられる。審判員に関する学術的研究は限られているが、既存の研究では体力科学、技能、哲学、心理的特性などの側面が扱われている。審判員の活動を社会貢献活動と捉え、ボランティア的性格を持つ社会参加の1つの形態であり、参加動機の解明はスポーツ科学および社会心理学的観点からも重要な課題である。社会活動に対する参加動機に関する研究については、ボランティア活動を対象とした研究が多く、審判活動に関する研究は少ない。発田（2021）は、テニス審判員を対象に、参加動機とその満足度を活動頻度から分析しているが、競技人口の多い種目に特有の動機が含まれている可能性が高い。そこで、本研究では、競技人口が比較的少ないフェンシング競技における審判員を対象として、その活動参加動機を包括的に把握することを目的とした。参加動機の構造を明らかにすることで、将来の審判員の活動を促す、あるいは審判員育成を視野に入れた養成プログラム策定に有益な知見が得られる可能性が考えられる。また、審判活動の参加動機の構造を明らかにすることは、スポーツ種別を問わず審判員の養成に汎用できる知見を提供するものと考えられる。審判員の参加動機に関する研究は、競技の発展に加え、スポーツ文化の深化にも寄与することが期待される。

【方法】対象者 本研究の対象者は、国内外の高水準な競技大会において定期的に審判活動をおこなっている3名（男性2名、女性1名）とした。調査方法 審判活動への参加動機を把握するため、半構造化面接を実施した。面接はZoomを用いてオンラインでおこない、1回あたりの所要時間は30～40分程度であった。質問の項目 面接では、「国際審判員資格を取得したきっかけ及び動機について」と「審判活動の開始から現在までの、当初の参加動機からの変化について」を主要な質問項目とした。回答内容に応じて、随時追加質問をおこない、できる限り詳細な語りを引き出すよう心がけた。分析方法 面接内容をすべて文字起こしし、逐語録を作成した。発話から審判活動への参加動機に関する項目を抽出し、活動開始時から現在に至るまでの参加動機に関する記述を分析対象とした。得られた項目を意味的類似性に基づいてグループ化し、適切かつ簡潔な表現でサブカテゴリーを設定した。さらに、サブカテゴリー同士の内容的近接性を踏まえ、より上位のカテゴリーに統合した。

【結果および考察】面接調査により得られた発話内容のうち、意味的に同一と判断されるものを統合した結果、40個の項目が抽出された。これらを分析対象とし、意味内容に基づいて整理および分類をおこなったところ、2つの上位カテゴリーである「競技への貢献」と「自己のキャリア形成」が抽出さ

れた（Table 1.）。「競技への貢献」カテゴリーは、「選手への情報提供・貢献」、「公正・公平な競技の実現」、「関係構築」、「後進の育成と指導」の4つのサブカテゴリーから構成された。これらは、審判活動を通じて他者や競技全体にポジティブな影響を与えようとする意図が中心であり、「利他的動機」として理解される。一方、「自己のキャリア形成」カテゴリーには、「成長」、「挑戦」、「評価」の3つのサブカテゴリーが含まれていた。これらのカテゴリーの中には、「スキル」や「知識」、「指名される審判員」といった表現が多くみられ、審判員自身の知識・技能の向上や、審判としての地位向上を志向する発話に基づいており、「利己的動機」と解釈できる。このように、審判活動への参加動機には、「利他」と「利己」の両側面が併存しており、活動の開始時点および継続時期中において、動機内容が変化することが示唆された。これらは、必ずしも排他的なものではなく、相互に補完的に働く可能性も考えられる。また、特筆すべき点として、対象者のうち1名から、活動時期ごとに参加動機が変化しているという語りが得られた。特に、国際大会などのビッグイベントの有無や、キャリア段階に応じて、動機の焦点が変化する傾向が見られた。このことから、審判員の参加動機は静的なものではなく、時間的・状況的文脈に応じて変容するものであると考えられる。今後の研究においては、「時期」や「競技イベントの規模」などの要因を含めて参加動機を聴取し、その変遷を明らかにすることが重要である。これにより、各キャリア段階における典型的な動機を把握し、審判員への効果的な支援・育成の方策を検討する上で有益な知見を得ることができると考えられる。

Table 1. 審判活動の参加動機

カテゴリー	サブカテゴリー	発話内容の例
競技への貢献	選手への情報提供と貢献	世界で審判仲間を増やすことで、日本の選手たちが試合をしやすくなる 色々情報を得ることによって、ナショナルチームや自分の選手たちに還元できる
	公正・公平な競技の実現	正確なジャッジをすることで、日本人選手へのフェアな判定に繋がる 選手のために「正しいジャッジをちゃんとやり続ける」こと
	関係構築	他の国の審判員との繋がりや人脈を広げる 出合い、励ましが活動へのモチベーションとなった
	後進の育成と指導	海外で学んだことを国内の審判に広め、全体の審判スキルのレベルを上げること
		次世代の国際審判を育てたい
自己のキャリア形成	成長	指導者としての勉強のため 自身の知識をアップデートする楽しさ
	挑戦	「自分がどこまで行けるのかやってみたい」という気持ち 実力で国際大会の審判に指名されるようスキルを磨く
	評価	外国のコーチや審判仲間から評価されること
		選手から必要とされていると感じること

【利益相反】特になし

【引用文献】

発田 志音（2021）テニス審判員の参加動機・満足度と活動頻度の関連-量的手法と質的手法の併用による検討- テニスの科学 29, 13-25

（さとう ひであき、きだ のりゆき、ごんの めぐみ）

高校部活動における倫理的指導の構築と生徒のウェルビーイング：

医療専門職との連携による実践とその効果

○伊藤将史¹ 大門耕平² 山本ちさと³ 権野めぐみ⁴ 来田宣幸⁵

(¹ 近江兄弟社高等学校 ² 東北学院大学 ³ 洛和会音羽リハビリテーション病院 ⁴ 名古屋葵大学 ⁵ 京都工芸繊維大学)

キーワード：部活動、バレーボール、ウェルビーイング

1. 【目的】

日本の高校における部活動は、教育的意義を持つ一方で、指導者による独断的な指導や勝利至上主義が、生徒の心身の健康を損ねる要因として長年指摘されてきた。特に、生徒の身体の状態を客観的に把握せずに行われる過度な練習や指導は、重篤な怪我や長期的な活動停止につながる事例を生じさせている。このような状況は、生徒の成長機会の喪失だけでなく、部活動への心理的負担や不適応を引き起こす可能性もはらんでいる。

本研究は、生徒の安全と健全な成長を最優先する倫理的な部活動の構築を目指し、医療専門職との連携を核とした具体的な指導実践とその効果を検証することを目的とした。具体的には、客観的な身体状況の把握、個別化されたサポート、そして生徒、指導者、医療機関の三者連携を通じて、生徒の自己管理能力と心理的安全性の向上を図り、部活動におけるウェルビーイングの実現に向けての事例を提示する。

2. 【方法】

2.1 対象：対象は、近畿圏のA高等学校のバレーボール部に在籍する新入生とした。

2.2 介入機関：高校入学直後の4月にメディカルチェック、フィジカルチェックを実施した。この時期は高校への進学により、練習量・質の変化が大きく、身体的・心理的適応が求められる時期として設定した。そして、この介入を2019年から2024年まで実施した。

2.3 介入内容

①**メディカルチェック・フィジカルチェックの実施**：入部直後に整形外科医および理学療法士が協力し、新入生一人ひとりの身体の状態（柔軟性、筋力、関節可動域、既往歴など）を客観的に診断した。生徒自身も検査結果を詳細に確認し、自身の身体的特性への自己認識を深める機会とした。

②**個別メニューの提供と指導**：フィジカルチェックの結果に基づき、理学療法士が生徒個々の身体的弱点や課題に対応した、個別化されたコンディショニングメニューを提供した。これにより、生徒は怪我の予防に必要な具体的な行動を自覚し、練習への向き合い方を自己調整できるよう促した。

③**顧問への情報提供と連携**：顧問には、メディカル・フィジカルチェックの結果を提供した。これにより、顧問は個々の生徒の身体的特性や注意点を把握し、練習メニューの立案や指導の際に個別の配慮を組み込むことを可能にした。また、練習の質や負荷に関する認識の共有を図った。

④**外部クリニックとの連携体制構築と周知**：生徒に対し顧問以外に身体面で心配なことを相談できる外部クリニックとの連携体制があることを伝えた。これは、生徒が怪我や不調を隠して無理な練習を続けることを防ぎ、安心して専門医に相談できる心理的安全性を確保するための重要な施策である。

⑤**三者連携（生徒・顧問・医療機関）の強化**：これまでは、生徒が練習参加を優先して、医療機関の診断情報が顧問に伝わりにくいといった問題が存在した。本実践では、生徒の保護者の同意のもと、医療機関から顧問へ直接診断結果や治療方針が共有される仕組みを構築し、三者が連携して生徒のコンディション管理に取り組む体制を整備した。

3. 【結果】実践結果から得られた効果

専門機関連携に対する意識変容：顧問は「クラブ活動は学校

教員で運営するものという考えから、専門の機関と関わることで選手、指導者ともに有意義なものがあるという考えに変わった」「今後の部活動の1つの形としていくものだと感じている」と認識し、専門機関との連携が部活動指導の質を高める新たなスタンダードとなり得る可能性を評価した。

客観的情報に基づく指導の実現：「障害の程度の把握とその時に練習参加の判断ができる」ようになったことで、生徒の身体の状態に応じた適切な練習量や負荷の調整が可能になった。また、「専門競技者とは違った視点から、選手の身体の状態や動きを分析することで、気づけない身体的な弱点や課題を見つけレベルアップにつなげるきっかけができる」と、競技力向上への寄与も認識された。

生徒の主体性と自己認識の向上：新入生のフィジカルチェックは、「選手自身が身体のことを深く知り、関心を持つきっかけとなる」効果があったとされる。高校での練習強度が増す中で、「自身の体の状況を理解して練習参加することで、安心して練習に調整しながら取り組める」ようになり、自己管理能力の萌芽が見られた。さらに、「本人の痛みやケガに対する認識の確認ができる（軽い、重い、自覚、無自覚など）」という点も、生徒の主体的な関与を促した。

三者連携による情報共有の円滑化と心理的安全性：顧問は「選手のコンディションについて、三者が同じ考えを持って維持、回復に取り組める」ことを高く評価した。選手は顧問には伝えられない身体の相談をする場所ができることで、生徒の心理的負担が軽減され、教員は選手から伝わりきらない内容を理解できる、またわからないことなどを相談できることで、指導における不確実性が減少した。加えて、教員では判断できない練習参加や試合出場などについて相談して進めることができるようになったことで、生徒の安全がより一層確保されるようになった。

6. 考察

本研究は、従来の指導者中心型の部活動モデルから、生徒の身体的・心理的ウェルビーイングを重視し、主体性を育む倫理的な指導モデルへの転換を強力に示唆するものである。医療専門職との連携を通じて客観的な身体情報が指導現場にもたらされたことは、指導者の意思決定プロセスを合理化し、経験や感覚に頼りがちな指導から脱却する上で極めて有効であった。

また、生徒自身が自身の身体状況を客観的に認識し、個別メニューを通じて自己管理に取り組むことは、自己効力感とレジリエンス（回復力）の向上に寄与すると考えられる。外部クリニックとの連携による相談窓口の確保は、生徒が抱える身体的・心理的負担を軽減し、指導者に伝えにくい情報も安心して共有できる心理的安全性の高い環境を構築した点で、その意義は大きい。この多角的なサポート体制は、部活動における怪我の予防に留まらず、生徒が安心して活動に打ち込み、自身のパフォーマンスを最大限に引き出すための心理的基盤を築くことに貢献したと言える。

さらに、本研究はこれからの新たな部活動の形を提示するものである。

【利益相反】利益相反（conflict of interest; COI）無し。

（いう まさし・おおかど こうへい・やまもと ちさと・ごんの めぐみ・きだ のりゆき）

姿勢制御における開眼・閉眼の影響

—乱数生成課題と重心動揺計測の関係から—

○板垣文彦¹ 鹿内菜穂（非会員）² 須永範明³

¹国立病院機構東京医療センター ²亜細亜大学経営学部 ³日本大学文理学部

キーワード：乱数生成, 重心動揺, 姿勢制御

ヒトの姿勢制御には高次の注意機能が関わっている。ある姿勢をとりながら同時に認知課題をおこなうと姿勢が不安定になることが指摘されているが、実際にはそのような研究結果を示すのは5割程度であり、影響がない、逆に姿勢が安定するという研究もそれぞれ2割、3割を占めることが報告されている[1]。この矛盾には特定の姿勢維持の難易度、副次課題の精神負荷の高さ、ならびに課題内容の単純さ・複雑さの要因が絡み合っているといわれている。このような認知の副次課題としてワーキングメモリ課題が注目されている[2]が、特に乱数生成(Random Number Generation: RNG)課題は中央実行系の容量を消費する課題と見なされてきた。しかし、それは比較的速いテンポが設定されていることが前提であり、自由速度で生成するRNG課題の場合は、個人のワーキングメモリ全体を反映した課題と見ることができる[3]。つまり、RNG課題は姿勢制御に負荷を与える副次課題であると同時に、姿勢制御の影響を反映する課題であるともいえる。

RNG課題における視空間特性を反映する傾向としてSmall Number Bias(SNB)[4]があるが、先行研究[5]では立位姿勢でのRNG課題において閉眼条件よりも開眼条件でSNBが顕著であった。また、これらの背景には視覚的な物体・空間イメージの鮮明さに関する性差が関係していることが示唆されている。本研究では、姿勢の重心移動との関係から閉眼・開眼条件と性差がRNG課題に与える影響を検討する。

方法：

実験参加者：大学生53名（男子27名、女子26名）

機器：重心軌跡測定器（竹井機器工業製）

乱数生成課題：1～9までの数を使用して主観的にランダム性と生成速度のバランスをとって音声生成することを求めた。

手続き：実験参加者は重心軌跡測定機に立ち、開眼条件（2.5m先の固視円を見る）・閉眼条件で60秒間の安静立位時の重心動揺を計測し、続けてRNG課題（150秒）を遂行した。なお、RNG課題遂行時の最初の60秒間の重心動揺を計測した。条件の順番は被験者間でカウンターバランスをとった。

分析の手続き：重心動揺計測ではX、Y軸方向の平均値を分析対象とする。RNG課題では、条件別に最初に個人が生成した数系列を9×9の数対マトリックスに集計し、閉眼・開眼の差分マトリックスその平均データを算出する。また、RNG課題で値が小さいほどSNB傾向を意味する生成数の平均マグニチュード(Average Magnitude: AM)を評価する。

結果：

開眼・閉眼条件それぞれの平均対頻度マトリックスの差分構造を開眼-閉眼評価軸として利用した。その結果、閉眼条件の平均が原点0に近く、開眼条件の平均が原点を離れることから、開眼条件がRNG課題の遂行に影響を及ぼすといえる(Close:0.005(0.108), Open:0.134(0.142), $p<.001$)。

Fig.1にRNG課題遂行前、Fig.2にRNG課題遂行中の左右(X)・前後(Y)方向の重心位置を示す。どちらも開眼条件で前後(Y)方向の男女差が有意に広がることが示された。

AM評価は閉眼・開眼条件間で有意差は認められなかった。

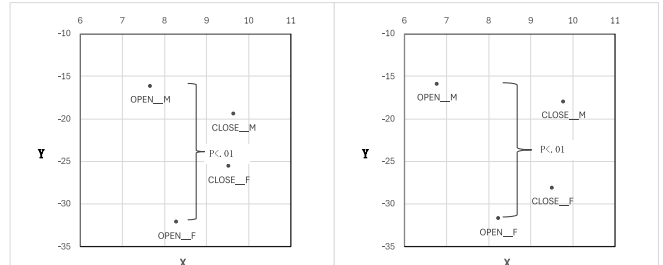


Fig.1 Differences in center of pressure under eyes-open/eyes-closed conditions and between sexes (Male and Female) before RNG task.

Fig.2 Differences in center of pressure under eyes-open/eyes-closed conditions and between sexes (Male and Female) during RNG task.

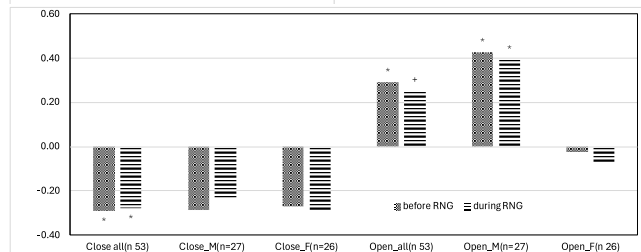


Fig.3. Correlations between average magnitude of numbers and the center of pressure in the sagittal plane before and during RNG task

(Close:4.989(0.204), Open:4.940(0.174), ns).しかし、閉眼、開眼条件別に重心位置との相関を見ると、閉眼条件ではAMは前傾傾向(Y)と有意な弱い負の相関を示し、開眼条件では逆に有意な弱い正の相関を示した(Fig.3.)。この相関関係は男女別では有意な相関にならないが、開眼条件では男性のみで有意な中程度の相関を示している。閉眼状態では前傾姿勢をとる参加者ほど大きい数を生成する傾向があるのに対し、開眼状態ではその関係が逆転して前傾姿勢をとるほど小さい数を生成する傾向があり、その重心移動は男性で顕著である。類似の結果は、RNG課題前、RNG遂行中の両条件で生じており、RNG課題の課題負荷の影響とはいえない。

考察：目を開けることによって男性が女性よりも前傾姿勢を取ること、そして、その程度がSNBを引き起こす原因だといえる。SNBに関しては線分2等分課題において分割点がわずかに中心の左にずれる疑似半側無視との関係が予想されていたが、今回の結果がこの解明に向けての手がかりになる。

本研究に利益相反はない。

本研究は JSPS 科研費 23K02563, 20K19608 の助成を受けた。

1 Salihu, A. T. et al. (2022). Effect of cognitive task complexity on dual task postural stability: A systematic review and meta-analysis. *Exp Brain Res*, 240(3), 703–731.

2. Dault MC, Frank JS, Allard F (2001) Influence of a visuo-spatial, verbal and central executive working memory task on postural control. *Gait Posture* 14(2):110–116.

3. 板垣文彦 (2005) 乱数生成課題とワーキングメモリー軸モデル、Focus of attention と Episodic buffer の統合-電子情報通信学会報告, 104 [637] (思考と言語)TL2004-36

4 Loetscher, T.・Brugger, P. (2007) Exploring number space by random digit generation. *Experimental brain research*, 180, 655–665.

5 板垣文彦、須永範明、鹿内菜穂 (2024) 乱数生成課題に反映される視空間特性について-拮抗する形態知覚と空間知覚-、日本応用心理学会第90回大会 (いたがきふみひこ・しかないなお・すながのりあき)

自己調整学習方略尺度作成の試み

(¹ 日本大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻)

キーワード：自己調整学習方略，競技継続，尺度

【目的】

競技者が試合においてパフォーマンスを発揮するために、競技を継続することが前提となる。一方で、怪我や成績の停滞などに起因する心理的不調により、競技継続の意志があるにもかかわらず、その継続が心理的に困難となる事例が存在する。

そこで本研究では、競技者が競技に対する意欲が低下した際に、どのような方法を用いて自身の競技継続を支えているのかを、自己調整学習方略の観点から検討することとした。伊藤（2009）によると、『自己調整学習方略』とは「学習を方向づけ調整していく方法」であり、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」とされる自己調整学習理論を構成する『自己効力感』『目標への関与』と並ぶ、重要な3要素の1つである。よって、自己調整学習方略を活用することで、主体的かつ能動的な競技継続を支える具体的な方法を明示できると考えられる。

また、競泳競技は他の競技と比較して競技継続年数が長い傾向があり、個人競技である点からも、選手個人が自身に適した自己調整学習方略を有している可能性が高いと考えられる。さらに、大会において自己記録を更新する大学競泳選手は自己実現意欲や勝利意欲が高いとされる一方で（尾関・菅生，2024），年齢の上昇とともに実力発揮や自己ベスト更新といった目標達成が困難になることから（徳永他，1991），その過程において動機づけの維持が難しくなることが予想される。したがって、長期的な競技継続を支援するための具体的方策の検討が必要であると考えられる。

以上より、本研究は、競技者が自身に適した競技継続の方法を理解するための具体的支援策を提示することを目的とし、自己調整学習方略の観点から、大学競泳選手版自己調整学習方略尺度の作成を試みるものである。

【方法】

調査対象者 調査は、大学体育会競技部である水泳部に所属する学生を対象とし、2025年1月から4月に実施した。対象者は、男子193名、女子81名、回答しない1名、計275名（計14校）であった。

調査内容 調査に先立ち、「あなたが練習に対してやる気が出ないときにいつも行っている工夫について、それぞれの場面ごとに教えてください（複数回答可）」という教示文を提示し、〈練習を始める前〉、〈練習を行っている最中〉、〈練習が終わった後〉、〈試合に向けて〉、〈その他〉の各場面における工夫を尋ねた。質問項目は、選手 5 名およびコーチ 1 名へのインタビュー調査ならびに選手 25 名を対象とした自由記述式アンケート調査の結果をもとに作成し、計 102 問の質問文を設定した。調査は、この 102 問の質問項目およびフェイスシート（学年、性別、種目、競技継続年数等）を用いて実施した。

分析方法 作成した 102 問の質問項目に対して因子分析を行った。分析結果に基づき、本研究者およびスポーツ心理学分野の研究者 1 名が因子の解釈可能性について検討し、探索的因子分析を実施した (SPSS Ver.27.0)。

Table1 因子分析の結果

項目	因子負荷量									M	SD	
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9			
F1 想像力 (α = .870)												
F2 成功するイメージをする。	.904	-.003	-.110	-.071	-.098	-.029	-.143	-.067	.007	4.065	1.18	
F3 イメージトレーニングをする。	.898	.076	-.073	-.115	.030	-.005	-.143	.029	-.069	3.982	1.21	
F4 理想の自分を思い描く。	.864	.035	-.072	-.038	-.022	-.011	-.029	-.084	.053	3.945	1.26	
F5 観望力 (α = .852)												
F6 言葉と文字に対するものを食べる。	.010	.871	.005	.064	-.091	.046	-.143	-.004	.118	3.625	1.38	
F7 周囲に満足できた好きなものを食べる。	.037	.863	.068	.121	-.120	.053	-.129	-.009	.056	3.611	1.37	
F8 好きなものを食べに行くことを考える。	.051		.716	-.026	-.18	.131	.031	-.002	0.880	-.027	3.360	1.47
F9 意識変換力 (α = .412)												
F10 練習中に泳ぎながら歌を歌う。	-.114	-.045	.468	-.019	.230	-.059	-.010	.160	-.132	2.345	1.45	
F11 自分自身に自惚れる。	-.131	-.140	.457	-.015	.084	.003	-.018	.047	-.054	2.087	1.29	
F12 ルーティンを変える。	.068	.033	.452	.083	-.105	.054	-.002	-.055	.053	2.156	1.26	
F13 対人交流力 (α = .811)												
F14 課題を共有し合ったりする。	.101	-.081	.016	.810	-.066	-.196	.002	-.068	.060	3.533	1.23	
F15 泳ぎの泳ぎ方にも相違する。	.154	.106	.014	.808	-.159	-.136	-.142	-.045	-.011	3.913	1.26	
F16 コミュニケーションをとる。	.130	.005	.016	.874	-.084	.035	.022	-.030	.003	3.484	1.17	
F17 音楽刺激力 (α = .894)												
F18 音楽を聴いて気分を上げる。	-.005	.064	-.023	-.061	.874	-.023	-.032	-.004	.186	4.298	1.10	
F19 音楽でスイッチを切り替える。	.081	-.044	.040	-.110	.792	.038	-.019	-.016	.123	4.113	1.22	
F20 音楽を大きく声で聴く。	.067	-.031	.193	-.111	.748	-.076	.030	-.067	.072	3.825	1.30	
F21 負負転換力 (α = .814)												
F22 得意、得意なメニューから練習を始める。	.102	.031	.198	-.247	-.227	.601	-.109	-.030	.045	2.709	1.32	
F23 得意と別個のメニューを作る。	.103	.044	.205	-.185	-.165	.604	-.114	-.106	.054	2.825	1.39	
F24 得意、得意なメニューを多く練習する。	.102	.068	.295	-.243	-.079	.815	-.101	-.018	.075	2.964	1.33	
F25 否定意思遮断力 (α = .582)												
F26 悪かったことを考えない。	-.114	-.001	.088	.183	-.020	-.036	.580	.064	-.055	2.727	1.34	
F27 やる気がないことを考えない。	-.037	.007	.012	.080	-.012	.024	.672	.074	.007	2.778	1.40	
F28 いやなこと考えないようにする。	.070	-.004	-.097	-.020	.081	.038	.460	-.027	.167	3.218	1.31	
F29 視覚的整理力 (α = .869)												
F30 練習ノートを作って、書き込む。	.018	.063	.007	-.136	.010	-.064	.000	.974	-.017	1.858	1.29	
F31 練習ノートに、わかりやすくまとめる。	.023	.111	-.025	-.061	-.024	-.048	.001	.954	.005	1.771	1.20	
F32 練習ノートに練習リストを入れる。	-.053	-.015	.196	-.051	-.063	-.025	-.014	.940	.009	1.618	0.94	
F33 練習力 (α = .899)												
F34 いつもより早めに始める。	.113	.063	.030	-.049	.118	-.011	.056	.018	.860	.368	1.34	
F35 1つよりも2つに決める。	.169	.116	-.099	-.157	.161	.079	.040	-.049	.819	.3865	1.28	
		.285	.224	.599	.376	.179	-.062	.328	.377			
			.247	.283	.279	.150	.173	.003	.020			
				.211	.138	.296	.218	.057	.148			
					.393	.233	.017	.140	.395			
						.142	.147	.050	.605			
						.246	.161	-.008	.198			
							-.091	-.055	.262			
因子間相関												

【結果と考察】

大学競泳選手の自己調整学習方略を構成する因子は F1「想像方略」、F2「報酬方略」、F3「意識変容方略」、F4「対人交流方略」、F5「音楽刺激方略」、F6「負担軽減方略」、F7「否定思考遮断方略」、F8「視覚的整理方略」、F9「睡眠方略」と命名した。内的整合性を検討するために、Cronbach's α を算出したところ、想像方略は .87、報酬方略は .86、意識変容方略は .41、対人交流方略は .81、音楽刺激方略は .88、負担軽減方略は .81、否定思考遮断方略は .56、視覚的整理方略は .87、睡眠方略は .90 を示した。これらの結果より 9 因子が抽出されたが、Cronbach's α の結果から F3「意識変容方略」と F7「否定思考遮断方略」の 2 因子については妥当性の検証を踏まえた上で、今後更なる検討が必要となる。

【利益相反】

本研究に関して開示すべき利益相反はありません。

【引用文献】

伊藤崇達 (2009) 自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割 北大路書房

尾関一将・菅生貴之 (2024) 競泳競技における実力発揮度が高い選手の心理的競技能力の特徴. 大阪体育大学紀要 55 29-34.

徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄・梅田靖次郎 (1991). 試合前の状態不安と実力発揮度の関係. 九州大学健康科学センター 健康科学 13 105-114.

(たかい みりい ・ たねがしま ひさし)

教育発表 8 月 27 日(水)

D2-1

運転自己調節行動に影響を及ぼす諸要因の探索的検討

キーワード: 高齢ドライバー, 運転自己調節行動, 属性

福井匠流¹ 山村豊¹

(¹ 桜美林大学教育探究科学群)

発表要旨

健康で安全かつ自立的な移動性の確保は超高齢社会の重要課題であり、安全運転継続のための努力を行う意識を高める必要がある。本研究では、高齢者の運転自己調節行動に着目し、「高齢者講習」受講者約 9000 人を対象に、運転自己調節に関する 7 項目の行動を調査した。各項目について、属性、運転や運転目的、運転継続の意思、運転に対する態度、QOL などの回答とのクロス集計を行い、 χ^2 検定と残差分析を行い効果量 (Cramer's V) を算出した。まず、属性については、女性のほうが自己調節を行っている回答が有意に多く、70 歳以下とサポカー乗り換えやドラレコ利用との関連が見られた。また、QOL に関する 5 項目 (5 件法、分析の際に 1~2 を「低位群」、3 を「中位群」、4~5 を「高位群」に統合) と運転自己調節の関連が見られた。とりわけ、「運動機能を維持するために運動やスポーツを行っている」という自己調節と各 QOL との間に有意な関連が見られた。一方で、総じて自己調節を「特に何も行っていない」回答者は QOL が低い傾向があった。本分析より、運転自己調節は性別、年齢の特徴があり、QOL を高める自己調節行動がある可能性が示唆された。

D2-2

創造的自己信念と諸要因の関係の検討

— 偏相関による分析 —

キーワード: 創造性, 創造的自己信念 (CSBs), 教育

小松駿¹, 時田学¹

(¹ 日本大学商学部)

発表要旨

この研究は、創造的自己信念 (CSBs) とその関連要因の包括的検討を目的とした実証研究である。現代社会において創造性の重要度が増す中、近年特に自身の創造性に対する信念である CSBs が注目されている。従来の創造性研究は領域特異性を無視したテストに依存していたが、CSBs は比較的ドメイン特異性が低く、教育現場での活用が期待される。しかし、CSBs は比較的新しい研究領域であり、包括的なモデルや他要因との関係の研究が不足している。そこで本研究では、2025 年に質問紙調査を実施し、SSCS-J (Short Scale of Creative Self) を用いて CSBs を測定するほか、ビッグファイブ性格特性、創造的マインドセット、楽観性、動機づけ調整方略、認知的柔軟性と持続性、マインドワンダリング傾向、時間的圧力などの関連要因を包括的に測定する。分析では偏相関を用いて、各要因間の関係や CSBs への影響の大きさの比較をする。本研究により、CSBs と諸要因の関係が明らかになり、創造性と CSBs の性質の違いや CSBs の醸成への実践的示唆が得られることが期待される。

D2-3

生と死に対する欲尺度(LADDS)の開発

—探索的因子分析から—

キーワード: 生に対する欲, 死に対する欲, 尺度作成

小鹿柚祐¹, 今井田貴裕²

(¹人間環境大学心理学部, ²仁愛大学)

発表要旨

自殺や自傷のリスクのある人々は、「生きたい」と「死にたい」欲求に葛藤すると考えられる。しかし、既存の尺度では、死に対する評価や感情、行動傾向を含むものが多く(e.g., 丹下, 1999; 平井・坂口, 2000), 自傷や自殺のリスクのある人々へのアセスメントに適しているとは言い難い。そこで本研究では、生と死に対する欲を測定する 46 項目を既存の尺度から抽出し、一般健常群 741 名(男性 228 名, 女性 512 名)を対象に調査した。平均年齢は 24.36 歳(SD = 3.46)であった。基礎統計量の見当と探索的因子分析の結果、生に対する欲として、生に対する思慮($\alpha = .77$)および生に対する追求($\alpha = .85$), 肯定的未来志向($\alpha = .90$) 3 因子構造が、死に対する欲として、死に対する思慮($\alpha = .87$)および死に対する追求($\alpha = .92$), 否定的未来志向($\alpha = .90$)の 21 項目の 3 因子構造が示され、信頼性係数も良好であった。以上を生と死に対する欲尺度(Life and Death Desire Scale)命名した。今後、自殺や自傷のリスクのある人々の生と死に対する欲の多寡を検討する必要がある。

D2-4

青年期におけるアイデンティティ発達と集団へのコミットメントとの関連

キーワード: アイデンティティ, コミットメント, 集団

本田直人¹, 時田学¹

(¹ 日本大学商学部)

発表要旨

青年期は集団経験を通じアイデンティティを形成する重要な時期であるとされる(Erikson, 1959). しかし集団経験とアイデンティティの関連研究は宮下(1998)以降乏しく、尺度の妥当性や関与の質的側面の検討が不十分だった。本研究は、青年期のサークル集団へのコミットメントが、多次元的自我同一性尺度(MEIS; 谷, 2001)の諸側面との関連を明らかにする。さらに、サークル集団の特性である集団フォーマル性(新井, 2004)と集団凝集性(橋本・唐沢・磯崎, 2010)が、この関連に及ぼす影響も検討する。仮説は、(1)サークルコミットメント(橋本・唐沢・磯崎, 2010)が高いほど MEIS の特定側面(対他性・心理社会的同一性)及び総合点が向上する、(2)集団フォーマル性・凝集性とアイデンティティ得点の正の関連である。N 大学サークル所属学生約 200 名程度を対象に、MEIS(谷, 2001), サークルコミットメント尺度(橋本・唐沢・磯崎, 2010), 集団フォーマル性尺度(新井, 2004), 集団凝集性尺度(橋本・唐沢・磯崎, 2010)を用いた質問紙調査を行う。本研究は、青年期の集団経験とアイデンティティ形成の具体的プロセス解明を検討する。

教育発表 8 月 27 日(水)

D2-5

「キモかわいい」は人を甘やかすか？

～かわいさの新たな心理効果の検討～

キーワード:かわいい, キモかわいい, 自己甘やかし行動

宮優作¹, 齋藤拓心¹, 岡田佳穂¹, 井上裕珠¹

(¹ 日本大学商学部)

発表要旨

近年、「かわいい」という言葉はその意味と対象を拡張し続けており、「キモかわいい」や「ダサかわいい」など、反義的要素を含む複合語も一般化している。2025 年の大阪・関西万博の公式キャラクター「ミャクミャク」にも、「気持ち悪いのにかawaii」という評価が SNS 上で多く見られ、現代の「かわいさ」の多様化を象徴する事例といえる。従来の「かわいい」に関する研究は、Lorenz (1943) が提唱したベビースキーマに基づく幼い特徴を持つ対象が、自制的・利他的行動を引き出すことに焦点を当ててきた (Nittoño & Ihara, 2017)。一方、Nenkov & Scott (2014) は「面白いかわいさ」が人を自分に甘くする行動に向かわせることを示し、かわいさが必ずしも自制心を促すとは限らないことを明らかにした。本研究では、この「面白いかわいさ」の概念をさらに発展させ、特にネガティブな要素を含む「キモかわいい」という感性が、消費者の自己甘やかし行動に及ぼす影響を検証する。これにより、かわいさが持つ心理的效果に関する理解を深め、Nenkov & Scott (2014) による先行研究を発展させることが期待される。実験方法および実験結果の詳細は、発表当日に報告する。

D2-6

セルフオーダーがカロリー選択に与える意外な影響

キーワード: 摂食行動、メニュー選択、瘦身願望

長瀬華¹, 阿部美乃¹, 荒井香凜¹, 井上裕珠¹

(¹ 日本大学商学部)

発表要旨

近年、飲食店でセルフオーダーシステムの導入が進み、他者と対面せずに注文できる環境が一般化しつつある。清原ら (2012) は、女性は男性よりも瘦身願望が高いことを示しており、その背景には自己肯定感の低さや「痩せ=魅力的」とする固定観念があるとされる。本研究では、他者の目を気にせずに済むセルフオーダー環境において、女性の合計カロリー摂取量が対面注文時より高くなると予測した。さらに、異性の店員に対する対面注文では、同性の場合よりもカロリー摂取量が低下する傾向があると考えられる。また、公的自己意識が高い女性ほど、セルフオーダー時においてその傾向が顕著になると予測される。一方、男性は公的自己意識の高低にかかわらず、注文方法によるカロリー摂取量の差は小さいと考えられる。心理学実験方法および結果は当日報告する。

企業の炎上は本当に悪か？

—倫理的炎上が低関与消費者の購買意欲に与える影響—

キーワード: 炎上、倫理的炎上、ブランド・コミットメント

佐々木大輔¹，浅岡陽¹，市東紫月¹，前田直太郎¹，井上裕珠¹

(¹ 日本大学商学部)

発表要旨

SNS などのソーシャルメディアの発達により、企業は製品やサービスの情報を容易に発信できるようになった。その一方、不適切な投稿や対応によって「炎上」するリスクも増大している。企業の炎上は、一般に顧客離れや売上低下といったネガティブなイメージと結びつけられることが多いが、必ずしも全ての炎上が悪影響をもたらすとは限らない。

本研究はポジティブな影響を考えにくい、製品の機能的欠陥に基づく炎上 (Dawar & Pillutla, 2000) ではなく、企業 SNS での不適切な発言など、消費者の価値観に関わる倫理的炎上 (Pullig et al., 2006) に焦点を当てる。倫理的炎上は高関与消費者のブランド信頼度とブランド好感度を低下させると知られているが (Hayran & Ceylan, 2023)、低関与消費者にはユーモラスだと知覚される可能性があり、むしろそれが購買意欲を高めるのではないかと考える。

本研究では「企業の倫理的炎上が消費者の購買意欲に与える影響」に着目し、企業の倫理的炎上は、低関与消費者のユーモラスな知覚を促進し、さらに購買意欲を向上させると予測する。実験方法および調査結果の詳細は、発表当日に報告する。

氏名索引(研究発表)

【ア】

秋保 亮太 アキホ リョウタ 100

【イ】

井梅 由美子 イウメ ユミコ 42, 43,
井川 純一 イガワ ジュンイチ 59
異儀田 はづき イギタ ハヅキ 89
池田 琴恵 イケダ コトエ 52, 53
池田 満 イケダ ミツル 93
磯和 壮太朗 イソワ ソウタロウ 83
板垣 文彦 イタガキ フミヒコ 16, 109
伊藤 将史 イトウ マサシ 17, 108
稲野辺 奈緒子 イナノベ ナオコ 75
井上 航人 イノウエ コウト 72, 73,
井上 真郷 イノウエ マサト 75
井上 雄貴 イノウエ ユウキ 66, 67, 71, 74
井上 裕珠 イノウエ ユミ 77, 113, 114
今井 靖雄 イマイ ヤスオ 63,
今井田 貴裕 イマイダ タカヒロ 41, 83, 94, 111
岩崎 翔 イワサキ ショウ 38, 39, 40
岩藤 和広 イワドウ カズヒロ 75

【ウ】

上田 仁 ウエダ ジン 51
浮谷 秀一 ウキヤ シュウイチ 13
内田 誠也 ウチダ セイヤ 49,
内堀 恵美 ウチボリ エミ 48,
内山 伊知郎 ウチヤマ イチロウ 96

【オ】

及川 昌典 オイカワ マサノリ 82
王 晋民 オウ シンミン 105
扇原 貴志 オウギハラ タカシ 78
大門 耕平 オオカド コウヘイ 37, 108
大久保 千恵 オオクボ チエ 48
大久保 智生 オオクボ トモオ 92
大関 貴久 オオゼキ タカヒサ 68, 69, 70
大谷 亮 オオタニ アキラ 14, 102
大橋 恵 オオハシ メグミ 42, 43

大藤	潤也	オオフジ	ジュンヤ		68, 69, 70
大森	哲至	オオモリ	テツジ		61, 62,
岡崎	祐史	オカザキ	ユウジ		68, 69, 70,
尾形	和男	オガタ	カズオ		86
小川	久貴子	オガワ	クキコ		75
越智	淳子	オチ	ジュンコ		17
【カ】					
片岡	大輔	カタオカ	ダイスケ		106
加藤	博己	カトウ	ヒロキ		15
加藤	佳子	カトウ	ヨシコ		45,
軽部	幸浩	カルベ	ユキヒロ		66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74
【キ】					
岸	学	キシ	マナブ		84
来田	宣幸	キダ	ノリユキ		17, 31, 37, 47, 107, 108
木村	年晶	キムラ	トシアキ		96
桐生	正幸	キリウ	マサユキ		38, 39, 40
【ク】					
工藤	咲	クドウ	サキ		55
久保	尚也	クボ	ナオヤ		76
黒岩	誠	クロイワ	マコト		84
【コ】					
幸田	仁志	コウダ	ヒトシ		47
小鹿	柚祐	コジカ	ユズユ		41
小島	治幸	コジマ	ハルユキ		63,
小島	弥生	コジマ	ヤヨイ		104
小菅	英恵	コスゲ	ハナエ		14
小西	奈美	コニシ	ナミ		48,
駒田	淑久	コマダ	トシヒサ		37
紺野	剛史	コンノ	タケシ		38, 39, 40
権野	めぐみ	ゴンノ	メグミ		17, 31, 107, 108
【サ】					
阪本	麻郁	サカモト	マヤ		31
佐藤	秀明	サトウ	ヒデアキ		107,
皿谷	陽子	サラガイ	ヨウコ		94

【シ】

鹿内	菜穂	シカナイ	ナオ		16, 109
設楽	一碩	シガラ	カズヒロ		38, 39, 40
島田	恭子	シマダ	キョウコ		38, 39, 40
清水	佐紀	シミズ	サキ		46,
下條	朝也	シモジョウ	アサヤ		33
白石	奈津栄	シライシ	ナツエ		85,
新里	知佳野	シンザト	チカノ		66, 67, 71, 74
新保	智之	シンボ	トモユキ		64,

【ス】

菅野	智子	スガノ	トモコ		61, 62
杉山	聡一	スギヤマ	ソウイチ		47,
須永	範明	スナガ	ノリアキ		16, 109

【セ】

仙波	亮一	センバ	リョウイチ		98
----	----	-----	-------	-------	----

【タ】

大本	浩司	ダイモト	ヒロシ		100
高井	美莉衣	タカイ	ミリイ		110
高下	梓	タカシタ	アズサ		84
高橋	浩子	タカハシ	ヒロコ		15
高橋	良博	タカハシ	ヨシヒロ		15
竹内	倫和	タケウチ	トモカズ		99
竹内	規彦	タケウチ	ノリヒコ		60, 64, 65, 97, 101
田中	共子	タナカ	トモコ		50, 54
田中	英明	タナカ	ヒデアキ		49,
谷口	淳一	タニグチ	ジュンイチ		58
谷口	まち子	タニグチ	マチコ		52, 53
種ヶ嶋	尚志	タネガシマ	ヒサシ		110
田宮	憲	タミヤ	ケン		61, 62

【ト】

藤後	悦子	トウゴ	エツコ		42, 43,
時田	学	トキタ	ガク		35, 36, 111, 112
富田	瑛智	トミタ	アキトシ		91

【ナ】

中尾	達馬	ナカオ	タツマ		57,
----	----	-----	-----	-------	-----

中谷	智美	ナカタニ	トモミ		44,
中西	誠	ナカニシ	マコト		14
中野	友香子	ナカノ	ユカコ		14
中村	早希	ナカムラ	サキ		100
Nagongbiling		ナゴビリン			15
成井	隆友	ナルイ	タカトモ		36

【ハ】

橋元	真央	ハシモト	マオ		17
林	潔	ハヤシ	キヨシ		15

【ヒ】

廣島	克佳	ヒロシマ	カツヨシ		56
----	----	------	------	-------	----

【フ】

福井	義一	フクイ	ヨシカズ		44,
福田	佳織	フクダ	カオリ		86
藤田	主一	フジタ	シュイチ		13, 32, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74
古川	紘子	フルカワ	ヒロコ		96
古澤	伸晃	フルサワ	ノブアキ		66, 67, 71, 74
古屋	健	フルヤ	タケシ		75, 89

【ホ】

堀	孝司	ホリ	タカシ		44
本多	麻子	ホンダ	アサコ		87

【マ】

巻田	晴香	マキタ	ハルカ		82
松浦	均	マツウラ	ヒトシ		51
松沼	悟	マツヌマ	サトシ		75
松尾	由美	マツオ	ユミ		79

【ミ】

三島	斉紀	ミシマ	ムネノリ		34
三宅	沙侑美	ミヤケ	サユミ		50, 54, 85
宮島	直子	ミヤジマ	ナオコ		88

【ム】

村田	康德	ムラタ	ヤスノリ		45,
村山	陽	ムラヤマ	ヨウ		46

【モ】

本村	明嘉	モトムラ	ハルカ		49
百田	尚史	モモタ	ナオヒト		66, 67, 71, 74
森泉	慎吾	モリイズミ	シンゴ		103
森下	葉子	モリシタ	ヨウコ		86
森本	康太郎	モリモト	コウタロウ		80
森脇	保彦	モリワキ	ヤスヒコ		68, 69, 70

【ヤ】

八木沢	誠	ヤギサワ	マコト		66, 67, 71, 74
山岡	重行	ヤマオカ	シゲユキ		13, 90
山野	洋一	ヤマノ	ヨウイチ		50, 54
山村	豊	ヤマムラ	ユタカ		61, 62, 111
山本	睦	ヤマモト	チカ		81
山本	しおり	ヤマモト	シオリ		97
山本	ちさと	ヤマモト	チサト		108

【ヨ】

吉岡	隆宏	ヨシオカ	タカヒロ		38, 39, 40
----	----	------	------	-------	------------

【リ】

李	同帰	リ	トキ		15, 57
劉	徳嘯	リュウ	トクショウ		65

【ワ】

脇坂	正和	ワキサカ	マサカズ		101
和田	万紀	ワダ	マキ		16
渡辺	伸子	ワタナベ	ノブコ		95

氏名索引(教育発表)

浅岡陽		114	佐々木大輔		114
阿部美乃		113	市東紫月		114
荒井香凜		113	長瀬華		113
岡田佳穂		113	福井匠流		111
小鹿柚祐		112	本田直人		112
小松駿		111	前田直太郎		114
齋藤拓心		113	宮優作		113

(敬称略)

日本応用心理学会第91回大会

賛助団体等ご芳名

本大会を開催するにあたり、以下のとおり、諸団体・企業の皆さまからご協賛および多大なご支援を賜りました。深く感謝し、御礼申し上げます。

一般社団法人ココロバランス研究所

株式会社北大路書房

株式会社クロス・マーケティング

株式会社ナカニシヤ出版

東洋大学桐生研究室

福村出版株式会社

富士通株式会社

(敬称略／五十音順)

2025 年7月吉日

日本応用心理学会第91回大会

委員長 桐生正幸

日本応用心理学会第91回大会委員会

大会事務局

委員長	桐生 正幸	東洋大学社会学部
事務局長	高 史明	東洋大学社会学部
統括代表	上市 秀雄	筑波大学システム情報系

大会委員

入山 茂	東洋大学現代社会研究所
長内 範子	株式会社 Xbee
紺野 剛史	富士通株式会社コンバーGINGテクノロジー研究所
島田 恭子	一般社団法人ココロバランス研究所
平井 佑美	東洋大学社会学部

スタッフ

多胡 叶奈美	東洋大学大学院社会心理学専攻
大高 実奈	東洋大学大学院社会心理学専攻
山口 ゆうと	東洋大学大学院社会心理学専攻
汪 楽琳	東洋大学大学院社会心理学専攻
大川 明李	東洋大学大学院社会心理学専攻
濱田 龍	東洋大学大学院社会心理学専攻
日高 舞子	東洋大学大学院社会心理学専攻
杉本 たまき	東洋大学大学院社会心理学専攻
中井 きらら	東洋大学大学院社会心理学専攻
大門 渚紗	東洋大学大学院社会心理学専攻
高橋 拓真	東洋大学大学院社会心理学専攻

特別顧問

軽部 幸浩	東京富士大学経営学部
-------	------------

日本応用心理学会第91回大会発表論文集

発行日：2025 年8月25日

発行者：日本応用心理学会

第91回大会委員長 桐生正幸

112-8606

東京都文京区白山 5-28-20

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<https://www.kitaohji.com> (価格税込)

人についての柔らかな理解

—本当は〈温かい〉クリティカル・シンキング— 吉田寿夫著 A5・384頁・定価3960円 人は様々な「決めつけ・思い込み」を意識せずに行っている。それは、他者や自分が傷ついたり人間関係が悪化したりすることに強く関わっている。決めつけや思い込みから脱し、人を柔らかに冷静に理解するための視点や考え方を、具体策を交えながら提言する。

経験サンプリング法入門

—集中的縦断研究のデザインと分析を学ぶ— ナイアル・ボルジャー、ジャン＝フィリップ・ロレンソ著 尾崎由佳訳 A5・264頁・定価3850円 調査対象者の行動・感情データをリアルタイムで短期間に繰り返し収集する、経験サンプリング法や日誌法の手引書。研究デザインの選択、得られたデータの扱い方と関連する統計学的知識、理論のモデル化を解説。

非認知能力の発達

—生涯にわたる変化と影響— 小塩真司編著 A5・336頁・定価2970円 非認知能力はどのように発達するのか。教育的・養育的関わりを含めたさまざまな人間関係やライフイベントの影響のもと、心理特性相互の関連性にも着目しつつ、人生全体にわたって変化するものとして捉える。発達概念とあわせもつ多様な意味を考える奥深さへといざなう。

テキスト 司法・犯罪心理学

越智啓太、桐生正幸編著 A5上製・632頁・定価6380円 本物の犯罪心理学を学ぶための骨太な教科書。「犯罪行動」「捜査・防犯・矯正」の2部で構成。プロファイリング、ポリグラフ検査、目撃証言、取調べなど、行動科学的な犯罪心理学を中心に、実証的知見を数多く取り入れて編集。日本における真の犯罪心理学者の姿が浮かぶ仕掛け。

障害という経験を理解する

—社会と個人へのアプローチ— ダナ・S・ダン編著 勝谷紀子、佐藤剛介、柴田邦臣、高山亨太監訳 A5・480頁・定価8800円 障害という経験は個人の心身機能や資質よりも、社会的障壁や他者の態度・行動といった状況要因に大きな影響を受けて形づくられる。社会心理学やリハビリテーション心理学等の多様な切り口から障害経験の理解を試みる。

心理学・教育学研究のための効果量入門

—Rを用いた実践的理解— 中村大輝著 A5・232頁・定価3520円 ジャーナルでの研究報告に求められる効果量とその信頼区間について、理論から実践まで体系的に学べるテキスト。効果量の定義、計算方法、解釈や統合の方法、効果量に基づくサンプルサイズ設計の方法を、Rコードと論文での実際の記載例を交えて紹介。

人はいかに学ぶのか

—授業を変える学習科学の新たな挑戦— 全米科学・工学・医学アカデミー編 秋田喜代美、一柳智紀、坂本篤史監訳 A5・396頁・定価4620円 『How People Learn (邦題：授業を変える)』から20年の間で明らかになった知見に基づき再構成された最新版。脳科学・神経科学、動機づけ研究や文化等多様な切り口から人の「学び」に迫る。

シリーズ 心理学と仕事16 司法・犯罪心理学

太田信夫監修 桐生正幸編集 A5・160頁・定価2310円 誕生からまだ歴史の浅い「司法・犯罪心理学」の定義や理論、研究と実務などを説明し、関連する各組織における具体的な仕事と研究知見、防犯、具体的な犯罪について解説。基本と応用との両面から捉え、国家資格「公認心理師」めざす人のために幅広い視点で学べるよう構成を工夫。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事 (全20巻) 完結！ シリーズ 監修 太田信夫
●A5判・148～232頁・定価2200～2530円

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

2025年8月刊

カスタマーハラスメント 心理的安全をどう守るか カスハラ対策の研究・実践・事例

桐生正幸、島田恭子 編著

■A 5判／並製／248頁 ◎定価 3,300円

心理学的視点と事例でカスハラの実態・実態・対策を解説。AI・データ可視化など最新手法を網羅。



恋愛と結婚の心理学

恋愛心理学研究の現在地

高坂康雅 著

■A 5判／並製／244頁 ◎定価 2,750円

近年の研究成果をもとに『恋愛心理学特論』を大幅改訂。刷新された構成とデータで迫る異性恋愛の“今”。



新・脳から始めるこころの理解

心理学・脳科学による心の見方

安部博史 編著

■A 5判／並製／266頁 ◎定価 3,080円

大学生や臨床現場の担当者に向け、心理学・脳科学の知見からAIやネット依存まで網羅した「脳」の入門書。



生涯発達の心理学

理論と実践への誘い

大川一郎、安藤智子 編著

■A 5判／並製／300頁 ◎定価 3,080円

生涯発達心理学の基礎から高度な知識まで網羅。2色刷、豊富な図表、コラムと読書案内で教科書にも参考書にも。



心理臨床における「見立て」

こころの支援にむけて

見立ての本質の意味を探究する

高橋靖恵 監修 西 見奈子 編

■A 5判／上製／164頁 ◎定価 2,970円

いかにしてクライアントのこころの核心を見立てて支援に結び付けるか。その本質の意味を探究する。



行動と変化を促す キャリアカウンセリング&ガイダンス

クライアントの可能性を引き出す行動支援

渡部昌平 編著

■A 5判／並製／248頁 ◎定価 3,520円

行動と変化を促すキャリアカウンセリングの重要性を説き、現状分析から理想実現の行動計画までの手法を示す。

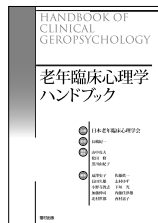


基本から学ぶ 発達と教育の心理学

藤田主一 編著

■A 5判／並製／204頁 ◎定価 2,860円

教職課程の基本テキスト『新 発達と教育の心理学』の全面改訂版。わかりやすい最新の内容で初学者に最適。



老年臨床心理学ハンドブック

日本老年臨床心理学会 企画 長嶋紀一 監修

山中克夫、松田 修、黒川由紀子 統括編集

扇澤史子、長田久雄、小野寺敦志、加藤伸司、北村世都、

佐藤真一、志村ゆず、下垣 光、内藤佳津雄、西村嘉子 編集

■B 5判／上製／672頁 ◎定価 30,800円

多領域にわたる応用・実践研究を網羅し、超高齢社会に対応する臨床心理学の概念を第一線の専門家が詳説。



プロセス・ファシリテーション

人と人、人と社会がつながって育つ、

人間関係づくり体験学習プログラム

林 芳孝 著

■A 5判／並製／236頁 ◎定価 2,970円

人間関係づくりを楽しく実践的に学べる、ファシリテーションのための16の体験学習プログラムを紹介する。



新・消費者理解のための 心理学 (第2版)

永野光朗、秋山 学 編著

■A 5判／並製／304頁 ◎定価 2,970円

消費者行動の心理学的・経済学的側面を解明し、今日的なマーケティング戦略に役立つ知識を提供する。



心理学入門

生物・個人・社会を融合するこころの科学

広重佳治 著

■A 5判／並製／216頁 ◎定価 2,200円

重要なキーワードで章を構成。最新の情報、豊富な図表と多彩なコラム、設問がこころの機序を解き明かす。



研究法がアートと出会うとき

アートベース・リサーチへの招待

パトリシア・リー・ヴィー 著

岸 磨貴子、東村知子、久保田賢一 訳

■A 5判／並製／396頁 ◎定価 6,930円

アートベース・リサーチは学術論文の限界を超え、研究を社会にひらく。その実践法を豊富な実例を交え解説。



誰にも言えない汗の悩み

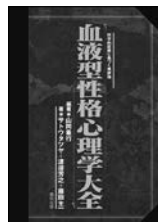
多汗症のための心理学的・医学的サポート

藤後悦子、山極和佳 編著

NPO法人多汗症サポートグループ 協力

■A 5判／並製／208頁 ◎定価 2,200円

汗で困っている人必読！ 汗の悩みの数々を紹介し、心理学・医学の専門家が多汗の対処法をアドバイスする。



血液型性格心理学大全

科学的証拠に基づく再評価

山岡重行 編著

サトウタツヤ、渡邊芳之、藤田主一 著

■A 5判／上製／360頁 ◎定価 4,950円

血液型ブームが去った現在、あらためて血液型と性格の関連を再評価し、ブームの実態を心理学的に検証する。



福村出版

〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2
TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323

◎定価は税込み価格です。
<https://www.fukumura.co.jp>

はじめよう！心理学研究

「テーマが決まらない」を乗り越える
浦上昌則・藤田知加子・解良優基 編著
マンガと対話を手がかりに「研究とは何か」
「テーマをどう探すか」を考える。1980円

やさしく学ぶ教育心理学

一人と人とのつながりを求めて
栗川直子・浜崎隆司 編著
人と人との関係を重視した教科書。理論編
と実践編の二部構成。2530円

グローバル時代の教育相談

多様性の中で生きる子どもと教師
大家まゆみ・稲垣勉 編
多文化共生社会における多様性を尊重する
教育相談とは？ 2530円

岡本祐子著作集 第一巻

中年からの アイデンティティ心理学

成人期の危機と発達
岡本祐子 著 3960円

チーム・ダイナミックス の行動科学

組織の生産性・安全性・創造性を高める
鍵はどこにあるのか
山口裕幸 編著 3630円

多変量解析のための SPSS操作マニュアル

解析手順から結果・解釈の書き方まで
明石法子・岸田拓也・花塚優貴・天野成昭 著
身近な題材で理解を深めよう。2970円

みんなが知りたい 脳と心のつながり

「よりよい人生にするための行動科学入門」
坂本敏郎・上北朋子 著
人生に役立つ入門テキスト。2750円

保育のためのやさしい 教育心理学〔第2版〕

高村和代・安藤史高・小平英志 著
子どもの見方を身につけるために、教育心
理学は役に立つ！ 2090円

学級経営の心理学

子どもと教師がともに成長するために
弓削洋子・越良子 編著
子ども、教師、集団の心理的ダイナミクスを実
証研究から説明。2860円

新版K式発達検査〔第2版〕による 子どもの理解と発達支援

初版から2020年版までで変わったこと
と変わらないこと
郷間英世・清水里美・清水寛之 編 3630円

コミュニケーション の社会心理学

伝える・関わる・動かす
岡本真一郎 編
最先端の研究を幅広く解説。3520円

フリー統計分析ツール HADのトリセツ

心理学データの分析から結果のまとめ
方まで 横田晋大 著
見たまま簡単！徹底マニュアル。3520円

キャリア心理学強み デザインガイドブック

「自分にワークできるワークシヨップ」
をつくる。
新免玲・杉山崇 著 2200円

学校コミュニティにおける スクールカウンセラーの 心理・社会的支援

坪田祐季 著 3300円

キャリアを支える教職入門

ワークで探るこれからの教師と学校
小川翔太・久野弘幸 編著
教職の仕事や学校の最新動向への理解を深め
て進路をじっくり考えよう。2530円

なぜ子どもはミニカー に乗ろうとするのか

スケールエラーからみる幼児期の物体
認識の発達心理学
石橋美香子 著 4180円

芸術鑑賞の心理学

展示照明や特殊レンズの効果を探る
西川恵 著
作品をより美しく見せる明るさは。より
良い芸術鑑賞の実現方法を探る。5280円

すいすい学べる 認知行動療法

行動療法の基本と認知療法、マインドフ
ルネス
松野航大・嶋大樹・原真太郎 著 2530円

人間関係の学び方

人間性豊かな関係を育む「ラボトリ」
方式の体験学習の理論と実践
土屋耕治・楠本和彦・中村和彦 編
人間性豊かな関係と社会のために。2750円

社会性の発達心理学

長谷川真里・佐久間路子・林創 編著
重要テーマを第一線の研究者が解説。基本を
学びたい読者にも、深く知りたい読者にも有
用なアドバンステキスト。2860円

大学生の学びと成長

知識・他者・自分との関係から人生をつくる
河井亨 著
リフレクションとラーニング・ブリッジングを軸に
学びと成長の創出を解説。2970円

やさしく学べる 心理統計法入門〔増補版〕

こころのデータ理解への扉その3
鈴木公啓 著
基礎が身につく好評テキスト。2970円

ロールフルネス

役割満足感の心理学
加藤大樹・鈴木美樹江 著
自分が誰かの役に立っているという実感があ
ると、人は立ち上がれる。4840円

京都北山エリア ぐるっと心理学さんぽ

「心ってなんだろう？」
伊藤一美・向山泰代 編
こころちゃんと歩いて学ぼう。2200円

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111
FAX 075-723-0095

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
<https://www.nakanishiya.co.jp/> (税込価格)



学術調査ならクロス・マーケティング

研究論文でのリサーチ実績、年間1000件超。
倫理審査もお手伝いいたします。



クロス・マーケティングの展示ブースへお立ち寄りいただいた方限定

❖ ブースご来場特典 ❖

特典
1

無料配布

学術調査の基本とやり方がわかる
実践ガイド



特典
2

限定割引

学術調査 基本料金半額 もしくは
対象者リクルーティング **30% OFF**



特典
3

プレゼント

オリジナルノベルティ
※数に限りがございます。



※弊社ブースにて名刺交換をさせていただいたお客様限定となります。



詳細は 当日のクロス・マーケティング展示ブースまで

お問合せはこちらから

株式会社クロス・マーケティング

☎ 0120-198-022

✉ academic@cross-m.co.jp

学術調査
特設サイトへは
こちらから



<https://www.cross-m.co.jp/industries/academic-conference>

第3回

参加無料

コンバージングテクノロジー 研究大会

日時：2025/8/26(火) 15:00~17:45

場所：東洋大学 白山キャンパス

8号館地下1階8B11教室
及びオンライン（ハイブリッド開催）

近年の複雑化する社会課題に対して、単一分野の知見だけで解決することは困難になっています。このような課題の解決には、複数の異分野を収斂させる技術（コンバージングテクノロジー）が重要となります。そこで、以下を目的としてコンバージングテクノロジー研究大会を実施いたします。

- ・ デジタル技術と心理学の共同研究の礎を形成し、新たな研究領域を広げていくこと
- ・ 心理学者と企業や行政をつなぎ、心理学の社会実装を目指すこと

第3回となる今回の研究大会では各分野を代表する方々をお招きしご講演頂きます。研究会への入会はありませんので、ご興味のある皆様にお気軽にご参加頂きたく、ご案内申し上げます。

【プログラム】

- 15:00- はじめに（富士通 プロジェクトディレクター 紺野 剛史）
- 15:10- 「科学技術・イノベーション政策と総合知」
（内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 参事官 永澤 剛 氏）
- 15:30- ご挨拶（日本応用心理学会 理事長 京都大学 田中 真介 氏）
- 15:40- 「「総合知」に着目した科学技術・イノベーション政策のデザイン」
（科学技術振興機構 研究開発戦略センター 上席フェロー 山本 里枝子 氏）
- 16:10- 「コンバージングテクノロジーが拓く異分野融合の新地平」
（富士通 フェロー（コンバージングテクノロジー担当） 増本 大器）
- 16:30- 「カスハラ対策における心理学×AIの応用研究と実践」
（一般財団法人ココロバランス研究所 島田 恭子 氏 / 富士通 岩崎 翔）
- 16:55- 「北海道大学人間知・脳・AI研究教育センター（CHAIN）における
異分野融合研究の取り組み」
（北海道大学 人間知・脳・AI研究教育センター長 田口 茂 氏）
- 17:20- 質疑
- 17:30- 総括（東洋大学 社会学部 教授 桐生 正幸 氏）



【参加申込】

参加をご希望の方は、2025/8/25(月)までに、URLまたは右記QRコードよりお申し込みください。

（申込URL：<https://seminar.jp.fujitsu.com/public/seminar/view/122294>）
定員は250名です。定員になり次第、締め切らせていただきます。



主催：コンバージングテクノロジー研究会（代表：東洋大学 桐生正幸）

運営：富士通株式会社 コンバージングテクノロジー研究所（担当：紺野、吉岡、片桐、有馬）

お問い合わせにつきましては、contact-convtech01@cs.jp.fujitsu.comまでご連絡お願い致します。